



4月号 ¥350

作・六・鬼・団

花と蛇 特集号

定価 五〇〇円 略号 「花」

好評の傑作集大成第四弾刊行!!
団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気を博した。S・F・ファンを沸かした傑作であり、過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい洗腸の末排泄を強要される美女
- 二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 三、清純な美女に初めて縄掛けしていたぶる
- 四、刺毛の羞恥責めに悶える地獄部屋的美女
- 五、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 六、後のように縛られて宙吊りにされた美女
- 七、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 八、足吊りで強制洗腸を施される全裸の美女

日本文内容見出し

- 第一章 清純な令嬢の屈服
(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)
- 第二章 人身御供の令夫人
(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)
- 第三章 深窓の美少女とズベ公
(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

- 第四章 小夜子への執拗な調教
(鈴と調)
- 第五章 変性色事師の登場
(二人のシスター・ボーイ・化物の計画・京子の哀泣)
- 第六章 生れかわるスター京子
(崩壊する京子・夏の嵐・地獄の宣誓・まんじの舞)
- 第七章 激しいスターへの訓練
(奈落への道・美女と白痴)
- 第八章 低脳男と令夫人の結婚
(奴隷の花嫁・二対一)
- 第九章 愛弟子を調教する静子夫人
(蛇の果・悲しき決意)
- 第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊
(美花の踊り・露と百合)
- 第十一章 悪魔たちの哄笑
(白い関係・調教日記・手鏡)
- 第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄
(甘い調教・挫折)

- 第十三章 珍芸を開陳する令夫人
(おとし穴・筆と硯)
- 第十四章 淫靡な時代劇ショー
(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)
- 第十五章 華々しきショーの展開
(ショーの開幕・楽屋の中・検舞台)
- 第十六章 野卑な妾二人のいたぶり
(珍芸・姐の上)
- 第十七章 スベ公達の邪悪な責め
(美女と野獣・ある日の回想)
- 第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
(美女崩潰・別荘)
- 第十九章 悪党の執拗ないたぶり
(娘の部屋・卑劣な録音)
- 第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面
(地獄・断髪令嬢・悲しき対面)
- 第二十一章 勝ち誇る悪党一味
(受難の姉妹)
- 第二十二章 中国伝来の秘法
(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい叫)
- 第二十三章 緊縛された美女の涕泣
(三悪女の狂態)
- 第二十四章 新しい餌食への触手
(義兄弟)
- 第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄
(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)
- 第二十六章 恐怖の責め続く
(地獄の接吻・巨大な責め)
- 第二十七章 結末なき責めの結末
(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

【最新版】美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印刷紙 (9×13cm) 極鮮明焼付

- 各組 一組一枚 (送料共)
- 四組四枚 五〇〇円
- 十組十枚 一〇〇〇円
- 二十組二十枚 一八〇〇円
- 五十組五十枚 四〇〇〇円
- 百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
- 2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
- 3 緊う影に懐く (佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
- 5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
- 6 縛られて困る (金原奈加子)
- 7 私を喰わないで (左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
- 9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
- 10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
- 11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
- 13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
- 15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
- 16 恥らひの女体美 (中河 恵子)
- 17 何故私を縛るの (金原奈加子)
- 18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)
- 19 猿ぐつわの悦楽 (関谷富佐子)
- 20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
- 21 足指はくの字に (佐々木真弓)
- 22 麻細の柔肌責め (金原奈加子)
- 23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
- 24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
- 25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
- 26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
- 27 全裸の縄は細く (佐々木真弓)
- 28 鎖縛と縄に泣く (川越美佐子)
- 29 縄に喰いた童顔 (長井葉津子)
- 30 出路を請う縛り (佐々木真弓)
- 31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
- 32 首腰縄にあえぐ (長井葉津子)
- 33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
- 34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
- 35 高小手の全裸 (佐々木真弓)
- 36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
- 37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
- 39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
- 40 縄目に喰う表情 (中河 恵子)
- 41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
- 42 猿轡に喰う緊縛 (左近麻里子)
- 43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
- 44 私は縛りが好き (金原奈加子)
- 45 強烈縛りを味わう (金原奈加子)
- 46 麗身を横たえて (左近麻里子)
- 47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
- 48 柔肌に悶は激し (長井葉津子)
- 49 柔肌に痛む麻細 (左近麻里子)
- 50 全裸の女体引連 (中河 恵子)
- 51 開股縛りを請願 (左近麻里子)
- 52 突き出したお尻 (中河 恵子)
- 53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
- 54 首腰股間縛りの女 (長井葉津子)
- 55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
- 56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
- 57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
- 58 縛られる緊縛女 (長井葉津子)
- 59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
- 60 もう虐めないで (金原奈加子)
- 61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
- 62 女体は縄に喰う (左近麻里子)
- 63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
- 64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
- 65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
- 66 この裸身を喰う (佐々木真弓)
- 67 諸親の縛り表情 (長井葉津子)
- 68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

- 69 美体は縄に喰う (中河 恵子)
- 70 涙まじき臀部晒 (左近麻里子)
- 71 両手吊りに喰う (長井葉津子)
- 72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
- 73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
- 74 捧げられる女体 (中河 恵子)
- 75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
- 76 麗わしの肌を縛 (佐々木真弓)
- 77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
- 78 開股の股間縛り (大島 照代)
- 79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
- 80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
- 81 豊満な裸身の美 (関谷富佐子)
- 82 羞らひの流し目 (佐々木真弓)
- 83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
- 84 縛縛りと猿轡 (長井葉津子)
- 85 投げ出された裸 (金原奈加子)
- 86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
- 87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
- 88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
- 89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
- 90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
- 91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
- 92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
- 93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
- 94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
- 95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
- 96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
- 97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
- 98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
- 99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
- 100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

△強烈な虐被女性▽

川路むら子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつた驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によつて彼女のあらゆる被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにファンの手元に提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむなV

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむまV

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむやV

ば、もう責め手の意のままに、うしろも開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむわV

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむゆV

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむえV

壯絶肛門責の妙技

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむおV

悶悦海老縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむもV

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむみV

不安定な片足吊りで全身を揺めように見られる羞しい苦痛。

編集部特写初産婦若妻臨月の資料案内

昭和四十三年三月号の奇クサロ誌上で「或る願望に托して」という告白を發表して、本誌の緊縛モデルになりたいたというM女性と加子はその後希望通りに辻村氏や山本氏のカメラの前でその緊縛姿を披露したのである。

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさみV

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさろV

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさまV

膨満妊婦乳房責め

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさむV

臨月腹全裸晒人形

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさちV

躍動する妊婦裸像

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさほV

妊娠という異常美

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさへV

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさとV

妊婦全裸全身肢体

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AささV

△妊婦緊縛の部▽

逆吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円
金原奈加子 略号AさめV

両手吊りの臨月婦

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさもV

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさいV

妊婦全裸縛り全身

大手札三枚一組 四〇〇円
金原奈加子 略号AさにV



奇譚クラブ

△第二四巻 第四号・通刊第二六四号▽

(昭和四十五年) 四月号 目次

△本 文▽

- 扉で一言「女性の神秘化」……………前川圭之助……………(9)
- 懸賞告白「私のSMプレイ」……………松山 壮吉……………(10)
- 妖羅譚「しゆる・しゆる」……………秤 蕩也……………(22)
- 懸賞入選「クイアン・フレミング」……………ムラカワ……………(36)
- 女責め図絵の系譜 明治女工哀史……………南 彦造……………(44)
- SMカメラ・ハント(続・金原奈加子の巻)……………辻村 隆……………(46)
- 「童女浣腸譜」……………辻村 隆……………(46)
- 史実研究 切腹百年史(女性篇4)……………中康 弘通……………(70)
- 女斗美小説「ふたり妻」(4)……………芦浦紫舞夫……………(74)
- 観劇記「SMショー」二題……………柴 利好……………(82)
- 連載小説「大噴火」(19)……………千葉 青鬼……………(86)
- 懸賞告白 私はどうしてこんな女に……………渡部 好美……………(94)
- 体験記「被虐鼻」(後)……………大橋美代子……………(97)

本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文獻を研究する平和で
 穩健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に關する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

奇クサロン

(232)

周期的な耽溺の世界……………片倉 茂

Mの理解者……………中河 恵子

イメージ画「鞭責め」……………志羽 利也

イメージ画「水責め」……………堀 真彦

サロン楽我記(第七十回)……………辻村 隆

プレイをして下さい……………佐野みさ子

願望「人妻讃歌」……………国川 栄一

イメージ画「獲物」……………小川 茂正

「SMプレイ」への反省……………伊藤 圭子

イメージ画「可憐」……………狂 四郎

奈津子の近況……………浅田 守

読者通信について思う……………大西 弘明

編集部だより……………編集 部

SM短歌「縦縄」……………小林美智子

豚妻通信……………赤畑 修造

モデル志望者のプロフィール……………前田カオル

マンネリのSM夫婦の願い……………杉本 譲治

ショート・ショート「ムロイ新聞」……………室井亜砂路

剃毛の楽しさ……………堀 山人

短信往来 女装愛好者各位……………井風呂秋於

SCコレクション「花と枯木」……………豪 城二

マゾ詩私は坐布団になりたい……………並木恵夢男

私の夢想教師の屈辱……………赤ちゃん

願望下男に使ってほしい……………堀川 英勝

連載小説「花と蛇」(終篇第六十二回)……………団 鬼六……………(102)

無量寺訪問「ヤイト寺の大広間」……………石田 賢治……………(110)

まそひすむす ある患者……………泉 一郎……………(118)

見果てぬ夢の物語……………塚本 鉄三……………(126)

あるマニアのたわごと……………須渾 朔……………(130)

懸賞創作 おナベの浮気……………林 たけし……………(136)

秘聞・象牙の塔 助教授夫人受難譜……………風流極道軒……………(146)

連載小説「M派交友録」(4)……………鬼山 絢策……………(156)

マニアの一日「菱縄デー」……………早木 夢二……………(166)

懸賞入選 ある混浴場……………結城 春哉……………(176)

三回分載小説「女狐」(上)……………光谷 東穂……………(186)

青春の陥穽(5)従順な新妻……………芳野 眉美……………(196)

緒方君子さんへ「浣腸」によせて……………関 悦子……………(206)

娘相撲物語「花の女斗美たち」(19)……………奮斗士好太……………(216)

女丈夫散華「女忠臣蔵」……………川上 米子……………(226)

読者通信……………編集 部選……………(232)

目次カット「鉛の兵隊」……………室井亜砂路

扉カット「新星座」……………辻 梟太郎

☆ミキとマキの華麗な悦虐プレイ写真

九月号のカメラ・ハント「飼育の愉しみ」で始めて登場した小池美喜と十一月号のカメラ・ハント「悦虐の昼と夜」で初登場した松山真樹子の二人の美女の写真をマキのカメラ・ハントに紹介します。十二月の華麗なる戯れでは小池美喜、松山真樹子二嬢のピチピチとした肢体の躍動を描写していきます。

縛られた美女二人

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とそ
雪の如き白さの柔肌を誇るマキと若鮎の肢体に小麦色の肌のミキと対照的な二人の美女を後手に縛り上げたマキ好みの資料。

全裸の美女を連縛

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とそ
若さの溢れたムチムチとした全裸の肌を惜しげもなく晒して二人の美女が、それぞれ個性的な美しい肢体を緊縛にゆだねている。

白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とわ
ぽちぽちととした真白い柔肌は皮下脂肪が二の腕に喰い込んで埋没してしまっている。

糸まとわぬ柔肌

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とわ
高々と後手に縛り上げられ無抵抗のまま全裸の肌をさらしたマキはその無防備感だけで異常なまでの昂奮を味ったと告白している。

開陳した華麗肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とわ
咲き誇ったバラの花のような華やかなマキの肢体は門の洗礼を受ける一段と美しさを増し微細な肌の皺に至るまで鮮鋭に描出する。

縄に喘ぐ諦観の相

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とわ
いみじくも辻村氏が言った真樹子のボーカルフエイスが全裸に緊縛という非常事態に至っても、そのままだ平静を保てるだろうか。

マキを責めるミキ

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とわ
真白い肌のマキに縄を掛ける小池色の肌のミキ。二人共若やいだ肢体を誇らかに糸まとわぬ全裸で縛られるマキの表情が凄い。

縄に通う愛情の焰

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とわ
縄に通う愛情の焰

松山・小池二嬢 略号八とわ
男性が縛ったときはそうでもなかったのに縛る相手がミキになった途端、マキの表情には極めて美しい被虐の表情が現れた。

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とわ
全裸の肢体を晒して誰はばからぬ二人の美女が互いに相擁してレスポスの美しいムードを最高にまで盛り上げていくのは楽しい。

柔肌と柔肌の狂態

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とわ
二人とも極めて若々しい白肌と小麦色肌をびったりと寄せ合って手と足をからめ躍動する若鹿のような肢体はまことに素晴らしい。

相愛の極致を描く

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とわ
カメラ・ハントで紹介されたマキとミキは相思相愛の純粋な間柄であるが、カメラを前にして燃え上った全裸の二人の狂態を描く。

塚本鉄三

狂乱の一夜の記録

十一月号で塚本氏が久方ぶりにマキの女王関谷富佐子さんを責めた記事が「狂乱の一夜」と題して掲載したところ大変な評判で、その時のフोटを譲ってほしいとい

う希望者が殺到しましたので、ここに凄惨場面だけ抽出しました。

鞭に狂う悦虐表情

大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とわ
全裸で後手に緊縛された女性の臀部を力一杯鞭打てば自由にされ狂う顔と肢体の表情の美しさ。

うねる鞭打ち肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とわ
定評のある彼女の表情はマキの極致としてS人士にとっては垂涎の物である。強烈なムチの連打に依って絶妙の肢体を開陳する。

足吊りの被虐肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とわ
両足を逆さに吊って臀部を眼前に晒して、さあいつでも鞭打つて下さいという被虐ポーズに炸裂するムチ。感泣にむせぶ妙な表情。

美しきマゾの境地

大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とわ
屈みに突出した尻を乱打された前打ち好みのマゾ女性には、髪ふり乱して悦虐にむせび泣いている。

「申込先」

真は総て直接印刷紙に焼付けた写真は鮮明なものばかりです。お申込みは大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛前金にてお願いいたします。



辻 梟太郎・画

女性の神秘化

最近若い男性の間でインポの者が増えつつあるということだが、その原因の一つとして、男性が女性を神秘化しすぎるといえることが挙げられるという。

インポと化した男性群が女性の前にひれ伏すといった図は、まさに女性上位時代の縮図のようなものであるが、男性の女装化、女性の男装化と、こうした傾向は、ますますエスカレートしそうだ。

神秘的な女性を女王様として崇拜し絶対的な権力下に奉仕を強いられるというシステムに随喜の涙を流すM族もあれば、神秘的な女性の探求を縄一筋に求めて、右往左往するS族もあるが、煎じつめれば、S、M、Fといっても、その寄って来たる根源は女性にあるといつてよい。げに不可解なるは女体である。本誌は、その説明に一役も二役も買ってほしいものである。

(前川圭之助)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

私のSM夫婦プレイ

——(鞭を中心として)——



松山
壮吉

同じマニアでもSMプレイに罪の匂いを感じるが故にSMを愛するという御意見をみたことがある。非常に古典的な感覚で、当節としては寧ろ尊重すべきことかも知れないが、私の場合、SMと罪とが親近であったのは遠い少年の日の夢で、現在では、自分が性の味わいを複雑にする、やや高級な味覚を心得て

いる点で若干の誇りさえ感じていると言っている。とはいえ、派手な鞭音が耳聡い近隣の御婦人達の注意を惹き、噂的になるのは社会生活上、好ましい事ではない。特に男がMであることは現代においては、まだまだ一段と秘密の必要性を高めている。そこで、家庭では緊縛その他、音を立てな

いプレイを楽しみ、鞭打プレイには遠出することになる。日常のプレイの中に本格的な鞭が加わらない事は、珠玉の盃に底なきが如き不満があるが、これは止むを得ない。

某ホテルに遠出しての、最初の鞭打はあまりうまくはいかなかった。私の手によってSに育てられてはいるものの、必ずしも本来のSではない妻としては、相当の心理的抵抗があり、鞭打がどういう肉体的障害を残すかという現実的不安もあるらしかった。

私をベッドに縛りつけた後、婦人用の薄いバンドで臀打をするのだが、どうも力が入らない。厚いバンドに取替えさせ、「もっと強く強く」と催促する中に、思い切ったものであろう、力を入れてピシリと打ち下ろした。続いてピシリピシリと左右の臀に烈しく打ち下ろす。

漠然と鞭に撞れているのと、実際に鞭を受けるのとは、非常な相違がある。相当の力を入れて振り下ろされた革バンドはなかなか痛い。身動き出来ぬようしっかり緊縛して貰っているのだが、打たれる度に思わず臀を動かして避けようとする。呻き声が出る。性的な興奮は吹飛んで苦痛ばかりとなり、幾らの鞭数も経たないうちに、「もういい、止めてく

れ」と音を上げてしまった。

臀は青や紫の鞭痕に覆われているものと思
って、綿ロープを解いて貰いながら、「臀は
どうなっている」と尋ねると、「どうもなっ
てやしないわよ」と全く面白くなさそうな答
えである。

鏡に映して見ると、成程、一面に少し紅潮
はしているが鞭痕一条見えはしない。その赤
味も僅かの時間に消えて、全く何の跡も無い
ことになった。

「案外意気地ないのね」とすっかり軽蔑され
まあ今日はこれまで、とプレイは打ち止めに
して普通の夫婦に還った。ところが、全く面
白くなさそうに、いやいやつきあっている様
に見えた妻が、意外に興奮しているのが確か
められたのは、喜ばしい意外さであった。

それは良いが、妻の右肩右腕が重労働でも
したように二、三日も痛んだのは驚いた。
精神的抵抗が強く、緊張してコチコチになっ
て鞭を振ったので、すっかり筋肉に無理をさ
せたわけである。第一回目の鞭打は、案外痛
いことを発見した私よりも、妻に対してずっ
と大きいショックを与えたことが推測され、
少し罪作りの気持ちしたのである。

第一回目はこうして中途半端に終わったが、

後で考えてみると、せっかくの機会をよく生
かせなかったことがいかにも残念である。寝
物語にも、「今度は止めてくれと言えないよ
うに猿轡をして、血の少々は流れる位に鞭打
してくれ」と頼み、妻も、「とてもそんな忪
え性は無いくせに」と笑いながらも、思い切
って鞭を振り出してから、一種の征服感と、
何かひどく肉体的な興奮を感じたことを告白
し、「あんなに跡もつかないのなら、もっと
力を入れて打てば良かった」等と、言う様
になり、やがて二度目の遠出をすることにな
った。

今度の鞭はずっと烈しく、妻の興奮も烈し
く、最初の二十打が終らぬ中にもう恍惚に溺
れきって暫時休憩になる。一寸鞭が途切れる
と、まだいくらでも我慢出来るし、まだ物足
りないと思うのだが、いざ鞭打が再開される
と耐え難い苦痛である。臀に焼火箸を当てら
れるかと思うように泳えきれず、予定の半ば
も行かないうちに猿轡の中から哀願して、中
止してもらった。

ところが此の時も臀に赤い跡が幾条かつい
た位で、この跡も間もなく消えてしまった。
そしてその頃にはもう物足りなく感じ、次は
もっと強く打って貰いたいと考えており、そ

の願いは日を経るとともに益々強く、渴した
者が水を求めるように身を灼く思いとなって
行くのである。

こんな事を何回か重ねる中に段々とエスカ
レートし、次第に本格的な鞭打プレイを楽し
めるようになって来た。妻も、もう肩が痛く
なるような事はなく、余裕をもってのびのび
とプレイ出来るようになって来た。

本格的な鞭はまだ入手しなかったが、皮パ
ンドを各種類取揃え、昔の軍用バンドのよう
な頑丈なバンドの先を二つに割ったり、二枚
の皮バンドの間に針金を入れて接着し、鉄芯
入りの革鞭にしたり、種々工夫した。ただし
この鉄芯入りの鞭は棒のような鈍い痛みがあ
り、実用には適しなかった。

竹筥の方も、はたきの柄、掛軸用の竹、笹
簾から切って来た青い矢竹、安物の釣竿など
種々工夫した末、釣竿の中間辺を利用した物
が一番良いと判定した。鞆に入れて持ち運べ
る位に切断すると、振ってしなう感じが無く
なり、鋭く空気を切る音も無くなって面白く
ないので、小型の釣用バッグを持参すること
にした。

一両度途中で釣師に話しかけられた事もあ
るが、つとめて言葉少なに謙遜的な？ 態度

をとっていた加減か、相手が勝手に武勇伝を聞かせてくれた。

だが遠出してみても、適当な場所は、なかなか発見出来なかった。

わざわざ一流ホテルの洋室、それも新婚用の、防音度の高そうな室を、割り高の宿泊費を出して借りてみても、鉄筋コンクリートの堂々たる建築は見かけ倒しで、防音度については和風建築とえらぶ所のないのが一般であった。探偵小説に出て来るイギリスの荘園屋敷とは異なり、壁は力学上、必要最小限の厚味しかないし、その上クーラーやセントラルヒーティングが、音との関連を無視して取付けられる結果、室内と外部との、或は室相互間の遮音効果をゼロに近くしてしまっているケースが多いようだ。

連れ込み専門宿の方がこの点は留意してある筈だと考えたが、これは又ひどい玉石混淆なので知らぬ街で咄嗟に玉は探し難いものなのだ。別に悪い事をするわけではなし、肚を据えてプレイはするのだが、やはり気兼ねであり、思うような発展は自然に抑えられるようにもなる。

そこで適当な場所を求めて、大分うろうろと彼方此方へ行ってみたが、結局、同じ県内

で、距離も手頃なA温泉Eホテルが比較的良いと判断し、折々にはそこに出かけることになったのである。

A温泉は決して一流とはいえない温泉であり、Eホテルもホテルとはいえない条、増築改築のつぎはぎの跡が歴然とした、やたらに複雑な構造を持った、何となくまとまりの悪い大きいだけの一旅館であるに過ぎない。それでも各シーズンには、レジャー時代の余波を享けてか、なかなかの賑わいだが、シーズンオフには、ぐっと閑散になる。

私達は、大体そういう時期を選んで出かけることになる。

始めてEホテルに出かけたのは、ニッパチ月の二月であった。一寸した機会があつて大体の様子は聞いておいたので、或程度の期待をもって出発した。

出発の日は朝から食事を禁じられる。既にプレイに入っているのである。

愈々出発に当っては、まず身支度をする必要がある。まず裸体にゴム全身タイツを着用する。これは頭と手首から先だけ出して全身足の爪先迄包むもので、ゴムマニアの感覚に強く訴えるものだが、首周りを押し広げてスッポリと体を入れ、下からジリジリと巻上げ

て着用していくのだが、これが少し時間がかかる。手荒にしては薄いゴムを破ってしまう恐れがあるからだ。

それに、ともすると逃場の無い空気が足先に溜り、風船のように膨れあがり、恰好がつかないことになるので、足先を少し濡らしておき、ゴムと足先の皮膚をピッタリくっつけるようにした上で、両掌で脚をよくおさえ、空気を上にあげるように、ゴムと皮膚を馴染ませるように注意しながら着用するのだから手間がかかる。

だが、少しきつめの寸法にしてあるので、着用には骨は折れるが、これを入念に着用し終ると、全身はピッタリと薄いゴムで心地良く締めつけられるのである。

(私はゴムやレザーの全身タイツやレオタードを注文する為に採寸する時、胴周りは心持ち細目に背丈は十分に見るようにしている。周囲は細過ぎる位の方がキツチリと締まって良いが背丈に無理があると肩に圧力が掛かって、着用長時間に及ぶと肩凝りし易いという経験からである)

全身ゴムタイツを着用した後、ロングガードルをつけ、シームレスをはきガードルから吊す。男物の靴下はシームレスの上にはく。

この基礎の上に厚手のアンダーシャツとパッチ、更に平常は簞笥の中で眠っているラクダの上下等を重ね、ハイネックのセーターを着る。普通のシャツではゴムタイツの上部が衿明きから覗くので、特に求めたプレイ用のセーターである。この上に背広の上下、オーバーにマフラーと北国向きの身ごしらえを固めていると、寒中にも拘らず薄いゴム地の下はすぐ汗ばんで来るのである。

あれこれ取揃えて、一泊旅行にはは嵩張った鞆と、綿ロープや革鞭・竹笞等を入れた釣用バッグを抱えて列車に乗込む。

例のように車内のスチームは利き過ぎているので、妻はブラウスとスカートの夏同様の軽装になって、気持良さそうに新刊の小説を読んでいる。

私はオーバーは脱いだものの、幾重にも着込んでいるので、暑苦しいこと一通りではない。人目につかぬよう素早く顔の汗は拭っているが、ゴムタイツの下に汗が流れているのが、はっきりと分かる。

途中の駅で妻から「アイスクリームを買って来て」と命じられ、急いでホームに出て何気なく二つ買って来るが、悪戯っぽく睨まれて諦める。二つのアイスクリームは、妻がし

とやかな手付きで、しかしさり気なく二つとも平げてしまった。

マゾッホの毛皮のヴィナスのように階級制の濃く残存した社会なら、私は下僕であり、女主人のお供をしています、という設定で旅行中を過ごすのが面白いだろうが、生憎現代日本は、世界に冠たる無思想無階級社会なのでそれは難かしい。人前では大体にノーマルなカップルである以外の在り様がないので、途中に於いて妻が女王様の片鱗を示したのはアイスクリームの件のみである。

暑苦しさとは汗は、責めの重要な要素なので余り冷たくはないのだが、利き過ぎたスチームに少し気分が悪くなりそうなのでデッキに出ると、粉雪まじりの烈風が痛いほどに吹きつける。暫くは好い気持で熱を発散させ、セーターをひき上げて風を入れたりしていたが、耳が痛くてたまらなくなる頃には体も大分冷えたので、また車内に入る。タイツの下は汗も冷たくなっていて、一寸身動きする度に、冷たい汗に濡れたゴムが背中から脇腹にかけてヌルヌルと動く。ひたすら暑苦しい時の方がずっと感じがよかったと少し後悔するのである。

窓外に粉雪が舞ったり、日が照ったりして

いる中に、列車は山村を過ぎ山峡を遡ってA温泉に到着する。

七分は杉(まだ小さい部分は桧)の植林、三分は大方落葉した雑木林に覆われた急角度の山が両側から迫り、間に澄んだ溪流が流れている。流れの両岸は道、道に沿って旅館と土産物屋が一行に並んでいるという、おさまりの温泉場風景である。

Eホテルも道に沿って、半ば以上山の斜面にかかって建てられているのだが、更にその背面、山の中腹にかけて、木地垣や生垣に囲まれた庵風の離れ屋が散在し、本館と各離れ屋の間を初瀬の長谷寺の廻廊の様な、ただしもっと小規模な、電光形の廊下がつないでいる。春秋の行楽シーズン、特に秋の結婚シーズンには此等の離れは満員で、予約も難しい時があると云うが、シーズンオフには、本館にはそれなりの客はあっても、これらの離れは、あらかた戸を閉めた筈になるのである。

日帰りの団体客の演芸にさんざめく広間の横を過ぎ、入り組んだ廊下や階段を通過して古びた廻廊にさしかかる。廻廊の両側は庭というより雑木林の続きという趣で廊の屈曲毎に椎や榎の落葉に埋もれた離れ屋が、大石内蔵之助閑居の場とでも言いそうな風情に、ひっ

そりと戸を閉ざしている。

予約した最も奥の棟に入ると、玄関の奥は応接セットを置いた控えの間、炬燵をおいた茶の間、ダブルベッドのベッドルーム、浴室、トイレと一セットになっている。控の間には大きなウォーマーがやかましく音を立てて、コンパクトな離れ屋全体に暖房はよく利いている。

この離れの上はもう頂き迄続く雑木林、下の数軒の離れは客が無く締切られているし、ウォーマーの音を除けば、少なくとも主観的には閑寂な深山に入ったようで、あまり周囲を顧慮する必要はない。

女中さんにいっさい気付かれまいというのは不可能に近いが、そこは旅の恥は何とやら始めから別名で予約もしているし、多少の心付けによって暗々裡の協力を期待する以外に方法はないと覚悟は出来ている。幸い、この室の係の女中さんは、新婚や各種の連込み専門で、鍛えられているためか、ごく感じが良く、これも私がこの室を愛用するようになった一要因なのである。

女中さんがお茶を出し、浴室の湯を調節して立去ると、玄関に内錠を掛けて早速入浴する。もっとも私はゴムタイツを脱ぐことは許

されず、女王様のお背中を流す役である。

「でも、賤しい男がダイアナの浴みの姿を見て、獣に変えられたというお話があるでしょう。あなたは今賤しい男なのだから、目隠しをした方がいいのじゃない。うまく洗えなかったら、その度に私が叩いてあげるから」という着想に、「なるほど、それはいい」と私も喜んで賛成する。

妻をダイアナだと考える為には、眼を閉じるのが最低必要な条件だろうけれど、私が賛成したのはその為ばかりではない。妻の詞に SM 的な感覚をグツと刺激されたからなのである。

そこでゴムタイツのまま、ゴムマスクを持って浴室に入り、女王様が浴槽にのびのびと横たわってうっとりしていらっしゃる傍で、タオルに石鹸をたっぷりつけて洗う用意をし、愛用のゴムマスクをつけ、タイルに正座して、女王様が浴槽から出られるのをじっと待っている。

このマスクは黒色ゴム製で鼻と口だけ出るようにした全頭マスクで、私のプレイでの愛用品である。このマスクの効能は完全に視力を奪って現実を遮断し、プレイの別天地を開いてくれることであり、しかも少し窮屈に作

ってあるので着脱に多少の要領を要するぐらいで、通常の目隠しのようにプレイの途中で外れることは絶対になく、ゴムの匂いと圧力と暑苦しさを満喫させてくれるのである。

やがて女王様が浴槽からお上りになる。早速、湯を汲んでお背中を流そうとして間合いを間違え思いきり横っ面をひっぱたかれる。

私は鞭の方が好きなのだが、妻は頬を平手打ちすることに特別な征服的快感があるのだそう、プレイ中には何かと理由をつけて、好んで平手打ちをする。ついその癖が出たのか、プレイ以外の時にパチンと小気味良いような平手打ちを食わされた事があったが、ハッとして忽ち、赤くなって困りきっているの、苦笑いしたことである。

プレイと日常とは嚴重に区別してあるのだが、ごく希な混線は性愛的ムードの高まりと併行しているようなので人前の失敗でない以上、余り本気で腹を立てる訳にも行かないのだ。もっとも、初めの中は平手打ちすることに非常に精神的抵抗があり、それだけに快感も強かったのが、だんだん馴れて気楽に平手打ちするようになった傾きもあり、私を苦笑させた平手打ちは性愛ムードとは関係なく、つい気楽にごく自然に手が出たものだと考え

ている。それは、それで良い刺激だったのだが、日常とのけじめは必要なので一応の訓戒はしたことである。これは余談だ。

景気良く平手打ちを喰らわせた女王様は、「ゴムの上からだ面白くないわね、ムチを持って入った方が、良かったかしら」と、呟いて「顔を上げて、まっすぐして」と姿勢を正させて、もう一度思い切り平手打ちを食わされる。「今度はいい音が出たわ」とやっと満足して、「痛かった？」と囁いて私の鼻の頭に軽くキスしてくれ、洗い易いように誘導して下さるので、手探りでお背中に取付いて一心不乱にお流しし、ついでおみ足を捧げて持って丹念に指の一本一本迄お清めする。

妻の裸体というのは亭主にとってはさっぱり興味の無いものの一例とされる位だ。湯上りに大肌脱ぎで鏡台に向かっていたりすると「見苦しい、嗜みがない。もっときちんとなさい」と叱りつけて、及ばずながら羨をする位のものだが、触覚だけで入念に味わってみると、背中にも腕にも足にも意外に魅力に富んだ表情がある。

結婚以来、少し肉がつきかかって、本人はひとかたならず苦にしていたが、かえって豊かな、弾力のある艶やかな手触りで、私は妻

の体をまだ知っていなかったのだという気持ちさえして来るのだ。

通常の愛撫は勿論、以前には私がS側に立って縛ったり責めたりして体の隅々迄知悉している筈なのに、今改めてこんな感慨を持つのは、江戸川乱歩ではないが、視覚が働いては触覚は本当の働きはしないので、視覚を鎖してはじめて触覚が生きて来るのだろうか。それとも、一時のプレイとは言いながらあたかも、美しく尊い女神様のおみ足のように捧げもって奉仕する姿勢をとることで、対象自体に美しさ尊とさという属性を与えてしまふという心理的原則が働くことを、主として認めるべきなのであろうか。

いわば自己暗示にかかったような形で、畏れ謹しみつつ奉仕しているのだが、やはり全身を入念に洗っていると自然に妙なムードになる。威厳あるダイアナは忽ちかわき女性に転落して、私の腕の中に崩れてくる。しっかりと抱き止めてキスをしてやる。ゴムタイツ、ゴムマスクの私に抱かれ、ゴムを膚に感ずることが非常に刺激的だったとは、妻の後日の告白である。ただしゴムタイツは前開きではないので、窮極の処迄は決して進行しない。

うっとりとして接吻に応えていた妻は、やがて自分の役割を思い出し、顔をそむけると私を突きとばし、二つ三つ四つ五つと痛烈な平手打ちを連発する。我に還ってかきこまる私に、タイルの上に仰向けに寝る事が命じられる。女王様は、ぶざまにひっくり返っている私を片足で踏まえてスックと立たれる。踏まえた足の踵で、私の胸のあたりをぐいぐいと踏み蹴られる。痛烈な感覚に、私は女王様の足の下であえぎ、呻く。

女神を女に引下ろし、かりそめにも征服をした報復として、私は完全に、手厳しく征服されたのである。

女王様は私を踏まえた足をのけると、今度は洗い桶に冷たい水を満たしてゴムタイツにザアーツと注がれる。犬に水の発想だ。続いて私の顔の上に、重くて暖かいものがどしりとかぶさって来る。重い臀に顔を半ば押し潰されたような恰好で懸命な奉仕を強いられるわけだ。

一応の及第点をいただくと、努力の報酬としてネクターを直接拝受する。実は口を開いたままでもネクターを飲み下すのは相当困難で下手をすると噎せてしまうし、飛沫もあたり一面にかかるし、一旦容器にとる間接法でゆ

つくり味わって、拝受する方が私は好きなのだ。だが妻は直接と指定する事が多い。その方が征服感が強いらしい。ともあれこの際は仰せのままである。マスクやタイツを濡らした飛沫は妻がお湯をかけて流してくれた。

洗い場でのプレイの次には、妻と一緒に浴槽に入るよう命じられる。一寸躊躇するが、現代のゴムが風呂の湯位でいたむ事もあるまいと判断して湯船に入る。風邪をひかせまいという妻の配慮からの命令である。

(ゴムは別に傷んだ様子もないが、やはり微温湯位が好ましいそう。逆に温度が少し上ると粘りつく粗製ゴムの下着も有れば、プレイの方法によっては面白いかも知れないと思ったことだ。粘りついたゴムを落とす方法と使い捨てにする為の価格とを考えねばならぬいけれど)

浴槽の中で女王様のお肩を揉ませていただいたり、あれやこれやと入浴プレイを楽しんでいる中に、湯当りしたのか、眩暈と呼吸困難を惹起した。

普通でも長湯で、湯当りする人は希ではないのに、全身ゴムタイツとゴム全頭マスクでは、体の殆ど全表面がゴム膜で密閉されている。眩暈も呼吸困難も当然であろう。しかも

サアと云っても、噴き出した汗でピッタリ貼り着いた全身ゴムタイツは、そう簡単に脱げはしない。とにかくゴムマスクを脱ぎ、窓を開けて冷たい空気を大きく吸い込んでやっと人心地がつく。妻に手伝って貰って、ゴムタイツを脱ぐと中は水浸しの汗である。一休みして気分が治ってから、改めて汗をサッと洗い流して、さっぱりする。

妻は平常の妻に還って甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

ゴムマスクとゴムタイツは、私が浴室を出て休んでいる間に、妻が両面の水分を持参の湯上げタオルであらまし吸い取り、ベッドルームの洋服入れにかけて一応の始末をすませている。

あれやこれやでもう夕食の時間となった。予定では、ゴムタイツは夜のプレイ迄脱がない筈であったし、私はゴムタイツのまま高小手に縛られて一段下って控え、女王様が食べ残して投げ与えて下さる骨や何かだけ食べる筈だったのだが、さっきのプレイでくたびれているので食事プレイは中止とし、炬燵を挟んで仲良く食事することにする。

山間ではあるが、最近では漁港から直通のトラック便があるそうで魚は新しく、お定ま

りの刺身も季節の寄せ鍋も存外うまい。先刻のプレイとはがらりと様変わりだが、冬の夕温泉宿で夫婦穏やかに寄せ鍋をつつくというのも、これはこれでまた良いものである。

食事がすむと、ゴムタイツをもう一度よく拭い、粉を打って靴に納めた上で、ホテル内の調査に出かける。(汗には塩分があるので帰宅後に私がもう一度真水でゴムタイツを拭いて陰干しにするのである)

本館ロビーの喫茶コーナーで、これはあまり美味しくなくて値段ばかり高いコーヒーを飲み、売店をひやかし、ダンスホールと掲示された一面を覗いてみると、至って閑散である。隣のバーも開店の準備をしている段階である。十二時閉店なので、十時から十二時位が中心時間帯だという。一周りしてから、ウオーマーのみが唸っている、林の中の我庵に立ち帰る。一夜泊りの仮の一室なのに、自分の室に入ると、些か我家に帰った感があるから面白い。炬燵を挟んで一杯のお茶を啜る、至って静かな少時をはさんで、プレイの舞台はベッドルームに移る。

最近のベッドは前部後部の柱も脚も無く、前後とも一枚の板になっていた。ベッド全体が台になっていた。つまり、緊縛固定に

は不便である。我家では、わざわざ二段ベッドを改造した四本脚、四本柱の寝台を備えているのだが、出先では別の工夫がいる。

すなわち、台式のものは手に当る部分と足に当る部分に、一本ずつ綿ロープをマットレスの下を潜らせて横たえておく。ベッドに伏せ、右手首をロープの右端で縛り、左手首をそのロープの左端で縛り、両足もその要領でやるようにしている。大の字に固定するため、更にその上に、長いロープを縦にも通して、上下のロープがずれない様にすることもあるが、これは気分のもので、少し重いがベッドを持上げて、ロープをベッドの下を潜らせておさえる様にすれば、最も完全で微動もしないので、烈しい鞭打ちを予定する時は此の方式でいくことにしているが、板式の場合でも、これに準じている。

まずカーテンを引き、宿の丹前を脱いで裸になり、愛用の首輪付の革轡を取出して自分で首輪を締め、革の玉を口に含んで細いバンドを後頭部で留める。その上にタイヤチェーンから作ったきついゴム轡を締める。先刻のゴムマスクを被り、手を後に回してかきこまる。妻は脱いだ丹前の紐で私を後手に緊縛しておいて自分も身支度をする。当時愛用した

スタイルは、黒の変型スリーインワン（股がなくブラがハーフカップ）に、黒の長靴下と黒のハイヒール、黒の長手袋で、欧人ならば私の黒い雌豹とでも云うべき姿である。その後ハイヒールの好みは、ロングブーツに変わった。何れにせよ私は「裸の足」よりも、靴と靴下で修飾された足に、より強い刺激を感じるのだ。

身支度を了えた妻が、私の臀を蹴飛ばして立たせ、ベッドルームに連行して、改めてベッドにうつぶせの大の字に固定すると、愈々革バンドによる烈しい鞭打が始まる。

妻はもう馴れているので、遠慮なく力強く鞭を振り下ろす。呻こうが泣こうが構わずに一定の処迄やるよう約束してあるので、始まってから後悔しても逃げ道はないのである。

私に対する鞭打には、臀部全体をなるべく満遍なく打っていく方法と、前の鞭痕を、そらさずに繰返して打つ方法とがある。後者の方がよくきくが早く皮膚を傷つけてしまう。そこで妻はまず私の臀部全体に鞭をあびせ、全体が発赤し、やや腫れ上る迄続ける。次に一カ所に狙いを定めて連打する。すると紫色の筋が浮上り、やがてそれらがダブって、臀に紫色の斑紋を作っていく。

もう条件反射になっていて、鞭打し出すとじきに体の深部から、感動が溢出する。そこで妻は一度手を休めて処理し、一休みすると又冷静に的確に鞭を振っていく。

打つ方は、プレイ毎に馴れてめきめきとうまくなるのだが、打たれる方の痛さに馴れない。鞭打映画で打たれる女が大袈裟に悲鳴をあげてそり返るのは、如何にもわざとらしいと思うが、実際に鞭打たれると反射的にピントとるのである。

妻の言によると、始めは休えているので余り声も立てず動きも小さい。ピシピシ続けて打つとじきに烈しく呻き、もがき出す。更に打ち続けると又動きが小さくなるという。本当に烈しい鞭打をうけると、ただ、ピクリピクリと動くだけになると言われるが、私達のほんの初歩的な鞭打でも一応、似た経過は辿るようだ。

妻は、鞭数は覚えていなくても、臀の色、条痕のつき具合、動きの様子等見ていけば、大体の状況は判断出来る自信をつけており、力いっぱいの鞭ばかりは振わないで、適当に力を加減したり、また全力をいれたりして、至極研究的に、且つ楽しみながら、鞭打を続けていく。

ところが、打たれる方にとって最も辛いのは、こういう風に延々と続く、鞭打なのだ。皮膚を傷つけ易い竹笞と、傷を決して残さぬ程度に使われる革鞭と、結果は雲泥の相違だが、一打一打の痛みは結果に比例するほどの差があるわけではない。だから、鞭打のやり方によっては、あまり甚しい肉体的損傷を与えないで、ずいぶん長く鞭打を続ける事が出来、受刑者の精神を錯乱させることも出来るだろう。私が経験した鞭打は、あとになると何時も、物足りなく思うのだが、当座は或る程度まで来るとどうにもやりきれず、中止を求める事になる。そこで声は激重な猿轡でおさえ、動きも激しい拘束でおさえしておくのだが、真に哀れな縋りつくような眼で中止を哀願するので、ついそこで終りになる。

で、今度はわざわざ全頭マスクで眼も隠してあるのだから、もうどうにもならないのである。ただ、一打毎に呻き、そり返り、臀をふり手を握りしめ、全身に玉の汗を浮かべて一秒でも早く鞭が終るのを心中に願いながら苦しむだけである。やっと鞭が終り、ホッとしてぐったりしていると、これは単なる中休みで又次の連打が始まると、全く泣き出したいほどである。

苦しんでへとへとになってしまふ頃、やっと鞭が止んで、ロープを解かれベッドから下りる。かわって妻がベッドに上り、斜めに横たわる。私は自分で猿轡を外し、ベッドの傍にひざまずいて奉仕にあたる。妻は鞭打中に一兩度は燃えているので、又火をつけるのに少し時間がかかり、一生懸命で奉仕する。

女王様はベッドの上で、私は床の上で暫く休息していると、「ここに来て」と呼ばれてベッドに上り、しばらくは、もとの夫婦に戻る。臀の状況の説明を聞き、手で撫でてみると鞭痕のむくみらしいものが触れる。いつも予定の何分の一も出来ないのだが、今日は割に順調に行っていると思ひ、少し満足する。時間を見ると、まだ十時過ぎである。

「何か飲みたいわ」

「本館の方に行ってみたらどうだい」

「繫がれて待ってる？」

「うん」

「一晩中、繫いどくわよ」

「いいよ。朝、夜の明ける前に、放しに来てくれれば」

「いいわ。その時、又、鞭で打ってあげましょうね」

といった経緯で、私はもう一度、マスクと

猿轡、今度は前手錠で、浴室へ連行される。「繫ぐ場所をちゃんと見ておいたのよ。このシャワー用のパイプは丈夫そうだから」といって前手錠した手を上にあげさせる。一寸考えて「せっかくだから、あなたの作品をもう一つ使いましょうね」と釣用バッグを持って来て両足を少し開かせる。これは三尺足らずの丸い棒で、両端に近い所に婦人用の飾りバンドを切った革紐をしっかりと結びつけ、小さな錠で止めて、ずれないようにしたものである。右端の革紐を右の足首に、左端の革紐を左の足首に結びつけると、両足は二尺余り開いた状態で固定される。今度は椅子を持って来てその上にあがり、手をいっばいに上げた処で鎖をパイプに巻いて、鎖の輪をあわせて南京錠でとめる。

高さを足が少し爪先立ちになる位に調節したが、「少しずれそうね」と呟いてもう一度手を加える。その時は目隠しで分からなかったが、鎖にロープを通し、そのロープを下のカランに結んで、鎖がずれないようにしたのである。

この処置をすませて、妻はまた茶の間に入り、外出用の洋服にきちんと着かえる模様である。すぐに浴室にやって来て、「では一時

間半ばかり楽しませて貰いますわ。大人しくお留守番出来るように、少しムチをあげておきましょう。今度は竹笞を使ってあげる」と優しく言って、ピシリと竹笞を加える。思わず呻いて吊るされたまま、そり返る。「よくしなって気持がいいわ」と、ヒューヒューと空気を切る鋭い音をさせて、竹笞を当てられるからたまったものではない。一回毎に腎が引裂けるようで、腎を庇おうとして鎖を中心に滑稽な踊りを踊ってしまう。

笞を止めて腎の状況を調べ、「蚯蚓腫れのあちこちから少し血が滲みかかっている。この筋をもう少し打つとお望み通り血が流れると思うけど、どうする？ 打ってほしい？」と問われて周章で首を横に振る。

「一寸浮気してみようかな。ハンサムな男がいるといいなあ」などと云って、出かけて行く。

妻が外から鍵をかけて出ていった後、私は一人、ぼんやりとパイプに吊られて立っている。

今日は流石にあとまで腎が少し痛い。それにしても、妻は本当に男と遊ぶ気かどうか。あんな事を言っても固すぎる程固く、貞淑な妻である。時間もあと一時間ばかり、何も出

来るわけではないが、温泉宿に団体などで女を連れずに泊った男は、とにかく一夜の相手が欲しくてたまらないのだ。隙のある女がいれば、あっという間に話は進むだろう。ひょっとして……とも思うのだ。

「心まではいけないが、体だけの行きずりの浮気ならしてもいいよ」とか、「押入れの中に縛られて、お前と男のやりとりを聞いているなどと云うのも一寸刺激があるなあ」などと言って、ひどく怒られたこともある。もし御希望通りに、等という事態になったらどうするのか、大変に困ると思うがひどく刺激も感じるのだ。

やがて十二時になったらしい。下の方から微かに螢の光のメロディが聞こえてくる。或いは来る様な感じがする。その中にウォーマーの音以外全く、静かになった四辺にひたすら耳を澄ましていると、廻廊に華やかな笑い声、確かに妻と男とが楽し気に話しながら廊を上り、今玄関前で何か語り合っている。本当に「御希望通りに」とベッドルームに連れ込んで寝るつもりなのか。こんなところを見られてはいけない、と云う狼狽と同時に、体だけがひどく興奮している。

しかし男は送って来ただけらしく、玄関に

入らず立去って行く。妻は早速、浴室にやって来て「ホールに行つてバーに行つたのよ。とても楽しかったわ」と上機嫌である。久しぶりに他の男と話をし、多少はお愛想も言われて子供のように嬉しいらしい。

「中に、入れてやればよかった」と云うと、「入れてもよかった？」と尋ねる。吊るされたまま、うなずく。

「入れれば寝るのよ。それでもいいの？」
「ウン」と云う様にうなずくと、「馬鹿！」と叱咤して、竹笞をピシリピシリと腎に加える。笞をカラリとタイルに投げ出して浴室を出ていく。サッサと着替をしてベッドルームで寝てしまったようだ。

妻が寝る時にウォーマーを最弱にしたらしい。暑すぎると眠れないのが、妻の性分である。ウォーマーの音がずっと低くなると外の風音がよく聞こえる。大分強くなったとみえて、時々林全体をどうこうと唸らせる山嵐の響きも聞こえてくる。あとは全くの静寂である。爪先立ちの足がひきつりそうになり、苦痛がその一事に集中する。手錠のかかった手首の痛いのを押して何とか足を楽にしようとする。指先がロープにかかったので、掴んで体重をかけて引いている中に少し緩んで足は

大分、楽になった。少し壁に凭れる様にして朝迄眠ろうとするがそうもいかぬ。足を楽にすれば手首が痛く、手首を楽にすれば足がひきつる。これを交替にしながら時間を過ごす中に室温はだんだん下って、体が冷えこんで来た。私はただ妻が解放に来てくれる夜明けの訪れるのを待つばかりであった。

プレイの疲れとバーで飲んだ一杯の酒の為に妻はすっかり熟睡して朝は九時に女中さんから朝食の時間の問い合わせの電話で起こされる始末となった。慌てて浴室に来て解放してくれる。浴室を出ようとして足が痺れていて弱ったりしたが、とにかく私も急いで洋服を着る。足首と手首、特に手首に明瞭に跡がついているので、丹前は着れず、長袖のシャツとセーターで隠す必要があるからだ。勿論約束の曉方の答は、お流れになった。

帰りの車中では、さすがに疲れて、ぐっすり眠ってしまった。晩に自宅の鏡で臀部を見ると、紫の筋と斑紋が相当に、はっきりついていた。革鞭の痕らしいものは、じきに消え打たれた時、血が滲んでいたという竹笞の痕が少しの間、残っていたが、これも程無く消えた。その時は痛いわりに、後は大した事はないことが分かり、大分、自信が出来た。

ダンスホールを覗いてみたが、全く知らない新しいステップをやっているのですねに出て、バーで中年のセールスマンと無駄話をしていたそうだ。主人がお酒を飲んで寝てしまつて退屈なので一寸散歩に出たのだと云っており、中に入れるなど云う筈もない。至つてあっさりした事だったのだと本人は言い、私もその通りだろうと思う。だが私は多少警戒して、以後しばらくは、うかつに浮気の話はしなくなった。行きずりならいいんだ、と本当に腹をきめて又水を向け出したのは最近の事である。

此の時の鞭打は在来より一步エスカレートしたものだし、大変痛かったが、あとで考えると、やはり物足りない。何故なら、たしかに苦しかったが、まだ理性の統御の範囲内であった。呻きも悶えも、ぎりぎり迄つきつめれば、やはり理性の統御を離れてはいなかったのだという気持がするからである。

フランス? の鞭打小説に、冒険家のMの夫と可愛いSの妻とが鞭打を楽しみながら旅をする話があった。一日、妻が本当の鞭打がしたいと言う。臀だけではなく、背中を打ちたいと云うのだ。夫を木に吊るし思いきり打っていると、夫は遂に限界が来て凄まじい悲

鳴をあげる、妻はその悲鳴に非常に興奮して打って打ちまくり、夫は一打毎に凄まじい悲鳴をあげて苦しむというヤマ場がある。

つまりそこなのだ。その時受刑者は一時的な錯乱、狂気に追い込まれている。そして私の受けた鞭もその線をずっと延長していけばそこまで来ると思う。そこにMとしての、鞭打の醍醐味があると思うのだ。別の角度から見れば、始終鞭打小説に書かれる、鞭を血に染めるような鞭打である。竹笞の笞打をもう少し延長すればそうなる。革鞭だけで血に染める迄には相当の延長が必要だ。その時点はさっき言った一時的な錯乱の時点とも近くなるだろう。私は一度でもその境地を経験してみたい。(一度経験すれば一度ではすまなくなるだろうけれど) こう願っているのだが、その後の鞭打の歴史の中でも、遂にそこまで行かないうちに子供が生まれ、プレイ全体が大分、レベルダウンしたのが、今迄の経過である。

Eホテルの此の室は初回のプレイが好調であったので、その後も折々に利用させて貰った。だが子供が出来て、しばらく御無沙汰しているうちにEホテルも変わってしまった。先日、別の用件でこの温泉を通った時見ると

屈曲して、複雑な構造を持っていたEホテルは真に現代的・機能的な箱型の鉄筋ホテルに変わっていた。同様の变化は他の旅館にもあった。土地の人の話では、繁昌もさることながら、女中さんのなり手がこの土地でも減少し、廊下を短く、エレベーターを多くし、食事、どの室にもワゴンで運べる様にし、なるべくなら食堂に来て貰う、といった機能ホテルにしなければ、或る程度以上、規模の大きい旅館は人手の面で成立しなくなるので、荷の重い借金をしても全面改築を急ぐのだと云う事であった。してみれば非能率の権化の様なあゝの離れ屋は、まっ先に撤去されたのであろう。大変、名残惜しいことだと思う。

しかしそれに代って、我々SMの徒にとってずっと有難い施設が、最近急速に普及して来た。それはモーターである。

最近、私の住む地方都市から一時間以内の国道沿いに、三軒の近代設備完備のモーターがオープンした。昨年に、此の地方の交通事情を特に変えるような道路の変化があったわけではないのだが、モータリゼーションに付随した、モーターゼーションの波が、この地方まで波及したということであろう。その中の一軒は地場資本で、経営者はまだ二十代の

青年だが、設計に先だち全国の主要モーターを、一利用者としてひとわり廻ってみて、その体験に基づき最新流行をとり入れて構想を立てたという苦心談？ が、地元の小新聞に掲載されていた。最新流行を摂取する点については、大阪資本の二軒といえども決してひけはとらないであろう。

年末に機会があつて、その一軒を利用したが、窓口で料金を払うだけで、終始誰にも顔を合わせず出入出来るシステムなど、たしかに週刊誌で紹介されている新しい流行のスタイルであろう。室はさして豪華ではないが、一見バロック風のニュアンスを持たせた完全な密室であり、隣室との境の壁も相当分厚いと見えて隣の気配は少しも感じられない。室に窓はなく、付属のトイレにだけ昔の二等駆逐艦の舷窓のような、厚いガラスをいれた小さな丸窓がある。これならばSMプレイに耽るにも何の気兼ねもない。

どれだけ探しても得難かったこういう施設が、全国の国道筋に雨後の筍のように出現しつつあることを思うと、マニアにとってまことに有難い時代が開幕されつつあるわけだ。今迄適当な場所が得られない為に抑圧されていた、多くの人々の心中に潜むSMの芽が、

所を得て伸びてくることになるだろうし、セックスの新時代はこの面からも開けて来そうな気持もするのである。セックスを全くのプレイとして捉える気風も、よかれあしかれ、若い人の間に急速に広まっているそうだからSMをセックスの一技法として捉えることへの抵抗も、急速に減退し、近い将来にSMはごく正常なセックスの一技法として定着することだろう。ただし、この変化はこれからの若い人が主役となって進めるだろうからSMの先覚者たる現在の我々マニアは、新時代には既に老化して引退していることであろう。

サーフィンベッドを置いたベッドルームと応接セットを置いた控の間を、形ばかりに区切る鉄製の唐草格子（上にカーテンを引けるようになっていた）は、手足を緊縛固定するに絶好の道具立であった。単に室にバロック風のムードを添える為だけではなく、SMプレイに利用の効果も考えての設計のように思うのは、私の考え過ぎであろうか。同日はそういう相手ではなかったもので、ごく通り一遍の利用で終わったが、生命短かし恋せよ乙女、老化してしまわぬ中に、SMプレイの方でこういう施設は十分に利用させて貰うことを期している次第である。



カット・野江三郎

起之章

この夜もまた、由紀子はその円い膝の上で例の縄を「愛撫」していた……

彼女のすべすべして白い陶器のような肌にくらべると、全く対照的に汚れ果てて、なんだか異臭すら立ちのぼってきそうなくらいすっかりくたびれてヨレヨレと縋れている縄を——相変わらず、まるで小猫か小犬かを膝に置いたかのようにやさしく、いともやさしく愛撫しつづけているのだった。

妖——縄——譚——

しゅる、しゅる

秤 蕩 也

黒瞳がちな目はもうかなりのあいだ、空虚^{うつろ}げないろを浮かべて、何処を見詰めるともなく大きく見ひらかれていた。

だが、矢張りこの夜もまた由紀子のその瞳は、そんな空虚^{うつろ}ないろにもかかわらず、空間に妖しく乱れながら、烈しく交錯しながら現われている『まぼろし』を、凝^{とら}っと捉えているのだった。言わば彼女は、こうして寝室に入^いって、ベッドの上で縄を撫で始めたころから、彼女だけの、その悲しい世界へと、のめりこんでいたのかも知れない。

しかし、その『まぼろし』のなかには、現

実ではこの膝の上で見る影もなく汚れ縋れているヨレヨレの縄が、打って変わって、縦横無^む尽にと活きているのだ。むしろ熾烈なほどの美しさで、撥ね躍^{はね}ってさえいるのだった。『まぼろし』は——

白い臍^{へそ}をきびしくうしろ手に縛りあげられ弓形^{なり}に反り返って悶^もえているのが、由紀子自身であった。

足を踏ん張^たって、光の粒のような汗を飛び散^ちらして、その由紀子の背中を、腹を、腰^{こし}を、太腿^{もも}を、情容赦なく、縄尻で打擲^{うち}しているのが、夫の昭二であった。

そして夫は間断なく怒号にも似た呻き声をあげながら、ますます猛り狂っていき――

妻は、もう悲鳴すら忘れてうち慄える軀を次第に硬直させていき、わずかに、うしろの首根に縛り合わされた手だけを動かして、むなしく宙に取りすがろうとする。

かと思えば、夫は突然、臂力をこめて覆い掛かり、その硬い女体を強引に丸めていく。

そして尚も縄を掛けながら、恥辱のために悶絶してしまいそうな妻に構わず、真っ赤に燃えたぎる悪鬼の形相になって苛責する。

この『まぼろし』のなかの、地獄の責め苦にあう妻は、やがて丸められた身を烈しく揉んで脂汗で照らつくその白い軀を徐々に、隈なく薄桃いろにと染めていくのだった。

間もなく、髪をふりたててのけぞった妻の顔には、なんと、堰を切ったのぼってきたような一種異様な喜色の波紋がひろがっていつて、そのうち、深紅に濡れ光った唇をわななかすと彼女は、遠い谷間で絶叫するような音を長く洩らしはじめるのだった――

このとき、掛け時計の重く鈍い九時の報らせが、はじめて由紀子の『まぼろし』を中断させた。いつしか彼女は愛撫していたその手で、こまかく震えるほどに緊く縄をにぎり締

めていた。時計を見上げた眼をすぐに閉じると、途切れがちの大きな息をつきながらその縄を、両手で揉むようにして持った。

「……あなた。なぜなの？」

と、彼女はつぶやいた。

彼女の臉のなかへまた戻って来た夫は、しかし、背中を冷たく向けているのだった。

「なぜ…… あたしが駄目になってしまったの？ おしえて……」

この縄には、貴方と一緒にあの悦びにまみれつづけたあたしの汗が……得も言えぬ満足感で泣いたあたしの泪が、芯の芯までに沁みこんでいる。貴方はあのかとき、泪で汚れ汗で臭いを醸ったこの縄を手に取りながら、こう言ったわ。

これは、もう俺にとっては、おまえの体の一部みたいなものになってしまったなあ、なんだか、いっさえ、愛しくって愛しくってたまらない気持ちになるんだ！……と。

それが何故？ どうして？ 突然『おまえなんか』などと言うような貴方になってしまったの？

縄を胸のあいだに抱きしめた由紀子の、長い睫毛の陰から大粒の泪があふれでて、緻密くふるえる唇の端へと、つたい落ちた。

夫の昭二がこの家に帰らなくなって、すでに一週間が経とうとしている。由紀子がきいたところでは友人と共同で経営している玩具会社へは欠かさず出勤しているそうだが、しかし、由紀子がいくら電話を入れてみても彼には通じなかった。出掛けて行っても、彼は姿を見せようとしなかった。取り次ぎを頼んだ社員までが冷たく、近日中には奥さまに連絡なさるとの事でしたが只今は生憎と社用にて「何処其処」へ、出張中で……の一点張り。にべもなく追い帰されてしまう仕末だから、彼女はただおろおろと、一体どうすればいいのか、それすらの判断もつきかねて途方に暮れたのも当然であった。

――たしかに夫は、彼女に対して『おまえなんか、もう……』と言った。彼女が枕辺に例の縄などの責め具を置いて、いつものように彼に甘えかかった土曜日の夜の事だった。

この夫婦だけの、他人の知らない『烈しい密戯』は明確に言ってこの一瞬から断絶された、と言ってもよかった。

彼女にとって、その夫の突然の、冷やかな一言はまさしく寝耳に水、いや振りおろされた斧のすさまじさに他ならなかった。そして彼女が、ひいては自分たちの生活に、いま思

いがけぬ恐怖の事態が襲って来ているのだということを、その身にはっきり感じ取ったのは、次の晩、彼は、嘗つて一度たりともしなかった外泊を、ひとことの報らせもなくやつた、その時だった。

自分たち夫婦は——通常的に言っても強く愛されている、と思い込んでいたのに、この夫の異変は、彼女をして、あらゆる意味においても、ひどく興奮させた。

次の日の朝、夫は自分のほうから電話を掛けてきた。

一夜をまんじりとししないで明かした彼女である、思わず言葉も乱れてしまうのへ、

「俺……素晴らしい女を見つけた」

と、含み笑いの混る声を聞かせてから、「言っとくが、おまえなんかとは格段の差だぜ。活き活きしてやがる、拗わ拗わしてやがる、恐ろしくスタミナを持ってやがる。そうだな……まるでこの俺の、プレーの相手になる為に生まれてきたような女なんだぜ！」

そして、狂ったような哄笑のあとに、

「だから……俺はこれから暫く睡る。いや疲れたからじゃないよ、また今夜も、この女を縄で鞭で棒で……、そうさ、東の空が白むまでも責め苛んでやるためにな。なあに心配な

んかするな、とでも言っておこうか。まあ、そのうちには帰るさ。いずれは、帰ってやるさ。が、そのときはついでの事に、この女をおまえに初お目見得って事にするかな」

由紀子のそれまでの興奮は、このときを境にして空虚なものにと、かわっていった。

普通にいわれるような夫の浮気としても、これでは居ても立ってもいられないだろう。血走り、口走り、なお、駆けずりまわるだろう。しかし彼女はそれらに倍増したマゾである身の女の憎念を、堅い堅い殻のなかに押しこめ、信じられぬくらいの静けさで、逆に冷たく沈みこんでいったのである。

ただ、彼女はその憎念のたった一つの吐口のような「腫」で冷静を漂わせながらも、これまでのあのめくるめく二人の様態を『まぼろし』として見つづけるようになった。夫のこうなっては今は懐しいとしか言えない怒号と呻きを、そして陶酔の喘ぎをただ夢のように聞きつづけたのである。

終日椅子に凭れてひっそり過ごし、そして寝室にこもると今度は、これはもうおまえの牀の一部みたいになってしまった……と彼に言われたヨレヨレの縄をひっぱり出して、愛撫をはじめたのだった。こうして三日が経ち

四日目が暮れるうち、彼女はまずその腫が次第に際立って大きくなっていくかに見え、また生まれついていたの白い肌は、より一層透けてしまふのではないかと思うほど、蒼白く光っていたのである。

やがて——。彼女は、ただ泪を誘うばかりでしかない、臉のなかの夫への呼びかけをやめ、そっと、縄を膝の上にもどすとその縄れを解きほぐしにかかった。

細く哀れな指が、ゆっくりと縄に這った。ようやく、膝もとに大きな輪をつくったその縄を、矢張り遅々とした手つきで、裸の胸に巻きはじめた。いま、諸肌脱いではいるが——着たきりでもある紫紅色模様の和服の上からもヨレヨレの穢い縄がだらしなく巻きついて、彼女はふとあえぎながら、両手をうしろに回すのだった。

上体が傾いて、あやしく裾のみだれた姿が緩慢に、イヤイヤをしながら揺れた。

間もなく彼女のその美しい横顔に、何かを想い、何かのこみあがってくるさまが、ゆっくりと浮かびはじめた。……

彼女は天井を仰いで、
「あなた、帰ってきて……」
と、言った。

「帰って来て……こうしたあたしが駄目な女であつたら、駄目な女ではなくなるように思う存分、教えこんでちょうだい……」

そして、うしろ手の姿態を、曳かれたように仰向きに倒していった。すると乱れた紫紅色の波のあいだから、一層白白とした肌理こまやかな両肢があらわれた。肢は、幾度か膝を繰りかえし立てて、やがて『縄を縛い』はじめた。緊く、緩く、それは上下しながら、その指の一本一本が反りかえった。

嗚咽とも喘ぎともつかぬ声が振りみだれた黒髪のなかで嬌嬌としてこもり、そのうち、彼女のその『縛られた』体は、まるで堪えやらぬような起伏をみせてから反転し、うつぶせとなった。

——すると、湿りを帯びはじめた背中、掌のなかに余っていた縄が、またヨレヨレと、いかにも頼りなげな、途方に暮れたといった『表情』で彼女のうごめく腋のほうへと垂れていった。

承之章

それからどのくらい経ったのか。

睡るともなく、苦しい夢に魘されたまま臥

せていた由紀子を叩き起こしたのは——

突然、割れるような大声であつた。

当然彼女は、目をこすりながらきよんとした、が、すぐに——ぼやけている目の焦点を苦勞して合わせるまでもない、自分の枕辺に立って傲然と見おろしている人間を、夫の昭二と知つたのである。

知つた瞬間に彼女の体は、転ぶようにしてベッドから降りていた。そうしながらも両手を夫のほうへ伸ばし、膝をにじらせて、すがりついていこうとしていた。

だが、

「——馬鹿め、なにを寝呆けてんだ！」

濁み声と一緒にその夫の片足が撥ねあがつて彼女の手をしたたかに払ったからたまらない。彼女は支えるすべもなく半回転して肩先から落ち、着物の裾を舞いみだしてイヤというほど、床に顔を打ちつけてしまった。

一週間ぶりに、しかも深夜、何の前触れもなく帰って来た夫は、いま足許で、そのような無惨な倒れ方をする妻へ、細い目を一層細くしながら、なおその太鼓腹を突き出して、けらけらと高笑いをするのだった。そして、

「あなた、ひどい……」

と、四つん這いに身を起こしながら声をふ

るわせて言う妻に、また大笑いして、背広を脱ぎすてベッドへ上がると、彼女の枕の上へどっかりとその尻を乗せて、見るからに、いささかの憐れみも、愛情の色もないといった面構えなのだ。

——このとき、由紀子の目は、今またもうひとつの「変事」をみつめて瞬きを忘れてしまったように、より大きく見ひらかれていた。

夫が立っていたそのうしろに、もうひとり……イヤに気取ったポーズの女の下肢を見たのだった。そして彼女は、その女をすぐに見あげていくといった事はしないで、というよりそんな事すらも忘れたように、ただ凝つと目を据えているのだった。

「おい、蘭子。どうした……」

と、昭二が言った。が、鷹揚ぶつたその呼びかけは、すぐにまた大声にかわった。

「なんだ、なんだ！ そんな借りて来た猫みたいになって。……なにもお前、こいつの前だからってそんなに小さくなってるこたアないんだ。もっと威張って、でっかい顔してりゃいい！」

すると女は、本当？ と低声で言ってから急に虚勢を張り、

「そりゃ、あたいだって、もしそうしてもい

いんなら気が楽だけどさ。でもさ、奥さんがホレ……あんな恐い顔してるんだもん、なんぼ、あたいだって、借りて来た猫みたいにもなるじゃん。うふふ……それに、今夜はこのあたいの立場ってこともあるしよね」

と、由紀子より若い声には違いないが、しかし変に鼻に掛かって甘ったるい、というよりは、まるで幼稚児だ。それに、その言い草とは裏腹に「奥さんがホレ……」と言ったときには足先で由紀子の顔を指して、あとは全く馬鹿にしたように空拍子^{から}なんかとっている。「お前には……言わなかったけどな」

と昭二は、その風船みたいな容貌^{かお}には似合わない気障な型の長髪をこれまた気障っぽく搔きあげながら、

「いつもこいつは、そんな人がみても緊い……好感の持てっこねえ、ツラしてやがんだ。もっとも、言ってみりゃ生まれつきって事だろうがな」

「じゃアこれが、奥さんの素顔？」

「そうだ。だから気にするこたアない」

「だったら、ひとまず安心よね」

女のせせら笑いを聞いて由紀子は、始めて視線をあげていった。

赤茶けた長い髪——深紅のロング・ニット

の服を着込んで首には同色の大袈裟なロング・ストール、そのくせ、うそ寒げに肩身をすばめてポケットに両手を突っこんでいる。まあこの顔やスタイルは街の何処にでもころがっているわけだけど、この蘭子というらしい女はとりわけ、まだ少女のような顔立ちでもあるのに、眼ノ玉のまわりを塗りたくり、穴ぐらのタヌキみたいな目を光らせていた。(……この子が夫のいう素晴らしい女なの？活き活きしている、女なの？……)

すると、その蘭子の目が彼女に下手くそなウインクを送ってきて、

「じゃ、奥さま。挨拶しますネ。あたい友達^{ダチ}仲間ではブルーライトのヨコバイって呼ばれてるお見掛け通りのかわいい子で蘭子。なんだか知らないんだけど皆さん、あたいを見るとヨコバイしてきて抱きつきたくなっちゃうんだって。でもネ、いまでは其処の旦那さまの言いなり放題になっちゃった女の子。よろしくネ……」

もちやもちやと言った。そして昭二に、「……でもさ、あんた。こうして久し振りに奥さんのところへ帰って来たんじゃない。そんなに奥さんのこと、ぼろ、かすにいうもんじやないわよ」

こざかしくも言って、言った口の下からもう爪先で踊るように歩き、ベッドの上の昭二へ嬌声をあげて、抱きついていった。

「ばかやろう、その女のこと、のべつ幕なしに奥さん奥さんって、並べ立てるな」

「だって、奥さんだアもん」

「ばか。お前が今夜も、奥さんだ」

「あら……なによ、さっきからあたいのこと馬鹿馬鹿って」

「うん、なに？」

「そんなにあたいが馬鹿なら、その……ずいぶんと賢いそうなお奥さんに尻尾でも巻いて今夜はこのまま帰っちゃおうと……」

「うふふ……さてよオ！これから俺たち面白い事をおっ始めるんじゃないのか、え、そうだろう？そのためにお前だって、こうして俺にのこのこ従^ついて来たじゃないか」

「あれ、あんた。あんなこと……本気？」

「きまってるア！」

昭二は赤茶いろの髪を指に巻きつけながら得意気な笑みをうかべた。

すると蘭子は、彼の胸のなかで、その小狸みたいな目を一瞬輝かせて——だがすぐに、幼稚な仕草で呆れ顔をつくると彼を見あげ、そして由紀子のほうをチラリと窺った。

「でも、そんなことして」

「なんだよ、今になってお前、怖^おじ気づいてきたのか？」

「そうじゃないよん」

「案外、お前も見掛け倒しだな」

「ちがうったら！」

「まあいいや。それなら、これから二人で……いや違った、三人でよ、面白おかしく楽しむ事にしようじゃないか」

昭二は啞えたばかりの煙草をぷつと妻のほうへ吐きすてると、矢庭に双腕で蘭子の胸をぎゅう！と締めつけて、すぐにまた嬌声を張りあげる女鹿のようなその体と一緒に夜具へ倒れこんだ。

床の上でまだ四つ這いになっている由紀子の瞳に、そのとき一瞬のすさまじい炎が燃え上がったが——やがて彼女は、それまでよりも冷たい色にかわって、ばらばらに乱れた髪の毛の陰の表情を重く沈みこませていった。

それはあまりにも静かな姿で、些かも動じている風を見せないものであった。夫が他の女と痴態を繰りひろげるのを間近で見詰めている、とてもそんな、妻としての姿とは見受けられないのであった。

昭二は、甘ったれてあばれる女体にその肥^{ふと}

い図体を翻弄されながらも、この妻の様子にすぐ気がついた。彼は急に動きをとめた。

「あれ、どうなったの？」

と言う蘭子の上から起きあがると、のっそりとベッドを降りた。

「ああ、俺って、なんて思いやりのある男なんだろう！」

「なんの事よ、それ」

「うふふふ……ここで御覧になっているお客さんにも、大サービスして差しあげることをお願いしたのさ」

彼は蘭子よりも紅い、その唇を舐めた。

「へえ、どうすんのよ」

「俺たちの神聖かつ敬虔な行事を拝観するには、こんなに悪い位置からでは、きつと有難味が少ないもんさ。心ゆくまで、じっくりと拝観して、お楽しみ願うには、もっと角度のよい位置から……」

「？」

「まってる、大サービスするには用意する物があるんだ」

ニタリと笑った昭二は片隅へ行ってテーブルの下をごそごそやり始めたが、間もなく由紀子の近くへ東になったものを投げた。

「さあ、これがこのお客さんの大好物ってわ

けさ！」

立ちあがると大股で由紀子に近づいていった。身を屈めると由紀子のうなじに手をかけて、有無を言わせぬ乱暴さでその着物の襟を掻きわけ、摺りおろしはじめた。

すでに沈みこんでいたと思っただ彼女の表情に、このときまた驚愕と、恐怖のいろがありありと浮かびあがってきた。白い灯りに^{ぬめ}絨か^{ぬめ}がやいた二十四歳の柔肌がいま露わに剥き出されていく、それには構わず——いやそうでもなからうけど、彼女の手は摺りおろされる着物の袖をみずからぐり抜けて夫のほうへ伸び、これをとらえようとして振り廻されるのだった。

「なんだ、どうした。おまえの生き甲斐はどのようにされる事ではなかったのか？ だったら、そう逆らうもんじゃないぜ」

昭二の手は白い肌に喰いこんで、その腕を強引に背中へ捻じあげていた。

彼女の目に、恐れをこえた憎悪の色が燃えあがったのは、この時である。

蘭子がベッドから降りてきて、ニコニコしたいのを我慢した表情で由紀子の前へうずくまった。

「あら奥さんったら……綺麗ならだしてる

なアって感心して見ていたのに、傍で見たら
ずいぶんと色んな、痣があるじゃん」

年令や舌つ足らずの口ぶりに似合ねぬ太
さが蘭子のその横顔に宿って、膨れあがった
ような唇はチラと、陰険な年増のような歪み
をみせた。

「ははア、旦那さまの仕業ね？」

「ばか、くだらん事を言っただけで少しは手
伝え」

「あら、女性を縛るのがあんたのご趣味じゃ
なかったかしら。しかもこれは、奥さんに対
しての思いやり。ね、そうでしょう？ あた
いなんかの出る幕じゃないもん」

言いながら蘭子は、人差し指に唾をつけて
由紀子の腕のような乳房の上の、小さく消え
かかっている薄墨色の痣を突つくのだった。

「ばか！ 噛みつかれるぞ……」

と昭二が喚いた。

彼は、背中へまわした手首を括りあげると
その手の先が肩にとどいてしまうほどに吊り
あげて、前かがみになろうとする由紀子の上
体を手首もろとも、ぐるぐる巻きに縛りあげ
るのだった。腕が今にも折れそうに見えても
美しい乳房の形が無惨に壊れていっても一切
お構いなしに、だ。そして、縄止めしように

見えてもまだ二の腕に縄をくぐらせて、つよ
く絞りはじめるのだった。

「……」

今はもう、露骨な好奇の目だけで凝っと由
紀子を窺っている蘭子。その蘭子の目の前で
とうとう隠し切れずに由紀子は苦悶の色を噴
きあげていった。

だが由紀子は、この間、呻き声ひとつとて
洩らさなかったのはさすが、と言えよう。

膚には矢鱈と荒縄が喰いこんでいき、腕が
折れんばかりに曲げられていっても——口唇
だけは頑強に、一文字に結んでいる。その感
じは、姿形のなやかな風情の奥に秘められ
ている存外なほどの芯の強さ、であった。

「蘭子、もっと縄を取って来るんだ」

昭二は縛りあげた妻の両肩を押さえつける
と、何やら天井近くを見あげながら言った。

「どこにあるんよ？」

「あのテーブルの下に残っている！」

「どうするの？……ぶら下げるつもり？」

「へへ、そんな苦勞な事はしなくてもいい
だろうぜ。あそこ……鎖に引っ掛けて、こ
こから俺たちを一ト眺め出来るように立たせ
ておけばな」

「ち。そこまで考えりゃ思いやりを通り越し

て、極悪趣味よね」

「うるせえ。内心はこの俺の思いつきに小躍
りしてやがるくせに、利いた風なことを言う
な。早く、縄を取って来い」

「どうでもあたいに手伝わせるの？」

「俺は、こいつに猿轡を噛ませるんだ」

「へえ、それも思いやりのひとつ？」

「ばかやろう」

「あら、そしたら猿轡、こんなのでどう？」

「なんだ、首巻きか。そんなのスカスカして
効果がないや」

「もちろん、口になにか押し込んどけばいい
じゃん」

「なにか、あるか？」

「……あるわよ」

蘭子は含み笑いしながら、化けられるほど
生きてきた女のような驕りをつくった。

「どうせ、あたいたちには、要らないって事
になるんでしょ……」

言いながら、横坐りにくずれて、下から腰
のあたりへ手を差し入れた。

「ひひ、ひひ、案外お前だって……思いつく
じゃないか」

男にしては色白すぎるような、丸い顔。そ
の厚い瞼のあたりが先刻からポウツと紅らん

でいる。彼はその臉の下に、肉裂けの細い筋みたいな目を拵えて卑屈にわらった。

蘭子の手からピンク色の丸めたものが、昭二へ飛んだ。

「それでは——っと」

眩きながら蘭子はテーブルのほうへ髻を振り振り這っていった。

——昭二の片腕が由紀子の喉を巻いて、勢いにつられて態の向きが変わるとその二人の背中中は、ぐんと緊迫した動きを見せ始めた。

「なにしてんのよ」

縄を引きずって戻って来た蘭子が言った。

「こいつ、あばれやがる！」

「ふふ、そりゃ誰だって……いくら奥さんだってそんなもの押し込められちゃア、好い感じしないもんね」

由紀子の頬をつかんだ夫の指は中ほどまでも没していた。それでも彼女の唇はすぼみ、押しつけられてくるピンクの布を懸命に拒否していた。ざんばら髪の内奥で吊り上がった目が何処かを睨みつけてきらきら光ってはいるが勿論、彼女には何ひとつと映っていないかったかも知れぬ——しかしやがて、彼女にちからの尽きるときがきた。頤が、がくんとはずれたように開いてしまった。すかさず丸

められたものが押し込められ、彼女の口のなかにはピンク色で充満した。

すぐにストールで口を覆うて、ぐるぐる巻きにされる。千切れるばかりに、緊く。

蘭子はその時を待っていたように、由紀子のうしろ手へ追加の縄を掛けはじめた。

「でもさ、こんな必要であるのかな？」

「なにが？」

「猿轡。だって奥さん静かだもん」

「うん、……しかしア必要だろうぜ。だって俺たちの肝心なところで、こいつ、調子外れの声でも掛けてみる、それこそ水を差されるようなもんだぜ」

「うふふ……やアだ」

蘭子が、肩を押した。昭二が押し返した。

ふたりは何かの狂っている視線を縫い合わせ、笑いを含ませながら顔を寄せて軽く口を吸い合った。

自分の妻、そして相手の男の妻が苦痛に揺れているうしろで——爛れた思いが臭気を漂わせて交錯した、密室のなかのおそろしい一瞬であった。

由紀子のうしろ手に縄を加える蘭子の手は遠慮気兼ねどころか、むしろ楽し気だった

昭二はやがてその縄をつかんで立ちあがり由紀子の脛を、まるで荷物のように、ずるッずるッ、ドア近くの壁際まで引きずった。

そしてサイドボードを足台にして、天井近くに打ちこまれてある見るからに頑丈そうな銀へ縄を通す。

ふたり掛かりでその足台をのけて、早速、昭二が縄を引っ張り、蘭子が、持ちあげた。

「へえ、そう言やア、この部屋のあちこちにたくさんの鉄の輪、取っつけてあるわネ」

「うん、矢鱈とな。だがな、これも俺の過ぎ去ってしまった日の……言ってみりゃ、残骸みたいなもんさ」

「でも奥さんと、よくこんな事したりして、お楽しみだったんでしょ」

「ばか！」

「ま、いいじゃんか。それより、こんなしんどいこと、早くやっちゃまおうよ」

「う、うん……」

由紀子の体は、その時から始まった懸命な無言の逆らいも効果なく、じわじわとその半身を起こされた。否応もなく膝で立たされ、やがて足が伸びていった。

転之章

——そして、白磁のような肌に縄を喰い入らせ、腰から下にはどこがどうなったか見当もつかないほどに乱れた着物を纏いつかせて、やや浮き足で立った由紀子の姿。

悲鳴も上げられず、いや呻き声すら自由に洩らす事も出来ない。そのうえに諦めてしまったのか身悶えする事もやめたその姿は、まさに、『漂然』として見えた。それがかえって、泣き喚くよりも烈しく、あばれるよりも一層なにか鬼気迫る凄まじさというものを感ぜさせる。

吊り縄を今度は床近くの環に結び終えた昭二は、額に滲み出た汗を指で引っ掻きながら後退りして、そんな彼女の姿に凝っと見入った。見入りながら紅い唇のはしから舌をちょろっと出し、ゆっくりと舐めまわした。

すると、噴き上がってくるような『苦悶』のいろを浮かべていったのは、今度は彼であった。彼は、足許に残っている縄の束を指差して言った。

「おい、これで、足をくくるんだ！」

蘭子は、彼のこの怪しい昂まりを敏感に覺っていたのかも知れない。「どうして？」などとは、もう訊かなかった。だまって縄をひろって由紀子に近づいていった。

二人は急に黙り込んだ恰好で、それぞれに由紀子の足首へ縄を結えつけると、左右に引っ張って、隅柱の環にくくりつけた。

「ひ！ ひ！ 好い眺めじゃないか」

足が開いたばかりにうしろ手がぐんと吊り上がり胸もとへ頤をうずめてしまった由紀子を見て、昭二はいかにも嬉しそうな揉み手をした。

「揃いも揃って過去、の残骸どもが、こんなに見応えのある縛りを作り出してくれるとはなあ！ ……ああ、気持の好いポーズじゃないか、可愛い見物じゃないか。え、由紀、どうだ？ おまえもここまでして貰えば上々の気分、不満なんて全然なからうが！ ……」

大きな図体をゆすって由紀子へ話しかけ、ニヤニヤ笑いの同意をもとめる視線を蘭子におくった。

そして不意に彼は由紀子に飛び掛かった。

無茶苦茶な手付きでその着物を剥ぎ取りはじめたのだ。八、九十纏の間隔で拇指だけで立っているような由紀子は、それでも膝を突き出し腰をひねり、可能なかぎり軀をゆすって彼の手に逆らった。

「ふん、頭に来ちゃってんの！」

蘭子はこれを見て、白い表情かおをした。

ぶつぶつ言いながらベッドへ行き、どてんとひっくりかえった。昭二の上衣から煙草を取って啞え、火を点けると、ぶわアと、いやに苦々しい顔で煙を吹いた。

そんなところへ、いまにも鼻歌が出そうな顔をして昭二がやって来た。

「さあ、俺たち……始めるか！」

「……」

「今夜はお客さんつきの晴れ舞台よ、とは言って、なアに固くなる事はないがね」

「ふん、あたいは固いどころか、御覧の通りだらけてるよ」

「なに言ってるやがる。……それどころか、今夜のお前は彼処のお客さんが堪能するくらい気分をこめてヤンなきや、な！」

「……あ、あんた」

蘭子は不意に腕を捻られて目を光らせた。

「なにすんのよ」

「まず、あの女のように縛ってやらア」

「え、あたいを縛る？」

「きまってるあ。いったいお前は、なに考えてやがった。さ、早く脱いじまえ」

「あ、待って、待ってよ！ し……縛るって、もう縄なんか何処にもないじゃん」

「……？」

「ふざけてんの、使ってしまったって縄なんかありもしないのに縛るだなんてさ」

可笑しそうに言いながら——その蘭子が片手を掛け蒲団の下へもぞもぞさせるのを、ぼんやりと溜め息を吐きかけた昭二が見た。

「こら！……隠したな？」

「なによ」

「とぼけるな。縄だろう！」

「知らないわよ」

「この嘘つきめ、退きやがれ！」

昭二の腕が女の軀を拘って——

「見ろ、隠してたじゃないか」

蒲団の下からヨレヨレの縄を引っ張り出して、それを掲げながら蘭子を睨みつけた。

「隠したりしない、始めから此処に……あったンよ。でも厭だなア、そんな汚い縄であたし、縛られるなんて……」

矢張り、蘭子の目にも、その縄のくたびれ加減がよくわかったらしい。

が、このときだった——壁際に吊られて身動きもしなかった由紀子が、突如、としか言えないような狂おしさでその身を揉みはじめたのは。

蒼白だった顔にみるみる血の気がよみがえって、今までとはまるで別人のような、する

どい目つきになっている。そして彼女は——顔を突き出すようにして振り、しきりに猿轡の口を動かして声にはならぬ声を上げはじめたのだった。

「ま、……奥さんがなにか言ってる」

裸身を縛らせながら蘭子が、頤で差した。

「ホラね、ずいぶんと暴れて……」

「放って置け」

「へえ、ただ聞いてやる事もしないの」

「どうせ、許して頂戴……だろうて」

「でもなさそうよ」

「ふうん、それじゃあ……」

昭二はちょっと、きな臭い顔をした。

「その縄はあたくし専用の、それはそれはもう大切な縄でございます。だから、何処の馬の骨とも知れないような女になど気易く使ってもらっちゃ困ります、ってところかな」

「あたいが、馬の骨だって……」

「そうさ、この縄はな、この家に数ある縄の中でも一番、あの女の肌の味を知った縄だ。言ってみりゃ、あの女の全身を締めつけ、舐めまわしてきた縄、ってやつだな」

「じゃ、奥さんのお気に入りってわけ」

「まあそんな、風だったな」

「だからこんなところに、この縄だけが仕舞

ってあった……」

「なに言ってるやがる、それはお前が」

「ちがうわよ。あたいは、ちょっと押し込んでみただけよ」

「そうか。でもな、今夜だけは特別として、

俺に飽きられてしまった女なんかじゃもう縄なんて要らねえ。この縄にしても俺が捨てちまおうが何処の女に使おうが、そんな事ア勝手とくらあ」

「でもねえ、あんた。この縄、汚いわネ。なんだかネトネトの感じもするんよ」

「贅沢言うんじゃない。この俺に責められた女の、つまり総恨みがこもっている縄だと思ってるや……また感慨も一入しゅって気分になれるぜ」

「ふん、それは、あんたのことだろ！」

「あれ、こいつ……」

「そ、それにしてもあんた、いつもよりチト乱暴過ぎちゃあいない？」

「なに、乱暴？ ふざけるな。この俺が今までお前に手加減した縛りなんぞ、やった事アねえぞ！」

「じゃこの縄が、生きものみたいに、勝手に締めつけてくるとでもいうの？……あたいさっきから軀が千切れそうなくらい痛くって

痛くって、息が詰まりそう！」

蘭子はいかにも気味悪そうに胸もとの縄を
瞞め、嫌々をするように軀を揺らしながらそ
の声音も交にくぐもらせるのだった。

そして事実、その言葉のように次第に苦痛
の色を浮かべていき、やがて堪えかねたかの
ように身を振り振り、ふと、微妙な、恐懼に
も似た色をその目に走らせて——由紀子のほ
うを見たのであった。

勿論、昭二に言わせれば、こんな縛りの程
度では、ついぞ音を上げることもなかった蘭
子なのだが——

「い、痛い！」

言ったとき彼女は、髪を引っ張られ他愛も
なく俯伏せになって倒れていた。下肢が撥ね
上がってまだ熱れてはいない『青青』とした
肉体が昭二の目に曝けだされた。しかし軀全
体はすぐに、苦痛の歪みをみせて、火に炙ら
れたように縮こまっていった。

昭二は、そんな蘭子を、今夜特別の『昂奮
のあまりのゼスチュア』とでも思ったか——
にたりと嬉しげな笑みを浮かべただけ。そし
て彼女の片足を曲げると、わずかに余してあ
った縄をその足首に巻きつけるのだった。
やがて彼は例の舌舐めずりをみせながら、

腰からバンドを引き抜いた。それを、早や振
りかざしながら仁王立ちとなった。

結 之 章

両手を縛ると、片足だけの自由も奪う。

それから鞭打ちながら、その苦悶に踊り、ま
わる姿態をたっぷりと賞玩する。——昭二の
『趣味』は、こんなところにある。

女体は間断なく振り下ろされる鞭の下での
たうち廻りながらも、せめて、その『片足だ
けの自由』でもフルに利用して何とか逃れよ
うと努力する。だが、言わずともこの『片足
だけの自由』が曲せものである。昭二の場合
それは、たっぷりと賞味させてもらうに——
いや例の舌舐めずりをたっぷりとやらかした
いがためは振りかけた、女体『調味料』であ
ることは言うまでもない。

女体はそのちっぽけな自由を利用すればす
るほど、かえって両足を使って暴れるよりも
一層凄絶としたものを展開するようになる。

彼はこの一週間、それを、この蘭子という
女を実験台に乗せることによって、確かめさ
せて貰ってきたのである。

また、この責めで彼が特に言える事は、蘭

子のその若さという点であった。

つまり由紀子の比ではないのだ。苦痛にゆ
がみながらも、絶叫に狂って硬直しながらも
停まることを知らず、まるで舟板に釣り上げ
られたばかりの魚のように撥ね廻り躍り返る
のだ。見た目にはまだ育っている途中でもあ
るし、枝のような軀で、誰の目にも弱々しく
映るに違いないのだが——ところが見掛けに
寄らぬとはこのこと、彼女は『底力』という
か仲々果てることを知らないで猛り狂い、目
まぐるしく動きつづけるのである。

そして昭二はと言えば、いつもこの彼女の
若さに『^{かぶ}気触れ』てしまうのだ。鞭打するそ
の燃焼ぶりが、時間の経つにつれ衰えていく
どころか度を増していき、彼女に合わせて？
いつ果てるともなく奮闘を続けてしまう。

いま、その狂態が、延々として由紀子の目
前で繰り展げられていた。

すでに昭二の打ちおろすバンドの鞭で蘭子
の軀は、鮮烈な『朱』もまじえたピンクの色
に染めあがっている。

この夜はいつもに似合わずちょっと緩慢な
ところもあるが、それでもその被縛の裸形は
いなやかに、ほとんど停止もなく起伏し伸縮
しながら部屋中をのたうち廻っているのだっ

た。背中の手首と片方の足首を繋いだ縄の長さは僅か三十センチばかり、逆海老のように反り返らざるを得ないだろう。だが彼女は、あきれるばかりの『スタミナ』で常に全身を波うたせながら、自由であるもう片方の足を大きくばたかせて鞭の下を転げ廻っているのだった。

弾みで、躰が異形に纏れる。さてはついに終局が来たか——と思った瞬間には、なんの凄まじい勢いでもう躍って寝返りを打ち一気に彼から三メートルも離れてみせるのだ。

長い髪が顔を覆うように巻きつき、まるで赤茶いろのマスクを被ったみたいだから、その表情は定かでない。しかし、反転するとき、さすが胃袋あたりだろうか締めつける縄目をくぐって異様に丸く押しあがり、何とも言えぬ苦痛の呻きが洩れてくる。

そして、そんな彼女を、これまた『スタミナ』充分の様子で追い廻して、鞭で打ち、足蹴りにしている男の目は、涙で濡れたようにキラキラ光っていた。唇はますます紅く、その隅から涎さえがタラタラと垂れていた。

——と、その昭二が手を止めて、不意に喚いた。「由紀！ どうだ！」と。

額の青すじが描かれたように浮かんで今に

も血を噴き出しそうな赤い目で彼らのする事を凝視していた由紀子は、荒い息を吐いて近づいて来たその『片割れ』の夫に、また何やら声にならぬ声をあげた。

「そうか。そんなに気に入ってくれたか、俺たちのやっている事が……」

昭二は汗まみれの顔で、にやにや笑った。「どれどれ？ どのくらい喜んで呉れたのやら……ちょっと失礼して、調べさせてもらいましうかな？」

彼は顔の触れるほど接近して、それから、ゆっくりと手を……伸ばしていった。

少し身を屈め、彼がなにかを探っている。

——そんな目つきをしたとき、由紀子は顔をのけぞらせて天井を仰いだ。そして足を突っ張らせ、不自由なからだを、烈しく回転させた。もし、昭二は彼女の胴へ片腕をまわしていなかったら、その彼女の勢いで尻餅ぐらいは、つかされていたかも知れない。

「……あんた！ 何してるんよ」

壁際で暴れながら、蘭子が怒鳴った。

「なあに、俺たちがどれほどの効き目をもたらしたか、ちょっと調べているのさ」

昭二は、由紀子から少し体を離しはしたがまだ手のほうは、伸ばしたままだ。

だからやがて横へ身を捻ってこのほうを見た蘭子に——これはよくわかってしまった。

「き、効き目って、なによ！」

「……うふふ、この女はな、意外と素直で従順なところもある女だな。この俺のすることを見ているうちに……自分もびったり調子を合わせてしまうという、女なんだ。それも、たっぷりとな……」

「ちくしょうッ」

と蘭子は、その悲惨な恰好には似つかぬような元気な金切り声をあげた。

「ひ、ひとをこんなままで放って置きやがってッ！」

しかし蘭子をふりかえった昭二の表情は随分と間伸びしている。すると、蘭子は、まだそんな体力が余っていたのかと思うほどに足をばたつかせて何やら唸り声を上げながら匍い寄ってきた。

「ちッ、気が散るなァ……」

白々しく、溜め息を吐いてみせたりして、昭二はやっこのことで由紀子を離れた。そして、何かを必死に堪えてきて猿轡の顔をこまかく震わせている由紀子の、その喉もとをさも珍しげに眺めながら、

「ではお客さま、いやさ絶大なる御声援のお

客さま。この辺でまたごゆっくりと……俺たちの仕上げの舞台をみていただくことにしましょうかな」

と、言うとき突然、その場処から肉団子みたいに肥った軀を丸めて転がり、近づいている蘭子のその妖しい両手片肢縛りの姿態めがけて襲い掛かっていったのだった。

——このときから。

この部屋に、まるで、悪魔の棲む世界からつたわるような唸り声が絶え間もなく交錯し始め、悲惨なるそれは、やがて『充満』していき、もう何もかもが熟れて腐ってしまうほどの雰囲気醸し出していった。——

由紀子は別に、睡ってはいなかった。

が、物音の、なにひとつしない静けさが、ふと彼女を目醒めさせた。

冷気が全身をつつんで、三つの鎖に繋がれたまま壁に寄り掛かっている軀には、もう苦痛を起えて感覚らしいものもなかった。ただ動かし得たのは、それまで喉もとにうずめていた顔を僅かに上げたぐらいのことである。

まだ、夜は明けていないだろう。——

それは朝をもうすぐ迎えようとするひとときで、人々の、いま一番深い睡りにある頃合

であつたかも知れぬ。

由紀子は、自分が聴覚を失っていることを淡く思い知りながら——ともすれば、また重なるうとする臉をけんめいにこらえて、まず足許近くに投げ捨てられてある縄を見た。

煌煌と点け放された明かりのなかで、この身の、汗と脂と涙が泌みこんだその縄はいままた他の女のそれを泌み込ませてヨレヨレともう『見る影もないすがた』を曝している。

彼女は視線を、その向こうにやった。

ベッドの上で、生まっ白く肥った足と細く撓やかそうな足が縫れ合い、掛け蒲団からはみ出していた。女はみみず腫れのついた背中を僅かに見せて枕へしがみつくような恰好で睡っている。男は、こんもりと蒲団をよりあげて此方をむき、その女へ半身を被せるようにして安らかな寝息を立てている。

みつめているうちに——

乱れて、疲れ果てて、もう一片の感受性すら残っていないかった筈の彼女のところが、またもや震えはじめた。

彼女は低くうめいて、その身を繋いでいる三つの鎖をきしませた。

ベッドを中心とした視野のすみから、何やら黒い、煙霧みたいなのがモクモクとあら

われて、彼らを見るにも——足許の縄を見るにも、あたかも懐中電灯の小さな光の輪で見ているような不思議な症状が襲って来たのはそのころからであった。

やがてベッドの上の形態にだぶって、そこに妖しい幻覚が生じた。

裸身をきびしく縛られた女。それを男が責めている。

何かに白くばやけ、照りかがやきながら、男は映画のスローモーションを見るようにゆっくりと跳躍の影を繰り返して曳く。女はそのたびに只ならぬ身のくねりを見せて影を起伏させている。と、それは次第に熔け合っていく、間もなく、赤く燃えながら一つになった。何やら喚きつづける男の声。それに応えるかのような狂おしい女の叫び！——

フィルムの切れたような停止があるかと思うと、突然凄まじい動きがある。こんな事が何べんも繰り返される。

——が、由紀子はここで愕然とした。

その妖しい蠢きのなかで、今に息も絶えてしまふような切迫した表情でこちらをむいた女は、なんと、あたしではなかった！——

(男はあきらかに夫の昭二その人なのに、女は、あたしとは似ても似つかぬ女！)

依然として煙霧の漂うそのなかに、やがて彼女は赤茶けて流れるような長い髪を見た。

嫌らしい、眼の化粧をした小娘の横顔を見た。しかも、気がつく、その小娘は彼女へこれ見よがしに大平楽な顔をしてもう眠っているではないか。そして夫、昭二までが例の間伸びした顔でいびきをかいている。その、すべてを果たして満足したらしい顔、顔。

(憎いッ！)

と、心のうちで叫ぶのと同時に、由紀子に今また新たな血の奔流がのぼってきた。

(憎い！ 憎い！……)

由紀子は、その噴き上がった血に灼かれて気を失いそうになった。ぐっとこらえて下を見たとき、深紅のストールの猿轡にみるみる唾液がにじみ出てきた。そして数時間も唾液に濡れびたり噛みしめられてきた口中のものが吐き出されて、次第にそのストールを膨らましはじめた。

「……しゅる！」

と、言った。

「しゅる！ しゅる！」

と、低くかすれた声で言って、彼女は紅い珠のような双眸で凝っと、足許のヨレヨレの縄をにらみつけた。

そして女の憎念のすべてがこもったその声は、いつしか流麗なひびきにとさえ変わっていった。

「しゅる…… しゅる……」

と尚も彼女は、何かを懸命に願うかのよう、何かを必死に『縄へ吹き込もう』とするかのように言いつづけた。

——縄は、こうして動かされたのだった。

微かに縄尻を、生きものの尾か頭のようにふるわせたかと思うと、依然ヨレヨレとしながらもくねり、床を擦って直線に伸びつつ、ベッドのほうへそろそろと進みはじめたのであった。このとき由紀子の、その紅い瞳にとても人間のものとは思えない不気味な笑いが浮かんた。そしてこの笑いはすぐに、うしろ手に吊り縛られている躰のほうへも、ぴく、ぴく、とひろがっていったのである——

縄は、匍った。

もそもそと緩慢に匍っていき、ようやく男と女の許に、たどりついた。

ゆるゆるとベッドをつたってのぼり、赤茶いろの髪を縫ってその細い首に巻きついた。

一方、痙攣してみせた縄尻は、瞬間釣り上げられたように高く撥ねて、男の太い首にと巻きついた。

「しゅる！ しゅる！……」

と、怖ろしいこの世のものとは思えぬ『叱咤』の声で縄は徐々に締まっていった。

女が眉をひそめて寝返りを打ち——男の寝息が、ふと止まった。その男の眼が薄ぼんやりとあいて、首をかしげると、半身を起こしながら喉に手を持っていった。しばらくして急激に、自分の置かれている状態がわかった風だ。が、その時は、すでに遅かった。

「しゅ、しゅ！ しゅる！」

一際高い叱咤の声に縄は、このとき完全に生きもののように二つの首を締めてキュッ、キュッと音さえ立てた。男の目はいっばいに見ひらかれ、そしてわなないたその唇から、「ち、違うんだよッ、由紀！……」

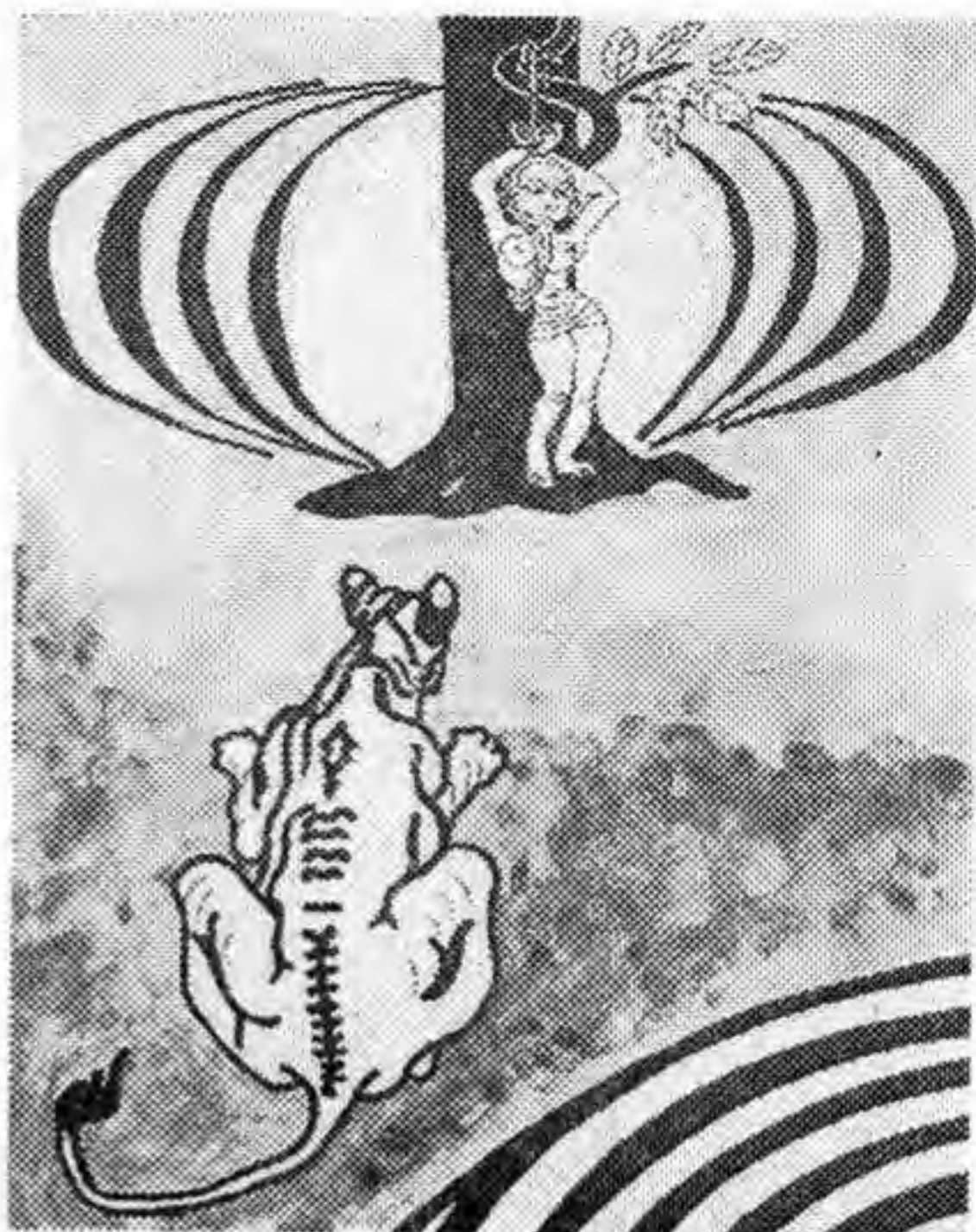
という声がこぼれた。

なにが、一体、ちがうのか——

しかし、これと殆ど同時に彼は躰を突っ張らし、仰向きに女の上へ倒れ白眼をむいた。しゅる。しゅる。

と、いつまでも、気味悪くおそろしく、そして悲しい由紀子の声がつづいていた。——

——(おわり)——



懸賞入選

続 イアン・フレミング

「翻訳ミステリーのサド・マゾ紹介」

ショー・ムラカワ (カットも)

先日、数あるスパイ・アクションの内より特にフレミング氏の作品を第六作まで紹介させていただいた。今日は残りの分を御賞味していただく。

第七作は「ゴールドフィンガ」である。

これもショーン・コネリー主演で映画化された(映画化第三作)。この映画が上映された時、町のあちこちに、肌を金色にかがやかせたヌードの女性がベッドに横たわる奇抜なポスターが氾濫したので、映画を見なくても

その映像だけは、頭の片隅にとどめている人が多いだろう。

ストーリーは、拝金亡者であるゴールドフィンガーが企む二つの大犯罪——金の密輸とアメリカ合衆国の保有金金庫ノックス砦の襲撃——を軸にして、ボンドが孤軍奮闘する物語である。

サディストには、ゴールドフィンガーが小さな醜悪な体で頑張る。

犠牲者には、ゴールドフィンガーの女秘書ジル・マスタートオンが長身のしなやかな体で

登場する。

サド場面は、ジルの妹のかたりの中にでてくる。

「あいつは、月に一ぺんずつ女を手にいれるのよ。ジルははじめてあの仕事についたとき、私に話してくれたわ。あいつはその女たちを麻酔で眠らして——それから——体中を金で塗るのよ」

「へえ！ なぜだろう？」

「……略……つまり、金の女を手にいれたよ

うなつもりになるんでしょう。わかるでしょう——金と結婚するのよ。朝鮮人の召使いに、女たちを金で塗らせるのよ。背骨のそこだけは、塗らないでおかなければいけないんですって。ジルにもそこまでは説明できなかったわ。でも、そうすれば、死んでしまわないからだろうと、あとでわかったわ。体を金ペンキですっかり塗られたら、肌の毛穴が呼吸できなくなつて、死んでしまうのよ。——用がすむと、……略……ゴールドフィンガーは、その相手に千ドルやっておっぱりだすんですって」

ボンドには……略……光る立像を激しい所有欲で目を光らせて見ているゴールドフィンガーが、目に浮かぶようだった。

「ジルはどうしたの？」

「来てくれという電報がきたのよ。マイアミの病院の並等病室にはいつてたわ。ゴールドフィンガーに、ほうりだされたのよ。死にかかってたわ。お医者さんたちにも、どんな目にあつたのかわからない。ジルは私には、どんな目にあつたか——ゴールドフィンガーが何をやったか、話してくれたわ。ジルはその晩死んでしまったのよ」……略……

「私は皮膚の専門家のトレインのところへい

ったわ。……略……銀像のまねをしようとして、あるキャバレーの女が、そうだったことがあるんですって。その時の症状や解剖の詳しい結果を教えてください。それで私も、ジルがどんな目にあつたか、はっきりわかった。ジルは体中、すっかり塗りつぶされたのよ。ゴールドフィンガーに殺されたんだわ。……略……あなたといっしょにいったというんで復讐されたんだわ」(井上一夫訳「ゴールドフィンガー」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック第六〇一号一八六—一八七頁)

○

女性を料理するにも、だんだんこつた調理法を使うようになった。下地づくりにも、なかなか苦心をするようだ。

流行の先端を突っ走るは、ヒッピー族御推薦の「ボディ・ペインティング」

片や古典を代表するは、江戸時代より東映時代に連綿と続く「いき」と「いなせ」をトレードマークに、うりまくったお兄い^{あに}さんがた御推奨……「クリカラムンモン」「カラジシボタン」可愛いあの娘の、二の腕めくりや「タメゴロイノチ」のカナ8文字……のいれずみがある。

しかし、つらつら考えるに、サド・マゾ族

にとって、一生涯、着たきりすずめの一帳羅で脱ぎも着替えもできず、一歩めの変化のあと、二歩め、三歩めの変化が味わえぬ、いれずみより、その都度その都度に変化を求められ、新鮮さを味わえ、結果よりも描く行為にその課程に喜びを見いだせる、ボディ・ペインティングの方が深みはないにしても楽しめるのではなからうか。

さて「ゴールドフィンガー」幕ぎれにあつての一節に、

「私は南部の出なのよ。向うでは、処女をどういうか知ってる？ ああ、兄貴より足が早い女かっていうのよ。いずれにしても、私は叔父より足が早くなかつたわ。だって十二のときですもの。ひどいものよ。あんたなんかには想像もつかないでしょうけど」(前記第二九〇頁)

といったセリフがある。これはボンドの新たなアメリカ人の恋人プッシーの言である。これには、ただただ「フーン」の感嘆詞のみ。ただし「フーン」の語尾は、はねあがったことをつけ加えておく。

×

×

第八作 短編集 「〇〇七号の冒険」

これは五つの短編より成っている。「バラ

と拳銃」「読後焼却すべし」「危険」「珍魚ヒルデブランド」「ナッソーの夜」である。

短編であるため、それぞれテーマを一つに絞っている。「バラと……」「読後……」「危険」はアクションに「ナッソー……」は一組の夫婦の破局に「珍魚……」だけがサディスティックなものにテーマをおいている。よってここでは「珍魚ヒルデブランド」をとりあげる。

ストーリーは、忙中閑の一刻をインド洋上に浮かぶセーシェル諸島で過ごすボンド氏がふと乗り合わせたヨットの、数日間の出来事である。

サディストとしては、アメリカ人の実業家でヨットの持主、ミルトン・クレスト。

犠牲者には、クレストの妻でイギリス人のエリザベス。

クレストの人物像は、鉄砲の弾丸に針金を植えたような、短く刈りこんだ白髪まじりのまばらな髪、いかりにワシのいれずみをした右腕、今はなきギャング俳優ハンフリー・ボガート^{ボガート}ばりの話し方、色あせたジーパンに軍隊式のシャツ、太い革ベルトのヘミング・ウェイの小説の主人公達^達つまり意志、行動力、快楽の追求者で、朴訥、粗放を気どっている

人物。

つまり役立たずの「セガレ」をかかえて、コンプレックスを感じ、なんやかんやと苦勞している男なのである。日本でいえば、さしずめ「見死魔行男」^{見死魔行男}ばりの、こわもて好みとあったところか。

この夫婦の関係については次のようにいつている。

『やはりそうだったのか！ このおやじもまた、例の暴君的ドイツ人なのだ。喉を狙うか足もとにひれ伏すかというのだ。……略……』

この美しい妻も、奴隷のつもりで、飼ってようなものだろう。イギリス人の奴隷だ（井上一夫訳「〇〇七号の冒険」創元推理文庫第一八六頁）

クレスト氏専用の小道具については、『クレスト氏の説明は、なだらかにつづいていたが、ボンドの目はベッドぎわのテーブルのかげにかけてあるものに向かっていた。

大きなダブル・ベッドのクレスト氏の側らしいほうに、かくすようにして、つってあるものだった。長さ三フィートばかりの細い鞭だった。皮でくるんだような握りがついている。鞭は赤エイの尾で作ったものだった。……略……とげだらけの鞭を指でなぞてみる。

それだけでも指が痛かった。

「こいつは、どこで手にいれました？ わたしは、けさ、この怪物を一匹退治したんですかね」

「バーレインだ。あそこではアラビア人が、女房の仕おきに使うんだ」クレスト氏は笑いながらいった。

「もっとも、うちの女房には一なぐり以上はやったことがないが、ご利益あらたかだな。うちでは、こいつをカントクさんと呼んでるんだ」

……略……「そうですかねえ。セーシェル諸島の頑丈なクリオール人たちですら、こいつを持つことは法律で禁じてるんですよ。使うなんて、とんでもない」

クレスト氏はドアに向かっていった。冷やかにいう。「おいおい、あいにくこの船はアメリカ合衆国のものだぜ。さて、一杯やろうかな」（前記第一九一―一九二頁）

さて、サドシーンであるが、これは間接話法であらわしている。

『「よけいな口を出さんほうがいいぞ」クレスト氏は猫なげ声でいった。「いいかい？ 自分でもわかってるだろう？」やさしい無造作な口調だった。「出すぎたことをいうと、

あとでカントクさんにお目にかかることになるぞ。自業自得だよ」

リズの手が、すっと口もとにいった。目を大きく見ひらいて蚊の鳴くような声でいう。「やめて、あなた。お願い、それだけは」

(前記第一九六頁)

「彼女は、きのうは一日ベッドから出てこなかった。頭痛のせいだと亭主はいつていた。いつかは彼女も、亭主にさからうようになるのではなからうか?……略……」

クレスト氏は、うまい女房をえらんだものだ。奴隷タイプの女だ。それに、玉のこしにのったということが、女にとっては手も足も出ないかせになっている。あの恐ろしい亭主を片づけたところで、あの赤エイの尻尾の鞭が法廷に出されれば、陪審員は彼女を放免してしまうだろうということが、彼女にはわからないのだろうか?……略……

「ねえ、奥さん。ご亭主を殺したかったら、殺したって、だいじょうぶですよ」

ボンドは水中マスクのなかで、思わず笑ってしまった。冗談じゃないぜ!ひとさまのことに、口をだすことはない。それに、彼女もマゾヒストなのかもしれないぞ」(前記第一九八―一九九頁)

「船首の乗組員用の浴室でシャワーをあびたボンドが……略……ベッドを作ろうとしていると、はっとするような悲鳴が、ひと声。夜空をきりさいてひびいたと思うと、すーっと尾を引いて消える。女の悲鳴だった。」

ボンドはサロンをぬけて、廊下をとんでいった。船室のドアに手をかけて、はっと思いとどまる。女のすすり泣きと、それを上まわるようなクレスト氏のくどくど何かいう声。

ボンドはドアから手をはなした。ちえっ、自分になんの関係があるんだ?あの二人は夫婦なんだ。

女がああ亭主に我慢して、亭主を殺したり逃げ出したりしないというなら、任侠の騎士を気どって出る幕じゃない。

ボンドはゆっくり廊下をもどった。サロンを通るとき、また悲鳴が聞こえたが、こんどは前ほど鋭くなかった。

ボンドは立てつづけに悪態を吐きちらしながら、デッキに出ると……略……女ってやつは、どうしてああ意気地がないんだろう?」(前記第二一七―二一八頁)

ボンドが「サド・マゾ」夫婦を前にして、ひごろのボンドらしくらず、やきもきして途方にくれ、むくれかえっているとこなぞは、

なかなかおもしろい。

しかしこの奥さんも、たいしたもので、最後には、寝ている亭主の口に珍魚ヒルデブランドを押しこんで窒息死させてしまい、その残酷さにボンドをへきえきさせる。

×

×

第九作は「サンダーボール作戦」である。

シヨーン・コネリー主演映画化第四作であるが、ヒロインのドミノを演じたクロード・イヌ・オージェは、なかなかの美人だった。「ドクター・ノオ」でハニーを演じたアーシユラ・アンドレス——ボデーに弓のような引締った「しなり」が、かんじられた——と共にボンドをめぐる女達の中ではA級である。ストーリーは、犯罪組織スペクターが、原子爆弾を搭載し、訓練中の英国機を強奪し、その原爆でイギリスとアメリカから一、〇〇〇億円相当の金塊を、おどしとらんとする物語である。

これは実に材料が豊富で、北大西洋条約機構、CIA、FBI、国防閣僚会議、スコットランド・ヤード、国際警察、スパイ、マフィア、ゲシュタポの生残り、中近東麻薬組織、水中翼船、原子力潜水艦、アクアラング、カジノから食事療法の健康論、はては一本のジ

ンから何杯のドライ・マーティニができるかという損益論、エトセトラ、エトセトラと、ぶちこまれている。

そのためスペースがなくなってしまうらしくサド場面はワン・シーンか出てこない。映画化するには絶好だろうが、サドファンにとってはサービス不足の作品である。

サディストには、スペクター団の幹部ラルゴ。犠牲者にはラルゴの女でスペクター団に兄を殺され、ボンドに想いを寄せるドミノ。問題のシーンは、ドミノの裏切りが、ラルゴに発見された処で起こる。

○

『ドアをしめると鍵をかけた。この部屋も、赤い標識灯が、天井から下っているだけだった。その下のダブルの寝棚にドミノが手足をマットレスの下に四本の支柱に縛られて、まるでひとでみたいな恰好で横たわっていた。ラルゴは氷のいれものを簞笥の上におき、そのわきに葉巻の火がニスの部分を焦がさないように用心深くバランスをとっておく。

ドミノはじっと彼をにらみつけていた。その目が、うす暗い船室で赤く光る点のようだった。

ラルゴが口をひらく。「なあ、おれはお前

の体でさんざ楽しませてもらってきたんだ。とても楽しんだぜ。それなのに、あの機械を船にもちこむことをだれにたのまれたかわらないと、お前をうんといたい目にあわせなければならぬんだ。道具はいたって簡単なんだ」葉巻をとりあげて、先が真っ赤になるまでふかして見せる。

「こいつは熱いほうで、それからこの角氷は冷たいほうだ。おれがやるように科学的に使うと、こいつがどうしてもお前に音をあげさせることになる。悲鳴がやめば、口を割るようになるし、本当のことをしゃべるようになるんだ。さして、どっちがいい？」

ドミノの声は、憎しみがこもってすごかった。

「あたしの兄を殺して、こんどはあたしを殺すのね。たんと楽しむがいいわ。自分だってもう死んでるようなものなんだから。すぐにそのときがくるけど、そのときはあたしは、あたしたちの百万倍もお前が苦しんで死ぬように神様に祈ってやる」

ラルゴの笑いは、しゃがれた短い吠えるような声だった。

「そいつはいい。じゃあ、お前をどんな目にあわせるか、やってみようぜ。うんとやんわ

りと、うんとじわじわとやれるところを見ようぜ」

ラルゴはかがみこんで、ドミノのシャツの衿とブラジャーを、いっしょに指でひっかけた。いやにゆっくりと、だがすごい力をこめてそれを下に裂いてゆく。いちばん下まで引き裂くのだった。それから、半分ずつに破れた布をわきに投げすてて、つややかな全身をむきだしにする。丹念に何か考えこみながらその体を眺めると、こんどは簞笥のところへゆき、葉巻と角氷のいれものをとってくる。寝棚のはしに楽に坐りこんだ。

やがて葉巻をひと口吸うと、灰を床にはたき落して、前にかがみこんだ」(井上一夫訳「サンダーボール作戦」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック第七三六号二三六―二三七頁)

このあと、ラルゴは、息もたえだえなドミノに、喉へ水中銃の銚をうちこまれて殺される。フレミングの作品に登場するヒロイン達は、皆モーレツな反攻精神を持っている。

×

×

第十作は「わたしを愛したスパイ」

これは今までのボンド物と違って第三者の目でみたボンド像を描いている。

それに主人公は女で、ボンドはその女の一期に、ふと、登場し風のごとく去っていった男としている。西部の漂泊者「シェーン」といった感じである。

サディストとして、ホラーとスラグシーの二人の殺し屋。

生け贄には、スクーターで過去の生活から逃げだしてきた女、ファンシー。

サド場面は、ファンシーが、はやらないモーターの火災保険詐欺にまきこまれた時に起こる。

「スラグシーがわきにならんで、あいているほうの手がいやらしくわたしをなぜまわす。

わたしはただ「やめて」というだけで、抵抗する気力はなくなっていた。

スラグシーはそっといった。「姐ちゃん、お前はまずい立場になってるんだぞ。ホラーはひでえやつだからな。こってり痛い目にあうぜ。……略……」

「ようし、そうかい姐ちゃん。そっちがそうならこっちにも考えがあらあ。今夜はひどい目にあわしてやるからな。わかったか？」
思わず悲鳴をあげるくらい、強くわたしをつねった。

スラグシーはうれしそうに笑う。「そうそ

う。たとと歌いな！ 今夜の稽古にならあ」
……略……

ホラーと呼ばれた男は、部屋のまんなかんでれっと両手をさげてのんびり立っていた。

例の冷たい目でじっとわたしを見つめている。やがて、右手をあげて指を一本だけ曲げて招いた。冷たい傷だらけの足が、勝手にわたしをそっちへはこんでゆく。……略……

わたしは、ホラーの前で足を止めた。じっとわたしの目を見つめたまま、その右手が蛇のようにとんできて、わたしの顔をひっぱたいた。パシッパシッと右左からひっぱたく。
……略……

ここでゆっくりと、まるでなぶりものにするみたいに、ホラーはわたしをなぐりはじめたのだった。いま平手でなぐったと思うと、こんどは拳。とぎすました肉感的とでもいっていいような残忍さで、目標を選びながらなぐるのだった。

最初はわたしはからだをよじったり曲げたり、足で蹴ったりしたが、そのうちに悲鳴をあげはじめる。血をしたたらせた灰色の顔と黒い穴みたいな目が、じっとわたしを見つめて、手があとからあとからとんでくる。

わたしは……略……はだかでタイルの床に

横になる、きれいだった服のぼろぼろになって汚れた残骸がわきどころがっている。

楊子をクチャクチャ噛みながら、スラグシーが壁によりかかって、冷水のタップに手をかけていた。その目は細く光っていた。

彼が水を出すと、やっとわたしは膝をついて起きあがる。吐くだろうとわかっていたが気にもしなかった。

わたしはもう殺されるのを待って、べそをかいている飼いなされた家畜みたいなものだった』（井上一夫訳「わたしが愛したスパイ」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブックス第八〇〇号九三〜九五頁）

○

これはモーターに放火しようとしている二人組が、不注意の出火とみせるために、焼き殺そうと予定しているファンシーを、猫が猟を殺す前にじゃれて遊ぶように、おもちゃにしているところである。

この場合のサドシーンは、愛とかその裏返し、憎悪とかによるものでなく、猫とか豹の蛮行。つまり意思の力で制御^{コントロール}されていない本能のあらわれで、結末に死を予測しての暴力行為であるため、あんまりかんばしいシーンとはいえない。

サドプレイというものが、より本能的なものだけに、プレイヤーたるものは意思による制御装置が完全でなければなるまい。

それがなくなったとき、サドプレイは醜惡な暴力行為にかわるだろう。

何度も例に出して申しわけないが、辻村隆氏の「カメラ・ハント」が、激しいプレイをのせても安心してみていられるのは、そこに原因があるのだろう。又彼が数多くの夫婦プレイに招待されるのも、やはり本能をおさえるブレーキ装置完備のためだろう。

さて、ここではフレミング氏、暴力の罠に落ちこんだ娘を描いたが、暴力の罠にはまりこむ娘の話は、我々の日常の見聞にも、よくある。

先日、物置の整理の時にみた古新聞（四十四年二月二十二日付読売新聞）に羽田空港ビル爆発事件の青野の情婦K子について次のような記事がのっていた。

『身長、一メートル六五（青野より、やや長身）すらっとしたスタイル。丸顔、色白、左手の薬指に黒い指輪の入れ墨。両手の指根部に、たばこのやけど跡。十八才だが二十二、三才ぐらいにみえる』

これなどは暴力の世界にはいりこんでしま

った女の断片が如実にあらわされている。K子自身には、すでに自由な心などなかったであろう。

このように奴隷状態におちいつている女はかりに青野を愛していたとしても、青野を独占することはできない。

自由な心を失い「物」になってしまった女は、あかれてしまうか、もっと良い「物」が目にはいれば、どんどんすてられてしまう。

やくざたちが十万、二十万の腕時計を誇ると同じように「スケ」の数の多きを誇るのもそこにある。

だから男性のすべてが、愛する女性をいじめて泣かせて見たいと思うのと同じように、女性も好きな男に泣かされてみたいと思うのは大いに結構だが、男というものは完全に自分のものとなった女からは、離れて新鮮な対象に興味が移っていくということを忘れてはならない。

世のマゾヒスト女性たちに必要なことは、男の独占欲の願望をしげきし、自分のマゾヒスティックな願いを酔わせる演技と共に、自由で新鮮な心と、白紙の体を常に心がけることであろう。

一組の人間関係において、おのおのの自由

な心より発する日常の軽い衝突は関係の永続のためには、ぜったいの必要条件であろう。できあがってしまったプラモデルは棚の上で、いたずらにほりをかぶるのみである。女達よ、常に未知数であれ！ 謎多き存在であれ！ 未完成であれ！

さすれば、ミスター・ボンドが、かかる多くのおんなたちに突進することもなかったであろう。（ヤッパリ、カッタカナ）

かつてはケネディ夫人であり、今はオナシス夫人となっているジャクリーンは、フレミングの「ロシヤより愛をこめて」を愛読書に選んでいたという。ケネディ大統領もフレミング・ファンだったそう。ケネディは、常にジャクリーンの可愛い女心を愛していたろうし、彼女は彼女で、新鮮な体と自由な小鳥の心を常に保ったであろう。だからこそ世に宣伝される夫婦仲をたもてたのであろう。

そしてケネディ亡き後、彼女がオナシス夫人となったところで、それが、常に白紙で新鮮な心と体をもった女としての、当然の帰結であったろう。

ケネディは墓の下でニヤリと笑って、つぶやいたにちがいない。「可愛がってもらったぞ！」そして「こいつめ！」といって彼女

の尻か肩を「ポン」とたたき仕草でもしたであらう。

×

×

第十一作は「女王陛下の〇〇七号」であるが、ストーリーは、スペクターの首領プロフェルドが、サンダーボール作戦の巻き返しにスイス・アルプスの嶺にアレギー治療院を作り、そこで深層催眠によって娘たちを教育し、牛疫、豚コレラ、鳥ペスト等のウイルスを持たせてイギリスへ帰国させ、イギリス農業を破産させて、ついでにポンド売りによってひとかせぎしようとたくらむ。

治療と称して外界から遮断^{しやだん}されている娘達と深層催眠。サド場面の背景には充分なのだが残念ながらこの物語にはサド場面はない。

ただ一つ、ポンドの恋人になる女が、マゾヒスティックなセリフをいうところがある。

「女は大きなダブル・ベッドでシーツを一枚衿のところまでかけて待っていた。……略……」

：ひろがった金髪が金のつばさのように見える。その青い目の光りは、ほかのベッドではかの女だったら、ポンドは情熱の火と解釈するところだった。……略……

部屋にはいって、ドアに鍵をかけたポンドは、そばにいてベッドのはしに腰をおろし

女の左胸の小さなふくらんだあたりに、しっかりと片手をのせた。

「ねえ、トレーシー」……略……

ところが、女はゲランの香水「オード」の匂いのする手をさっと伸ばして、ポンドの唇を封じてしまう。

「おしゃべりは、なしにするといい、はずよ。服をぬいで、抱いて。あんたは男前もいいし、強そうだわ。どんなものか、思い出しにしておきたいわ。好きなことを何でもして。それに、あたしにどうさせたいか、どうすればあんたの気にいるか、何でもそういつて。手荒くやってもいいのよ。地上最低の淫売みたい扱って。ほかのことはみんな忘れちまうのよ。質問もなし。さあ、どうぞ」

(井上一夫訳「女王陛下の〇〇七号」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック、第八〇六号三九〜四〇頁)

これは、ポンド役の俳優が替って、ごく最近に上映されたものである。

×

×

第十二作は「〇〇七号は二度死ぬ」

これはポンドの日本見聞記である。映画でプロットをくみかえて、まるっきりちがう物語にしてしまったのも無理ない。

サド場面もなく、せいぜい最後に、不能になったポンドが海女のキッシー鈴木に「いもりの黒焼き」と「がまの油」を飲まされ、枕草子の一頁目からを試みんとするお色気が若干、加わるのみである。

×

×

第十三作目は「黄金の銃をもつ男」

これはポンドが、拳銃使いの殺し屋と対決する物語であるが、これにもサドシーンはない。あまりに有名になりすぎたフレミング氏は破廉恥で荒唐無稽^{こうとうむけい}なサドシーンが、かけなくなってしまったのだろう。

そのためか、この作品を最後にフレミング氏は、あの世へ旅立ってしまった。

いま頃は、あの世で「地獄にあらわれた〇〇七」とかなんとか、やっтерることだろう。

針の山、血の池、赤鬼、青鬼とか悪玉も道具だても、そろっているから、さぞかし悦にいつてることだろう。

このあと翻訳出版洩れだった短篇が「〇〇七号／ベルリン脱出」として井上一夫訳ハヤカワ・ポケット・ミステリーで出ているが、これ等にも、きわ立ってサドシーンはない。

×

×

最後に翻訳を一手にひきうけた井上一夫さ

——女責め図絵の系譜——

明治女工哀史

絵と文 南彦造



ん、よっぽどポンド氏に「ほれ」たんだろ
が、御苦労さんでやんした。

最後の最後に一言、フレミング氏がケネデ
イ大統領についていったことを、つけ加えさ
せて戴く。

『大統領が私の本を読んでくれるのはうれし

いが、同時にほかの真面目な本も読んでもら
いたいと私はねがっている』

イギリス作家らしいユーモアである（ハヤ
カワ・ポケット・ミステリー「サンダーポー
ル作戦」の二六八頁）
そこで私も一言。

「当奇譚クラブを愛読するかたがたよ。女を
泣かせて喜ぶ罪深いかたがたよ。たまには、
バイブルや観音經の一節をひもといて「ざん
げ」と「しょくざい」に、一日を送ったとし
ても罰はあたらぬ。南無阿弥陀仏」

『……初五郎、実母マン（50）兩人ノ工女虐
待ハ残忍ヲキワメ、コレヲ記スニ身ノ毛ノ逆
立ツバカリナリ。

ココニ酷使ノタメ盲目トナリタル工女藤沢
カノ（20）ノ談話ヲカカゲテ、ソノ実況ヲ具
ニツタエントス……』（明治三十五年八月二
十五日付「時事新報」より）

以上のような記事が、当時の新聞の社会面
を賑わしていた。

とても賃金上げでストライキが公然と行な
われる現在の有難い時代とは裏腹に、こうし
た灰色の青春の織姫暗黒時代もあったのだ。

彼女は募集にだまされて、石川県の片田舎
から上京した。場所は埼玉県春岡村（いまの
大宮市附近）の織物業——金子初五郎（26）
の小さな町工場。

来て二日めに逃げ出したが、地理を知らぬ
悲しさ。すぐに捕えられて、工場の柱に縛り

つけられた。

声をたてられぬように口を割ってボロ切れを押し込まれ、その上から手拭いで二重に縛られ、泣いても外には聴こえないようにしてしまってから、鉄の棒で散々に打たれた。

それから、両足に薪を挟んで、裸に剝かれたまま、みんなの前を動物のように歩け歩けと歩かされました。

裸になるのは「いやだ」「下帯だけは勘忍して下さい」って板の間に蹲みついて頼んだけれども許してはくれなかった。

その後——ずっと着るものも、^{ぜに}銭もくれねえで働かされたんです。受け取りの分だけ織れねえと飯も食わして貰えねえんです。

どうにも辛抱できなくて、半年ばかりたつて、また逃げたけど鬼婆のマンに、また捕まってしまうました。

真冬の雪の中を、こんども素ッ裸にひん剝かれ、髪の毛を持って鬼婆が引摺り廻し、その上荒縄で太股から両肩へタスキに縛り、工場の鴨居に宙吊られ、何遍も棒で叩きのめされた。体中が紫色に腫れあがり、気が遠くな

ったら、やっと下におろしてくれた。両眼がかすみ、見えなくなったのは、その時からでした。

機が織れなくなつて、三疊の納屋で肺病で寝たっきりの、お関さんと一緒に転がされ、一日一杯の粥と梅干し一ツで、今日までやつと生きて来ました。

首をくくつて死のうと、何遍も思ったけど、どうしても生れ故郷に帰ってから死にたかつた。

按摩になり、杖にすがつても、一目でいいからおッ母さんのところに帰りたいかつた。新聞社の人が助けに来てくれた時……おらア、嬉しくつて……嬉しくつてエ……。

以上が助かつた藤沢カノ(20)の談話——この恐るべき事実が、明るみに出されたのは同じ工場の——田畑ツヤ(15)が、苦しまぎれに深夜逃亡し、十里の道を突走り、東京の時事本社に知らせたからである——と伝えられている。

私の住んでいるK市も糸織工場の町で、以

来「女工哀史」は跡を断たなかつた、聞いている。

明治以後の一代成金で、数百億の財を築いたという——H製糸工場主の如きは、息子の若社長が、女を裸体にして、自分の部屋にしようって行き、手足を縛り、ミダラなことをしたり、犯したりした。当時の雇い主は女に対する、生殺与奪の権利を握っていたというのであつた。

だから、大声をあげて、暴れたり、争ったりしようものなら、大切な髪の毛を切られたり、肌身に危害を加えられたり——はては用心棒と称する若い男の使用人たちによつてたかつて袋叩きにされたり——するような私刑事件も隠れて起り、警察にでも訴えようものなら二度と喋れぬよう唇を裂かれたりもしたものであつたらしい。

日露戦争の勝利で、日本は文明国の仲間入りをしたが、織物産業も次第に賑れあがり、同時に「織女酷使」の「奴隷工場」も跡を断たなかつたのだ。いまの若い世代には伝えたくないそれは悪夢の女難史ではあつた。

S M カメラ・ハント

続・金原奈加子の巻

童 女 浣 腸 譜

辻 村

隆

一九六九年の歳の暮も押しつまった、三十

日の午後二時頃、ひょっこりと金原奈加子より電話がかかる。私に電話する時は、よくよく切羽つまった時であるが、矢張り、その予感に間違いはなかった。車を洗っていた最中だから、つい面倒くさい調子になる。

「どうしても要るのです。撮っていただけないでしょうか？」

「今日、これから？」

「出来たら、そうして欲しいのです」

「いくら何でも、そりゃ無理だよ。明後日は

正月だぜ」

「ダメでしょうか？」

「ウン、来年早々じゃいけないのかい？」

「ええ、今、要るんです」

無理を承知の、彼女の差し迫った声であった。可愛い童女と幼児の、面倒みきれぬ彼女の夫の不甲斐なさに、少々業腹になり乍らも、突っ張り切れぬ哀れさを感じて、

「じゃあ、兎も角、おいでよ。どちらにしろ今日明日は忙しくてダメだけど、相談にのってあげよう」

「出てこれないでしょうか？」

「ああ、出られないよ、とても……。遠慮な

く来たらいいよ」

私は、かなり精しく自宅までの道順を教え てやった。

「じゃあ、そうします」

電話は向こうからプツンときれる。余りにも一方的な押付けだが、金原奈加子にはどうも怒る気が湧いてこない。それというのも、彼女の家庭の事情や、性格、教養の度を知っているだけに、それが精一杯のものの言い方であることを、過去の経験から察知していたのである。自分自身の甘い心に苦笑しながらも、年の暮を控えて、切羽つまっている彼女



を、薄情に放置する気にもなれなかったのは彼女より年上の娘達を持つ親の、垂直思考めいた老爺（婆？）心からであろうか。

車を洗い終わって格納し、新しい年を迎える準備に追われていても、もう訪ねてくるかと心に掛かるのは金原奈加子の事であった。別段待合せでもないが、訪れる人間が来ないと落着かないものである。二度ばかり表へ出て迎いを見廻し、もうそろそろ日も暮れるのにと焦々しながら、或いは「そうします」といったものの、私の家族への手前、気後れして、思案に暮れているのではなからうかと思

うと、こんなことなら一層、しばし外出してどこかで会った方がよかったようにも思われてくるのであった。

三度目の正直で、暮れかかった路上に出てみると、少女めいた金原奈加子が、グレーの安っぽいオーバーを着て、数メートル先に立ちすくんでいるのを見付けたのである。慌て

て手招きすると、オズオズと近附いてくる。「さあ、遠慮しないでお入り。遅かったんだね。道が分からなかったの」

イエイエというように首を振り、彼女はちっぽけな体を、私の背後に隠すようにして、入って来た。玄関傍の応接間に通しておいて家内がマーケットへ買物に出掛けて留守なので、二女にコーヒーを入れる様、伝える。

「あの女の子、誰？」

と二女に聞かれて咄嗟に返事も出来ない。外見だけなら、まるで中学三年生か、精々高校一年生ぐらいにしか見えず、このオカッパ

の少女が、まさか一児の母親であるなんてことは、二女にとって凡そ想像もつかなかったことに違いない。

「ウン、一寸就職の相談をうけてるのでネ」
苦しまぎれの思いつきのウソに、

「そう、いいところ見つけたげてネ」

と私の娘は、親を疑わぬ素直な大らかな性質だから、六十キロ近くあるグラマーの体を小さくして、彼女に会釈すると、さっさと引揚げていった。生まれくる星の下が違うと、^{はたち}二十才に満たぬ金原奈加子が、極道で甲斐性なしの夫と、子供を抱えて苦悩するかと思えば、二十二才になっても、まるでオボコい二女は、近づく二月旬々の、親のきめた見合結婚にイソイソとして嫁入支度に余念もない。娘に対しては、善良、且つ敬愛に値する父が裏返してみれば、二女よりも年下の、しかも夫ある若い雅な妻をプレイの対象にしようとしているのであった。しかもそのことに、何の矛盾も感じない私である。むしろ人助けのつもりでいるのだから、世の中オカシナことだらけである。所詮プレイはプレイと判つきり割り切っているところに、私の人間的な救いがあるのではなからうか。

金原奈加子は、私と二人きりになると、や

つと心のゆとりが出てきたのか、

「すみません、無理なことをいって……」

と始めて人並らしい挨拶をした。

「子供さん、元気？」

「ええ、何とか——乳はよく出るんです。でもやっぱり、なかなか大変です。撮っていただかないと、わたし……」

「分かっているよ。年の瀬を控えて苦しいんだろう。予定していなかったので沢山も出来ないけど、一日分のプレイの先渡しをしておこうじゃないか。いずれ正月早々にでも、あなたの都合いい日にやるさ」

まるで物わりのいい保護者めいた態度でそのくせ幾分の不安を感じつつも、私は、あっさりと報酬を渡してやった。

「助かりました」

「いいんだよ。それでダンナは、その後マジメに働いてるの」

「十二月の中ごろ、又今の勤め先をやめて今、アパートでブラブラしているんです。なまけて休んでばかりいるからクビになったんです」

「処置なしだね。といって、別れるとも奨められないし。あんたが働いてんだらう、どうせ——」

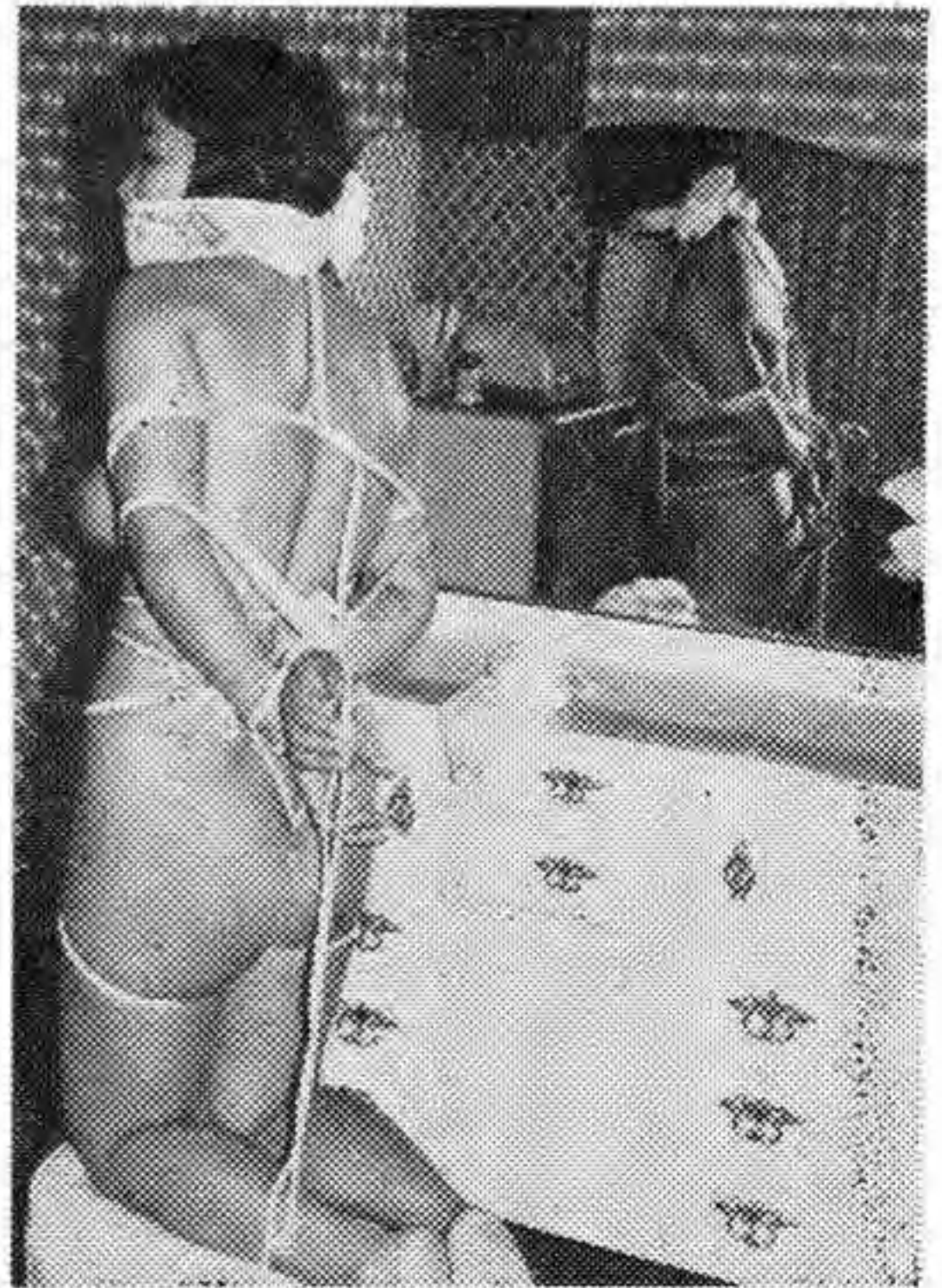
「近く的美容院でパートタイムの手伝っています。が、賃金が安いので、幾らにもなりません」

私は彼女に出会うと、いつも暗然たる、やり切れない気持になるのであった。この稚な妻には年相応の若さも、明るさも朗らかさもなかった。環境がおそらくそうさせるのであろうが、何か不幸を一人で背負ったみたい

な感じをうけるのである。余りにも若くしてセックスで結ばれ、同棲がズルズルベッタリに結婚に進んだ、この一組の夫婦に、世間の風の冷たさは一入、身に沁み渡っているに違いなかった。

金原奈加子によって、始めてなし得た、妊娠九カ月の逆吊りという快挙も、何かもう遠い過去の想い出のようであった。それ程に社会と私の生活はめまぐるしく変貌している。

彼女自身、純粹のMではないが、プレイの報酬のためには、意外に律気なところがあってかなりの強烈な嗜虐にもよく耐えてきた。そ



れだけに、機会があれば、この童女を再び撮ってみたい欲望は、いつも私の心の中にくすぶりつづけていた。今、思い余って自から望んで来たプレイに対して、本来なれば、もっとワクワクして欣んでいいはずであった。しかし私の心は、ともすれば沈み勝ちで、今テールを隔てて正対する彼女に、も一つその欲望の湧かないのはどうしたことだろうか。

それが、金原奈加子にとって、自からの好みより、ぎりぎり一杯の、生きるための、よすがとして、プレイを希望してきた処に、大きく原因している事を、私は須臾にして気付



いたのであった。

夫の愛情が行き届き、物質的に不自由しなかったならば、金原奈加子は恐らく、こうしたSMのプレイなどに憂き身をやつしはしなかったであろう。そうした事情が、他のハント女性と異なる大きなポイントであった。その一事が私の心を、つい重くしているに違いなかった。

金原奈加子は、さして嬉しそうな笑顔もみせず、受取るものを受取ると、すぐ腰を上げた。引留めるにしては、余りにも辺りが慌し過ぎた。

「いつにしよう?」

ときくと、気のない返事で

「いつでも……」

「じゃあ、一月の十日にきめとこう」

「出来るだけ、ゆきます」

「出来るだけじゃ困るよ、必ずでない」と

「ハイ、ゆきます」

そういつてから、チラッと頬を赤らめて、

「この頃、便秘で困っているんです。何かいい方法ありますか?」

「浣腸がいいよ。やった?」

「いいえ」

「じゃあ、やって御覧。今度のプレイは、その手でゆくかな」

「じゃあ、やって御覧。今度のプレイは、その手でゆくかな」

気を惹くような言い方をしたが一向に関心がないのか、金原奈加子はデートの場所と時間を自分の方からきめると、そそくさと、かなりくたびれた踵の低い靴を突っ掛けるように履いて、ペコリとお辞儀をすると、出ていってしまった。

初荷ならぬ、七〇年の初撮りは思いがけない童女の登場で、金原奈加子になりそうである。

× × ×

昨年、一昨年と、二年続いた正月の東京行

きも、今年は二女の結婚準備などもあって、

一応あきらめ、世間並みの父親で過ごすつもりであったのが、金原奈加子の出現で、屠蘇

気分もさめやらぬ正月早々から、ハントする機会をつくって、約束の十日に、待合場所の

新世界、通天閣下で待ったのに、一時間以上

も寒風に吹かれての待ち呆うけ。又してもや

られたわいと、彼女の相も変わらぬ不履行さに、自己嫌悪めいた腹を立て、こうなりや、

せめて、その腹の立てた心でも奉納してこよう

と、折からの十日戎で、物凄く混雑する恵

美須町へと抜けて、見動きならぬ雑踏に揉ま

れて、福の神に参詣して、モータープールへ

と引返す。家へ帰りついたら、私の出発した

のと入れ違いに彼女から電話かかって来て、

今日は行けぬから、十二日にして欲しいとい

う連絡を家内がきいて、今頃まで何処をウロ

ウロしていたのとボヤかれる始末。ええい、

こんなことなら、もう一寸、遅く家を出るん

だったと悔んだが、あとの祭。こぬ人待つ

帆の浦で、バカを見たのは私であった。

待合せ場所が通天閣といってきたが、御

存知のように、ここは人生の吹き溜り、釜ガ

崎に近い。或いは果敢ないドヤ暮しか、今池

辺りの安アパートに移ったのじゃなからうかという私の想像は、ほぼ当たらずといえど遠からずといった生活をしていると思われるのであった。

私の知る限りでも、数カ所のアパートを転々としていたから、彼女からの連絡のない時は、いくらこちらでその気になっても、呼び出しの方法もなかったのである。

案外、律気堅い奈加子だけに、まさかプレイの報酬を踏み倒す気もあるまいと思われたが、連絡出来ぬもどかしさは、彼女の指定した二日先の十二日の月曜日を待つより外、手段の構じようのない私であった。

自分自身、時間に厳しいせいが大抵の場合車の停滞などを見越して、かなり早いめから出掛ける癖がついているのであるが、金原奈加子に限っては、再び待たされるウンザリさ加減を考えて、私にしては珍しく待合せ時間ぎりぎりになって出発した。

通天閣下へ到着した時は、約束の時間を四十分近く過ぎていた。金原奈加子は、ちっばけな体を一層すくめて、寒そうに足踏みして私を待っていた。そうなると思ち気の毒な気が起こるのだから、私という人間も、よくよく純情か、お人好に出来ているらしい。



「待った？」

「十五分ばかりです」

「おととい待ちぼうけを喰ったので、時間を加減して来たんだよ」

「行けないって電話したんですが……」

「出掛けたあとだったよ」

「すみませんでした」

「いいんだ。食事は？」

「急いで出てきたので、まだなんです」

彼女は正直に言って、化粧気のない、寒さにそそけ立った顔を微かに振っていた。近くの特チリ（ふぐの水炊き）日本一という、大きなフグ提灯のかかった店に入る。

テッチリは怖いという彼女に、私は苦笑して、洋食を注文した。

「約束は守ったね。子供さん、どこかへ預けたの？」

「うちの人の子守してるんです」

「今日のこと、知ってるの？」

「何もいって来なかったですが、多分感づいていると思います」

「便秘は、その後、どう？」

「やはり、何日ありません。でも食事の時そんな話しないで下さい。たべるものが不味くなりますから」

M 気がない証拠に、彼女はチラッと眉をひそめてみせた。その気で試みるつもりになって、車のトランクに入れてある、黒い革袋には、縄類やプレイ用具の外に、ポンプやエネマを忍ばせてきたが、話の腰を折られて、それ以上、浣腸の話を持ち出せなくなって、私は外の話の方に切換えざるを得なかった。

「この近くに住んでるんじゃないの？」

「ハイ、安いアパートです。前に居たところ

家賃ためましたので追い出されました」

正直に答えるその一言一言に、生活の苦勞が滲んでいたが、奈加子は案外、淡々としていた。貧乏ぐらしに、すっかり馴れてしまつたせいであろうか。

「正月は、どうだった？」

「お蔭で何とか、お餅ぐらい買えましたが、遊びに行く程のゆとりもなく、うちの人はパチンコばかり行っていました」

「何かお先真暗で、聞いていてやり切れなくなるよ」

「私、妊娠しているんです、又——。今月から四カ月に入りますが、もう沢山。一人の子供でも苦しいので、何とかしようと決心しています。だから、今日撮って、もう一度撮ってほしいのです、四、五日先にでも……」

「どうして産制しないの？ 年子になるじゃないか」

「私は、うちの人に言うのですが、邪魔くさいからといって、考えてくれません。それで宿ったら、適当に始末してこいって怒鳴るんです。男って勝手です」

たしかに勝手すぎる夫である。中絶が女の体を疲弊させて行くのを、この男は平気でいるのだろうか。どうにもしようのない、セッ

クスで結ばれたこの若い夫婦の前途を、私は暗澹たる思いでみつめるより仕方がない。その二人の生活にまで立ち入る権利は私にはないし、又義務もなかった。さりとて、切羽つまれば、これからいつ何時、プレイを要請してくるかも知れぬ金原奈加子に、私は少々持て扱いかねる気持を抱くのであった。一人の女性に対して、特定の感情を持たない以上、そう度々フオトを撮る興味は、さして起こらない。況して、彼女自身、M性でないのだから、被虐の悦楽に咽ぶでもなく、悦虐を求めようともしていないのである。報酬の代償としてのプレイには忠実でも、彼女自身の心を動かす何ものもないプレイは、実の処、私にとっても興趣は半減するのであった。既に数度とって、大体の緊縛は試みまし、前人未到の妊娠逆吊りまで敢行した今となっては、正直いって金原奈加子への魅力は、頂点を極めた降り坂にかかっているような、惰性的なものであった。彼女がフト思わず洩らした便秘という言葉が、鮮烈な刺激となって、彼女には試みたことのない浣腸プレイを今日の日にやってみようという意慾にかられ、それが私をして、彼女へ繋ぐ一つの大きな関心となっていたのである。私にそのような腹案がある

とも知らず、彼女は注文したビーフステーキとライスの方へ心を走らせて、不馴れな手付のフォーク捌きで、たどたどしく料理を口に運んでいるのであった。

「去年も恰度、今頃だったね、電話してきたのは……生憎と東京へいついて留守だったけど」

「あの時、中絶するハラだったのです。でも仕方ないので生む結果になりました」

「そのお蔭で思いもかけぬ妊婦の逆吊りが撮れたんだがね」

その時、私の脳裡には、ゆくりなくも、彼女が妊娠三カ月の二度目にあった時の、あの幻想の中の、ポイントマイムのような、仄暗いベッドでのきしみが、ありありと蘇ってきたのであった。

報酬の代償のみではない微かな息を弾ませ私の体をまさぐった指先の震えを、私の体が一番よく知っていた。十八才の稚な妻の体は既に濡れていた——あの、めくるめく妖しいひととき。

今こうして、憂き身をやつして、馴れぬフォーク捌きで料理を口に運ぶ奈加子の、無心な表情の奥に、私にそっと寄せる淡い慕情をヒタと感じて、単なる報酬のみでない稚ない



女心の微妙な心理を、まざまざと嗅ぎとったのであった。私の心は、いつしか、その一点に傾斜しつつあった。あわよくば、プレイの谷間を縫って、今ひとたびの……。そんな欲望が年甲斐もなく湧然と盛り上ってくるのである。(昭和四十四年八月号『童女受胎譜』

——秋風の譜——参照)

まるで親娘のような私達は、風に吹かれてモータープールへ向かって歩いた。現代の盛り場から取り残されたような新世界も、かつての私の学生時代のニキビ華やかなりし頃は

十日我過ぎの今頃も、押すな押すなの雑踏で身動きもならなかった三昔前を憶い出し、どこかうらぶれた、そのさびれように、うたた感慨の念を禁じ得なかった。自由の街、釜ガ崎の悪名と、華やかな赤線地帯飛田の衰退が、新世界々隈に、夢よう一度のあの繁栄を、再び、もたらさないのではなからうか。

人眼を憚るように、金原奈加子は小柄な体を一層すくめて、私より半歩遅れ気味についてきた。

通りで、フト目につく、一坪ほどの小さい小間物店で私の足はハタと止まる。ためらわず店の中へ入ると、コールドクリームと無臭のハンドクリームを求めた。私の咄嗟によぎった想念の買物を、どう勘違いしたのか店の五十年配の女主人は、次々と最高級のコールドクリームをとり出してくるのであった。目的をきいたら目を丸くするに違いない。苦笑のやり場に困る顔で、一番安いコールドクリームを自から探し求めて、二つの買物をすませて表へ出ると、彼女は不審の面持で、手にした資生堂の宣伝の小袋をみつめた。中味は四百円そこそこでも、袋が一流メーカーだけに、何かいいものにみえたのだろう。しかし

彼女は敢えて訊ねなかった。

(君の化粧品を買ってあげたんだよ)と、フト冗談のひとつも言おうとしたが、思い直して口をつぐむ。化粧は疎か、口紅すらつけていない奈加子の、むき出しの寒々しい素顔をみては、うかつに冗談もいえなかった。この子は恐らく、私の言葉をまともに受取るように思われたからである。

このクリーム類が、果して活用出来るか否かは疑問である。しかし或る種の目的を探求するものは、その場において、その現物が、役に立っても立たなくても、あれこれと、プレイの充実を考えて準備するのが、同好者の共通の理念であった。私のハントの場合でも数々持参するプレイ用具や縄類が、百パーセント活用されたことは先ずないといってよかった。そのくせ、或いは、若しや、運よくばと、プレイの華やかな展開を様々に想像しては、いつも数多く準備してゆくのであった。事實は、その半分以上も使えば上々なのであるが……。

眼前に、巨大に屹立する、名物「通天閣」附近の往来も疎らで、もう一昔も前から、相も変わらぬバラック建てのストリップ小屋の看板がイヤに毒々しく、そのくせ、うらぶれ

て私の眼をよぎる。この一月中旬の寒い、さ中にでも、醜い裸身を曝して、隙間だらけの舞台板をギコギコ鳴らして踊りつづけるストリッパーに、そぞろ哀れを催しながら、ここを左に折れると、車を預けたモータープールが、ついすぐ、そばにある。

大阪都心部の四幹線道路が、全国にさきがけて、昨日から一方通行のスタートをきり、目指す上本町高台の、生玉附近のホテル群へ辿りつくには、堺筋へ出て日本橋一丁目を右折し、千日前通に出て、又迂回せねばならなかった。

カーラジオをひねると、折からのニュースが、コンクリートづめ殺人の、怪奇複雑な、さながら推理小説めいた、第二の殺人を報じていた。批判するでもなく、口を挟むでもなく、金原奈加子は黙ってそれをきいている。

この後藤という陰險な犯人は、五九才、四八才、二二才の、親娘関係のような女性と次々関係をもち、私の想像では、A子という十七才の少女にも、恐らく魔手がのびているのではなからうかと推察されるのであった。こんな四十男をかばう、若い人妻と少女の心の妖しさに、異常心理の怖ろしさに慄然とし、そのくせ、私自身どうであらうかと顧みた時

ひとつ自制心が狂えば、この男と似たりよつたりの行動に走りはないかと、深く反省させられるのであった。金原奈加子にしてからが、ハタチになるかならずの人妻である。それが例え内縁にしろ正式のものであれ、今こうして、プレイの対象として、その夫に平然と子供の守りをさせて、中年過ぎの私とホテルへ直行しようとしているのである。

金原奈加子にも又、こうした事件を起こし得る要素がなからうとは誰が保証し断定出来るか。

SMのプレイは、凡そ犯罪とは縁のないものでなければならぬプレイを行なう男も女も、ともすれば踏み外しそうになる、理性の一線をしっかりと画して、行動しなければならなかった。

そんな想念にとらわれつつ、渋滞する車の波に揉まれて、ホテル群へと差しかかる。

比較的デラックスそうなのを目指して、車を進めると、昼下りの情事を憚かるように、辺りに気を使いながら、その一つに私の車は

潜り込んでいった。

× × ×

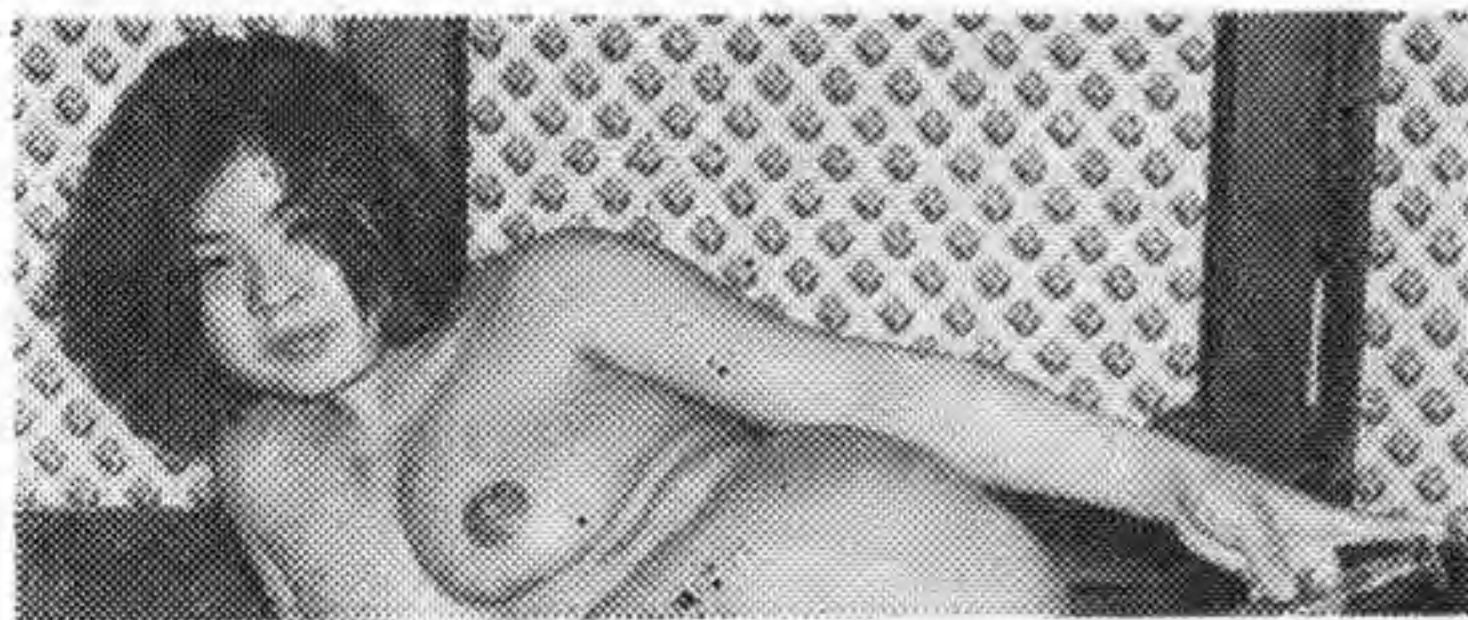
薄暗い廊下を通過して、案内された部屋は、フロアを相当に広くとった、濃紅のカーペットの敷きつめた洋間であった。かなり豪華であるが、どうも私のしょうに合わない。

和室に変更してほしいと頼んだら、全部、

満室との二べのない返事。月

曜日というのに正月気分が抜けきれないのか、アベックホテルは、昼間からの情事を愉しむ人々で膨らんでいる。部屋まで通って、今更、又出るのも億劫だし、諦めて洋室で我慢することにした。吊り下げの梁も鴨居もなければ、縛りつける柱一本もないノックペラぼうの今様建の部屋に、いささかがガッカリし乍ら、テールブルに向かって腰を降ろす。情事に耽るだけなら結構ムードのあるこの部屋も、緊縛のフォトをとるには余りふさわしくなかった。

金原奈加子も、もう始めて



ではないだけにおどおどした様子もなく、黙ってうつむき加減に私の前に坐っている。入浴をすすめるとあっさりうなずいて、ドアを開いてバスの方へ消えていった。始めてハントした女性に対するような新鮮味はないが、大概のことなら可能な気易さが、私をリラックスな気持ちにさせていた。

二つ提げて入った黒革の袋の一つを開いて濃紅なカーペットの上に逆さにして、全部投げ出す。プレイヤー独特の、一種不可思議な異彩を放つ、とり合せの品々が、足下に大きく拡がっていった。縄、ローソク、ポンプ、エネマ、大小のバイブレーターなど、この組み合せを、若し不測の出来事で開陳せざるを得なくなったら、人は果して何と受取るだろうと、いつもそうした一片の危惧をもって運び込んでいた私であった。身に何一つやましいことはなくとも、何かの節、非常警戒などで引っ掛り、怪しいとみて、こうした袋の中を調べられた時、私は果してどう説明するだろうか——仮にこの私が、非常警戒目的の容疑者に似ており、車も運悪く同一であれば、こうした事態は起きるかも知らない。こんな奇妙な不安は、同好者のみが知り、感じる共通の、危惧ではなからうか——。そうした

一見、説明のつけようもない品々を拡げ散らかして私はやがて奈加子と二人きりで始まるさまざまなプレイの構想をあれこれ思索しては、心はとめどもなく淫らに拡大してゆくのであった。勿論その思索の中には、クリスタールへの慾望が、大きくはばたいていた。羞恥に身をくねらせて、注がれてゆく液体に身悶えして、緊縛のまま、あられもなく私の眼前で排泄する奈加子の肢態を想像しては、私の胸は疼く思いで熟くなって行く。しかしその幻想は、恐らくは実現出来る可能性を大いに含んでいるのである。

湯上りのバスタオルを胸許で巻いて童女はほてった顔で、髪が生え際を濡れそぼらせて佇んでいた。覚悟の上か、バスタオルの下には何一つ身に纏っている様子はなかった。冷静な表情の中に、判っきり割り切った想念がうかがえ、これからの緊縛と、それにつながる一連のプレイを承諾している様であった。くれないのカーペットの上に散乱した、あざとい品々をチラリ一瞥しても、彼女の瞳に動揺の色はなかった。私は笑顔に向けて手招く。招きにつれて歩を運ぶと、黙って私の眼前にテーブルを隔てて、椅子に深々と、はまり込む。

「便秘だといってたから、今日は浣腸してあげようと思って、色々浣腸の用具を持ってきたんだよ」

「いいえ、結構です」

ニベもない返事が潑ね返って、瞬間、彼女の顔は、さっと硬ばる。

「いやなのかい？」

「ハイ、いやです」

「いやに判っきりしているね」

「でもイヤなんです」

「どうして？」

「どうしてでも……それより早く縛って下さい」

何か手厳しい抵抗を感じて、私はそれ以上追求することを避けざるを得なかった。浣腸をプレイと考えられぬところに、この童女の羞恥がひそんでいるようである。

私は半ば失望しつつも、望みをあとに托して一条の縄をとり上げると、奈加子に目くばせする。チラリと羞かしげな表情が走ったがそれはすぐ消えて、彼女はゆっくりとバスタオルを外すと、一糸纏わぬ全裸で、フロアーの中央に直立した。まるで体にふさわしくない、見事な双つの乳房が、いきづくように大きく揺れていた。一つのオッパイが、小さい

童顔と比べても、さしてヒケをとらぬくらいに胸を占有して、しばし、その壮大さに私は息をつめて見入っていた。女の乳房は結婚し、妊娠して、子供を産むと、かくも膨大するものであろうか。そのたゆとう乳房は、妊娠九カ月のあの時よりも、又一廻り大きく盛り上っているようである。

「まだオチチが出るのです」

私の視線に、羞じ入るように両手で胸をかかえ、童女は小さく呟いた。全身の栄養が、いと児のために、乳房に凝結したというのだろうか。

「そう、そりゃいいね。ちょっと絞ってみせて御覧よ——」

「ホラ」

蔽っていた手で、乳房を抱き上げるようにして、片手で上から揉むように押し出すと、白い乳液がツツツと糸を曳くように一線になって落下し、尚も力をこめて乳頭を仰向かせて絞り上げると、目に見えぬ乳頭孔から、数条の白いほとばしりが、ちっぽけな噴水のようになふき上るのであった。

若々しい母体の、ふるさとの香の漂う乳液のほとばしりに、私は思わず我を忘れて、その豊かなポインにむしゃぶりたい意慾に



かり立てられた。親娘程も年令の違う理性心が辛うじてその行為を自制させていた。ぐつと生唾をのみ込むと、私は女体に矢庭に近づく。この煩悩をふり払うように、両の乳房に素早く八の字に縄をかけて、後手に縛ると、軽々と体を抱き上げて、一面鏡の台上に坐らせる。縛られた背後が鏡にまざまざとうつりポインの胸の前身を含めての、二つのポーズが一度に縛られて、私は急いでカメラを構える。ギョツと縄でしめ上げた乳房は、乳液の絞り癖がついたのか、先刻ふき上げた右乳房から、一滴、又一滴、ポタリ、ポタリと甘い乳汁のしずくを垂らして、それが奈加子の太腿に落ち、傾斜を伝って、かたくしめた両腿の谷間の、暗いかげりの中へと、にじんできた。

私の意慾は否応なく昂進する。この簡単な縛りをすぐ解くと、休む間もなく引続いて、

細引で全身をギリギリにしめつけ始めたのであった。いつも使い馴れているダンダラ縄は今日は一、二本程度で、代って、太めの縄から極細の細引縄まで、相当、沢山のロープを持ち込んでいたのである。日頃は最近、余り使わないこれらのロープ類にも、偶には恩恵に浴させたい、マニアの縄に対する愛着心からであろうか。

ましてや昨年、東京くんだりまでハントに出掛けての帰り、わざわざ買って帰った細引に至っては、殆ど筐底の奥深く眠ったきりであったのが、今日初見参で、金原奈加子の柔肌を、土蜘蛛の吐き出す太い糸さながらに、縦横無尽にしめ上げていったのであった。

太い縄は、見た目には凄惨、苛酷にみえても、その実、肌に喰い入る緊縛感には乏しかった。その点、細引は、一見柔調に思え、カメラを通しての観点も、さほどではないが、肌をしめつける強力さは、太縄のたぐいではなかったのである。極端に言えば、強靱なタコ糸が、最も深々としめつけ喰い込むのではなからうか。

細引は完全に没し、金原奈加子はこの細引

の緊縛に、しばしば眉をひそめたが、観念したようにさからわず、私の縛るがままになっていた。断続的に右乳房から滲み出る乳汁がポツリと乳頭で玉の粒になっては、音もなく点滴を落下させてゆく。漫画の描いた手拭で形だけの猿轡をはめて、縄尻を引いて、歩かせようとしたが、股縄と、両腿をしめた細引が、双臀に喰い込んでいるのか、よろめいて一、二歩、のめり、ああと、くぐもり声の呻きが洩れた。

直立したままの裸身を、よいしょと抱きかかえ上げ、数歩あゆんで、姿見の腰掛けに膝立てのポーズに体をおく。そのポーズに向かってストロボは一しきり、きらめく。私はカメラを前後左右から構えて、構図をねらうち、ふと金原奈加子の微妙な表情の変化に気付いたのであった。報酬の代償として割り切つて、被縛されていた前三回のあの時にくらべて、勿論、今日も報酬に対する、当然の緊縛には違いないのであるが、度重なる緊縛プレイが、いつしか、徐々にではあるが、被虐に対する悦楽の感興を覚え始めていたのではなからうかと——。その証明は、しつとりとうるおいを帯びてきた眸の動きであった。そして微かに喘ぐ、喜悦にも似た吐息。それは

いつしか悦虐を知り初めた女体の息づきでなくて何であらうか——。

かつて、私はこの童女に、報酬に対する代償のように鞭をふるってもみた。妊娠九カ月の緊縛の裸身にパイプを使って、歓喜に悶えた奈加子の歎歎する赤裸々な姿もみた。砲弾型のパイプをみつめ、感に堪えぬように、（感じるのです——わたし）と、はつきりいつて顔を赤らめ、うつむいた彼女を知っている私——。

しかし所詮それは、男性を体で知った童女の、女の宿命のような辿るべき性愛への道程に過ぎなかった。全裸の羞恥を曝して緊縛されることは、報酬への諦観の念として、いわば己むを得ず、女体を提供しているといった風情が感じられ、被虐に対する悦びといったものは、ついぞ今迄彼女には見受けられなかったのである。それが過去の金原奈加子のフオトを、無表情にしていた一因でもあったのだ。

今、この童女の表情の底に、そこはかとなく情愛が、ただよい、うるむ目もとが、まぎれもなく、うっすらと悦虐の想念の走っていることを証明していた。恐らくその想念については、奈加子自身すら気付いてはいないか

も知れない。しかし、今日を含めて、私だけでも四回、編集部で数回、緊縛に憂身をやつした女体は、いつしか、無意識のうちに、被虐の、悦楽に目ざめていたのではなからうか——。

奈加子自身の心では、それを認めていなくても、燃えさかる若き母体が、被緊の快感に馴れ、それにつづくプレイの悦楽と陶醉を求めて疼き始めていたに違いなかった。

この奈加子の、幼稚な頭脳に、悦虐の実体を言葉で告げても、恐らくは難解で否定するだろう。それは被虐の願望自体、その何たるかを知らないからである。そのくせ、女体そのものが、秘かに緊縛につながる悦虐を求めて、疼き出していることを、この童女はどう受け止めているのであろうか——。

再び抱きかかえて立たせた時、彼女は、しきりに腰をもじもじさせ、両足のかかとを、こすり合わせるようにするのであった。

二度の抱きかかえで、細引はゆるむところはだらしなくゆるみ、反対に、そのしわよせで、何処かが、よりきつくしまっている様であった。

「痛いのか？ どこか……」

「ハイ、両手がしびれて来ました」

猿轡の奥から判つきりした返事がかえる。

結びめが強くしまっていて、仲々にほどけない。やっとなきほぐして下半身から細引を外していった時、その細引の一個所に異常を発見し私は呀っと思った。そうだったのか——股縄につながる緊縛が、その原因に違いなかったのだ。なればこそ、奈加子の表情に、ついぞ見られぬ悦楽の表情が泛かんだのかも知れなかった。

しかし、彼女は私が解くまで、そうした緊縛を拒否せず、易々として体を任せていたのは、奈加子の女体が、それを求めていると考えてもよいのではあるまいか——それは裏返せば、悦虐に対する、一つの積極的な進歩でもあった。

足許で踏みしめている、くれないのカーペットは、ふわやかで温かく、むしろタタミの上よりも、裸身を横たえるには、ふさわしいようであった。

「大分、きつかったようだね」

いたわりの言葉を投げかけると、

「細い縄は、よくしまります。しかし大分、馴れました」

「縛られるのにかい？」

「ハイ」



「我慢づよいのか、その割に痛さを訴えないんだね」

「痛いといっても仕方ありませんもの。それが目的なんですよ」

微かに浣面をつくって、この童女は深々と痕跡の残る縄目の肌を揉むように、さすっている。妊娠九カ月の逆吊りにも耐えた根性が能なしの夫との、月々の生業なりわいにも挫けず、雑草のように力強く生き抜いてゆく根源となっているのかも知れない。あの時の忍耐にくらべたら、今の細引の緊縛など、奈加子にとっては、さして、苦痛にもならなかったのだろう。むしろ、性感をひきだす一助のようなものであった。この緊縛に対する割り切り方が

どうにも心憎い。一度、あっと泣き喚くようなプレイをしてみたい、八方破れの激情が私の胸をつらぬく。それと共に、何とかしてクリスタールのプレイへと持ってゆきたかった。折角わざわざ準備してきた、ポンプ、エネマや、来る途中で買い求めたクリームの手前でも、それは行使したい課題である。

私は裸の奈加子の手をとってどっしりとしたカーテンを一気に押し拡げて豪華なベッドの上へと、いざなう。

「いけません、いやです」

何を勘違いしたのか、奈加子は私の手を振り離そうとして、両脚をふんばって拒否したのであった。無言で両手に力をこめて引っ張り、力負けした彼女は、弾みのついた体をベッドに投出して、パツと起き上った。素早く握った太めの縄を、童女の両足首に絡みつかせて、ぐるぐる巻きに縛ると、体を大きく彎曲させて両手を膝下に組み込ませて縛り、腰に一回りさせて結びとめる。乱暴ながら一分近い早業であった。

そのポーズは逸り立つ男心にとっては、最

も好ましい典型であった。剥き出しの双臀につながる位置を確認して、私は有無をいわせず浣腸をこころみるつもりで、シーツの濡れるのを防ぐため、ビニールの風呂敷を拡げて奈加子の臀部を持ち上げて、その下に敷こうとした。セックスを予期して抵抗し、あえなくもハレンチのポーズを曝して、私の次に移る行動を想像して、全身を硬直させ、イヤ、イヤと弱々しく呟くように叫んでいた彼女は、この意外ななりゆきに、

「イヤ、イヤ、何をするんです？」

と腰を左右に振って必死に拒んでみせた。ニヤリと笑って、

「約束通り浣腸だよ」

「イヤです、そんな約束しません」

「でも、この間、便秘で困っているといったから、わざわざ持ってきてやったんだよ」

「困っているといっただけです。約束なんかしません」

「浣腸も私にとってはプレイのうちさ。いやといってもやるよ」

尚も駄々をこねるように、イヤイヤと叫ぶのを聞き流して、委細構わず、洗面器にバスの湯を汲み上げてくると、石鹼をこね廻して湯を泡立てて、浣腸液を作ってゆく。強制的

な浣腸の結果、奈加子が怒ってももうそれが最後となってもよい気が持が私の心を支配していた。女体くまなく緊縛フオートをとりまくった奈加子に対して、残るのは、この羞恥にまみれた浣腸のプレイのみのように思えるのであった。

コールドとハンドの両クリームを入れた袋を破いて、先ずコールドクリームをたっぷりと指先にすくい取る。

声にならぬ悲鳴が挙って、彼女は激しく左右に身悶える。

五〇CCのポンプに、たっぷりと石鹼液を吸い上げて近づく。

「ま、まって下さい。どうしてもしなければならぬのなら、自分でやります。いえ、やらして下さい」

この羞恥の肢態での屈辱に耐えられぬように奈加子は大声で叫んだ。

「きつとだね。縄を解いた途端、逃げたりしないだろうね」

「信用して下さい。そんなことはしません」「じゃあ、自分で、私の言う通り、やってみるかね」



「ハイ、やります」

私は、彼女に今日の報酬は先払いしてある上から、そんな危惧を感じながら、奈加子の誠実さを信用して、手早く縄をといた。ああと大きく溜息をついて、彼女は気の進まぬ面持でベッドを降りてきた。

「どうするんですか」

ややブッキラ棒に訊ねる。

「いきなり注入するのも大変だろうから、このポンプの液体を、こぼさぬようにあてがってごらん」

「こんなに沢山の量をですか」

「半分にしていあげよう。その代り何回も注入するポーズをするんだよ。さあ、そのスツ―

ルの上へ跨がって……」

ノロノロとポンプを握って、姿見の鏡台の前に立つと、チラリと鏡の中の自分の顔をみやってから、奈加子は、いわれた通りスツールに跨がった。ぐっと臀部を突き出させ、ポンプの先端をこわそうに自からの手で運んでゆく。数発、私の閃光はきらめいた。プレイといわれて観念したのか、ついで、スツールに打伏せになって腹をのせ、背後に手を廻そうとするが、無理なポーズで、ポンプは腿に並行している。辛うじて横向きに触れる程度であった。羞恥のポーズというのみで、その時点では、奈加子にとって、浣腸の真実は、まだ知ってはいなかった。しかしその露出のポーズに、私は単なるヌード以上のものを覚えるのであった。それは当然、次につながる注入を伴った浣腸への前哨戦として、その方に心が走るせいかも知れない。

位置をかえて、ソファに坐らせると、片脚をソファの凭れに掛けさせる。浣腸のポーズにことよせて、努めて露出的なポーズをとらせようとしていることを、奈加子自身も流石に気付いたようであった。

「すぐエッチですね、辻村さんは——」

私の名を始めて呼んで、奈加子はパッと顔

を赤らめた。その羞恥の表情の流れに、刹那なまめかしいオンナの妖しさがチラツとのぞく。

「じゃあ、いよいよ、本式に注入してもらいますかね」

「もう、カンニンして下さい」

「だって、今までの単なるポーズに過ぎな



いのだよ。注入してこそ、本当の浣腸といえるんだがね」

「こんな注射器みたいなので浣腸するの、生まれて始めてです。イチジク浣腸なら二、三度あります」

「それが浣腸用のポンプなんだよ。さあ注入するんだよ。カーペットに横たわって——」

「おナカの中、おかしくなりませんか」

「大丈夫だよ、便秘にはいいよ」

おそろおそろ、奈加子は浣腸ポンプをあてがった。石鹼液は約二〇〇Ｃ足らず入れてあるだけである。私は奈加子自身、浣腸してゆく本番を出来るだけ沢山撮りたいと思った。そのためにも、一度に多量に注入すると、忽ち便意をもよおされても困るのであった。

「どちらからですか」

「最初に横たわって、後ろの方からやってごらん」

怖々、奈加子はクリームにまみれたポンプを近づけてゆく。

「さあ、液体をこぼさぬようにして……」

それは、動悸が激しくなる一瞬であった。情なそうな顔付で、それでも奈加子は私の言うがままに従った。奇妙な複雑な表情が彼女に交錯する。



それでもコールドクリームをとり上げると、少し許り指先にとった。その間にエネマを湯桶の中へ、つけに立つ。

第三回目の注入の終わった時、離れてカメラを構える私の耳朵にも、グルグルという奈加子の腹部の辺りで鳴る、あの浣腸独特の腹鳴りが伝わってきたのである。

「何だかオナカが少し痛みます」
「大丈夫、大丈夫。じゃあポンプはそれでいいから、このエネマを使ってごらん」
「未だいれるのですか——」
「幾らも入ってやしない、五、六〇CCくらいだろ。まだまだ」
「段々苦しくなってきました」
奈加子は激しく眉をしかめる。クリスタールのプレイを知らぬ彼女にとって、それは、もう苦痛以外のなにものでもなかったかも知れない。しかし私は、貪婪に追求する。

「ああ、そのポーズのままです。……何なら、もっとクリームを、どっさりと塗ったっていいよ」
一寸、やり切れない顔付になって、彼女は

それでもコールドクリームをとり上げると、少し許り指先にとった。その間にエネマを湯桶の中へ、つけに立つ。

に感じて、液体は奔流となって移行していった。容赦もなく更にもう一回、吸い込み、吐き出す。奈加子のもち上げた臀部は、横ざまに倒れていった。

「やめて、もうやめて下さい」
「我慢するのだよ、いいね」
「でも、苦しいんです、オナカが」
私の手に返った嘴管から残滴がしたたり落ちて、カーペットを黒く濡らす。

抱きつくようにして、早縄が呀っという間に、奈加子の上半身を、犇と後手に縛り上げていた。身悶えしたものの、あえなく縛り上げられ、奈加子は腰をふるわせて、顔をこわばらせ、

「ああ、もう我慢出来ません。早く、早く、早くトイレへ行かせて下さい」
あわただしく、縛ったまま、突き立てるようにして、便器にかけ上らせる。

「イヤ、もう駄目です。あっちへ行って」
「ゆかない。さあ遠慮なくやるんだ」
「最低です、そんなとこ見るなんて……」
「イヤ、みたいんだ」
「ダメ、お願い……ああ、我慢出来ない。早く、あっちへ行って——」

地だんだふんで奈加子は泣くように叫ぶ。

奈加子の若さが、到底、このプレイの終焉に耐えられぬようであった。

その姿をカメラに納めると、未練を残して私はやっと、あきらめた。既に顔面蒼白になった彼女は、その排泄を必死にこらえて、懸命の力をこめているようであった。

ドアをしめた途端、はげしい響きが私の耳をつんざく。浣腸特有の潑音がはね返ってくる。耳をすませて、音に酔い、それが私を不逞にして、そっとドアを開いて覗き込む。気配で察して振り向いた奈加子の眸に、始めて激しい屈辱の色が浮かび上っていた。

もう彼女は一言もいわなかった。そして、苦しげに腰をねじらせ、体をゆすっていた。白磁の陶器に、黒塊が二つ、三つ大きく弧を描いて浮かび「ウンコによる健康診断」の本からみて、それはいかにも健康そのものであった。特有の臭気が流れ、そっと私はドアをしめる。

羞かしい極限の態位を覗かれ、奈加子は涙を泛かべているようであった。この刹那、奈加子の私に対する感情が、恐らく変わったであろうことを承知しながらも、とことんまで追求せずにはおれなかった、私のハイドの不倫な悪徳が、やむにやまれぬ窮極的な行為で

あったのを、私自身が一番よく知っていた。

「もういいんです。出して下さい」

遠慮し勝ちな声に、ドアを開く。縛られた奈加子にとって、どうしようもない水洗と清浄——。この眼で確かめて流し終わると、私はペソを掻いた童女をうつむかせて、丹念にきよめてやるのであった。（この浣腸シーンのフオトは、すべてを発表出来かねるものになった不手際、悪しからず御諒察乞う）

× × ×

ひとつの目的を果し終わった後の虚無の空白感が、気懶い倦怠を伴って私の心を占めていた。浣腸の実行によって、相手の心を燃焼させる場合もあるし、反対に鎮静させる時もあった。奈加子にとっては、累積の排泄は快よかったかも知れないが、それはプレイとはおよそ縁遠い行為に思われたのか、将又、それが私によっての強制の手段として行なわれた、羞恥の屈辱ととったのか、白けきった顔付でカーペットに俯伏せに転がっていた。二の腕を締め上げて両足首を縛った縄で両手を縛っている。たゆたう乳房がカーペットに圧縮されて

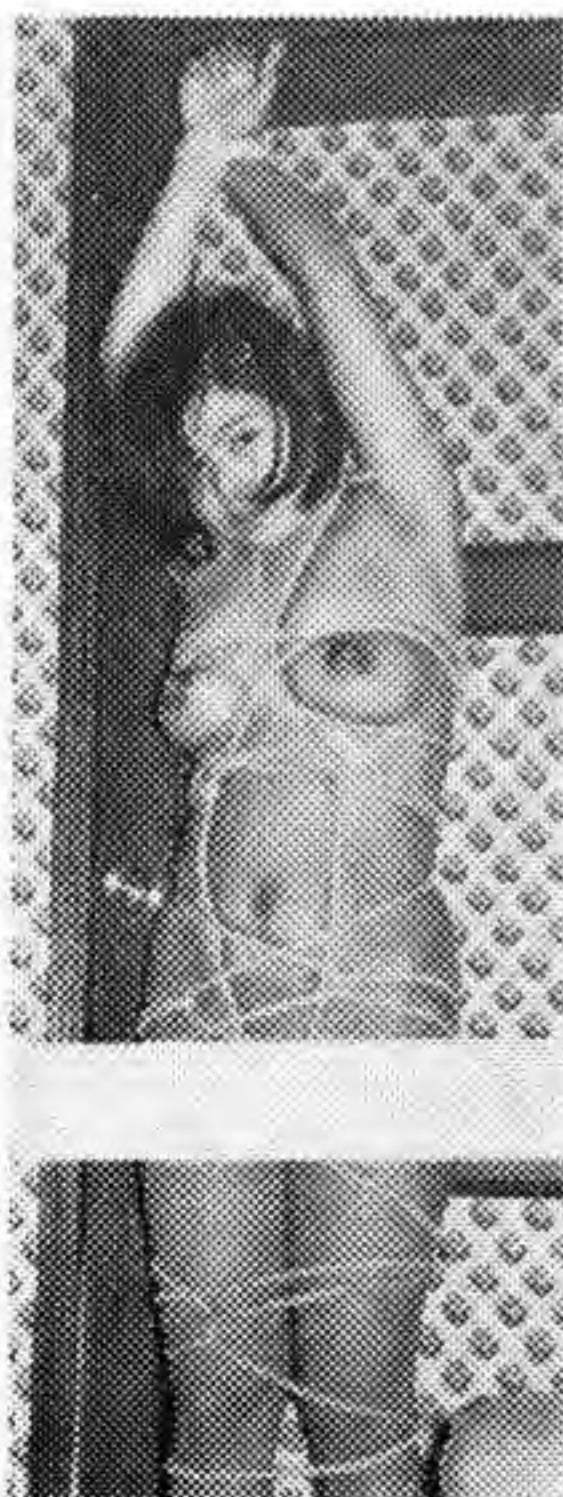
乳頭の摩擦する部分が、白い液汁を押し出して、じんめりと浸透している。

あきらかに奈加子は拗ねた表情を、ありありと顔に泛かべて面白くなさそうだった。「どうしたんだい？」

深々とソファに腰を降ろして煙草をくゆらせながら、声をかけたが返事はかえらない。

排泄が終わって、身をすくめるようにして出て来た彼女の縄を一旦といった時、解放されたと思ったのか、私の腕をすりぬけるようにして、バスの方へ走りかけた奈加子を、小雀を掴むようにして捉えると、有無を云わせずねじふせて、カーペットに倒れた彼女の上に馬乗りになり、背後で両手、両足を縛って連結したのであった。

立上ると、部屋の熱気が上層にこもって、上半身が暑い。いつか私のひたいには汗が滲んでいた。



「厭そうだね」

裸身に近々と寄り添って囁くようにいうと

「乱暴するからイヤです」

「どうして？ 乱暴なんかしてないじゃないか」

「だったら、どうしてカメラうつさないんですか。縛ったまま何もせず、こうして長い間放っておくのですか」

「愉しんでいるんだよ、君のその姿をみて」

「私には苦痛です」

「いじめてはいない。私は何もしていないんだよ」

「だから苦痛なんです」

「分からないな」

「……………」

「じゃあ、前にやったように、ムチ打ちしてやろうか？ それともパイプかけようか」

「イヤです今は——。そんな気持にならないんです。とに角じつと見ていないでホドいて下さい」

「イヤだといったら？」

奈加子は、きっと私をにらみつけるようにして、ややするどい口調で

「今日は仕方ありませんけど、もう二度と会いたくありません」



その激しい語調に気圧されて、私はしばらくためらっていたが、そそくさと縄をといていった。

屈折の膝頭や、二の腕の縄目の痕を撫でさすりながら、

「どうして、今日はこんなにヒドいことするんです？」

なじるようにいって、微かに眼尻に涙をうかべて、彼女はそっと、うずくまった。

「そんなにヒドい？」

「ハイ、いつもの辻村さんとは違います。何

だかイヤイヤ縛っているようです。そして、イヤなことばかりします」

いやなことばかりという中には、勿論、

クリスタールのプレイも含まれていた。

「そうだろうか？」

私は応えて、しかし反省する。自分の心を解剖した時、既に数度に亘ってとり尽したという熟知が、つい無意識のうちに現われ、第二回目の時や、逆吊りした折のような、激しい心の燃焼のない、やや投げやりの安易感を伴っていたことを、はしくも彼女の言葉が裏書きしているのを思い知らされたからであった。女心は、たしかに敏感であった。そうした私の態度の中に、プレイに対して意慾を燃やしていないことや、流腸を行なった結果彼女の響聲ひんしゆくをかって、まかり間違えば、もうこれが最後だという太々しい気持が、ありありと彼女の心に反応していたのである。

心は幼なく、歳は若くても、肉体にめざめた女のサガが、既定のあの時の事実を求めて或いは疼き始めていたのかも知れない。それが例え、報酬の代償としての緊縛のプレイとはいえ、そのプレイを通じて徐々に芽ばえ、今こうして二人きりの密室に於いて、秘奥までも曝した時、当然起こる現象として、期待

していたとしても、それは奈加子自身のツミではなかった筈である。

あの時、仮寝の私の傍らにヒソと寄添い、そっと、とばりをおろして裸身をゆだねてきた奈加子——。その燃えるような熱い体をまざまざと憶い起こすと、私はいつしかジーンと胸が熱くなるのを覚えるのであった。彼女は再び、あの甘美なひとときの訪れを、さやかな期待をもって、或いはそれを報酬にかこつけて、私に近づいたのではなからうか。そうした秘かな願望が、私の心なきプレイや浣腸によって、一挙にくずれさった今、やり場のない索漠たる空しい感情の虜になって、それがああした語調となって私の態度を責めているように思われるのであった。

それは、ハントした女性に対する、私の思いついた、我田引水式の思考であるかも知れない。それともいつになく女心への配慮の足りない、私の気促な行動への反撥が、奈加子を不貞腐れさせた、そんな単純な動機であったとしたら、私の思考は、いい年をして随分ひとりよがりのものであった。

めまぐるしく、そんな思索をかけめぐらせていた私は、フトある接点に突き当たった。

金原奈加子が、余りにも子供子供した感じ

のため、つい少女に対するような観念しか持ち合わせていなかったのが、一児すらある母のしかも現在、又も妊娠中の彼女の本能を、心ならずも傷つけていたことに気付いたのである。それはオンナへの侮辱であった。

奥さんと呼ぶはおろか、あなたともいえずに、君、君と呼んでいた私——。プレイのはしばしに走る少女扱いの行動。それが、奈加子のプライドを傷つけていたのかも知れなかった。たしかに童女の表情や髪かたちに比較して、裸身は成熟し、まぎれもなくオンナであったのだ。

私は咄嗟の想念で、思い切って態度を変えて、金原奈加子に声をかけた。多分に照れ乍ら——。

「奥さん、御免なさい。決して乱暴する気持ちなど、毛頭ないんですよ」

キョトンとした顔が私を見て、それが自分に掛けられた声とすると、パッと紅をさしたように奈加子の頬が一瞬、真赤に染まった。「気を悪くさせたようですね、奥さん——」

奥さんという語尾に、わざと力をこめて、ニコッと笑みを泛かべると、途まどったような童顔があわててカブリをきつくふった。

「怒ってないの？」

優しくいたわるようにいって、そっと肩に手をやると、ピクリと体をすくめて

「どうして、急に奥さんなんていうのです」と羞かしげに、きくのであった。

「でも、奥さんに違いなものね」

「誰からもいわれたことないんです」

「どうして？」

「どうしてでも……」

余りに幼なすぎる、このチツポケな少女めいた奈加子に、その言葉は痛々しく感じて、誰しもがタメらうのであろうか。私にも、それが分かる気がした。

「さっき、なぜ腹を立てていたの？」

「腹なんか立てていません」

「でも、随分こわい顔をしてプリプリしていたよ」

「それは、辻村さんがいつもの辻村さんと違うからです」

「どう違っていたの？」

「うまく口ではいえません。でも縛られる時何だか荒々しく感じられたのです」

「悪かったね」

「そんなことはありません」

「もっと縛っていい？」

「構いません。きつてもいいですから、優

しく縛って下さい」

縛り方は強く激しくてもいいが、優しくいたわりの心で縛ってくれという、この一言がSMプレイの真髄をつらぬいた、けだし名言であった。百言千句、むつかしい理論を列挙するよりも、身をもって体得した奈加子のこの一言が、SMのプレイをする者の、心の在り方を如実に現わしていた。

(優しい心で強く縛って……優しい心で強く縛って……優しい心で……)

その一言が、まるでエコーのように、韻々と余情を引いて、私の心の隅々まで波紋のようにはびこってゆくのであった。

負うた子に教えられた思いで大きくうなず



いて縄をとり立上ると、奈加子もつられて立上った。何かイソイソとした気配である。数条の白いロープをもって近づくと、鮮烈な思いにかられて、雁字搦目に小柄な全身に緯々と縄を巻きしぼって行く。

「痛いかい」

「大丈夫です——」

戸に交錯した全身の縄目を、奈加子は淡い愉悅の表情を浮かべて、眼で追っていた。

抱きかかえて、姿見にうつる様立たせると彼女は挙手で縛られた我が緊縛の裸身を、鏡に覗き込んだ。大腕を伏せたような乳房が、たわわに実ったおのが姿を、奈加子はいつまでも飽かず眺めているのであった。

二本の縄の喰込む腹部に眼を落とし、その縄の行方を追うように微かに身体を蠢動させると、それがそこはかとなく愉悅めいた快感につながるのか、鏡をみつめる奈加子の瞳は、いつしかしっとりと潤い始めていた。

じりじりと後退させて、パスに通ずるドアの前に直立させると、両手を縛った縄を、ドアの上部にかけて引き絞る。

微かな呻き声をあげた女体の足許が、床すれすれに爪先き立ちになり、重心が不安定になってユラユラと揺れるのを見定めて、縄端しを確かりとドアの把手に結びつける。

ドアをしめると、奈加子の全身が大きく揺れ、辛うじて指先だけで軀の重みを支えていた。

数枚撮し終わってカメラを措くと私は小型のパイプを手にする。その手許を凝視する奈加子の眼が、さっと期待の緊張に強ばった。

物懶い電動音を微かに響かせて、豊満そのものの乳頭に近づける。動々とした乳量が灰かに揺れて、白い乳液が細かい霧となって飛散する。縄目にこじ入れるようにして挟み込むと、引返して更に同一型のパイプを廻し、双房に、陶醉を呼ぶ電波を響かせ続けるのであった。

よろよろとよろめき、ぐっと唇を噛みしめて、童女奈加子は、この陶醉を、あからさまに私の眼前に曝け出すまいとしているらしく懸命に果敢ない努力を試みていた。いやいやというように首を振り、切なげに甘い抵抗を示し乍らも、やめてくれと口には出さぬその唇を縫うて、次第に洩れる熱い吐息は、悦虐の恍惚をまざまざと吐き出しているかのよう

であった。奈加子の溜息に声が交って、何かを私に訴えていた。

「えっ、どうしたの？」

耳を寄せると、

「手がしびれてるの。少しゆるめて下さい」

と喘ぎ喘ぎにとぎれていって、うるむ眼ざしに、口に云えぬ愉悅を泛かべて、尚も切々と疼く女体をもだえさせた。あきらかに奈加子の女体は燃え始めていた。汐時とドアを開き、高々と挙げさせていた両手を降ろし、縄をといてやると、息づく間もなく、細引で乳房を挟んで八の字に縛り上げる。

「どうだ、もっと縛られていたいんだろう」

「ハイ」

素直に応えて、うるんだ瞳が慕情をこめて私を振り仰ぐ。

「縛られて虐められることが好きになったんだよ」

「そんなことはありません」

「でも今、ハイといったじゃないか」

「もっと続けて、ああしていただきたいからです」

「これ？」

うなずいて、私の差し出したパイプに眼をやり、ポツと赤らんで視線を落とす。童女は

正直であった。たしかにパイプの効用は、虐めることでも責めることでもない。女体を悦ばせることに違いないのだと、私の想念は改めざるを得なかった。

過去のハントで、私はしばしばパイプを使い、それを、悦虐を与えろとか、女体を責めろとか書いてきたが、今、いみじくも奈加子がいったように、その行為は相手を喜ばせるプレイであったのだ。虐められ、責められるのじゃない。愉しみ、陶酔を呼んでいるのだと、奈加子からいわれようとも、こうして犇々と緊縛して、パイプを当てるこの行為に嗜虐を好む吾人の欲びがあることを彼女は知らない。

所詮それは与える側と受取る側の観点の違いであつても、M化した過去の女性性は、確かにそれを同一視して甘受していたのである。Mでない奈加子にとつても、愉悦は愉悦として素直に受け入れていた。そこに緊縛という行為があつてもなくても、奈加子の受取る気持は同一であつた筈である。緊縛の肢態によつて、嗜虐を感じるのは外ならぬ私自身の方だったからである。縛られていたいという奈加子の意味は、パイプやそれにつながる一連の、より以上の期待の行為を指していたので

あつた。だから、単に、縛られたり、虐められたりすることは好きでないと云いきつたのであろう。

虐めるということが、私の場合、パイプ等の行為によるプレイをさしていても、そのS Mプレイの何たるかを熟知せぬ奈加子にとつては、単純に虐待としか思いが走らなかったに違いない。

縛ることが好きな私という人間を前提のもとにおいて、彼女はそのパイプへの魅力に惹かれて、いわば已むを得ず緊縛を許容していたのであろう。

私は奈加子の肩を抱いて、ソファに坐らせると、左右の足首に縄をまきつけて、ソファの下をくぐらせて精一杯に伸張させた。

ドッキリカメラの極蓋のポーズをとらえたあと、砲弾型のパイプをまわし、据えつけ終わると日本手拭で蔽って、

「どう、十分ぐらいもつかね、そうしておいて」

ときくと、一寸怪訝な表情を泛かべたが、黙つてうなずく。眉がせばまったようであつた。

くるくると、素早く身につけていたものを脱いで、パンティ一枚になるとバスのドア

を開閉する。乱れ簾に金原奈加子の下着がこれみよがしに服の上にのっかっていて。卑しい慾念が思わず走り、うずくまって、掻き廻すと、童女のじかに身につけていたパンティを、そっととり上げる。

私は無意識のうちに、それを鼻に当てがっていた。すっと鼻孔をよぎる醜えた女臭。眼を落とした一点の黄褐色の汚れを、私は懐かしいものを発見した思いで凝視し、それに直射の鼻孔を当てていった。

湯は既に生ぬるかった。激しく温湯を噴射させて、狭いバスの中に足を伸ばしてゆく。まざまざと嗅ぎとった、奈加子の匂いを、ほろ苦く反芻しながら、今頃独り、悦楽の呻きを、惜しげもなく立てているであろう奈加子のなまめいた痴態を、あの少女めいた幼ない顔にダブらせてゆく時、フト我にもなく働く

大脳神経の気恥かしい作用であった。男らしくなっても、いざその痴態を眼のあたりに眺めては、不甲斐なく萎縮して行く情なさを想像すると、奇妙の現象は、皮肉にも反って逸り立つのであった。

緊縛―浣腸―緊縛―プレイ……その繰返し
の時間帯で、私は一度も男らしさを我が身に感じなかった。その癖、今こうして独り湯に

つかっていて、そうした奈加子の、緊縛のさまに思いをめぐらせ、パンティの女臭を嗅いだ想像に耽ると、卒然として燃え上るのであった。大脳神経は、プレイに心をはせている時は、それと共にカメラにも心をはらせている私の脳裡に、只管、その事実のみを伝えるだけで、感情線にまでは届かぬというのであろうか。それは他人はいざ知らず、私という人間が、そうした行為に対し、余りにも慢性化した結果に外ならないと泌々思い至るのである。

ほんの一、二カ所、石鹸を使って勿々に引返すと、奈加子の怒ったような顔にぶつかった。そっと手拭をまくり上げると、空しい電動音を撒きちらして、パイプはソファのシートをブルンブルンとのたうち廻っていた。

× × ×

両手足を一緒に縛られて、ソファに仰向けに据えられた奈加子のみち足りた表情の底に飽和感が、ほのぼのと漂っていた。この恰好のポーズが、私にどの様なプレイを行なわしめたか、それはもう言わずもがなの、奈加子の垂れ下った顔の、なごやかな眼が、そのす



べてを語っていた。

狭いソファの中でのたうち、両手足を空につっぱねていたのが、まるで嘘のような、平穏な表情であった。

そっと抱き起こすようにして片手で両手足の縄をとくと腰で回転させて坐らせてやる。

ソファの足許に転がった、大小二本のパイプレーターとローソクに眼をやって、奈加子は思い出したように大きくハァーッと息を吐いた。

しかし、私の大脳神経の命令の末端は、不完全燃焼のままくすぶりつづけていた。

彼女へ与えた報酬の代償に、私は心身を消耗させて奉仕してやったような、一方的な行為に、何か釈然としない気持ちが疼いているのである。

「もう服を着ても構いませんか？」

悦楽のあとの羞恥を、そこはかたなく漂わせて奈加子は、そっと訊ねた。私は向かい側のソファに腰を落としたままぶすっとして押し黙っていた。

「どうしましょう？」

もう一度、改めて聞き返してくる。

「奥さんは、それでいいけど……」

（この私のくすぶった気持はどうしてくれるんだ）というとして、口をつぐんだ。それは何も奈加子の知ったことではない。私独りで好きな様に行動し、勝手気儘に振舞っただけで、これでもか、これでもかと、彼女の悦楽の最高を求めて、懸命に独りよがり張り切っていたに過ぎぬからであった。

私のプレイにに応じて、奈加子はその目的通り耐えに耐えながら、耐え切れなかっただけであった。私の想念は自分勝手に、くすぶらせているだけである。

（プレイの度に自省し、そして我を忘れ。冷静になれば再び追求を続け、そうした繰り返し

しが、ひたむきになれぬ、私の年齢層のプレイへの年輪であろうか。近頃のハントが、ともすれば理窟っぽくなることを、私自身一番よく知っていながら、当初のように、唯、そのことのみに、ひたすら没入出来ぬ反省がいつも心の隅を支配しているのであった。

月毎の、プレイへの探究を深めれば深める



ほど、そうした疑問や理念が浮かんでくるのである。それを書かずにはいられない、このくどくどしさを、お許し願いたい。」

プレイ対象の女性によって、時には飛躍し或いは萎縮し、欺瞞し、真性を吐露し、そして高圧的になるかと思えば低姿勢で臨む私。

容貌、年令、環境、体質、性向等、一人一人違う女性とプレイする時、私の心もこうして千変万化せざるを得ないのであった。

途中で口をつぐんだ私に奈加子はハッと何か感付いたようであった。

「いいんです、私、まだ時間かまいません」

前言をあわてて取消すかのようにいって、奈加子は、そっと眼を伏せた。或いは私の不燃焼地帯に気付いたのかも知れない。

「ここへおいで」

パンティ一枚の裸身で立上って、私は縄をとった。もう縛ることは正直いって憶劫であった。それでいて、そうせずにはいられない私――。

うたたねの仮寝の夢に、かつて味わった奈加子とのひとときの喜びを忘れかね、自から女体を投出してきた彼女の心に甘えて、今ひとたび、緊縛を伴った私自身の意志によっての歓喜を試みてみたかったのである。

カーペットに奈加子を正座させると、うなじの背後で両手を縛る。その縄を腋から胸へと犇々と巻きつけてゆく。

素直に奈加子は、私の縛るがままになっていた。

軽便雲台をとり出すと、姿見の台に固定して小型の自動巻カメラをのせ、レリーズを長く引き伸ばす。

私と、奈加子の緊縛のプレイを、永久に保存するため、私は息を弾ませて彼女ににじりよっていった。

「私と一緒に撮るんだよ、いいね。その意味が分かるかい」

「分かりません」

「二人だけの、愛の姿を、いついつ迄も思い出の、よすがにしたいからさ」

「理解しかねた顔付であったが、半ば私の勢いに気圧されて、

「私は、どちらでもいいんです。でも余り、外の人に見せないで下さい」

うなずいて抱きしめると、ぐっと握りしめたレリーズ球の圧力でパッと閃光が走る。シニルシニルと電動巻上カメラは、微かな音を立ててフィルムを送る。

足の踵を使い、掌で蔽って、私達二人の愛

のプレイが次々と閃光と共にカメラへ納められていった。抱擁、くちづけ、愛撫……。そして、それにつらなる嗜虐の行為。

ボンと足蹴にして、呀っと倒れ伏す奈加子を、ソファに坐り込んで、足指先で弄んでゆく。力をこめて足で突くと、奈加子の体が半転する。立上って、又元の方へ転ばせる。

両脚を高々とかつぎあげ、大腿部をかかえて、ゆらりゆらりと逆さの女体を宙に揺さぶりつづける。めまぐるしく閃光が走り、苦悶の呻きと喘ぎが私の耳朵を撃つ。

小柄な体の胸を殆ど占有した、偉大なボインが、それにつれてユラリ、ユラリと揺れ動く。

流石に息切れして、そのまま傍らのベッドの上にドサリと投げ出すと、カメラにかけよりベッドに焦点を絞りを合わせて引き返す。

縄を握りしめて、足首をぐっと彎曲させて二の腕と直結させ、左右をつなぐと、ヒタとも身動きのとれぬ、奈加子のあからさまな、めくるめく肢態に、細引の縄ムチが発止ととんだ。

絶叫の悲鳴が流れ、激しく拒否する声も、やがて私の唇によって掻き消された時、奈加子は、うわごとのように

「電気を消して……カーテンをしめて……」
歎歎と共に、私の口腔に、その声が吹込まれて、咽喉の奥へと消えていった。

× × ×

意外に長い時間であった。冬の夕風が、暖房の部屋から出た私の頬を快くなでる。生玉のホテルを出て、松屋町筋に入ると、ここも昨日から一方通行で、新世界へは十分とは、かからなかった。

金原奈加子は又もとの無口にかえって、車の中で、殆ど口をきくこともなく、小さい体をチヨコンと助手席のシートに凭せかけていた。

じっと睨みつけるように正面を見据えたままである。しかし、移り変わる窓外の事物はおそらく奈加子の視線に映じてはいないのではないだろうか。

漠然、……まさにそうである。つまり、ポヤッとしているのである。

シートに背中を凭せている関係で、その背中にのっかっている顔についている両眼が、閉じるのも面倒くさいといわんばかりに正面を向いているに過ぎないと思われる。

そんな奈加子の様子を、チラリチラリと眼尻に見ながら、私は、彼女の複雑な胸の裡が

わかるような気がしていた。

「疲れた？」

前方注視のままで声をかけたが、返事はなかった。

信号停止の時、顔をのぞきこみ、

「食事でもしようか」

誘うと、私に一寸、上眼を使ってから、

「あの人のこと気になりますから帰ります」

正面をむいて、にべもなく応えた。

「悪かったね、おそくさせて——」

「いいんです」

「怒っているのかね」

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

「いいんです」

「もう一度、あさって頃といってたけど、どうする？」

「帰って考えてみます」

先払いしてあったが、手ぶらで帰す哀れさに、ホテルを出る時、なにがしかを手渡したのを、彼女は素直に、しかし当然のように受取ると、粗末なハンドバッグに無難作にしまいいこんだ。（いい気なもんだ。最後の報酬のつもりかも知れない。まあ、それでもいいじゃないか）こんな感懐を抱いて、私は車を出していた。明後日のプレイに口を濁したのも

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

奈加子に差し迫っての用がなくなったせいで
はなかるうか。

恵美須町の交叉点をわたって金原奈加子を
降ろす。いつ又会えるか、会えぬか分からな
い浮草に似た少女妻——。

縛られた身を必死に身悶えさせて、うたか
たの声をもつれさせ、

「ああ抱きつけない。この手という……ねえ
という……」

と叫んでいた奈加子のひきつった顔が、仄
暗いベッドの中で、白く浮かんでいたのを、
ほのぼのと思い出し、あれもこれも、果敢な
一場の夢かと、私は思い切って、パターンと
大きく音をさせてドアをしめた。

佗しげに肩を落として、霞町に向かって、
トボトボと舗道を歩み始めた奈加子の、ちっ
ぽけな後姿をじっと追っていた私は、折りし
も暮れなずむ大阪の下町に、高く聳えて輝き
はじめた通天閣のネオンにチラリと眼をやる
と、すべてを払拭するかのようには勢いよくス
タートした。

さっと横眼によぎり過ぎる彼女の影、それ
はみるみる小さくなって、もうバックミラー
にも、うつらなくなっていた。

（おわり）



史実研究

切腹百年史

〔女性篇4〕

中 康 弘 通

一〇、母子心中

娘たちの腹切り沙汰と同様にいたましいのは、母子心中のための、うら若い人妻の切腹であろう。そのうちでも悲痛をきわめた一例を挙げてみよう。

昭和三年五月二十二日の午前二時半ごろ、甲府市上一条町の酒屋で、若妻の池〇すゑの（二十四才）が、刃わたり六寸五分の出刃包丁で、年子の愛児、それも二才と生後二カ月の女兒を刺殺したのち、みずからは腹を真一文字にかき切って果てた。

六時ごろにようやく家人が起き出て発見した次第で、鮮血にまみれた現場は、近隣の人々の涙を誘ったという。

彼女は東八代郡の某素封家の長女で、県立

高女を卒業後、池〇家の人となったが、三年のあいだ姑の虐待と夫の放蕩に涙のかわく間もなく、二十一日夜も夫は姑ともどもスエノを虐待し、「子供をつれて行け」と足蹴にまですたので、思いつめたスエノは魚町のクロガネヤで出刃包丁を買い求め、深夜を待って両親や仲人などに遺書をしたためたのち、覚悟の切腹をとげたものである。

数人の使用人もいる家内で、人知れず絶命して行ったスエノは、苦鳴ももらさじとよほどの覚悟で腹かき切ったものと見え、その最期の姿のいたましさは思いやられる。

嫁しては生家のしきい、をまたがず、という婦道教育と、被虐に耐えきれぬ教養との板ばさみが、切腹という悲壮な手段を選ばせたものと見えて、いたましき限りない。

昭和二年十月十七日の夕刻、東京市外（当時）戸塚でも、〇本ときよ（三十才）は、三才の愛児を絞殺したのち、伝家の短刀をもってその場で割腹を企て、左横腹に突き立て深く廻りかねたのか、そのまま苦悶中を発見されたが、生命危篤とある。

彼女も石川県で県立高女を卒業、当時としては女子高等教育を受けたもので、原因は極度の潔癖と迷信が昂じた発作的なものと伝えられているが、教育の高さは前例と共通である。

是より少し前、同じく昭和二年五月十五日夜半すぎ、台湾台中州で、工員の妻〇村や江（三十二才）は、出刃包丁で八才の長男と五才の長女の咽喉を挟み、みずからも腹一文字

にかき切った。

長男と当のや江は生命に別条はなかったが長女は重傷。原因は二男（二才）を二日前に亡くし、憂うつ症となったものである。

生活苦の母子心中もまた悲劇的である。大正二年四月二十六日の夕方、○木ツイ（三十才）は、二女のうちの一人の午睡中を刺殺し、その剃刃でみずからも腹を切った。

即死をとげたというから、よほど深く腹をかき切ったものであろう。ツイは明治三十九年というから十九才のとき、東京下谷の○木泰助の妻となったが、明治四十五年に夫の死亡後は生計に困り、生れ故郷に近い埼玉県入間郡名細村に仮寓していたところ、過度の苦労から、発作的に自殺を企てたという。

昭和二年五月十六日午後、大阪市北区浪花町の、下宿先で○中幸恵（二十四才）は二人の女兒に剃刃で切りつけ、返す刃でみずから頸、左乳下、腹をかき切り、血まみれて倒れた。

折から来合わせた家主が見つけ、幸い軽傷ですんだが、是も映画助監督の夫が軍隊に入り、生活難の結果とある。

昭和三年九月二十二日にも、福島県石川町

で、公務員の妻○子いし（二十八才）が、夕方奥座敷で熟睡中の長女（八才）を、刃わたり二尺八寸の日本刀で斬殺し、返す刃でわれとわが腹部を切ったが、死なれず遂に縊死をとげた。

原因は複雑で、家庭事情とあるのみ。

母子心中は戦後も少なくないが、まずこれくらいにして次の機会を期そう。

一一、一家心中

母子心中も悲劇だが、一家心中は更に惨である。殊に女性が決行したのはみないたましい事情が多い。

一家心中のなかに、夫婦のみ、姉弟のみ、などを一応ふくめておく。姉弟というのは母子心中と心情において余り変わりないかも知れない。

大正二年八月九日の夜半すぎ、水戸市上市鉄砲町の下宿屋○川方で、長女の愛子（十九才）が弟を呼び起こし、刃わたり三寸五分の出刃包丁でその咽喉を突きとおした。

彼が人事不省になるのを見すまし、愛子自身も同じ出刃包丁で腹を三寸余り切り割き、咽喉を突きとおして絶命した。

現場は一面の血汐のなかに愛子が息絶え、

弟は苦悶している惨状であった。

もと愛子らは宇都宮の出身で、三月二十八日○川方へ養女養子となったが、養母の虐待に遭って、愛子は、わが身はともかく、弟のいじらしさに、一と思いに苦悩を逃れさせようと、姉弟心中を図るに至ったものである。わずか十九才の少女が、弟も死んだものと思ひ、わが身は冷静に腹を切り咽喉を突いて果てたというのは、よほど思いつめたものに見える、全くいたましいものがある。

昭和五年三月十三日昼すぎ、東京府下長崎町で、肉や卵を商う○本方二階では、一家心中の惨劇が起こった。

主婦のその、（三十二才）が、夫と二人の愛児を肉切包丁で殺害、みずからも割腹した上で頸部をかき切ったもので、虫の息で発見されたが、六時間余でその夜絶命した。

危うく階下へ逃げた次女と、学校にいた長女のみが助かったが、商売も始めたばかりで生活難は考えられず、全くそののヒステリーが原因とみられる。

夫婦の切腹心中は滅多にないが、公務員の夫婦が新婚半年もならぬに、夫が神経衰弱を

苦に、散歩中に突然自殺を企てた事件があった。

昭和八年九月十五日の夜、上野公園、西郷銅像付近のことである。短刀で咽喉を突いた男を、女は付近の植込みに連れ込み、目撃者の訴えで警官がかけつけたときは、植込みの中で二人とも、咽喉と腹を刺して血まみれになっていた。

夫の○田栄三郎（二十七才）妻よしの（二十三才）ともに生命覚醒ない重態ながら、よしのの申立てでは、夫の突然の自殺企図で咄嗟に心中を決意して、みずから腹を刺した夫の刃を、わが身にも向けさせ、腹を刺させたものという。

特殊なケースとして同性心中がある。

昭和九年五月二十八日夜半、横浜市神奈川区の網島温泉夢の家では、東京日本橋区江戸橋の○村せつ子、大森北洗足の○野好枝、ともに二十才の娘が投宿していた。

二人は催眠剤を服用した上で、好枝の所持していた短刀で互いに腹を刺し、咽喉を切つて情死を計ったが、翌日発見されて幸いにも生命をとりとめた。

原因は、女学校時代からの同性愛の末であ

った。

一二、切腹心中

前回、合意の情死を目的として女性が、まずみごとに切腹し果て、男は他の方法——咽喉を突いたり——して未遂または重態で加療後死亡、という例を挙げたが、女を刺して男が切腹する例もまた、柴田錬三郎氏の「切腹心中」（「眠狂四郎無頼控」のうち）ではないが、少なくとも事件である。合意であろうと無理心中であろうと、である。

前項に挙げた、夫が先に自から腹を刺し、妻がはげまして己が腹へ夫の刃を受けたのもその一つのバリエーションかも知れない。

もっとも、「切腹心中」は武家夫婦の物語りで、背いた妻女を斬って夫が切腹し果てる筋なのだが、いわゆる情死と呼ぶにふさわしい形態をとるものとしては、腹刺し違える形をとるのが、もっともその精神的な純粹さを感じしめる。そこには情痴的な雰囲気を超えた、殉愛の思想が感じられる。

そうしたなかで、戦後も戦後、まだニュース面から消えて日の浅い昭和四十年、清純派のTV女優とセールスマンとの情死未遂事件は、その形態からして、もっとも殉愛的色彩

の強いものであろう。

妻子ある男性と恋愛におちいった純情な女性の一つの途として、二人のあいだにはしばしば死が語られ、そして遂に二人して買った二丁の洋ナイフ（刃わたり六寸）とともに失踪した。

その夕方、山のドライブウェイに停めた車のなかで、互いに用意のナイフで腹刺し違えたが、着衣の上からでもあり、死に切れずに発見された。幸い、女性は重体を伝えられたが回復が早く、男性の看護に尽す状態になったが、やっと起きられるようになったとき彼は、病院を脱け出て自宅からも彼女のもとからも失踪した。

世間は男の弱さをなじり、はげしかった恋の終わりが余りにも女性には苛酷であるとさえ伝えた。彼女は、人間が信じられなくなつた、とポツリともらしたと云う。

しかしある意味では、二人はもう腹刺し違えた瞬間で、一つの人生を経過してしまったとも云えよう。死に損ねたと知ったとき、男はもはや彼女の眼の前から姿を消すほかはなかったらう。

筆者には、二人の純粹な愛の深さが、結局は、生へと二人を向かわせたとししか考えられ

ない。それでよいのではなかったか。ほかにこの恋を美しく終わる方法はなかったのではないか。

発見されたとき、女性の手により傷つけられた男の腹部の傷は深く、男性の手により傷つけられた女性の腹部の傷は浅かったとか。

常識的に男女の力の差を考えれば、是は逆でなければならぬような気がする。

では何故こうした結果になったものか？

真実ともども生命果てることのみ考えていた女性の方が、かえって深く男の腹を刺し、生かせるものなら女を生かしておきたい、よし自分は生命果てても、と思った男の刃は、彼女の腹を刺すとき手加減されたのではなかったか。それがやはり、十余年の年令差を持つ男の、世間的には「無分別な」と見られても、唯ひとつ残された男の分別ではなかったか。

従って、自分自身が生き残ったとき、そして目的の一つである「女性を生かすこと」に成功したとき、彼は舞台を降りねばならなかったのではなかったか。

悲痛な、いわば邪恋と呼ばれ易いこの種の恋の物語りに、ただ一つの救いを求めるとしたら、互いに結果は喰い違っている、それ

が愛し合っていたらこそこのこと、という推定だけではなかったか。

こののちお二人ともが、やはり東京の空の下で第二の人生を力強く歩いているに違いないと、筆者は確信している。そして女性がいつか第二の男性との結婚生活に入ったとき、彼の愛情のあり方が、女心を多少傷つけてまでも、あくまで彼女を生かしておくところにあったと、彼女は気づくかも知れないと思うのである。

その点、これは切腹という筆者のモチーフからは逸れるが、つい先ごろニュースになった、清純派モデルの自殺ほど、救いのない事件はなかっただろう。

高名な写真家の専属モデルとして、結婚も三年間お預けになった彼女は、更に約束を延ばした甲斐あって、芸術作品としてのヌード写真展に、その美しい体躯と清冽な容姿をもって貢献した。彼女の胸から腹へ流れる線の美しさは、ヌードモデルとして類がないように思えた。

しかしそののち進行していた恋愛の悲劇が週刊誌上に見えたとき、彼女はひとりさびしく生命を断って行った。

ある新聞は、週刊誌がモデルを死なせた、

とも報道したようである。しかしその週刊誌を読んだとき筆者には、罪なきもののみが石もて彼女を打つことが出来る、そういう反省が彼女の周辺にあったとしたら、彼女の救いともなり、それまでも「何度も自殺しようと思った」という彼女は死ななくともよかったのではあるまいか、と思えた。

結局、週刊誌は単なるきっかけにすぎなかったのではなかったか。

この週刊誌での対話に関する限り、少なくともこの週刊誌の報道は彼女をのみ責めるものでもなければ、彼女をおろかな弱い女と見せるものでもなかったように思える。

仮装に欺かれた者を罵っても何にもならないと一般である。

人のおのに感じ方は違う。

しかし筆者には、年令的なもの以上に性格の差、人生の考え方の差、愛というものの考え方の差ばかりが感じられてならなかった。

○

(付記) Ⅱ本稿に引用の新聞記事は、

朝日新聞(東京朝日、大阪朝日を含む)

毎日新聞(東京日日、大阪毎日を含む)

読売新聞(大阪読売を含む)

時事新報、産経新聞(サンケイを含む) 以上



(十七)

好造は、夫人たちに戦斗再開を命じた。止むなく夫人たちは再び部屋の中央に睨み合って構えたが、お互いに先程の痛手が完全に回復していない様子だった。

弓枝夫人は、相手に噛みつかれた足指が、まだ痛むのか、右足を上げて頻りに爪先を動かしている。また毬子夫人の方も、振られた右足がよほど痛かったらしく、太い右足で盛んに畳をトントン蹴っている。

と突然、好造が

『おいっ、どうした！　まだ勝負は、ついち

懸賞入選・女斗美小説

ふ　　た　　り　　妻

(4)

芦　　浦　　素　　舞　　夫

(カ　　ッ　　ト　　も)

やいないんだぞ！』

と大声で怒鳴りつけた。ハッ！　として我に返った夫人たちは、お互いに痛みも忘れたかのように、猛然と、相手に組み付いていった。そして、お互いに相手の両肩を驚掴みして激しく揉み合い、お互いに嫌って突き放し再び手四ツに組み合って凄まじく争った後、また離れての睨み合いになった。

二人の構えを見ると、太った毬子夫人よりも、背の高い弓枝夫人の方が却って低いくらいだった。恐らく彼女は、先程のように足取りを狙っているのだろう。

案の定、弓枝夫人は低い体勢から、長い腕

を伸ばして毬子夫人の太腿を掬おうとする。だが、今度は毬子夫人の方も警戒しており、なかなかその手には乗らなかった。彼女は、素早く右足を引き、右手で弓枝夫人の頭を抑え、逆に相手を牽制する。しかし、太った毬子夫人が足を取られるとモロいのを知っている弓枝夫人は、あくまでも相手の大根足を狙って攻めようとする。

長身の弓枝夫人は、頭を下げ長い腕を伸ばして、またもや毬子夫人の太い右足を掬いにいった。だが、それを充分、心得ていた毬子夫人は、素早く右足を引き、体を左に開くや逆に右手で弓枝夫人の頭を上から抱え込む。

チャ、ン、セ、リ、つまり首、巻、き、固、め、といつてレスリングでは相手のタックルを防ぐ最も効果的な方法とされている。

慌てた弓枝夫人は、首をすくめて逃れようとしたが遅かった。彼女は、毬子夫人の太い右腕の中にガッチリと首を抱え込まれてしまったのである。この体勢に組まされると、今度は逆に弓枝夫人の方が不利だった。下手すると、相手の重量に一気に押し潰されてしまう恐れがあった。長引いては面倒と弓枝夫人は焦って相手の太腿を取って引っくり返そうとしたが、毬子夫人は逆に、六三キロの体重にモノ言わせて、弓枝夫人を潰しに掛かる。こうなると弓枝夫人も、両手で毬子夫人の太い腰に抱き付き、頭を下げ、喰い下るほかなかった。

しかし好造は、彼女たちのこうした組み方が好きだった。彼は、息を詰めて夫人たちの動きを見守った。だがこの体勢では、どう見ても弓枝夫人の方が不利だった。相手より十センチ以上も背の高い彼女だが、いまや逆に相手に上から首を抱え込まれ、その長身をエビのように折り曲げて喰い下がるという不自然な体勢を強いられているのだ。こうした組み手は、背の高い方が余計に疲れるものであ

る。

焦った弓枝夫人は、何とか足、取、り、で、反撃しようとして頻りに長い腕を伸ばすが、その都度、相手が素早く右足を引くので、なかなかその太腿を掴めない……。一方、毬子夫人も、なかなか慎重だった。あまり強引なことをやっているとウツカリ相手に足でも拘われたら、それこそ先程のようにひどい目に遭わないとも限らないからだ。彼女は、太い右腕の中に弓枝夫人の首をガッチリと抱え込んだまま、自分の体重を相手の背中の中にしかけるようにして、ジツと出方を窺っている。どうやら、こうした相手をだんだん疲れさせる作戦らしい。

事実、弓枝夫人は相当、苦しそうだった。好造の眼には、頭を毬子夫人の胸の下に抱え込まれているので顔はよく見えないが、肩でハアハアと苦しそうに息をしているのが手に取るように分かる。時折、毬子夫人が弓枝夫人の首を引いて牽制する。その都度、弓枝夫人は、うまく足を送ってこれを耐えるが、彼女が足を動かす度に、その大きな足の裏が畳にペタペタと変な音をたてる。勿論、これは彼女が足の故だった。先程から、ずっと弓枝夫人の足の動きばかり見ている好造は、何とかしてその足の裏を覗いて見たくてならな

かった。

と……その時である。遂に喰い下りの体勢に耐えきれなくなったのか、弓枝夫人は、苦しまぎれに毬子夫人の足を取りにいかうとした。だが、毬子夫人は慌てなかった。彼女は右から弓枝夫人の首をグイ！と捻って逆に押し潰そうとする。

弓枝夫人は、思わず腰が砕けそうになりヨロヨロと崩れかけたが、足を送って必死に踏み耐える。だが毬子夫人は、素早い引き足をみせながら、二度、三度と続けさまに強引な引き落としを掛けた。弓枝夫人は、懸命に足を送って相手の動きについていかうとしたが駄目だった。彼女は、遂に毬子夫人の重量に抗しきれず、畳にガックリと両膝をついて四つん這いになってしまった。

これを見た好造は「シメタ」とばかり、急いで弓枝夫人の背後に回った。言うまでもなく彼女の足の裏を見るためである。

相手をうまく引き落としした毬子夫人は、自分も畳に片膝をついて、早速、相手を抑え込もうとした。だが弓枝夫人も、さるものだった。彼女は、両手で毬子夫人のもう一方の足を拘って、素早く起き上ろうとした。うまくいけば、相手を引っくり返し、逆に足、取、り、固

めで抑え込むつもりらしい。が、毬子夫人は「そうはさせじ」と、自ら畳の上に両膝ついて坐り込むや、弓枝夫人の頭を自分の脛の辺りまで引っ張り込み、太い両腕で首を強く締めながら、自分の体重を相手の背中中のしかけて、ガッチリと抑え込んでしまった。こうなると、さすがに弓枝夫人も苦しかった。

彼女は、大きなお尻をムクムクと持ち上げ足の爪先で畳を踏んばって、起き上ろうと懸命にモガく。

そんな弓枝夫人の動きを、好造は彼女の真後ろに立って息を止め、喰い入るように見詰めている。

長身の弓枝夫人は、四つん這いになって両足の踵を立てているので、その足の裏が丸見えだった。彼女の十文半の細長い足の裏は、汗と脂と埃で赤黒くベツトリと汚れており、好造にとって、まったく素晴らしい色をしていた。そして、脂足特有の蒸れたような素敵な匂いを発散させているに違いなかった。こうして畳の上で必死に動く弓枝夫人のベツトリ汚れた大きな足の裏と、彼女が懸命に持ち上げる汗で光った白い大きなお尻を見ている内に、好造は、ぞくぞくと身慄いしてしまう自分を、どうしようもなかった。

彼は、背の高い女性のこうしたポーズが、たまらなく好きだったからである。

さて弓枝夫人は、相手の抑え込みから逃れて起き上ろうと必死だった。しかし、太った毬子夫人にドッシリと背中中のし掛かられているので、これを跳ね返すのは、なかなか容易なことではなかった。弓枝夫人は、何回か立ち上りかけたが、腰が砕けて、再び畳にガツクリと両膝をついてしまう。だが、それでもなお彼女は、必死に畳に長い両手を突っ込んで、ようやく起き上った！　だが、毬子夫人にガッチリと首を抱え込まれているため、まだ完全には立ち上れない。

それは、ちょうど相撲の仕切りのような恰好だった。弓枝夫人の高く持ち上げた大きなお尻が、ますます好造の心持を、そそった。遂にたまらなくなった好造は、前後の見境もなく、いきなり後ろから、むしゃぶりついたのである。まったく呆れ果てた男である。もうこうなるとレスリング見物どころではなかった。

まず毬子夫人が、顔を真赤にしてサッと立ち上った。当の弓枝夫人も、慌てて立ち上ってしまう。

「おいっ！　どうして途中で止めるんだっ！

グズグズしないで早く続けろ！」

好造は自分のハレンチな行為は棚に上げて夫人たちを怒鳴りつけた。尤も、好造もさすがに自分のとりみだした事を内心は恥じたのだろうが、照れ隠しに、わざと大声を出したのだった。

(十八)

休む暇もなく弓枝夫人と毬子夫人は、再び部屋の中央に向かい合って立たされた。ボクシングの試合でさえ、一ラウンド毎に一分間の休憩があるのに、夫人たちは、それすら許されないのだ。まったく残酷な話である。

実は、好造が夫人たちを急ぎ立てて試合を続けさせるのは、そうすることによって自分のハレンチな行為をカムフラージュしようとしているのだった。好造に命ぜられるまま、夫人たちは、仕方なく向かい合って立ったものの、さすがに先程のショックから、まだ抜け切れない様子だった。いくらあられもない姿でレスリングをやっても、そこはやはり女である。平気な顔をして続けられる筈がなかった。特に、当の御本人である弓枝夫人の場合は尚更である。彼女は、まだ羞かしそうに顔を伏せている……。

『おい、弓枝っ！何をモジモジしてるんだっ！そんな態では試合には勝てないぞ！』

好造は、弓枝夫人にハッパを掛けるつもりで大声で怒鳴りつけた。だが、これを聞いて毬子夫人は、好造が弓枝夫人にばかりヒイキしてると思い込んだ。

へそうだ！もしかしたら好造さんは、スラリと背の高い弓枝さんだけが好きで、私のことなんか、ちっとも愛してないんじゃないかしら。きつと、そうだわ。たまたま私が太っているだけで、ただ女斗美のお相手をさせられているだけなんだわ！

毬子夫人の胸の内に、弓枝夫人に対する激しい嫉妬の炎がムラムラッと燃え上った。

好造の合図も待たずに毬子夫人は、いきなり長身の弓枝夫人に組み付いた。そして、右手を彼女の首に、巻きつけるや、無茶苦茶に首投げを打った。不意を衝かれた弓枝夫人はこれを耐える暇もなく、ドッ！と畳の上に投げ倒された。毬子夫人も相手の上に折り重なって倒れ、そのまま組んずほぐれつの格闘になった。

呆っ気にと取られて見ていた好造は、ここで慌てて止めに入った。寝技に入るのは、まだチョット早過ぎる……。好造は、やっこのこ

とで二人を引き離して立ち上らせた。今度は弓枝夫人の方がカンカンだった。

『何よ、毬子さん！貴女ったら、私がまだ構えもしない内に組み付いてくるなんて、やり方がキタナイわよ！』

彼女は、憤然として毬子夫人に迫った。だが毬子夫人も負けてはいない。

『フン！弓枝さんたら、投げつけられたくせにナニ言ってるのよ！』

彼女も昂然として言い返し、二人は今にも掴み合はんばかりの様子だった。

『まあまあ、二人ともそう興奮するなよ。これはあくまでもレスリングなんだぜ。さあ、ちゃんと構えて構えて』

好造は、ニヤニヤ笑いながら夫人たちを宥めて、スタンディング・ポジションをとらせた。まったくフザけた男である。夫人たちはしぶしぶ向かい合って構えたが、二人共、すっかり興奮しきっている。

『始めっ！』好造が戦闘再開を宣した。

気負い込んだ毬子夫人は、またもや右手を伸ばして弓枝夫人の首を巻こうとした。が弓枝夫人は、その手は喰わぬとばかり、左にサッ！と体を躲して、これを避けるや、逆に毬子夫人の右手首を掴んでグイ！と振り

上げた。いわゆる逆手取りである。毬子夫人は、慌てて右腕を振り解こうとしたが遅かった。弓枝夫人は、素早く毬子夫人の背後に回るや、彼女が痛がって悲鳴を上げるのを構わず、その腕を、折れよ！とばかり、力まかせに振り上げたのである。

いくら気が立っていると言え、それは余りにも荒っぽい技だった。あまりの痛さに毬子夫人は、ヒイッ！と絹を引き裂くような悲鳴を上げてのけぞった。本来ならば、これは明らかに反則である。だが好造は、そんな事よりも、毬子夫人が本当に降参しはしないか、却ってそっちの方が心配だった。

もともと好造が夫人たちに決闘をさせようとしたのは、彼女たちに肉弾相搏つ凄まじい組み討ちを期待してのことだった。それがもし、こんな手で勝負がつきでもしたら、それこそ折角やらせた甲斐がないと言うものだ。ハラハラしながら見ていた好造は、もうこの辺りで止めに入ったが良かろうと思った。

と……その時だった。弓枝夫人は長い左足を、後ろから毬子夫人の太い右足に絡ませるや否や、彼女の右腕を引っ張って、自ら倒れ込むようにグイ！と切り返した。この手は弓枝夫人が背が高く足が長いだけに強烈で、

毬子夫人のように太って足のズングリした者が耐えられる筈がなかった。何条たまるべき毬子夫人は畳の上にドッ！と地響き立てて仰向けに倒されてしまったのである。

弓枝夫人も当然、相手と同体我倒れたが、彼女は素早く自分の長い両足で毬子夫人の太い腰を挟みつけた。弓枝夫人得意の胴締めである。毬子夫人は急いで逃れようとしたが、相手に右腕を取られているので、どうにもならなかった。弓枝夫人は、両手で毬子夫人の右手を掴んで引き寄せるや、自分の長い両足を交叉させて彼女の胴をグイ！とばかり締め上げる。もともと締める力は、腕よりも足の方が遥かに強いのである。

まして、弓枝夫人は足が長いだけに、その胴締めもまた強烈だった。普段はスラリとしたカモシカのような彼女の足も、こんな時には実に恐るべき威力を発揮するのだ。

胴を締められた毬子夫人は、苦しくて息が止まりそうだった。彼女は、左手で弓枝夫人の足を懸命に外そうとしたが、ガッチリ挟み付けられているので、どうしようもない。

なおも弓枝夫人は、嵩にかかって激しく攻めたてる。彼女が、その長い両足にモノ言わせて毬子夫人の太い胴をさらに強く締め上げ

ると、「ムウッ！」忽ち、毬子夫人の顔が苦痛に歪む。彼女は足をバタつかせて、相手の胴締めから逃れようと心死にモガいた。だが毬子夫人は、今や完全に弓枝夫人の薬籠中のものだった。勝ち誇った弓枝夫人は、上体を起こして後ろから毬子夫人の顔を覗き込みながら、笑って話し掛けた。

「フフフ……毬子さん、どお、苦しい？」

どうせ貴女は、私には勝てっこないわよ。いい加減に降参したらどうなの？、フフフ」

自信満々の弓枝夫人は、長い両足で毬子夫人の太い胴をジワジワ締め上げる！だが毬子夫人は、顔を真赤にして苦しそうに喘ぎながらも、顔を左右に打ち振って懸命にこれを拒むのであった。

「毬子さん！貴女、太ってるくせに案外シブといわね。これではどうなの！」

弓枝夫人は憎々しげに言い捨てると、さらに両足に力を入れて、毬子夫人の胴をグイ！と締め上げた。

「く、く、苦しいっ！」

毬子夫人は、悲痛な叫び声を上げ、大根足をバタつかせて死物狂いにモガいた。そんな彼女の姿を眺めながら弓枝夫人が嘲笑った。「フフフ……こうなったら、いくらジタバタ

したって駄目よ。どうせ逃げられっこないわよ！まるで罾に掛かった動物みたいだわ。そうねえ、貴女は太ってるから、さしずめ豚ってとこかしら？　ホホホ……」

それは、如何にも弓枝夫人らしい傲慢無礼な言い方だった。好造は、弓枝夫人に散々苦しめられている毬子夫人が次第に可哀想になってきた。彼女が丸々太っているだけに、なおさらイジらしくてならなかったのだ。

「毬子ガンバレ！負けるんじゃないぞ！」

好造は毬子夫人の顔を覗き込み、夢中になって声援を送る。だが、これを聞いた弓枝夫人は面白くなかった。人一倍、気位の高い彼女は、如何なる場合でも自己中心でなければ気が済まないのである。だのに好造が毬子夫人の方を応援したとあっては、どうしてもそのプライドが許さないのだ。

「カッ！　となった弓枝夫人は、『これでもか！』とばかりに力まかせに毬子夫人の胴を締め上げた。『ム、ムウッ！』毬子夫人は苦しまぎれに弓枝夫人の太腿に爪を立てて、必死にモガいた。痛さに、よけいに気負い立った弓枝夫人は、なおも激しく胴締めで攻め立てた。『ゲエーッ！』毬子夫人は凄まじい呻き声を立て、大根足をバタつかせて激しく

のた打ち廻った。

毬子夫人は、いまや失神寸前だった。しかし、それでもなお彼女は絶対に「参ッター！」とは言わない。気を失いかけながらもへけるもんか、負けるもんか！と、心の中で必死に叫び続けていた。

額に脂汗を流し、苦痛に顔を引きつらせながらも、なお齒を喰いしばって相手の胸締めを耐えている毬子夫人の姿に、好造は、斗う女の凄まじい執念を、まざまざと見せつけられた思いがした。

一方、弓枝夫人も必死だった。「何としても、ここで勝負をつけねば！」業をにやした弓枝夫人は、「くたばれ！」とばかり、長い両足に渾身の力をこめて強烈に締め上げ続けた。それこそ腸が破れて飛び出しはしないかと思われるほどの、凄まじい激痛が毬子夫人を襲った。「グエーッ！」凄まじい呻き声と共に、彼女の太った軀が畳の上で激しく痙攣を起こした。

「勝った！」弓枝夫人は、きっとそう思ったに違いない。少なくとも、好造の眼にも、そう映った。ところが、ここで全く予期せぬ事が起こった。今まで断然、優勢だった弓枝夫人が突然「ギャアッ！」と悲鳴を上げての

けぞり、毬子夫人の胸を締め上げていた長い両足を思わずダラリと外してしまったのだ。

これは、毬子夫人が苦しまぎれに、掴まっていた右手を夢中で振り解いたハズミに、その肘で弓枝夫人の乳房をイヤッと言うほど殴りつけたからである。これこそ怪我の功名と言うよりほかなかったが……。

兎に角、すでに気絶一步前というところまで追い込まれていた毬子夫人も、この思わぬ「肘鉄砲の一撃によって、危うくそのピンチを脱する事が出来たのである。

(十九)

好造は、夫人たちに休む暇も与えず、引き続き戦斗再開を命じた。だが彼女たちも、さすがに直ぐには起き上れなかった。

「おい、何してるんだ！早く立てっ！」

好造は、割れ鐘のような大声で夫人たちを怒鳴りつけた。夫人たちは仕方なく立ち上ったものの、二人共、すっかり疲れ切っている様子だった。今まで散々胸締めで苦しめられてきた毬子夫人は言うに及ばず、相手の弓枝夫人もフラフラだった。もともと彼女は、あまり体力もないのに、今の胸締めにすっかり力を出し切ってしまったらしい。

「おい、君たち！まだ勝負はついてないんだぞ！本当に俺の妻になりたかったら、最後まで頑張れっ！」

好造が夫人たちを叱咤する。これを聞いた途端、彼女たちの心の中に凄まじい斗争本能が甦った。疲れた軀に鞭打って、夫人たちはムンズとばかり組み合ったのである。

太った毬子夫人が、例によって右手を長身の弓枝夫人の首に巻きつけければ、弓枝夫人もやむなく、両手で毬子夫人の太い腰を抱きかかえて双差しになる。それは、ちょうど相撲を取っているような恰好だった。だが疲れている故か、お互いに相手の肩に頸を埋め、ジツとして動かない。ジレツたくなった好造は「毬子！何をモタモタしてるんだっ！首、投げはどうした、首、投げは？」

と、大声で毬子夫人を盛んにケシかける。だがこれは別段、好造が毬子夫人の方を応援しているわけでもなかった。もともと好造は背の高い女性が太った女性に首、投げで倒されるのに異常なまでの興味を持っていた。

現に、長身の弓枝夫人が太った毬子夫人からただ首を巻かれたというだけで、早くも身震いしたくなるような異様な興奮を覚えるのだった。何のことはない、好造は、背の高い

弓枝夫人が首投げで倒されるのを見たいばかりに、太った毬子夫人をケシかけたのであって、つまり毬子夫人は、太っているために背の高い弓枝夫人の引き立て役として利用されているに過ぎなかったのである。

しかし、当の弓枝夫人にしてみれば、これは甚だ迷惑千万な話だった。いくら好造が首投げ、気狂いで、背の高い彼女がその手で投げつけられることによって悦んでくれるとは言え、投げられて痛い目に遭うのは彼女自身なのである。足の裏を嗅いだり舐めたりされるのとは、全くワケが違うのだ。

第一、首投げなどと言う手は、投げつける者からみれば痛快だろうが、投げられる者にとっては、これほど恥かしいことはまたとあるまい。彼女が毬子夫人より遥かに背が高いだけに尚更だ。しかもこの手は、直接、首を巻かれて投げられるのだから、ほかの投げ技に比べて肉体的な苦痛が遥かに大きい。その上、首投げで倒される際は必ず相手も一緒にのし掛かってくるので、へたするとそのまま首固めで抑え込まれてしまう恐れがある。こんな嫌な手で投げられるのを、人一倍自尊心の強い弓枝夫人が好むはずがなかった。余談はさておき、好造にハッパを掛けられ

て元気づいた毬子夫人は、早速、弓枝夫人を首投げで投げ倒そうとした。不意を衝かれた弓枝夫人は、思わずヨロヨロッとしかけたが懸命に腰を落としてこれを耐える。だが毬子夫人は相手に休む暇も与えず、引きずるようにして二度、三度と、立て続けに首投げで攻めたてる。長身の弓枝夫人も、相手の太い腰にむしゃぶりついて、倒されまいと必死である。こうして彼女たちは、激しく揉み合いながら狭い部屋の中をグルグル廻った。好造は「毬子、首投げ首投げ！ 弓枝、ノコッタノコッタ。あっ！ 毬子、また強引な首投げ、首投げ首投げ！ 弓枝、危い！ 危い危い。しかしよくノコッタ！ 残りました！」と、まるで実況放送のアナウンサーのように大声で喚きながら、自分も彼女たちの周りをグルグルついて廻る。

あられもなく相撲を取っている弓枝夫人と毬子夫人の周りを裸の好造が、および腰でウロウロしている姿は、まったく滑稽とも何とも言えないような図である。しかし、斗っている当人たちは必死なのだ。

と……毬子夫人が、また右から強引な首投げを打った。弓枝夫人の長身がグラッ！ と大きく傾いた。そこは生憎、ちょうど閉め切

った襖の直ぐ前だったが、二人とも無我夢中で気がつかない。「アッ、危い！」好造が止める間もあらばこそ、毬子夫人と弓枝夫人は激しく纏れ合ったまま、「バリバリッ！」と襖を押し倒し、勢い余って隣の部屋にドッ！ とばかり雪崩れ込んだ。エキサイトしている彼女たちは、そのまま畳の上で格闘しようとしたが、好造に止められ、元の部屋に引き戻された。

戦斗再開。今の首投げで勢いづいた毬子夫人は、またもや右手を伸ばして弓枝夫人の首を巻こうとする。だが弓枝夫人は、「そうはさせじ」と、逆にその手首を掴んで思いっきり振り廻した。毬子夫人はタタラを踏んで懸命に残そうとしたが、太っているだけに、却って勢いがついて踏み止まることが出来ず、忽ち二回、三回と部屋の中をグルグル廻される。逃げ遅れた好造が、これに真正面にブツかったからたまらない。小柄な好造は「アッ！」と言う間もなく部屋の隅に吹っ飛ばされてしまった。まったく良い気味である。

弓枝夫人は、何回か毬子夫人を引きずり廻した揚句、「エイッ！」と掛け声をかけて、彼女の手首を握って強引なハンマー投げを打った。女子プロレスでは、よく使う手だ。太

った毬子夫人は遂にたまらず、モンドリ打って畳の上にドッ！ とばかり仰向けに投げ出されてしまった。『してやったり』と弓枝夫人は、すかさず相手にのし掛かった。

長身の弓枝夫人は、長い両足で太った毬子夫人の腹の上にまたがり、彼女の両手を畳に抑えつけ馬乗りになって組み敷いた。

毬子夫人は、懸命にそれを跳ね返そうとするが、弓枝夫人はガッチリと抑え込んで離さない。勝ちに乗じた弓枝夫人は、次第に尻を上にもずらせて毬子夫人の咽喉首に跨り、遂に自分の太腿の間に彼女の顔を挟み込んでしまった。いくら相手が五二キロの軽量とは言えそんな事をされては全くだまったものでは無い。『ウウーッ！』毬子夫人は呻き声を上げ大根脚をバタつかせて必死にモガいた。しかし、相手を跳ね除けようにも、両手を畳に押し付けられているので、どうしようもない。いまや彼女は、完全に抑え込まれてしまったのだ。長身の弓枝夫人から馬乗りになって組み敷かれている毬子夫人こそ、まさに、サド女性から責められるマゾ女性そのものの姿にほかならなかった。

『フフフフ……毬子さん、どお？ 今度こそ貴女の負けらしいわね。良い加減に降参した

らどうなの。フフフフ……』

勝ち誇った弓枝夫人は、毬子夫人の顔を見下ろしながら嘲笑った。弓枝夫人のスラリとした真白い太腿に締めつけられて、毬子夫人の苦しそうな真赤な顔が覗いている。唇を噛みしめ、まさに無念の表情である。

『フフフフ……これ以上、痛い目に遭わない内に降参した方がよくってよ。参ッタ』って言ったら許して上げるわ。さあ、早くおっしゃいな。フフフフ……』

弓枝夫人が、さらに押揃った。そして、太腿に力を入れて相手の顔をギュウッ！ と締め上げる。『ムウーッ！』忽ち、毬子夫人の顔が苦痛に歪む。だが、それでもなお、決して『参ッタ！』とは言わない。

『ダ、ダ、ダレが、降参なんかするもんですか！ ぜ、ぜ、ゼッタイにしないわよ！』

苦しい息の下から、毬子夫人は懸命に言い返した。

『貴女って、ホントに強情ネ。じゃ、いいわよ。こうしてやるから！』

忌々しように言い捨てると、弓枝夫人は、お尻を上げて、事もあろうに毬子夫人の顔の上にデン！ とばかり馬乗りになった。

同性の尻の下に敷かれる。しかも、女性に

とって一番大切なその顔を……。これ以上の屈辱が、またとあるだろうか。あまりと言えばヒド過ぎる。だが、そんな事よりも、その苦しきたるや、到底、口では言い表すことは出来なかった。痩せているとは言え、弓枝夫人の体重は五二キロはある。それこそ、呼吸することも出来ず、たまったものではない。毬子夫人ならずとも、気を失いかけるのが当然だった。

『ウウッ！』長身の弓枝夫人の大きなお尻の下から、毬子夫人の凄まじい呻き声が聞こえ彼女の肥満体が激しくのた打った。その大根足が、バタバタと畳を蹴るのが空しかった。

十秒、二十秒……。

マゾの連中が見たら、それこそ随喜の涙を流しそうな光景である。だが当の毬子夫人は全くそれどころではなかった。彼女にとってこれは、さながら地獄の責め苦だった。氣息奄々として、まさに窒息寸前の状態に追い込まれていたのだ。

ここで弓枝夫人は、いよいよ相手に『最後の止め』を刺すべく、一旦、腰をちょっと浮かせてから、再びドスン！ とばかりに落下させた。

この痛烈な一撃に、毬子夫人は『キュウー

観劇記

「S・Mショー」二題

絵と文 柴 利 好

(その一)

二の酉の夜、立寄った新宿アングラ、モダンアートで、図らずも一つのサディズム・ショーを見た。演技者は痩せて青白い小柄の女性と、中背やや太り肉の男性との二人。テーマは南ベトナムで捕えられた女スパイが諜報の自白を強いられるが遂に白状せずに死んで行くというものであった。

初め、女は黒ブラウスに膝下までの黒ズボ

ッ!と、まるで蛙が押し潰されたような悲痛な呻き声を洩らして死物狂いにモガいた。彼女の苦しみに、さらに追討ちを掛けるように、弓枝夫人は「ブウッ」と一発、大きなのを、ぶっ放した。意識的にやったのか或いは、夢中で斗ってる内に力がいりすぎて思わず放屁したのか分からないが、兎に角、こ

の至近距離からぶっ放された強烈なヤツの臭いことと言ったら、まったくお話にならなかった。
「ウ、ウーッ!」
毬子夫人は、肥軀を激しくのた打たせて、断末魔の苦しみに喘いだ。遂に「勝負あった!」と思われた。

が、その時である。
突然「ギャアッ!」と悲鳴を上げて弓枝夫人が飛び上った。毬子夫人が苦しまぎれにガップリと噛みついたのだ。弓枝夫人としては、九仞の功を一簣に欠いてしまったわけである。

(つづく)

ンというベトナム風の服装で現われるが、やがて三メートル余りの二筋のロープで男のために首縄を打たれ、ひとしきり責められる。その揚句、上下の着衣をむしり取られ白いブラジャーとズロース(パンティーではない)だけに剥がされる。

続いて首縄を一旦解かれるや否や、両手首を前手に縛られ、縄尻を股間に潜らせて背面に回わし、さらに右肩から胸に掛け渡した上で上体を両腕もろとも三巻して背中中縄止め

されてしまう。縦縄で両手を下腹部に引かれているので、女の身体は否応なく前屈みになって直立することができない。後ろ手にこそされてはいないが、高手小手縛りに股間縛りを併用した一風変わった縛り方である。その上ササラの竹鞭でたたかれたり、肩まで垂れた長髪をむしられたり、棍棒を縄目の間に差入れて絞り上げられる。果ては胴体の下に責め棒を押し込まれる仕草などがあって、女は狭い舞台上を苦しみ悶え乍らのた打ち廻るがいつかな白状しない。その内に落ちたナイフで男が傷つき、折しも外部から飛来した数発の銃弾がこの男女に命中して両名とも倒れて終幕となるというあら筋であった。

演技時間約二十分をウツカリ見過ごしてしまったので演技の詳細は覚えていない。スト



青木順子

リップと奇術とこのショーの抱合わせで、全舞台一通り、二時間余りを見終って表に出て改めて看板を見た時、このショーが青木順子ショーであったことを初めて知った。青木順子といえばこの種のショーの草分けだが、東京には馴染は少ない方だし、その上、この所休演中であつたように承知していたので、この舞台は思い掛けない嬉しい収穫であつた。

誌上の写真で見る彼女は痩身とはいえ脚線美の故か割合背の高い人と想像していたが、意外と小柄であつた。髪をざんばら髪に乱して、捕われた女スパイらしく青白く化粧していたからでもあろうか、如何にも貧弱な印象さえ受けた。が、こうしたタイプの女性こそ真性マゾヒスティンの典型であらうと思う。

扱て彼女の演技そのものは大変氣の入った

真剣さに溢れてはいたけれども、縄の緊縛度は弱く、折檻そのものについていえば、他の類似のショーに較べて格別の印象を受けられなかつたのは残念であつた。しかし連日の舞台で毎回本式に責め折檻されたのでは、如何に真性マゾ女性であつたとしてもたまつたものではない。殊に病後の身体を勞わつての手加減もあつたのかも知れないと諒承される。

演出も演技も当然観客を対象として成り立ってはいながらも、彼女の精一ぱいの熱演にも拘らず、観客に与えた反響は、何故か盛り上がりにおいて欠ける処があつたように受取られた。それは彼女の演技が演技そのものとして終始することなく、彼女自身のマゾという受け身一方の自己陶醉に転化し、他のサドショーが陽性であるのに反して深く内攻的に沈潜しているためではないかとも思われる。それとも、彼女のマゾ的陶醉が本物であればあるだけに、彼女自身の肉体的、精神的消耗が甚だしく、ステージ上に発散する筈の活力を減じさせる結果が、観客へアップルする反応力を阻害させることになっているのかもわからない。

かつて辻村氏は、向井氏とともに彼の私宅で、二夜に亘って緊縛パーティーを実行され

たというが揚句の果、全裸の彼女を太い青竹に猪吊りにして深夜の庭をかついで逍遙し、遂にはブロック垣の飾り穴と脚立の間に宙吊りに掛け渡して、二人のハルンを彼女の全身に浴びせるなど悦虐の限りを尽されたのだそう。こういう逸話を単なる過去の伝説として止めて欲しくはない。

得難い本性マゾ女優青木順子氏よ！ 今後とも一層のご自愛専一によって、一日も早く嗜虐の官能に満ち溢れた体力を恢復せられんことを。

そしてたゆまぬ一途の精進で、往年にも勝るとも劣らぬ強烈極まりないリアルな演技を舞台一ぱいにたたきつけることによって、ファンの虐性を陶醉させて戴きたいと心から願うものである。

何は兎にあれ、彼女の不死鳥のような復活をこの誌上に報道し、同好諸賢と相共にその前途を祝福しよう。

(その二)

暮れも押し迫った二十七日の午後、「残酷ショー」という新聞広告に索かれて又してもモダンアートを訪れた。ショーの演技者はお目当ての青木順子ではなかつたが彼女の所属

する「おりじなるの会」の一員、高森由記という新人が被虐役を演じていた。テーマは先達と同様ベトナム戦に材を取り、捕われた女を高木伸扮する一人の男が、責め折檻して慰さむサディズム劇である。

舞台は開幕と同時に女の緊縛から始められる。両肩に届く長髪で、膝までもない薄汚れたワンピースの女は、舞台中央のベッド状の台の上に正面を向いて正坐する。次いで両手を背後に回わされ、三米余りの二筋縄で両手首を縛られる。(このロープは前に青木順子が縛られたものと同じものようであった) 縄は首筋から二つに分けて胸に回され、さらに一つにまとめて下腹部を経て股間をくぐらせ、背面に戻す。その上で上体を両腕もろとも二巻きして背部で縄止めされ、この緊縛は終る。二筋縄で巻かれたから、上体は四本の縄で縛られたことになる。股間縛りは縦縄のために、短いスカートが高くたくし上げられ丸見えの白いパンティーに喰い込んでいる美事さであった。

髪を筆っての折檻や、鞭打、下腹部に対する棍棒の攻撃などは以前のショーと大同小異である。変わっている点は二本に分かれた電線を両肘に繋いで電流責めをする事である。

勿論本当に電気を流す筈はないので、青色のライトの点滅と、身体中を激しく疼れんさせる演技で如何にもそれらしく見せる訳だ。この電気責めに加えて行なわれたのが、革靴を口に銜えさせる屈辱責めであった。

中央の台にドッカと腰を降ろした男の前に女が縛られた儘で正座すると、男は自分の右足に履いた短靴を、女に命じて口で脱がせるのである。女はこの痛ましい行為を拒否したのである。女は、そうすることで受けるであろう鞭と電気との折檻の恐ろしさ、苦しさを免れるために、厭々ながらこの屈辱的強制に従わなければならぬ。彼女は正真正銘その口に、唇と歯を使って靴のつま先を銜えて脱がせ、男ににじり寄ってこれを捧げる。



男はこれだけでは満足しない。女の口から靴をモグ取るように受取るや否や、舞台下手に投げやる。狭い舞台だから、靴は壁下まで飛ばされて転がる。男の無慈悲な命令が下され、女はこの靴をもう一度、口に銜えて男に捧げなければならない。

縛られた不自由な身体でよろめき乍ら壁際まで行った女は腰を低く屈めて靴に口を近付けようとするのだが、何分、後ろ手に縛られている悲しさ、思うように振舞えない。両膝を床につき、臀部を高く上げ、顔を床と壁際に密着するまでにして靴を銜えようと努めるのだが、靴の落ちている場所と形が悪くて仲々銜えられない。それを顔を使って銜え易いように整えようとする哀れな努力の末、漸く銜え終って男の足元まで戻って捧げる。男は靴を取ると、なおも舞台上手隅に投げつけてしまう。又しても女は犬のように床面に這いつくばって、苦勞の末、靴を銜えて戻る。

三度目に靴を投げられた時、彼女は流石に疲れたのか、余りの屈辱に耐え兼ねてか、男の絶対的命令に反抗してしまった。

当然の報いとして、靴と電気による激しい仕置が苛責なく行なわれた揚句、後ろ手高手小手股間縛りに加えて、コードで両足首を縛

られコードを手首の縄につないで逆エビに引き絞られる。この時、細いコードが足首の皮肉に深々と喰い込んだ有様は全く無惨であった。その上、手拭で猿グツワをかませられ逆エビ縛りの俤一しきり責め苛まれた後、最後に胸を数発ピストルで撃たれて女は死ぬ。女の縛しめが全て解かれ、男は女を抱え上げて上手に消え、このショーは終るのである。

要するにこのショーの見せ場は、女に対する緊縛、鞭打、或は電気責めもさることながら、犬畜生同然の姿で靴を口に銜えさせられるという屈辱的所作を強制されるというM・S行為が眼目であったように思う。即ち一般のこの種のショーが単に肉体的苦痛をその対象としているのに対して、ここではそれに加えて精神的苦痛を充分取り入れている点で、一層ショーとしての面白さを高めているものと解される。

捕われの女を演じた高森という女優は中肉中背で、身体つきは先輩青木順子ほどの引き締った脚線美人ではなく、別段特徴のない普通の身体つきをしていた。筋骨もまだまだ未熟で、鍛練不足のように見えた。しかし容貌の点では、大変近代的で理智的な人だった。しかも殆ど化粧をしないでいても眼鼻立ちが

彫り深く、眼元、口元に云いようなない憂いを含んで、陰影のある面ざしの女性であることが、長く垂れた髪の間を通してはつきりと覗うことができた。いって見れば思わず力一杯抱き締めてやり度いようなマゾヒスティックな虐められタイプの顔立ちの娘であった。

そのいじらしい顔だちの女が如何に職業柄とはいえ、裸体に近い姿の俤二〇分間縛られ通しに縛られて、責め折檻の演技を続ける。

それは兎に角として、より惨めなことは、男の履き古した靴を、犬畜生のように床に這いつくばって口で銜える所作を幾回も演じなければならぬのだから気の毒というもおろかであった。「おりじなるの会」についても、又彼女の素性についても知らない。彼女はあの時限りの、青木順子の代役で出演していたものか、或はこの舞台が彼女の本番であったのかも分からないが、これが彼女にとってS・Mショーの初舞台であると聞くにつけてもこの厭わしい役柄を懸命に演じている彼女の努力に、惜しみなない喝采を送り度い。

彼女は果して本当のマゾなのだろうか。それだからこそその舞台ではなからうか。否、実際はそうでないのかも知れない。毎日、毎夜繰返される緊縛や、折檻の演技は彼女にとっ

て楽しいことであるよりも、苦しい厭わしいものであるかも知れない。がそれを現代っ子らしく職業として割切って、率直に受け入れ日夜精励しているのだとしたら見上げた根性だと思う。

しかし、彼女がM性に関係あると無かるうと、所詮はこうした苦勞は、このサークルに所属する限り不可避であり、それを承知してこそ、このサークル入りに相違ない。

本来彼女がM性に無関係の女であったとしても、今後なお引続いて舞台上で演じられるであろう行為によって、自然とS・M的感覚が次第次第に彼女の身内に染み付いて遂には真性のものとして開華しないとは誰が断定し得よう。

彼女が、青木順子に次いで『S・Mショー』の女王にまで果して成長するか何うか、その前途を刮目して見守ろう。

附記 本項に挙げた男、女優の氏名及び女優の履歴は電話照会に基づくものである。従って聞き違いによる事実誤認があればそれは筆者の負うべき責任として深く陳謝する。

(完)



第十九回

O^オホテル

「オット、失礼」

有明は慌てて相手を助け起こそうとした。

Oホテル十二階の三角形をしたエレベーターロビーである。そこから廊下が三方に延びている。六十度になった曲り角で、丁度そこへ差しかかった彼は、廊下の向こうから足早にやって来た女と正面からぶつかってしまった。体重の相異か、女はもんどりうって床に倒れた。ハンドバッグがとんで口金を外れたため、中味が絨氈の上に散乱する。

余程びっくりしたのか、女は歯をガチガチいわせて立上ろうとするが、もがくばかりで手足がいうことを聞かないらしい。

「大丈夫ですか」

と重ねてたずねるのに、

「ええ」

と小さな声で頷くだけである。それでも、やっとのことで抱き起こしてやると、今度は貧血にでもなったらしい、壁に撞きまわるとするかのよう、フラフラと泳ぐ。

「どうですか、私の部屋は、すぐ近くだ。ちよっと休まれては……」

宿泊階層には、ただでさえ人影がまばらな

前号まで「誰も知らない裏側の世界で二つの巨大なシンジケートが血みどろの闘いを繰返していた。一つは国際的麻薬組織であり、一つは有明を謀主とする反麻薬組織である。有明は世界各地から巧みな手段で数多の美女を誘拐している。しかも彼の部下は星エミー司令をはじめとする美しいアマゾン女兵の面々である。今や舞台は香港から東京へ移った。麻薬事件に巻き込まれた混血の美女イーラは有明の手に救出された。謎の十五号は麻薬組織のかくれたヒロインであるらしい事態は渦を巻いている。その中へ有明も友人の青帮首領蔡樹理も時を同じくして東京へ向かうとしていく。

のに、幸か不幸かシーンと静まりかえって、人の気配さえない。エレベーターのランプが点滅して素通りして行くだけである。高級な部屋が多いからかも知れない。

散らばったコンパクトや口紅やらを拾い集めてハンドバッグに戻すと、やさしく肩を抱いて部屋へ導いていった。

若くて美しい女には特別に関心のある有明である。その観賞眼に十分、耐えるだけの素質を女は備えていた。それと、もう一つ。確かにどこかで見たことのあるような気がして思い出せないのである。何千という女を知っている有明だが、一度、会った顔を二度と忘れないのが自慢だった。乳房の格好、臍の形からさえ見分けることの出来る女が、何百といるのだ。それなのに、この娘はどうして思い出せないのだろうか。彼は謎を解くときのようなジレッタさを覚えていた。

豪華な彼のスイテ、フカフカしたソファにグッタリと横たわりながらジャンヌは、巧くいったと内心、ホクソ笑んでいた。Oホテルに泊りはじめてから三日目のことである。

心配そうに有明の顔が覗いているのを、まっつげの間にしながら、さも苦しうに顔をし

かめて見せる。

「ドクターを呼びましょうか」

有明の声がした。

「いいえ、もう大丈夫です」

弱々しく答える。医者と呼ばれては、厄介なことになるからである。

「あたしが、あたしが悪いんですわ。向こう見ずに走ったりして。すみません、急いでおりましたものですから、つい」

細々とした声でそこまでいうと、やっと目を開いた。

有明の顔がスグ近くにあった。自然に手がその首を抱いた。ウットリするような香水の匂いが襟元に、しみ込んでいた。

その晩、ジャンヌは自室に戻らなかった。深夜に電話をかけても出なかったのだ、十五号は、ジャンヌがアプローチに成功したことを知った。

野沢洋子が扮した小林敦子は、有明の命令で自室から出ることを許されなかったのだ、ジャンヌにとって邪魔は何一つなかったのだ。有明は有明で、ぶつかったこと自体、多少の作意は察していたが、いわゆる高級娼婦の類いではないかというカンを働かせていたのだ。この理解が、ジャンヌをして、いと

も簡単に一晚を有明と寝ることを可能にしたのである。

翌朝、出て行くとするジャンヌに、有明は渺なからぬ現金を握らせようとした。ところが彼女は目に涙をうかべて、自分はそんな積りで、あなたに抱かれたのではないと、うったえたではないか。

有明たるもの、認識を改めざるを得ない。ここでさしも慎重な彼が一つの間違いを犯すことになる。多くの女に、かしづかれる有明にしてみれば無理からぬことかも知れないが彼を見た女が、誰でも彼に一目惚れしてしまうかのような錯覚に陥ってしまったからである。つまり、ジャンヌが有明を憎からず想ったために身を許したのだと自惚れたわけである。そこにジャンヌの喰い込む隙が出来た。

呼び出された野沢洋子は、有明から、ジャンヌを自由に出入りさせてよいといわれたとき、女の直感から、ジャンヌの目的を、莫然とながら見破っていた。それで、ジャンヌが出て行ってしまってから、自分の考えを率直に申し述べた。ところが、有明ほどの男が、それは野沢洋子の嫉妬心がそうさせたのだと嗤ったものである。自尊心を傷つけられた洋子は、それきり黙ってしまった。

実際、有明は忙しそうに飛び廻っていた。留守は、いつも野沢洋子が守っている。ジャンヌが受けた第一回の指令は、この邪魔な女を誘拐することであった。

有明の秘密をあばくことが組織の目的である。その意味で、洋子を捕えておけば、何か有明を脅迫する材料になるかも知れない。いずれは殺すか売りとばすかするにしても、今のところは監禁しておくだけにしようというわけだった。

数日して有明の不在を確かめたジャンヌは野沢洋子を、地下三階のガレージに呼び出した。有明に頼まれた荷物が大きくて一人で持てないから手伝ってくれといったのである。外へ誘ったなら、留守番の責任を果たせないといって断ることも出来た。しかし、ホテルの中では口実がない。不承不承だが、仕方ない。部屋に鍵をかけ、エレベーターで一気に入り地下三階に降りる。そこには、もうジャンヌが待っていて、うす暗いガレージの隅へ彼女を導いて行った。

○ホテルはパーキング・スペースの広いことで有名である。面倒なチェックもないから一応、出入自由である。余程のことのない限

り地下二階迄のガレージで十分だから、地下三階のそれは殆ど利用されていない。それだけ目につく心配がないわけである。

その日も人影のないガレージはガラんとし、薄気味が悪いくらいだった。クラウンのトランクをジャンヌが開けたので、のぞき込もうとした瞬間、太い柱のかげから飛び出した運転手風の男が、いきなり洋子を羽交締めにして、持っていたガレージを顔に当てた。ムロン、無茶苦茶にあばれはしたが、

ガッシリした男の力には敵いそうもない。遂に麻酔剤を一ぱいに吸い込んでしまった。もうろうとして行く意識の中で、やっとの思いで洋子がしたことは、彼女の失踪を有明に知らせる手段についてのことだった。彼女は袖のカフスボタンをもぎとっ



て、敵に知られないように、コッソリと柱の蔭へ投げ棄てた。

グッタリ力を抜いた洋子の身体はトランクの中に乱暴に投げ込まれた。

「オーケー。いつものところへ監禁しといてちょうだい」

いつの間にかきたのか、ジャンヌのわきに十五号が立っていて、運転手姿の部下に命令を与えた。

クラウンはそのまま、ガレージを出て行ってしまふ。

「さてと、有明の部屋を拝見しようか」

十五号の手には、さっき野沢洋子の落としたルーム・キーが握られていた。ジャンヌは証拠になりそうな落し物はなにかと、タンネンに見廻したが、洋子の落としたカフス・ボタンを発見することはできなかった。

「だけど、いつ帰ってくるかわからないよ」

ジャンヌがいった。「かまわないさ。みつかった

ときのこと、そのときのこと。友達を連れてきたとか何とか、いいくるめればいい」そんなことを話し合いながら二人は、さも睡まじそうにエレベーターを上って行った。

夕方になって有明が帰ってきたとき、十五号の姿はすでになく、ジャンヌだけが帰り仕度をしている様子だった。

有明の姿を見ると、彼女は持っていたハンドバッグを投げ棄てて、コートを着たまま有明の腕の中に、とび込んできた。

「待っていたわ。ひどいわ、ずい分待って、あきらめて帰ろうと思っていたの」

と鼻声になった。

「野沢は、どうしましたか」

有明は部屋の中に、鋭い視線を走らせながらさりげない調子で、たずねた。野沢洋子が出迎えない筈はないからである。

「アノ、つい今しがた、何か買物があるからといってアーケードへ行きましたわ。それであたしがお留守番をしていたんです」

「それはどうも、ご苦労さま」

有明が快話にいった。

「どうです。一寸、一ぱいやっていらっしやいませんか」

返事も待たずに彼は部屋の一隅にあるホームバーに行くと、器用な手つきでジンをソーダーで割った。

一時は、そのまま帰りかけようとしたジャンヌも、相手があまりにも自分を疑っている様子なので、もう一度、腰を落ちつけることにした。

有明はジャンヌの目の前でレモンを二つに切りわけ、一方のグラスにタップリとしぼり込んだ。一見あたりまえの指だが、彼のそれは万力のようにレモンをつぶしてしまった。

「どうも私はレモンが苦手で、ハハハハ。あなたにだけ入れておきました。それじゃ、あなたのお留守番に敬意を表して……」

二人は睦みそうにカチンとグラスを合わせ、ジントニックを口に入れた。

有明の話術は素晴しかった。ガボンで彼が体験した様々の出来事は、それ自体が一つの物語だった。ジャンヌも警戒心を忘れて、その話に惹き込まれていた。

三十分もたたないうちに、ジャンヌに変化があらわれた。いつの間にか、彼女はソファに陥ち込むようにして意識を失っていたのである。

突然、有明が復話術を使いはじめた。ジャ

ンヌそっくりの女の声で、

「ほんとに、ごちそうさまでした。面白いお話を聞かせて下さって、時間のたつのを忘れてしまいましたわ。でも、約束がありますので、これで失礼申し上げます」

有明の声に戻って、

「そうですか、それは残念。今夜はお食事でもご一緒にして、ゆっくりお話を続けたいと思っておりますのに」

「ありがとうございます。それでは又、次の機会を楽しみに出来ますわね」

「いいですとも。今夜のところはそれじゃ、サヨナラ、おやすみなさい」

わざわざドアのところへ行くと、それを開いて直ぐボタンと、しめた。

それから別人のように厳しい表情に戻ると素早く部屋の中を探しはじめた。盗聴用のマイクがかくされていないかというおそれがあった。どんなに小さなものでも、又どんなに巧妙にかくされていても、所詮は人間のすることである。どこかに共通の心理があるのをさけることはできない。結局、寝室のベッド下に一口居間の花瓶下に一口が発見された。共に十五号が装置をしておいたものである。電波を発振するから、一寸した検波器があれば

ば容易に存在がわかる。有明は敵を油断させるために探し出したマイクを、わざとそのまゝにしておいた。そして、野沢洋子の部屋には何も怪しいものがないことを確かめたので眠りコケているジャンヌを、そこへ運んで行った。

手早く着物をハギとって洋子の寝台に抛り上げる。手首、足首を寝台の四ツ脚に縛りつけると、ぐったりとしたジャンヌの全裸は、大の字なりに固定されてしまう。

その上で、おもむろに気付け薬が注入された。身慄いしてジャンヌが息を吹きかえす。憤怒に燃えた有明の両眼が、すぐそばにあった。丁度、最初の出会ひのときのように。

網 吊 り

そこはかつて、混血の少女イーラが閉じこめられていた地下のガレージだった。日毎、夜毎に彼女が絶叫とともに滴り出した膏汗がそして、その美しい肉体とは凡そ正反対の不潔な垢や排泄物が流れ、しみこんだ場所であった。いや、イーラのものばかりとは限らない。あの不幸な女子山岳部員の五名が無念の屈辱にのたうち廻ったのも、このコンクリー

トの床の上だったし、実際、この部屋で拷問を受けた男女は、数知れない程だったのである。そうした積み重ねが陰鬱な部屋の隅々までよどんでいて、洗っても拭いても、もとへ戻らなかった。だから、たとえそれと知らないで這入った者でも何となく不気味に思えるのも当然であろう。

野沢洋子は手足をグルグル巻きにされ、すえたような匂いのする剥き出しのコンクリート床に転がされていた。意識は、もうとつくに回復していたけれど、固く目かくしをさせられ、又、猿轡まで噛まされていては、どうもこうもならない。こんなとき、無駄にあがいてみても、所詮、身体や精神をいたずらに疲れさせるだけに過ぎないことは、彼女の経験が教えていた。それで、彼女はジッと、死んだように横たわっていたのである。

数人の足音が近づいてきた。

女の声が、

「まだ正気にかえってないみたいね。丁度いい、裸にむしっておしまい」

手足の縄目が、ほどかれて行った。それでも洋子は、わざとグッタリとして、されるままになっている。痺れた四肢に血が蘇って、ピンピンと傷むのを、こらえる。

そして、口と眼を覆っていた布切れが解かれる瞬間、それこそ洋子がねらっていた隙であった。いきなり、ハネかえって跳躍し、サッと立上った。そのときには、もう一人の男が腹をおさえて苦しげに呻いていた。目にもとまらない早さで脾腹を蹴上げられたからである。

一瞬、周囲に目をくぼる。目かくしをしていた故か、まぶしいほどの明るさである。あつけにとられたように立ちすくんでいる男女が一人ずつ視野に入った。咄嗟に男の懐にとびこんで手練の片手突きが、これは見事に脇腹に一本。ウツとさけんで前のめりになる後頭部を、短刀のような空手が襲った。とても女とは思えない程の早業だった。デザイナーで、こんな芸当を身につけられる筈もない。有明の女兵士となつてから、その血のにじむような調教が今こそ役に立っている。

相手の女、それはいうまでもなく第十五号だったが、あきらかに狼狽していた。睡っていると思つた女が醒めていて、それがめっぽう強いのである。油断をしていて何一つ武器を持っていない。わずかにアクセサリーのようになっている細い乗馬鞭を目茶苦茶にふり廻して洋子の攻撃から逃れようとする。しかし



の四肢をまるめて行った。

「ヒッヒッヒッヒッヒ」

そんなことにひるむ洋子ではない。二、三度手刀でハネ返すと、鞭は折れとんでしまう。華者で小柄な十五号は到底、洋子の敵ではなかった。忽ち組み伏せられ、つい今しがたまで洋子を縛っていた縄目やギャグが逆にヒシヒシと十五号の身を締めつけて行った。氣息奄々としている二人の男も同様である。

部屋の隅に鉄の檻があった。裸のイーラが獣のような生活を強いられた檻である。格子扉が開いて、鍵がついたままになっている。野沢洋子は、一人ずつ引きずって三人とも押込んでパチンと錠をかけてしまう。

素早く戸口から室外へ、そこは階段の踊り場だった。地下から一階へ通じるであろうその階段を、一気に駆け上ろうとした途端、何やら黒いものがバサッと洋子を包み込んでド

ッと、ばかりに彼女をおどり場に叩きつけたのである。猛獣を囚えるときに使う重いトラップ網が、天井から落ちて来たのだ。もがけば、もがくほど網の目が入り組んできて、彼女

人を馬鹿にしたような甲高い哄笑が、ふってきたかと思うと、一人のせむし男がヨチヨチと階段を降りて来る。そのときにはもう、洋子は無駄なあがきをやめてしまっていた。「ヒッヒッヒ、簡単に逃げられては、このセムシめの顔が立たない。どうだい。見事に網にかかったもんだ」

セセラ嗤いながら、網に自由を奪われている洋子の周囲を躍り上るように廻る姿は、これこそ何か類人猿のように見えた。網の中には美しい洋子が身体をまるくしてうずくまっているのに、外には野獣めいた傀儡くぐつが自由にとびはねている。ノートルダムノートルダムのせむし男のような図柄だった。

しかし、当の野沢洋子にしてみれば、それどころの話ではない。折角、一難を逃れたと思ったのに、降って湧いた逆転は一層、絶望的であった。

ガレージの扉口から、セムシはガラガラと天井から下っているロープを外す。部屋の中のスイッチを操作すると、鎖は再びガラガラ部屋の中に戻って行く。それにつれて丸くなった洋子の身体は、アッチにぶつかり、コッチにぶつかりしながら、もとの部屋の中に引きずり込まれてしまう。それでも鎖は動きを止めない。やがて、彼女はガレージの真中に宙吊りにブラ下った。

檻の鍵は洋子がシツカリ握っていたのだけれど、網目の間から一本一本、指をひらかされては、どうにもならない。コトリと床に落ちる。それを拾ったセムシは、横つとびに檻にとりついて格子を開く。転り出した十五号のいましめをセムシが大いそぎで、ほどこにかかる。もどかしげに猿轡をひきちぎった十五号は、スックと洋子の前に立った。切れ長の眼だがやや陰をおびた瞳が一層大きくひらかれて、キラキラと妖光を放ったように見えた。事態は正に三転してしまった。十五号の前にブラさがっている洋子は、哀れにもクク

リ猿のように身をちぢめたまま、もはやなすすべでもなかったのである。

「シヤラクサイ真似をしておくれだね。いいさ、このカタキは必ず倍にして返してやるから」

ペツと吐いた唾液がモロに洋子の顔にひっかかった。

セムシにたすけられて、二人の男がヨロヨロと立上った。それをジロリとにらみつけて十五号がいった。

「おまえたち、それでもアタシの護衛かえ。恥かしいと思ひなよ。セムシの方が、よっぽど頼りになるじゃないか」

セムシが肩をゆすった。男たちはそれに反撥することも出来ない様子で、卑屈にペコペコあやまるだけである。ひとしきり罵声をとばしたので、いくらか気が済んだらしい十五号が、再び吊網の方に目を移した。

「アタシが時間がないんだ。おまえたちと言ひ合つてたつて一文にもなりやしない。今度ヘマをしたら、それきり、命がないと思つてもらおうか。さて……と」

片手で洋子の身体をチョイチョイと押すといとも簡単にグルグル廻りをはじめ。網を天井から吊っている鎖がギシギシと、よじれ

る。そのよじれの力で又、逆回転する。不快

なめまいと嘔吐感が洋子を襲った。しかし、彼女は先程から一言も叫んだり、わめいたりしないのである。そんなことをしても、どうもならないと覺っているからでもあるが、如何なる責め苦であっても彼女の経験しないものはないのだという自信、それ故にどんな目に遭つても立派に考え抜いて見せるという覚悟が、彼女をキ然とさせていたのであった。

それにしても、ブザマな恰好には、ちがいないのである。まくれ上ったミニスカートは張りのある洋子の臀部を丸出しにしていた。僅かにパンティの十センチばかりが、帯状にまといついているにすぎない。Oホテルの居室から、ちょっとガレージまで呼ばれて行つたのだから無論、外出着ではない。従つて靴下も穿いていなかった。その代り、なめらかな肌に網目のナイロンロープが喰ひ込んでゐる。メッシュ五センチの四角な網の目から、体重に押された腰の皮膚が、まるくとび出してゐた。

「そうだ、まず手はじめに、例のヤツを入れちまおう。それも上からでなく、下から吸収させるんだ」

いうより早くセムシが部屋をとび出して行

つた。

「ナイフをもつてるか」

男の一人が飛び出しナイフを差出した。ポタンを押すと、ピュッと刃が突き出てくる。それをかまえた十五号は、依然として回転を繰り返していた洋子の身を、男達に押えさせた。網の中に剥き出しの臀部がモゾモゾと動いてゐる。その中心部に向かつて、十五号はナイフを突きつけていた。十センチばかりのパンティの部分が、簡単に切りとられる。

「何だい、コレあ」

十五号が驚いたような声を出した。細い金鎖が柔肌をタテに割つて、それに押えつけられながら、それでも白い把手が一寸、顔を出してゐたからである。

「おまえも運び屋だったのか」

麻薬シンジゲートの連中が女のキンチャクを利用して密輸を行なう事例は非常に多い。あの女子山岳部員にしても、同じようなタマ運びをやらされたのである。十五号が、そう思ったのも無理はない。ところが、今まで沈黙していた洋子が落ちついた声でいった。

「さわらないで。ウツカリ動かすと爆発しますよ。私の身体にはプラスチック爆弾が仕込んでありますから」

アッと息をのんだ三人。思わずジリジリとあとへ退って行く。戻ってきたセムシも、顔色をかえて棒立ちになった。

これは嘘だ。彼女のそれは、バイオテレメーターを仕込んであるのに過ぎない。窮余の一策というか、テルアビブでエミール司令が斗った「戦訓」は、アマゾン女兵たちには、まだ耳あたらしいものだった。しらべない限りそうでないと言いきれるのではないし、しらべようとすれば大きな危険がある。さすがの十五号も困ったらしい。

「どう始末しようか」

彼女は男たちに話しかけた。

「殺し屋の鉄兄貴を呼んだら如何でしょう。」

兄貴はダイナマイト専門だから……」

セムシが口を出すのへ、

「バカ、あれは今、大阪へ行ってるじゃないか。間に合いやしないよ」

「ヘエ」

と頭をかくのに、

「そのサイズチ頭を使いなさいっていうんだよ」

十五号は邪慳に、セムシの頭を突きとばした。よろけながらセムシが言いはじめる。

「こうっと、十五号さま。こいつは爆弾を入

れてるっていいましたね」

「その通りよ。いまさら、何をつべこべいうの」

「するってえと、それだけを引き出そうとしないうちは安全なんで……、ヘエ」

「あたりまえさ」

「ですから」

舌なめずりをしながらセムシが言い出したのは、世にも怖ろしいアイデアだった。

「よく切れるナイフで、まわりの肉ごと抉りとっちまえば大丈夫でげしょう」

十五号は、乾いた声で笑った。悪魔のような声だった。さすがの野沢洋子も、ゾーッとになった。肌から血がひいて、鳥肌立つのが自分でも、わかる。

「そいつあ、いい考えだよ。だが、一思いに殺しちまったんじゃ、あたしの腹の虫が、おさまらないよ。さあ、誰か行ってドックを呼んどいで。もともと腕の立つ外科医だったんだ。ヤクさえ打ってやれあ、手ぎわよくやってくれるだろうよ」

「ハイッ」

運転手風の男が、とび出して行った。しばらくして、襟がみをブラさげるようにして連れてきたのは、もう七十を過ぎたかと思われる

るようなヨボヨボの老人だった。麻薬患者の例として、見かけより若いのかも知れぬ。

「ドック、ヤクを一ぱいやるから、こいつのぶっそうなものをえぐり出しておくれ。ただし、殺しちゃダメだよ」

「ク、クスリをくれ」

地の底から吹く風のような声で老人が哀願した。

手下の一人が入ってきて、十五号に耳うちした。

「蔡が帰ってきましたぜ」

「チェッ、仕置きは二、三時間延期だ。あたしの目の前で手術して貰いたいからね。ドックにヤクを打って、コンディションを充分にととのえさしておいとくれ」

セムシに向かって言いつけると、十五号は何故か大急ぎで出て行ってしまった。

ホッと一息ついた洋子だった。それでも依然として天井から牝ライオンのように吊下げられているのである。

(未完)

へお願いV ○切手代用にて御送金下さる場合は必ず一割増の計算にてお願いします。但し端数計算で百円以下の場合には構いません。尚、汚れたものや折り目のついた切手などは御勘弁願います。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



私はどうして、

こんな女に？

渡部好美

私はどうしてこんな女に？

私は、どうしてこんな女になってしまったのでしょうか。結婚して六年、主人によって飼育され、教えられて、変えられてしまったと言った方が正しいのかもしれませんが。一週間に二度か三度、主人の気持次第では三日も連続して行われる、しばりの責めに、何んとも云いようのない興奮をおぼえ、もう私からロープのない生活など考えられなくなってしまいました。でも私とて生れた時から、そんな女であったはずはないのです。どうして、そうなったのか、私は今まで文章らしいものなど書いたこともありませんが、思いつくをたどりながら一篇をつづりたいと思います。

今からもう八年も昔になります。それまで結婚の話も二、三あり、二度ばかりお見合もしましたが、何となくその気になれず、そうかと言って、恋人がいたわけでもなかったのですが、友達の多くは、結婚して行くなかで私一人、のんびりして居りました。そんなある日、さして観たいという目的があったのもなく、ぶらりと入った映画館のことでした。私が座席についてしばらくすると、「ここあいていますか」と一人の青年が横に坐りました。一本目の映画が終った時に青年の顔を見ましたが、とても真面目そうな青年でした。

二本目の上映ベルがなって館の中が暗くなった時、青年が私の手を握りに来たのです。あまり急だったので声も出ず、反射的に手を引こうとしましたが、あまりの力強さはどうすることも出来ませんでした。結局、そのまま手を許した形で映画を見なければならなりませんでした。

今から思えば、私の心のどこかに、それを求める何かが無意識のうちに存在していたのかもしれない。もしあの時、あの手をはらいのけていたら、私の運命はもっと別な方向に進んでいたであらうでしょう。

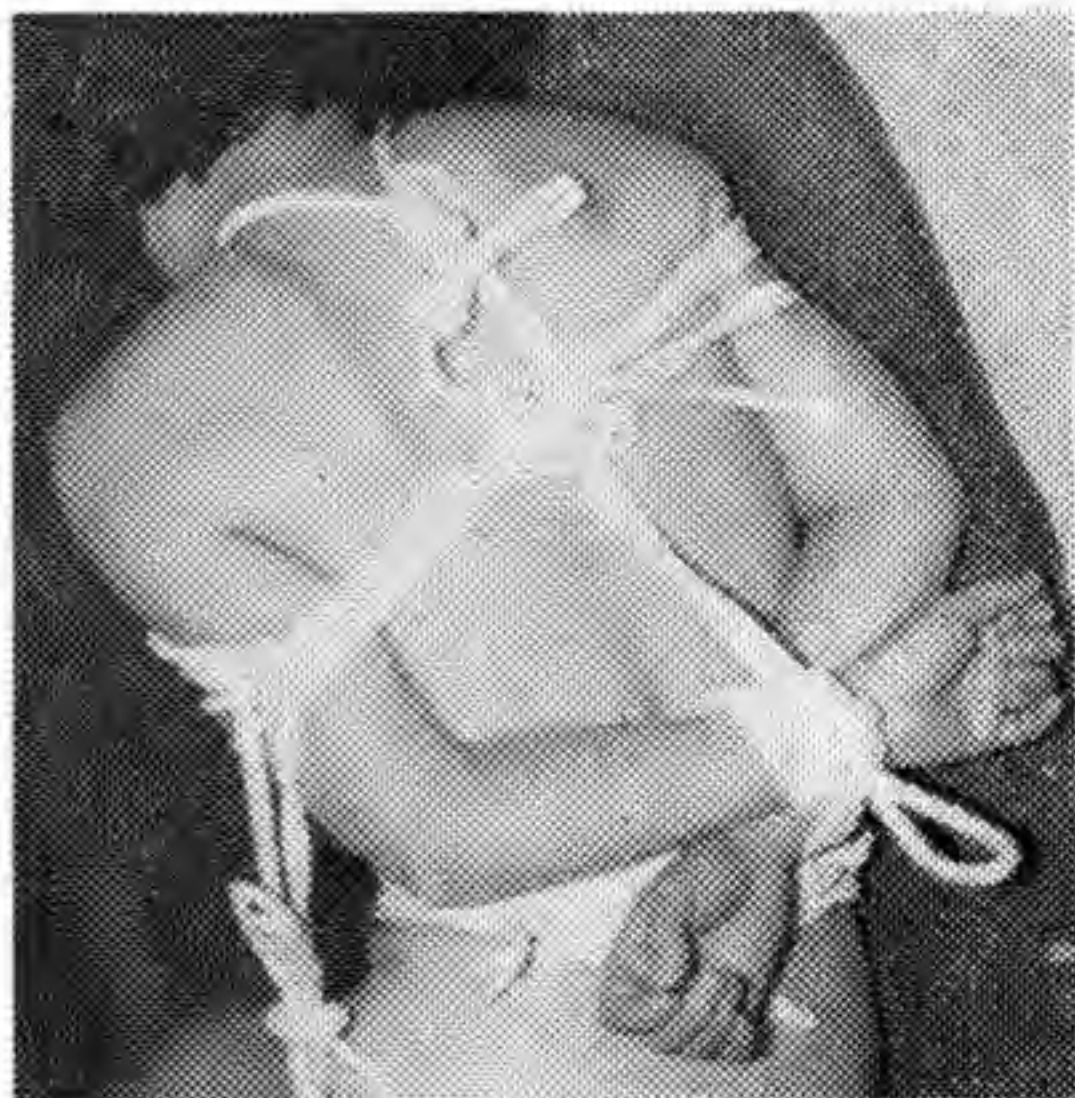
そこを出た私は、一緒に出てきて私の横に

立っている青年に対して、今しがた変な形で知り合った人だという不安感がなく、そのまま楽しく一日を過ごし再会を約束して別れたのでした。それ以来、二人の間は急激に深まり三カ月ほどで肉体も許し合う仲になりました。二十七才の女にとって、肉体の喜びを知るのにそんなに時間はかからなかったのは当然なのかもしれません。

そんなことがあって二年目、私達は周りの人々から祝福されながら、結婚へゴールイン出来たのです。

身も心も許し合い、知りつくして結ばれた私達の新婚生活は、普通の家庭のそれと何んの変わりもなく、ママゴト遊びのような生活ですが、とても楽しいものでした。でも一つだけ、何か、一抹の不安がありました。それはセックスの問題でした。満ちたりた中に、私達夫婦の間にはもう少し別な刺激を求めあっていたのです。色々考え、行動して見ましたが、そんなに新しいものがあるはずもなく、いらいらした日々のある日、私達にとってそのなやみを吹き飛ばすほど、共感を覚えるものが見つかりました。それが奇クの存在でした。

日曜日など、朝からアパートをしめきり、



読んだり写真を見ながら一枚一枚着ているものを脱がされ、ただそれだけで、あられもなく燃え上ったこともしばしばでした。やがて主人の手によってしばりつけられることを、無意識のうちに待ち望んでいた自分自身を知りました。

グラビヤ写真のモデル達のように、なかなか出来ませんでした。それでも当時の私にとって一本の腰ヒモ、一本の古ネクタイが不思議なほど気持ちにぴったりと合う新しい刺激となりました。そうして世の中に私達と同じ思いの方の多いのに勇気付けられました。

あの頃を思いかえして見ますと、まるで子供だましのような責め方でしたけれど、私は夢中でその中にとけこんで行きました。主人も私を責めることを「オシバリ」と名付けて、ずいぶん満足していました。

こんな形で、自分でも気付かなかったものを具体的に知り、しばりつけ責められる喜びを知った私は、ロープなしの人生など、とても考えられない女になってしまいました。また、主人から受ける責め方も、だんだんエスカレートして来ました。もう最近の私は、ロープで出来るだけ入念に、きつくぎりぎりとしめつけてほしくてなりません。

足の先から頭まで、あたりかまわずしめつけ、一時間ほどほり出される。それから、筆や鳥の羽根、ヒマラヤスギの小枝などで、足のウラ、おしり、腋の下、はなの中など、たんねんにくすぐられるのも、楽しい責めです。でも、私はくすぐられるとすぐ声を出してしまうのです。主人は、私の声をきらいいます。そこで、なんでも仕事に使用するとかのとてもいやな臭いのする強力な接着テープでサルぐつわを、されてしまいます。

身体を自由をうばわれ、口をふさがれ、あられもない姿を明るい光の下にさらけ出す。

主人の目が、くまなく私のそんな体を見つめている……なんと幸せなことでしょう。

こんな私ですが、どうしても、受け入れることの出来ない責めがあります。それはムチ責めです。ロープやバンドで何度か打たれましたが、痛みが先に走ってしまい、せっかく燃えていたものが一度に吹きとんでしまします。奇クのファンの中には、ムチ打ちのプレーを楽しんで居られる方もたくさん居られるらしいのに、私はどうしても、とけこめません。私はまだまだ責められることの楽しさを理解出来ないのでしょうか。まだまだ奇クファンの仲間に入れて戴く資格がないのでしょうか。

私がしばられて受ける責め中で、こんなのがあります。ウスイビニールを全身にかけ、



その上からローソクの雨を受けることです。直接身体に受けられるのは、おしりだけで、それも二十滴も、たらされると、ネを挙げてしまいます。でもビニールの上からだ、熱さがセーブされて、乳首やおしり、それに腋の下など、とてもよい気分になれるのです。それから、こんな責め方もあります。おしりを高々と持ち上げられ、注射針を三本ばかり束ねたもので、全体をくまなくチクリチクリと速く、あるときは遅く、あるときは強く、かく、休む間なく、つつかれるのです。これも私の大きな責めの一つです。

何といっても、責めの最後に来るもの、それは、イチジク浣腸。つき上げる苦しみの中で受ける主人の愛。私は、もだえ、苦しみ、主人にしがみつき、泣きます。これぞこの世の中の最高の喜びだと思っています。

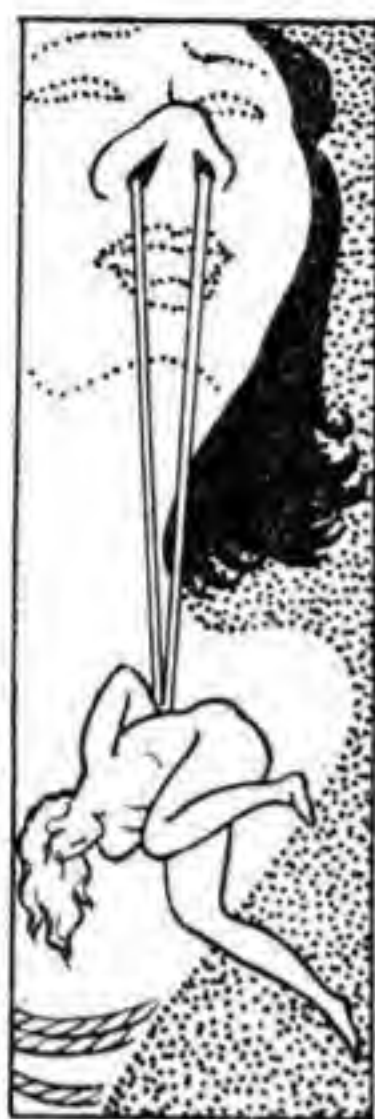
近ごろ主人は時々、「お前のこんな姿を、ぼく以外の人の手によって、ぼくの知っている前でされてはどうか」と云います。私も、いやではないのですが、私はもう三十四才のオバーチャンです。肉体的魅力ありません。まだ子供が小さいので主人と二人きりで出て行くことも出来ません。もし、そんなプレイが出来るとしても、主人の目前で、しばられ

責められ、だかれなくては、その意味がありません。

ですから、理解ある方が居られましたら、親しくお付合し、理解し合いたいとは思いますが、現在、そんな方が居られないからこそ思うことかも知れません。でも、やはり魅力のある「夢」として、捨てきれない気持になることがあるのです。

同封の写真は最近、主人が私を撮影したものです。





体 験 告 白

被 虐 鼻 (後)

鼻 責 め に 悶 え 抜 く の 章

大 橋 美 代 子

私の鼻を完全に征服した夫は、今度は医療器具店から、鼻鏡や綿棒、ピンセット等を次々と買い入れ、まるで耳鼻咽喉科のお医者さんのように道具を揃えると、本格的に私の鼻を責め出し始めたのです。

イルリガートル、エネマシリンジ等、いろいろな種類の浣腸用器具も購入されました。この浣腸器は、時には本来の使用目的に使われる事もありましたけれど、その嘴管は主に私の鼻を対象にされて、牛乳等を注入される鼻責めに、又食塩水を用いての鼻洗滌用として使われました。鼻洗滌は、チューブ入りの糊や練歯磨を鼻腔内一杯に絞り込まれた後の清掃のためにも必要で、この洗滌を充分に行なうて貰いませんと頭痛が残ったり致します。

この頃から鼻責めに平行して、他のいろいろな責めが加えられるようになりました。

私が今迄に夫からうけた責めは、責めに付随する緊縛や猿ぐつわの他浣腸責め、擦り責め、アヌス責め等

ありましたけれど、一番多く行なわれたのはやはり鼻責めでした。他の責めについては、沢山の方々が発表なさっていらっしゃいますので、次に私が今迄にうけた鼻責めについて二、三、述べさせて戴きたいと思います。

姿 勢 に つ い て

私は先ず両手を後手に、足首も揃えて縛られると、布団の上に仰向けに寝かされます。背中の肩胛骨の下に枕を挿し込まれますと、いやでも胸を突き出し、咽喉をのけ反らせて頭部はガククリと後に落ちます。

こうなると、私は当然、鼻を余す所なくさらけ出し、完全に自由を奪われて、意のままに鼻を弄ばれる以外、どうにもなりません。夫は私の頭の方に腹這いになって、天井を向いた私の鼻を、ゆっくりと責めにかかるのです。これは最も簡単ですし、また双方、楽な姿勢ですので一番多く使われます。

次に椅子に腰掛け、両腕を椅子の背後へ回して手首を縛られ、足首を椅子の脚に縛り付けられます。髪の毛を一まとめにして細紐に結び付けられ、後にグイと引かれて後手の手首に連結されますと、私の顔は水平に天井を向いたまま動けなくなってしまいます。この

姿勢の時にはむしタオルで、丁度床屋さんのように鼻だけを出して顔全体を覆われ、露出した鼻を責められるのです。

又、美容体操で、両膝を床について上半身を後に反らせ、後頭部を床に着ける運動がありますが、ちょうどそんな姿勢のまま責められたこともあります。でもこれは苦しくて長くは続けられません。

長時間に亘って本格的に責められる時は、木製の長椅子が用いられます。

長さ一・五米、幅二十糎、高さ四十五糎の細長い木製の椅子の上に、私が仰向けに寝かされ、足首から胸迄ぐるぐる巻きに、椅子に縛り付けられてしまいます。椅子の端は私の肩迄しかありませんので、椅子からはみ出した首は、咽喉をのけ反らせて下に落ちます。手拭で眼かくしをされ、後頭部の結び目に紐が通されて椅子の脚に結び付けられますと、私の顔は逆さに固定されたまま微動も出来ず天井を向いた鼻を思うままになぶられるしかないのです。

夫は上から、全く無抵抗の私の鼻を覗き込み、こよりや綿棒を使っていじめたり、パチンコ玉を詰め込んだりして責めるのです。

この姿勢のまま、口の中一杯にタオルがギ

ュウギュウ詰め込まれて完全な猿ぐつわがはめられ、耳にも脱脂綿を詰められて、両鼻孔に火のついた煙草を挿入される責めは、最大の苦痛を伴います。

煙草は最近、売り出された、味が一番軽いと言われる「セブンスター」が用いられますけれど、煙草をすわない私が、無理じいに鼻からのませられる、その時の苦しさ！呼吸とともに鼻の奥から胸にしみ込む煙は、鼻の粘膜や咽喉を刺し、その一息ごとに深まり高まる苦しみは、正に言語に絶する残酷な地獄の責め苦です。

私はどんなに苦しくても、どんなに辛くても、全身をグルグル巻きに椅子に縛り付けられた上、眼も口も耳も全部封じられていては抵抗どころか身じろぎ一つ出来ません。苦しみを訴えたり許しを乞う手段は全くなく、ただ全身から脂汗を噴き出して責め苦が終るのを待つだけなのです。

ローソク責め

顔を逆さに固定され、天井を向いた鼻にローソクを滴らして、両鼻孔を蠟で塞がれることがあります。

ローソクは鼻から約三十糎位離れています

ので、温度は幾分か低くなっているようですが、それでも鼻に当たると思わず呻く程熱いのです。左右の鼻の孔に交互に滴る蠟涙は、鼻孔の周囲から冷えて固まり、次第に鼻の孔が狭められていって、やがて蠟涙で完全に塞がれてしまいます。

これは一滴ずつ時間を掛けて行ってくれますので、鼻の孔の周囲から固まってゆき、あまり鼻腔内、深く流れ込むことはなく、たいていは簡単に取れたのですけれど、ある時、大変な事になりました。

それは忘年会で、夫がひどく酔って帰った晩の事でした。夫は部屋に入ると、いきなり私の手足を縛って布団の上に押し倒し、ローソク責めを始めたのです。

夫はその夜は酔っていたためか、ローソクを私の左の鼻孔の真近に近寄せると、ローソクを逆さにして蠟を溶かし始めました。ローソクの周囲から溶けた蠟は、間断なく私の鼻腔深く流れ込んで来ます。私は鼻の奥をしっかりと閉じて、辛うじて蠟が咽喉に流れ込まないように防ぎました。

後手に縛られた掌を固く握りしめ、足指を反らせたり曲げたりして熱蠟の責め苦に耐えている中に、私は徹底的に責められたい被虐

の衝動にかられたのです。私は、すべてを諦め切って観念の眼を閉じ、まるで催眠術でもかけられたように、おとなしくローソク責めをうけて居りました。

暫くすると、溶けた蠟が咽喉に大分、溜って来たようです。目を開けて見ますと、夫は酔いで赤く充血した目を私の鼻にそそぎ、何かに憑かれたかのように一心に蠟を流し込んでいます。やがて私は、鼻腔内深く流れ込んだ蠟が固まって取れなくなるのではないかしら？ と心配になって来ました。

「やめて、やめて！ 取れなくなるわ」

私の必死の叫びに、夫は夢から醒めたように、ローソクを吹き消しました。

急いで私の縛しめを解くと、ピンセットを使って、鼻孔から蠟を取り出し始めました。まだ柔らかく、半ば固りかけた蠟が、棒のようになつて左の鼻の孔から引き出されて来ましたが、咽喉深く流れ込んだ蠟が、大きな塊りになって取れなくなつてしまったのです。「困ったわ。どうしよう、どうしよう。早く取って」

私は、思わず泣き出してしまいました。

夫は、酔いも醒め果てたという態度で、種々な器具を使って取り出そうとしましたけれ

ど、素人の悲しさ、どうしても取れないのです。火箸のような鉄棒を鼻孔から挿し込み、咽喉の方に押し出そうとしましたが、塊りが大きいため咽喉の奥の壁につかえて出て来ません。

夫が、お酒に酔って理性を失い、私も又、夫に責められている中に、不思議な被虐感覚に溺れてしまい、理性を失ってプレイに熱中したための失敗だ、と今更、後悔してみても後の祭りです。

その夜は、二人とも眠るどころではなく、何とかして取り出そうと一睡もしないで一生懸命に努力しました。次の日も、夫はお勤めを休んで、いろいろと骨を折って呉れましたが、どうしても取り出せません。

「弱った、どうしても取れない。こうなったら、専門医に診て貰うしかない」

「いやですわ。恥ずかしくて、お医者さんになど行けないわ」

私は泣いて夫を怨みました。

食事も咽喉を通らず、次の夜は諦めてそのまま眠りましたが、鼻から呼吸が出来ないため、充分に眠れません。うとうとと眠ったかと思うと、恐ろしい悪夢にうなされ、目覚めてみると、そこにはどうにもならない現実が

あるのでした。

その翌日、私は遂にお医者さんに診て貰う決心をしました。町のお医者さんでは恥ずかしいので、電車で隣の町に行きました。看護婦さんが大勢いる大きな医院はさけて、なるべく小さな耳鼻咽喉科医院を選び、健康保険も使わず偽名で診察をうけました。

夫はお医者さんの門の前迄付いて来て呉れましたが「僕は外で待っているから」と言つて、どうしても中に入ろうとしません。私は診察椅子に腰をかけ、恥ずかしさで医師の顔も、まともに見られませんでした。事の次第を、かいつまんで説明しました。

「フーン、変わった事をするんだね。どれ、見せてごらん」

向こうで、医療器具を熱湯で消毒している看護婦さんも、好奇の眼差しで、私の方を見ているようです。

私は恥ずかしさに気も遠くなるようで、固く眼を閉じて診察をうけました。

医師が、左の鼻孔を鼻鏡で拡げて、ヤットコのような器具を鼻腔深く差し入れ、蠟の塊りを小さくくだいて取り出して呉れた時にはほんとうに心からホッと致しました。

これにこりて、その後ローソク責めを行な

う時は、あらかじめ脱脂綿を鼻腔の奥に詰めておき、蟬が奥迄流れ込まないように致しました。

鎖 責 め

夫は、私の顔を仰向きに固定して、天井を向いた二つの鼻の孔に、夫々長さ五十糎の鎖を入れるのです。細い鎖は、鎖自体の重さでスルスルと鼻腔深くすべり込んで参ります。ガラガラと鼻腔粘膜にふれる鎖の感触は、肌がそそけ立つような、思わず身震いをする程異様なものです。

そのままですと、鎖は咽喉に迄入って来ますので、鼻の奥を閉じて咽喉に入らないようにしていますと、夫は私を抱き起こして、鎖を口から出すように命じるのです。うつ向いて口を開きますと、鼻孔から入り、鼻の奥を通った二本の鎖が出て来ました。

夫は、口から出て来た二本の鎖の先端を結んでしまい、左右の鼻孔からぶら下っている鎖を引きますと、鎖の結び目は再び口の中に引き込まれ、鼻中隔の裏側につかえて止まります。結び目があるので少しきついのですが私の痛がるのも意に介さず、無理に引張って片方の鼻孔から結び目を出してほどこきます。

つまり、一本の鎖が右の鼻孔から入り、鼻中隔の奥を通って、左の鼻孔から出て来た事になります。

夫は鎖の両端を持って、右に左にと、交互に引きます。鼻中隔の裏側がこすられ、眼もくらむばかりの鋭い痛みが頭の芯をつらぬき思わず悲鳴を上げてしまっています。

「君の鼻中隔の奥行きを計って上げよう」

夫は鼻腔に通っている鎖を、鼻中隔の裏側に接するようにピンと張って、左右の鼻孔の入口の所に目印を付け、鎖を引き出して長さを計りますと、十二糎ありました。つまり、私の左右の鼻腔を隔ている鼻中隔は、奥行が六糎でお終いになり、あとは一続きの部屋になっている事が判ったのです。

「口から出して結ばず、一本の鎖だけで、右側から入れて左側に通してみよう」

夫は、私の右の鼻孔から鎖を入れると、私の顔を左側を下にして頭をゆすります。鼻の奥に溜っていた鎖が左側に寄った所で、鼻鏡で左の鼻孔を大きく広げ、ピンセットで鼻腔の奥の方から鎖を引き出しました。この方法を発見してからは、鎖責めをされる時は、いつもこの方法で鎖を通されることになりました。

その後、鎖は段々にその数を増してゆきました。太いの細いの、長い短い等の、種々な鎖が揃えられると、むごい責めが繰り返されるのでした。

両手を後手に縛られて立たされ、鼻中隔の裏側に通された鎖を天井に引き上げられ、爪先立ちになるように吊るされて、長時間、放置された事もあります。又、鼻孔から入れられ鼻腔の奥を通って口から出された鎖が、再び同じ鼻孔に何度も何度も通されて、上あごを雁字搦目に、締め上げられた事もありました。

浴室 責 め

浴室責めは、ゆっくりとくつろげる土曜日の夜、行なわれます。その夜の浴室は、残酷な拷問部屋と化してしまうのでした。

浴槽のお湯は長時間入っただけのものばせないうよう、あらかじめ、ぬるくしてあります。

両手を後手に、足首も縛られた私は、夫に抱き上げられて浴槽に入られます。洗濯挟みで鼻を挟まれ、直径三糎位のゴムホースを口にくわえさせられると、そのまま仰向けにお湯の中に沈められてしまうのです。浮き上がらないように、夫の膝で押え付けられた私

は、背中と後頭部を浴槽の底にピッタリと付けて、仰向けに横たわります。

私の顔の上は約六十糎の深さのお湯で覆われ、ゴーゴーという呼吸の音が聞こえます。

水圧で胸を押されますので、胸の力を抜くと空気は自然に出て行きますが、息を吸うときは胸に力を入れなければ、空気は入って来ません。

これが終わると一旦お湯から出され、今度は直径一種の長いビニール管が二本、私の両方の鼻孔に挿入されて、又お湯に沈められます。

この管は、端の内側に丸い針金が入って端がふくれていますので、鼻孔にしっかりとめられますと、容易に抜けません。今度は細い管ですので、呼吸は口から空気を吸う時より一層困難で、一生懸命に胸に力を入れないと空気が入って来ないのです。

やがて鼻のビニール管が、ピクピクと二回引かれました。この合図の五秒の後に、ビニール管が引き抜かれてしまうのです。私は慌て、それこそ必死になって胸一杯に空気を吸い込み、鼻の奥をしっかりと閉じます。

左右の鼻孔から、ビニール管が一気に引き抜かれますと、鼻腔内からブクブクと泡が出

て行き、代わりにお湯が浸入して来ます。左右の鼻孔から最後の泡がポカリポカリと出て行きますと、私の鼻腔内には完全にお湯が充滿してしまい、私は文字通り、被虐の深淵に耽溺してしまふのです。長い、そして恐ろしい時間が経過して、ようやく抱き起こされますが、夫の話では約二十秒位だそうです。

責め抜かれて、グッタリとなった私は、浴槽から出されると、縛られた手足をそのままに、今度は木製の長椅子の上に、仰向けに縛り付けられてしまいます。

「あなた、もう許して下さい」

「まだまだ。次は、お鼻の水責めをして上げよう」

夫は私の顔を逆さに固定すると、片方の鼻孔に、直径十糎位のジョーゴを使ってゴムホースの水を注入するのです。そのままですと、水は咽喉に流れ込みますので、鼻の奥を閉じていますと、水はジョーゴの水面と、片方の鼻孔の高さとの差によって、片方の鼻孔から溢れ出て参ります。

浴室の壁には、大きな鏡が置いてあって、夫は鼻責めの様子を見ているように強制するのです。私も又、責め苛まれて悶え苦しむ自分の姿を見る事によって、刺激が強められ、

より一層、被虐感覚が高められるのです。

ジョーゴが取り去られると、天井を向いた二つの鼻孔の入口迄、一杯に水が溢れているのが、よく見えます。

次は、水道の蛇口に連結したゴムホースが直接、右側の鼻孔に押し当てられて、蛇口がゆるめられます。

今度は水圧が強いので、左の鼻孔から水が勢いよく噴出して来ます。夫は、水が垂直に上がるように私の頭の角度を調節して、更に蛇口をゆるめると、水は噴水の様に、真直ぐ上に三十糎位も上がります。水圧が上がるに従って、鼻の奥に一生懸命、力を入れていないと、水が咽喉に浸入して来ます。私は、この強烈な鼻の水責めに喘ぎ唯々口を大きくあけて切ない呼吸を続けるばかりなのです。鼻腔粘膜は、冷たい水で麻痺してしまったためか、鼻腔の痛みはありませんけれども、ツーンと耳に痛みを感じ、また目からは大粒の涙のように、水がしみ出して参ります。夫は、地獄の責め苦に悶えながら被虐に酔っている私の表情の変化を観察して、じわじわと蛇口を調節し、極限に達する迄、水責めを続けるのです。

(おわり)

感に耐えないといった顔つきで、夫人のその凄まじいばかりの吸引力、それに加えて、おびただしい脂汗、男心を溶ろかせるような夫人の涕泣、そんな事について語り合うのだった。

「正に女として非の打ち所なしね。第一、鬼源さんの云う通り、稀に見る名器だわ」

春太郎は、悪戯っぽい笑いを見せて、云うのだが、夫人は、薄く眼を閉ざし、口をつぐんでいる。

つい先程までは、あられもないうめきと涕泣をくり返し、甘い柔らかな唇で、魂もしびれるような吸引力を発揮した静子夫人であるのに、まるで、そんな事は嘘のように、端然とした美しい横顔を見せ、優美な太腿をびったり密着させて、そこに立つ夫人であった。破壊しようとしても、破壊出来ぬ、この優雅な匂いに包まれた美しさ——千代が反撥し魔神に魅入られたような残酷な責めを夫人に加えようとするのは、これが原因かと、春太郎はわかったような気になった。

「ねえ、奥様、そんなに黙りこんでばかりいず、何とか云ってよ」

「奥様は、もう私達と普通の間柄じゃなくなつたのよ。わかつてるわね」

からかうように、横に伏せた夫人の顔をのぞきこんで云う二人に対して、夫人は、そつと眼を開き情感に潤んだような、美しい視線を投げかけた。

「おっしゃらなくても、わかっていますわ。」

静子は、静子は、あなた方とも——」

と、象牙色の優雅な頬を薄く上気させ、再び、伏眼にもどって、小さく口に出して夫人は云うのである。

「よく云って下さったわ。でも、そうおっしゃる奥様の、その可愛い唇と舌、さっきは大奮戦だったわ。あんなにお上手になられたとは思わなかった。完全に参っちゃったわ」

と、春太郎が皮肉っぽい笑いをする、夏次郎も調子づいて、

「鬼源さんの調教がうまかったからかしら。」

それとも、フランスに留学された時、勉強して来られたものなのかしら——と云って、笑うのだった。

夫人は、再び、軽く背を押されて歩き始める。

裸電球に、ぼんやりうつし出された石畳の上を歩み、一番奥にある四坪ぐらいの広さの牢舎が、夫人の休息室であり、宿舎なのであった。

「ハイ、着きましたわよ、奥様」

春太郎は、鉄格子にかかった南京錠を外し鉄の扉を引っ張った。

夏次郎に縄尻をとられて、その場へ立っている夫人の物哀しげな眼は、じっと鉄の扉を開く春太郎の動作に注がれている。

——一体、何時まで、このカビくさい、孤独と暗黒の牢屋暮らしをしなければならぬのか——。

夫人は、急に自分があまりにも、みじめに思えて来て、胸がつまり、涙が出そうになった。

この牢舎から出て、実演ショーを演じ、また骨や肉までがバラバラにくずれるような調教を受け、そして、また、この淋しい冷たい牢舎へ連れ戻される——奴隷とはいえ、あまりにも悲惨な毎日のくり返しに静子夫人は、それでもなお生きつづけている自分が、ふと恨めしくなるのだ。

そんな夫人の気持など考えず、夏次郎は、急に大粒の涙をポタポタ落とし始めた夫人の横顔を不思議そうに見ながら云うのだ。

「あら、急に泣き出したりなんかして、どうしたの、奥様」

鉄の扉は、鈍い音を軋ませて開いた。カビ

くさい、無気味な牢舎の中には、古ぼけた洗面器が一つ、それから古びた毛布が二枚ばかり隅に重ねてあるだけだ。

夫人は、それを眼にすると、一層、自分が哀れに思われ出し、わなわな頬を慄かせながら牢舎の中へ引込もうとする二人にさからって肩を揺さぶり、鉄格子に額を押しつけて哀泣し始める。

「何してんのよ、奥様。明日は朝早くからまた調教があるのよ」

少しでもよけいに休息をとらねば駄目じゃないの、と春太郎と夏次郎は、夫人のスペースした肩や背に手をかけるのだ。

「お願いです。しばらくこのまま静子を泣かせておいて。ね、お願い——」

静子夫人は、これらのシスターボーイ達とも、遂に肉のつながりを持つ事になってしまったという屈辱の自意識が、余韻が薄いで来ると、一つの痛恨となって胸をしめつけて来たのだろう。

「——嫌ですっ、嫌っ、嫌っ」

まるで駄々っ子のように乳白色の肉体を揺さぶって、牢舎へ入れられまいとするのだ。

しかし、それは、身をまかせた男に対して女が一寸した事に抗ったりすねたりして、わ

ざと手古ずらせる、そうした一種の技巧という風に春太郎は受取って、モソモソ喜んでい

るのだ。
「そんなに駄々をこねるもんじゃないわ。明日になれば、もっと素敵な方法で、奥様を調教してあげますからね。さ、おとなしく、牢屋へ入って、お寝んねするのよ」

春太郎と夏次郎は、含み笑いしながら、鉄格子に額を押しつけ、薄紙を慄わせるようにシクシクすすり上げている静子夫人の艶やかな首筋に優しく口吻し、おくれ毛をかき上げてやるのだ。

夫人は、もう昂ぶった声を上げようとはせず、何ともいえぬ繊細なすすり泣きをくり返しているだけだ。

夏次郎は、そっと身をかがめて、滑らかで美しい曲線を描く夫人の双臀をゆっくりと手で撫でさすり、うっとり眼を閉じて頬ずりする。

「奥様のヒップって、美しいわねえ、素敵だわ」

夏次郎は、次に舌を出して、それに熱い接吻の雨を降らしまくるのだ。

「——一日でいい。一日でいいから、自由が欲しいわ」

静子夫人は、夏次郎の執拗な接吻に美しい眉をひそめて耐えながら、囁くように云うのだった。

「自由が欲しいですって、奥様」

夏次郎は、ふと口吻するのを止めて、夫人を見上げる。

「一日でいいから、この屋敷から外へ出て、青空の下を歩いてみたいのです」

静子夫人は、シクシクすすり上げながらカスれた声で

「——せめて、人間らしく何か着るものが欲しいわ。ね、夏次郎さん」

夫人は、夏次郎の方へ濡れた瞳を気弱に向けると

「お願い。田代社長にお願いして、静子の今云った事を——」

伝えて欲しい、と云いかけた時、突然、聞き覚えのある高い笑い声。

静子夫人は、はっとして身をすくませた。何時の間に入ってきたのか、千代がすぐ傍に立っている。

「もう一度、云ってごらんよ、奥さん」

残忍な色を眼の底に浮かべ、千代は口元を歪めて云うのだった。

「この男達と特別な関係が出来たからって、

何もそうつけ上る事はないじゃないか」

「つけ上るって、そ、そんな——」

静子夫人は、おろおろした表情で、険のあ
る千代の顔を見る。

「外の空気を吸ってみたいとか、着物が着た
いとか、奴隷のくせに生意気な事を云うんじ
ゃないよ」

そう云った途端、千代は夫人の頬をいきな
りピシヤリと平手打ちした。

「田代社長に頼んでくれとは、よくも、そん
な事が云えたもんだ」

千代は、夫人が、たったそれだけの要求を
した事にも腹を立て、更に夫人の頬を激しく
ぶちつづける。

「ま、千代夫人、そんなにムキにならなくて
って——」

春太郎と夏次郎は、興奮する千代をなだめ
て中に入り、

「たまには、奥様だって、男に甘えてみた
くなる時だってありますわ。勘忍してやって下
さいよ、千代夫人」

そう云った春太郎は、次に、その場に身を
縮めて鳴咽している静子夫人に

「さ、奥様も、素直に千代夫人に謝らなくち
ゃいけないわ」

と、再び、肩を抱いて立上らせる。

「一寸、優しく出ると、すぐにこの女はつけ
上るんだからね。あんた達も甘やかしちゃ駄
目だよ」

千代は、春太郎達にもきびしい眼を向ける
のだった。

「静子が、静子が悪うございました」

静子夫人は、涙に濡れた頬を見せ、わなわ
な唇を慄わせて千代に詫びるのだ。

「二度とつけ上るんじゃないよ。いいかい。」

奥様はね、もうこの屋敷から永久に外へ出る
事は出来ないのだよ。素っ裸のまま一生ここ
で暮すのだよ。わかったね」

千代にそう浴びせられた夫人は、涙に濡れ
光った瞳を静かに閉ざしながら

「わかりましたわ、千代さん。我儘を云って
ごめんなさい」

と、消え入るように頭を下げ、左右に立つ
春太郎と夏次郎に

「——牢屋へ入りますわ。縄だけ解いて下さ
い」

と哀しげに眼をしばたかせて云うのだ。
すると、また千代が意地悪い微笑を口元に

浮かべて

「我儘を云った罰に、今日は縄つきのまま牢

屋へ入るのよ」

「——」

静子夫人は、何か云おうとしたが、すぐに
口をつぐみ、冷やかな表情を作って、その
ままゆっくり歩み出し、身をかがめて牢舎の
中へ入って行く。

春太郎の手で牢の扉は閉ざされ、夏次郎の
手でガチャガチャと南京錠がかけられた。

千代は、鉄格子の間から、さも楽しげに牢
獄の中の静子夫人を眺めている。

縛しめを解かれる事も許されなかった静子
夫人は、牢舎の隅に小さく立膝して坐り、憔
悴し切ったようにうなだれているのだ。

そうした静子夫人の端正な横顔がまた、比
類のない美しさに思われて、千代は、再び、
癪にさわってくるのだ。

「ホホホ、かつては、絶世の美女と各界の名
士を騒がせた遠山財閥の若奥様が、素っ裸に
なって穴倉暮らし、世の中も変わったものね」

と、片頬を歪めて揶揄した千代は、更に、
毒気を含んだ云い方で

「でも、奥様には、数え切れない位の楽しい
想い出があるじゃないの。パリで遊んだりロ
ーマで勉強したり、贅沢三昧して暮した時の
事を想い起こせば、こうした穴倉暮らしも苦痛

じゃないと思うわ」

静子夫人のしっとり濡れた長い睫毛が、慄えるように揺れ動くのを見て、ニヤリと千代が笑った時、うしろの方から足音が聞こえ出した。

「まあ、田代社長と森田親分じゃありませんか」

千代は、金齒を見せて微笑する。

「もう、静子夫人は、おやすみかな」

田代と森田は、酒気を帯びた赤い顔をつくりと手でさすりながら、鉄格子の中をのぞくのだ。

「ほう、今夜は縄つきのまま牢屋入りか」

と、牢舎の隅で緊縛されたままの裸身を縮めている静子夫人を見た田代は、眼を細めて云った。

「少し、思い上って来たようなので、こらしめてるんですよ。ところで、フッフ、珠江夫人の方は、その後、如何が」

と、千代は、奇妙な媚びの色を浮かべて田代に聞く。

「それが、随分と強情なんで、川田達も大分手古ずっているようなんだよ」

「トイレ木馬に乗ってから、もうかなりの時間がたつというのに、まだ、お始めにな

らねえのだよ」

と、森田が笑った。

「さすがに上流階級の若奥様ともなればしつかけが違うからな。もう限界にきて、木馬の上でモジモジお尻振っているのに、必死に齒を喰いしばって、がまんなさっているよ」

田代は、太鼓腹を揺すって笑うのだった。

「それはそうと、こちらの奥様の例の調教の結果はどうかね」

「ホホホ、思ったよりうまくいきましたの。それというのも、ここにいる春太郎さんと夏次郎さんのお手柄ですわ」

千代は、二人のシスターボーイを指さして云った。

「成程、そいつは勲章ものだな」

田代はそう云って、鉄格子の中の静子夫人の方へ再び眼を向ける。

しっとりとした贅の深い眼をじっと床に向け、髪の毛を乳白色のうなじのあたりに垂れさせて何ともいえず艶っぽさに包まれた夫人を見た田代は、唇を舌でしめすのだ。

「少し痩せた感じはするが、日一日とめっきり色っぽくなってきたようじゃないか、え、奥さん」

田代は、そう云ってから、春太郎達の指導

で、どんな風に変化したか、見たいものだ、と千代に云った。

「まあ、社長ったら」

と、千代は、取ってつけたような笑い方をして、鉄格子の中へ声をかける。

「奥様、社長が御覧になりたいのですって。いいでしょ」

そういうと同時に、千代は春太郎達を、うながして、また南京錠に鍵を差しこむのだった。

Ⅱ隠し財産Ⅱ

牢舎の隅のレンガ壁に取りつけてある把手を操作すると、ガラガラと長い鎖が垂れ下がって来る。

罪人を身体検査する時のために、と田代が以前工事しておいたものだが、隅で、身を縮めている静子夫人は、世にも哀しげに美しい眉をひそめるのだった。

「お疲れの所、御苦労だけれど、も一度、立って頂戴、奥様」

千代は、含み笑いをして夫人を見下ろしている。

「——もう、これ以上——千代さん、後生で

す」

悲しさと辛さで翳ったような、濡れ光った瞳で千代を見上げる静子夫人であった。

身心ともに疲れ切っている夫人は、一時の休息を渴望している。

「何も、ここで奥様をいじめようというのじゃないのよ。どんな風に進歩したか、一寸、社長にお見せするだけでいいのじゃないか」

危惧と不安の表情で、唇を噛みしめている静子夫人が、ふと小憎くなったのか、千代は腰をかめると、

「そのかわり、鬼源さんが何時も云ってるように、とりわけ社長に対してはお色気を欠かしちゃ駄目よ。こうした暮しが楽しくて仕様がなない事を告げて、社長を安心させなくちゃあね。フッフ、以前とは違って、すっかり成長された奥様にとっちゃ、そんな事、何でもない筈だわね」

社長に対する態度が気に入らなければ、またここで色々な調教を受けなければならなくなる、と千代は、夫人の顔をうかがうのだ。「調教の方法が生ぬるいから、もっと激しくして欲しいと社長に欲求する事、いいわね」千代は、長い睫毛を伏せて、凍りついたように身体を固くしている静子夫人の、縄に緊

め上げられた乳房をピチャピチャたたきながら云うのだ。

「——わかりましたわ」

何か思いつめたような、もの静かな一言を口から洩らした静子夫人は、

「一生懸命、静子、社長の御機嫌をとりますわ。そのかわり、それがすめば、ほんとに休息させて下さいますか？」

「ええ、そりゃ勿論よ。この縄をすぐにほどいて、ゆっくりと休ませてあげるわ」

千代に縄尻を取られた静子夫人は、素直に立上った。

春太郎と夏次郎は、待ちかまえていたように、ふくよかな夫人の肩に手をかけ、鎖の下へ連れて行く。

千代は、夫人の縄尻を鎖につなぎ留めると牢舎の外で、立ったままウイスキーを注ぎ合っている田代と森田に声をかける。

「支度が出来たわ。むさ苦しい所だけど、どうぞ、お入りになつて」

「それはそれは、お招きにあずかりまして」と、田代と森田は、ふざけた調子になって云い、身を低めて、鉄の扉をくぐって行く。

静子夫人は、牢舎の中央あたりに一本の鎖で緊縛された裸身を支えられて立っている。

薄暗い牢舎の中をそこだけ、ぽっかり白く浮き立たせたような、ねっとり光沢を持った夫人の肌を田代と森田は、ウイスキーに淀んだ眼でネチネチと見つめるのだった。

「どうだね、森田親分、一種の美術品じゃないか。この若奥様の裸は、いくら見ても飽きがこないから不思議だよ」

上下に数本の麻縄をからました夫人の乳房の隆々とした見事さ、その頂点の薄紅色した柔らかな蕾、そして、優美なカーブを描く腰部から太腿あたりは、息苦しいばかりに女っぽく成熟して、ムンムンする官能美を盛り上げていく。それでいて優雅な匂いに包まれているのだ。また、太腿の付根あたりのふっくらと翳を作っている幽玄的な感じさえも日夜の調教で、鍛え抜かれたとは思われぬ優雅さを保ち、ふと、犯し難い感じさえするのである。

「どうだい、奥さん。一杯、やらねえか」

森田は、夫人の美貌とその見事な肉体に今更ながら圧倒されてしまった自分に照れて、コップになみなみとウイスキーを注ぐ。

「——頂かせてほしいわ」

夫人は、そっと眼を開き、情感的な、そして、人懐っこさを含ませた瞳を森田に注ぐの

だった。

森田が、コップを夫人の紅唇へ近づけて行く、夫人は、むずかるように首を振り

「嫌ですわ、そんなの。どうして、口うつしで飲ませて下さないの」

「へへへ、成程、そいつは悪かったな」

森田は、気もそぞろになって、ぐいとウイスキーを口一杯に含んで、夫人の乳色の肩を抱いた。

夫人は、うっとりとして眼を閉ざし、森田の唇へぴたりと口を押しつける。

口うつしで、注ぎこまれるウイスキーを夫人は、ごくごく喉を鳴らせて飲みつづけるのだ。

田代は千代と顔を見合わせて北叟笑み、めっきり女っぽくなった静子夫人に満足するのである。

「じゃ、次は、わしが飲ませてやろう」

田代が次にウイスキーを口に含んで、夫人の横へ立つ。

森田のはげしい口吻を唇と舌とで受け取っていた静子夫人は、今度は、田代に肩を取られ、甘えかかるように首を廻して、ぴたりと田代の口に唇を押し当てるのだった。

ゆっくりと注ぎこまれる田代のウイスキー

を甘い鼻息を混ぜて、喉へ流しこみ、飲み乾した後は、田代の口中へそっと舌を差し入れて、優しく愛撫する静子夫人であった。

「大分、成長してくれて、わしも嬉しいよ、奥さん」

ひと時の甘い口吻が終ると、田代は、身も心も夫人に煽られ、浮き立った気持になって云った。

千代が煙草を口にし、火をつけると、うまそうに煙を吐いて

「ね、社長。近頃では、奥様もすっかり、この環境に馴れて、自信もわいて来たようなんです。実演ショーでも何でも、心からやる気になって下さったので、私も安心致しましたわ」

「ほう、それは、ますます結構な事だ」

田代は、如何にも感動したといった顔つきで静子夫人を見た。

二人に口うつしで飲まされたウイスキーの酔いが、ほんのり廻って来たらしく、夫人の白蛾の様な端正な頬は桜色に染まり出した。

「ね、奥様、何か社長におっしゃりたい事があるそうじゃないの。遠慮しなくたっていいのよ」

千代は、底意地の悪い眼をチラと夫人に向

けて云った。

「わしに云いたい事とは何だね」

田代は、ほんのり上気した夫人の優雅な頬を指で突き、優しい口調で云った。

ウイスキーの酔いの故か、夫人の美しい双瞳は、露を含んだようにしっとり潤んで、妖しいばかりに色っぽく見える。

「どうしたの、奥様。はっきり社長におっしゃったら」

千代は、夫人の煮え切らない態度に腹を立てたのか、ふと陰のある口調になった。

先程、夫人が春太郎に対して、田代社長に頼むように哀願した——外の空気を吸いたいとか、身に一片の布を与えて欲しいとか、そうした欲求の逆の欲求を夫人の口から田代にさせる事——それを千代は、夫人に対し、強制しているのだった。

静子夫人は、心のふんぎりをつけたように田代の方へ濡れてキラキラ輝く瞳を向ける。

「静子のお願ひしたい事は——」

「何だね、奥さん」

田代は、吸い寄せられるように再び夫人に近寄り、そのがっしりした片腕で優美な夫人の肩を抱くのであった。

「——それはね、社長」

夫人は、甘えかかるように田代の大きな胸元に額を押しつけるのだった。

その心も溶けるような甘い感触に田代は、身も心もしびれた思いになっていく。

「静子は、もう死ぬまで、このお屋敷から外へ出たくないのです。静子の面倒を一生、ここで見て下さいますわね。それだけは、はっきりお約束して、田代さん」

「ああ、それは勿論の事だよ」

田代は、そんな事を口に出す静子夫人を可愛いとも、いじらしいとも思い、涎でも流さんばかりの顔になっている。

「——それから、以前から、静子はよく、せめて腰から下だけでも何かで覆ってほしい、と我儘を云いましたわね。自分が奴隷である事を忘れたような、そうした我儘はもう決して申しませんわ」

「そりゃ、いい心掛けだぜ」

と今度は森田が口を出した。

「皆さんが折紙をつけている名器を何もけちくさく隠す事はねえやな。何時もそうして、丸出しにしておいてくれた方が、こっちも楽しいってものだ——ね、社長」

森田は、せせら笑いながら、コップにウィスキーを注いでいる。

「どうか、静子を何時までも、このように生まれたままの姿にしておいて下さいまし。その方が、その方が静子も嬉しいのです」

そう云った静子夫人は、さも羞ずかしげに身をよじり、一層、甘えるかのように田代の胸深く顔を埋めるのだった。

「じゃ、奥さん、こつてり調教されたつてのを拝見させて頂こうか」

「いいわ。気のすむまで御覧になって——」

田代は、ようやく夫人から体を離れたが、その時、牢舎の向こうから、人の足音がしたのだ。

「誰だ！」

と森田が声をかける。

「ま、伊沢先生じゃないの」

千代が、頓狂な声を上げた。

キザなふちなし眼鏡をかけた背の高い男は千代の依頼を受けて遠山家の顧問弁護士として働き、静子夫人名義の土地不動産をすべて千代の所有に変えるための仕事に取組んでいる男なのだ。

「何だ、伊沢先生か。お久しぶりぶりじゃありませんか」

田代は相好をくずして、「お越しになるなら御連絡下されば、よかったのに」と云う。

伊沢は、えへら、えへらと好色そうな顔をくずしながら

「一寸、急用が出来たもんですからね。いやそれは口実で、そこにおられる美しい若奥様にも一度お逢いしたい、それが本音かも知れません」

ま、狭くて、汚い所だが、お入りになりませんか、と田代は、扉を開けて、伊沢を中へ招き入れる。

「いや、御無沙汰しました。その後、如何がですか、若奥様」

伊沢は、そこに生まれたままの姿で立縛りにされている静子夫人におどけた調子で話しかけるのだ。

「相変らず、美しい。あれからもう随分とたつが、何かこう天性の美貌に一層磨きがかかったような感じがしますよ」

ペラペラとよくしゃべる伊沢であったが、眼だけはギラつかせ、夫人の優美な肉体を貪るように見つめているのだ。

自分の財産を全部没収する仕事つづけているという、夫人にとっては憎みてもあまりある男に違いないが、今の静子夫人の神経は人間の感情を麻痺させてしまっているのか、ただ、空気でも見るように翳の深い眼を遠くの

方に向けているだけであつた。

「そうそう、美しさに見とれちまつて、大切な用事を忘れていた」

伊沢は手にぶら下げていた大きな黒靴を開き、大きな封筒を取出すと千代の方を見た。

「以前、私が静子夫人名義の財産の調査をして約五千万と申上げましたが、色々、調査を進めている内、まだ他に莫大な資産がある事がわかりました」

「ま、ほんとなの」

千代は、顔面に喜色を浮かべた。

田代も森田も、ふと興味をそられた顔つきになる。

「北海道に約一億円からなる土地、それから九州の方にも時価三億円はする膨大な山林、そして、約一億円からなる有価証券が、都内の銀行へ預けてあるんです。驚きましたね」

「驚いたのは、こっちの方よ」

千代は、顔中しわだらけにくずして笑つたが、その笑顔が急に止まつて、きつと静子夫人の方へ鋭い眼を向けるのだった。

「ちよいと、奥様、あんた、こんなにも財産があるのに私に隠していたのね」

と、云うが早い、夫人の頬へ激しい平手打ちを喰わせる。

それをあわてて押しとめた伊沢は、

「待って下さいよ。これは、今、脳病院に入っている遠山氏が、この若奥様には知らせずこっそり名義を書き交えておいたらしいのですよ。自分に万一の事があつても、夫人の方には一生、遊んで暮していくだけの財産を残しておこうという、つまり、愛情の発露という事になるでしょうな」

と、笑つて云うのだ。

「フーン、そういう事なの」

千代は、いまましい顔つきで、うなだれてしまった静子夫人に眼を向け

「以前の御主人は思いやりがあつて、奥様も幸せだったわね。でも、今の奥様には、捨太郎という薄馬鹿の亭主がいる事を、忘れないでね」

千代は、伊沢の方へ媚びを含んだ微笑を向けて

「ところで、先生。その財産は、勿論、私のものに――」

「はい。そこは、商売ですからな」

伊沢は、紙包の中から、登記書とか委任状とか、その他、色々な書類を取り出すのだ。

「判というものは、便利なものですな。これだけの大きな取引が判一つできまつちゃ

うのですから」

伊沢は黒靴の中から、大事そうに象牙の判を取出した。

「これは、静子夫人の実印なんです、この書類全部に捺印する事によって、夫人の資産は、すべて千代さんの所有物になるといふわけです」

「つまり、私は、億万長者なのね」

千代は、そわそわし始める。

「早く判を押して、この財産一切、私が受けつぐ手続きをして頂戴」

「わかりました。じゃ、以前のように、この判は、元、遠山家の若奥様に押して頂く事にしましょう」

伊沢は、立位にされて縛られている夫人の足下へ沢山の書類を置く。

「これに捺印する事によって、奥様は、個人が所有する一切の財産を千代夫人に譲り渡した事になるわけです。一応、書類に眼を通しますか」

伊沢がそう云うと、夫人は、静かに首を左右に振つた。

「――もう静子は、一生、ここから出られない身の上ですわ。そうしたものは必要ございません」

優雅な頬をそよがせながら、夫人は、はっきりと云うのである。

「その通りよ。ホホホ、これで、私は億万長者、奥様は、ほんとの裸一貫におなりになったというわけね」

千代は、子供のようにはしゃぎ廻って「さあ、早く奥様に判を押させて頂戴、先生」と伊沢に催促するのだ。

春太郎と夏次郎も手伝って、夫人の足下に身をかがめ、書類をつみ重ねる。

「さ、前のように、御自分の実印を御自分の足の指で持って頂きましょう。縄を解くのも面倒くさいですからな」

伊沢は笑いながら、高貴な細工物のような夫人の白い足首を持ち上げ、その華奢な足指の間に、象牙の実印を挟ませるのだった。その間、伊沢の粘っこい視線は、乳色に輝く成熟し切った夫人の太腿と、ヴィナスの丘の魂まで吸い取られそうな柔らかい艶のあるふくらみに向けられている。

千代は、そんな伊沢を面白そうに見て、
「ホホホ、先生、そのあたりは、あとでゆっくり御賞味して頂くとして、先に仕事の方をお願いしますわ」

「ああ、そ、そうでした。どうも、好きなも

のがこう眼の前にちらちらするもんで——」

伊沢は、皆を笑わせながら、夫人の足指にさしこんだ実印で、幾枚もの書類に捺印させていく。

夫人は、しっとり潤んだ美しい瞳を気弱にしばたかせるだけで、何ら抗う事なく、伊沢の手に足首を取られ、書類に捺印し続けるだけだった。

「はい、それで結構です。これで事務は一応終了です」

そう云って書類をかかえ伊沢が立上ると、千代は、ほっとして

「どうも先生、色々、御苦労様でした。二三日、ごゆっくりなさってもいいでしょ」

そして、静子夫人の臍のあたりを指ではじき、伊沢を見て、悪戯っぽく笑うのだ。

「わかってますわよ。明日の夜は、先生のお部屋へこの奥様を連れて行きます。朝まで、うんとサービスさせますわ」

「そう願えれば、有難いですな」

伊沢は、優雅で滑らかな夫人の肌を改めて貪るように見つめながら、身内の血を燃え上らせている。

田代が伊沢に云った。

「以前、先生がここへいらっしゃった頃とは

違って、この奥様、今じゃ色々な芸を身につけ、この道のスターとして貫録も出て来たようです。ま、一度、お試しになれば、よくわかると思いますかね」

それを聞く伊沢は、ますます有頂天になっ
て行く。

Ⅱ フランスからの便り Ⅱ

「そうだ。一つ忘れていた事があったっけ」

伊沢は、ふと気がついたよう黒鞆の中から白い封筒を取り出した。

妙に話はずんで、未だ、せまい牢舎の中から立去らぬ田代達と千代は、森田が持込んできたウイスキーの角瓶を半分以上もあけている。

「何よ、先生、その手紙は——」

「一週間ばかり前、遠山家の静子夫人宛てにフランスから来たものですが」

「へえ、フランスから」

千代は、伊沢から封筒を受取り、無雑作に封を破った。

「何だ、横文字じゃないか、こんなのは苦手だね」

フランス語でぎっしり書きこまれた手紙が

出て来ると、千代は顔をしかめて、伊沢の方へそれを向け

「先生、読めない？」

「フランス語なんて、チンプンカンプンですよ。それが読めるのは、そこで晒しものになっ

っている静子夫人だけでしょうな」

伊沢は、森田に注がれたウイスキーを飲みしゃっくりして云うのである。

何だか気になるから、奥様に読んで頂こうか、と千代は、酔った足を踏みしめて、夫人に近づくと、

「ちよいと、これ、何て書いてあるのよ」

夫人の眼の前に手紙を押しつける。

そつと眼を開いて、それを黙読し始めた静子夫人の表情にふと明るさが滲み出て、その濡れた夫人の抒情的な眼の色にも、何かを懐かしむような生気が浮かび上るのだった。

「——すみません、先を読ませて下さい」

夫人に云われて、千代は不快そうに一枚一枚、便箋の頁をめくりながら、急に、今まで悲しげに閉ざされていた夫人の瞳が柔らかく輝き出した事に疑念が生じてくる。

「ね、黙っていいじゃないじゃないの。一体、何て書いてあるのよ」

千代は、いらいらして、きびしい口調にな

った。

「——フランスの大学で勉強していた頃、私と一番仲の良かったフランソワ・ダミヤさんが、同じ大学の文学教授と結婚される事になったのです。その結婚式に静子を招待して下さってるのですわ」

「へえ、結婚式にねえ。一体、どこで結婚式をやるうというの」

千代は、吹き出しそうになるのをがまんして云った。

しかし、静子夫人は、現実を忘れ、ふと、懐しい夢の中をさ迷っているような、一種の無邪気さを表情に現わして、

「——結婚式はスイスで行なうと書いてありますわ」

そして、留学時代の無二の親友であったダミアの手紙に、も一度、眼を向けながら、千代にそれを訳して読み聞かせるのである。

「——パリは、シズコも知ってる通り、水もいいとは云えないし、美しい樹木も少ない。

しかし、スイスには、豊かでスガスガしい緑の樹木が多く、雪をいただいたアルプスの遠景が何ともいえない荘厳な感じを見る人に与える。ドクタージャン・バルーは、このスイスを私達の結婚式場にどうしても選びたいと

いい出した。彼の講義の最も崇拝者であり、私の一番の親友であったシズコには、どうしてもこの結婚式に参加して欲しい。そして、雪解けの水を青々とたたえたあの美しい湖の傍で、ドクタージャンも含めて、昔話に花を咲かせたく思っている——」

静子夫人は、千代に押しつけられたフランスからの便りを懐かしげに眼を潤ませて読みつづけていたが、千代が大きな欠伸をした事で、ふと現実に関連戻された気持ちになったのか、急に口をつぐんで、眼を伏せた。

「へへへ、スイスカフランスか知らないが、毛唐の話ってのは、どうも、退屈でいけねえや」

かなりアルコールが廻って来たらしい森田は、巻き舌になって、がなり立て、千代は千代で、険のある微笑を口に浮かべて、その手紙を帯の間へしまいながら、これも怪しげな呂律になって、何かを思いつめたような表情をしている静子夫人をからかうのだった。

「フフフ、ところで、美しい、素っ裸の若奥様。そのスイスの結婚式に御出席なさるおつもりなんですか」

薄い夜具の上にあぐらを組んでウイスキーを飲む男達は口をあけて笑い合った。

静子夫人は、何か訴えるような、柔らかな情緒的な瞳をじっと前方に向けながら、つぶやくように

「——ドクタージャンバルーは、静子に学問だけではなく、人生をも教えてくれた人。もし、静子に翼があるなら、彼と彼女を祝福するため、飛んで行きたい」

それは、千代に聞こえなかったが、次に、静子夫人がゆっくりと瞼を閉じ合わせて

「——バルー先生、ダミヤさん、どうか、お幸せに——」

と、ひっそり口に出して云うのを聞くと、こうした地獄の底にあえぎながら、昔の友人の幸せを祈ろうという夫人の心情にふと胸をつかれた思になる。だが、それは千代の場合、こうした人間像があるのに対して、自分のような醜く心のいやしい人間が存在するという劣等感——それが、つまり美に対する憎悪感、復讐心理に変貌するようだ。

「フン、毛唐からの手紙をもらって、いい気なもんだよ。云々とくがね、奥様が、フランスの大学を出たか、スイスの大学を御卒業になったか知らないけど、ここでは、そういう教養は何の役にも立たないんだよ。ここさえ鍛えればそれでいいのさ」

千代は、夫人がぴたり閉ざしている太腿の、付根あたりにひっそりと息づいている柔らかなような盛り上りを指さして笑うのだ。

「今、奥様に残された唯一にして、最大の財産だよ」

千代がそう云ったので男達は大口を開けて笑い合う。

「わかってますわ、千代さん。お願い、もうそれ以上、おっしゃらないで——」

静子夫人は、今にも泣き出しそうな顔になり、黒髪を左右へ揺さぶるのだった。

先程、田代に使いに出された春太郎と夏次郎が、そこへ小型のポストンバッグを持って戻って来る。

バッグを受取った田代は、チャックを開きながら

「さっきは、伊沢先生の事務が片づいたが、今度は森田組の書類に奥様の実印が頂きたいんですよ」

これから、何か新しい企画を立てた時、それを行なうスターの承諾書をとる事にした、と田代は、自分の思いつきを楽しそうに伊沢に語り、

「こうした仕事もやくざっぽくやるより、だんだんと民主的にやって行くべきだと思うん

でね」

などといって、何枚かの書類を取出すのであった。

「嫌なら、無理に押せとは俺はいわん。しかし、一旦、印を押したならば、約束はどんな事があっても果してもらわねばならん。いいかね、奥さん」

田代は、楽しそうな顔で夫人を見るのだ。「まず、これから、奥様のはっきりした御承諾を示して頂きたいわ」

千代は、田代の手から一枚を取り、夫人の気品のある鼻先へ近づける。

夫人の顔は一瞬、強張った。

千代より、幾度も念を押された事で、何時かはその日が来ると覚悟はしていた事だが、その日時まで、はっきり明記した書面を突きつけられると、死刑執行日を宣告されたような慄然としたものを夫人は感じたのだ。

その書面には、大体、次のような事が書かれていたのである。

——遠山静子（二十六才）は、来る六月三日、六時三十分、医師、山内耕平によって、人口受精手術を受ける事を承諾致します——田代が考案したらしい奇妙な文句だったがちゃんとタイプ印刷されてあった。

「どうしたのよ、奥様。これは幾度も私とお約束した事じゃないの。今更、慄えるなんておかしいじゃない。とにかく、まずサインして頂くわ」

千代は、書面を夫人の足元へ再び置いて、華奢な夫人の足指の間へペンをはさませる。

「足で書くサインなんて聞いた事がねえ」

森田は、夫人の足首を持ち上げるようにしてサインするのを手伝っている千代を見ると吹き出した。

「さ、次は判を押すのよ」

千代は、いそいそとして、夫人の象牙の実印をも一度、足指にはさませようとする。

「千代さん、一寸、待って——」

「どうしたんだよ」

美しい繊細な下肢をあとへ引くようにして捺印する事をこぼんだ静子夫人を千代は、憎々しげに見上げるのだ。

「——一つ、一つだけ、お聞きしておきたい事があるの」

この判を押す事によって、自分の運命は、また、この地獄の底で、暗く醜く歪んでいく事はたしかだと思つと、夫人の白蛾のような頬をまた大粒の涙が濡らし始めるのだ。

「それで、それで、もし、静子が本当に赤ち

ゃんを生むような事になったら、その赤ちゃんは——」

「どうなるかというのね。そんな事、心配しなくていいわ。私達が引取って育ててあげますからね」

ただし、と森田が付け加えて、

「養育費の方は、ママさん持ちだぜ。しっかり稼いでくれなきゃ、子供が可哀そうだぜ」

静子夫人を妊娠させ、子供を生ませるといふ事は、千代の考えとは別に、田代と森田には、そこに計算があつたのである。つまり、

捕われ人の静子夫人より人質をとるといふこと、たとえ、人口受精でもうけた子供であっても、静子夫人の性質から想像して、母性愛を常の親以上に振りそぐ事になるだろう。

子供のために身を粉にして働く事になると思われる。天性の美貌と美しい肉体を所有する遠山静子を永久にこの屋敷に封じこめるには静子の手枷足枷となり得る肉の分身を一人この世に誕生させる事だ、と狐のように狡猾な田代は、以前から考えていたのであつた。

「さ、奥様、もうこれ以上、手古ずらせず、判を押すのよ」

千代は、夫人の足の指先へ判を挟ませた。

静子夫人は、もう反抗の気力も失せ、千代

の手に片足をあずけてしまう。

人工受精承諾書の上へ遂に捺印させられてしまった静子夫人は、その瞬間、自分の運命が決定的に崩れ落ちて行く音を聞いたような心地になった。

「よし、これで一つ契約がおわつた」

田代は、千代からその承諾書を手渡されると、満足げにうなずいて、

「次は、これだが」

と別の一枚を千代に渡す。

千代は、ちらと内容を読んで、フッフ、と口を押さえて笑い、それを夫人の眼に近づけた。

空虚な眼をぼんやりそれに向けた静子夫人は、はっと怯えて、すぐに田代の方を見た。

「——これは、嫌です。お願いします、田代さん。これだけは、勘忍して下さい」

静子夫人は、田代に哀願し始めた。

奴隷でも、一応の拒否権を与えるといい出した田代の言葉に夫人はすがったわけだが、千代は、

「あら、これも、何時か私、奥様と約束した筈よ。ニグロだって、人間じゃない。何もそう毛嫌いする事はないと思うな」

千代が夫人の鼻先で、ヒラヒラさせている

怪しげな承諾書には、

——遠山静子（二十六才）は、アメリカ生まれ、住所不定の黒人、（通称ジョー）と、実演コンビを結び、来る五月五日より開催される第二回秘密パーティーに一週間連続出演する事を承諾致します——と書いてあるのだ。
「ヨーロッパの白人連中とは、留学されていた時代から、随分と交遊があったそうだね。たまには、アメリカ生まれのニグロを相手にしちゃどうかね、奥さん」

田代はそう云って、腹を突き出して笑うのだ。

「それによ、奥さん」

と、森田がポケットから一枚の写真を取り出して、夫人の鼻先へ突きつける。それは、ボディビルの一つのポーズをとったジョーの全裸像であった。

反射的にさっと顔を伏せた夫人の顎に手をかけた森田は、

「そら、よく見てみな。このでっかさじゃ捨太郎だって顔負けするぜ」

「——いや、いや、ね、お願い、黒人とそんな——」

静子夫人は、乳色の柔軟な肩を揺さぶってシクシクすすり上げる。

「そう強情をはらず、判を押してくれねえかな。そうすりゃ、立川の基地あたりでゴロゴロしてやがるジョーをすぐに呼び寄せ、パーティーが始まる日まで、こつてり練習が出来るってもんだ」

と、森田がつめより、更に今度は、春太郎と夏次郎までが

「真っ白な肌をした美しい若奥様と、真っ黒な肌をした醜い黒人のジョーとは、正に絶好の組合わせと思うわ。ジョーに出演して、フランス式の妙技をお披露でもしたら、お客は大喜びでしょうね」

「ね、奥様、私からもお願いするわ。この承諾書に判を押して頂戴。ね、奥様ったら」

そんな風に左右から、静子夫人にまといつくようにして口説き始めた二人のシスターボーイを、田代は面白そうに眺めながら煙草をくゆらせている。

奴隷にも拒否権を与えるというものの、結局は、強制的に承諾させられる事になるのだと、悲しい諦めが次第に夫人の胸の中に充満していく。

苦しげに眉を寄せていた夫人の表情が次第に冷たく冴え始めて、

「——わかりましたわ。それを静子、承諾致します」

と、放心したように口を開いたのだ。

春太郎と夏次郎は、大喜びで、早速、夫人の足首に実印を差しこみ始める。

「さ、奥様、もう少し足を上げて——いいわね、しっかりと判を押すのよ」

承諾書にやっと捺印させた二人は、嬉しさのあまり、わっと歓声を上げた。

夫人の捺印を待ちかまえていたように田代は森田に向かって、

「それじゃ親分、早速、鬼源に知らせて、ジョーにこの屋敷へ来るよう連絡させてくれ。パーティーまで、あまり日はないからな。練習は早い目にさせておいた方がいい」

「へい、わかりました」

森田が鉄の扉をぐぐって出て行くと、田代は、肩の荷が降りたような気分になって、千代の背をたたいた。

「こんなものもあるんだが、どうするかね、千代夫人」

田代は、一応あんたの意見を聞いてからにしようと思ってな、と別の書類の内から一枚をとって千代に示したのだ。

「まあ、犬と——」

「シー、声が高いよ」

と、田代は、千代を眼で制して、がっくり首を落とし小さく嗚咽しつづける静子夫人の方に気を配りながら、小声で云うのだ。

「この芸当の出来るでかい犬が、香港にいます。相当な高値だがね。今から注文すれば二三カ月後には、ここへ到着するだろう」

「丁度、静子に人工受精をほどこした頃ね」

千代の眼が残忍な光を帯びて来た。

「面白いわ、社長。その犬の代金は私が支払います。とり寄せて下さいな」

そして、千代は、田代の手から、畜犬との交渉を承諾させるその恐ろしい書類を受取り「これは、折を見て私が静子を口説き、必ず判を押させますわよ」

と、ひきつったような微笑をして見せるのだった。

やがて——鬼源が森田に伴われて、小走りでやって来る。

「今、森田親分から聞きましたが、ほんとにジョーの奴を雇い入れるんで——」

鬼源は、牢舎の中へ入って来ると、すぐに田代に云った。

「そうさ。若奥様は、こうして、ちゃんと、承諾書に署名捺印をして下さったのだ」

鬼源は、田代に手渡された承諾書を見て、

ニヤリと黄色い歯をむき出した。

「成程、承諾書とはいい思いつきですよ、社長。こうして、自分で認めたからにや、本人も一生懸命、励まなけりやならねえわけだからな」

それにしても、あの黒と来ちゃ化物なみですぜ、と鬼源は周囲の男達を笑わせるのだ。

千代も、クスクス笑って、立位のまま縛られ、喪神したようにうなだれている静子夫人の頸に手をかけ、ぐいとその美しい顔を正面にこじ上げる。

「化物なみと聞いて、この奥様は悦んでその承諾書に判を押されたのよ、鬼源さん。前からよく私にこの奥様ったら、捨太郎さんより大きな人は、もうこの世にいないかしら、とこぼしていたのよ。この奥様はね、大きければ、大きい程、いいんですってさ」

と云って、千代は笑いこけるのだ。

静子夫人のびったり閉ざした切長の眼尻より、再び、一筋二筋の涙がしたたり流れる。

今、夫人の心にあるのは、これらの悪魔達が自分の周囲から少しでも早く退散し、このいまわしい時間が、早く終わる事——それを一心に神に祈りつづけているだけだ。

よし、わかった、と鬼源は、そんな静子夫人に近づいて、

「それじゃ、二三日内にジョーをここへ呼び寄せてやるぜ。あいつは、本場仕込みだからな。特に、お前さん好みのは天下一品さ」

と云うと、千代もそれに調子を合わせて

「ホホホ、すると間もなく、この奥様は、アメリカ産のジュースをたっぷり御馳走になれるわけね」

一座は、どっと哄笑した。

さてと——鬼源は、懷から手帖を取出して頁をめくりながら、

「そうなりや、奥さんの身体も、またこれから色々と忙しくなる事だ。明日のスケジュールを教えておこう」

俯向いたまま、じっと瞑目している夫人に気づいた鬼源は、「おい、ちゃんと聞いてなきゃ駄目じゃないか」と、強く夫人の胸を押してから

「いいか、朝は八時に起床、洗顔し、化粧した後、まず、俺の部屋へ来るんだ。そこで、俺を実験台にして、練習を二時間ばかり始めるんだ」

「おい、鬼源、すばらしい役得じゃないか」

と、田代がからかうように云う。

「へへへ、そうかも知れませんが、仲々これ

だって骨の折れる仕事なんですよ。何しろ、ジョーと組ませるんですからね。奴は、中途半端なことだと、すぐに怒るんです」

再び、一座に哄笑の渦が巻き起こった。

中でも、一番喜んだのは、千代だろう。

絶世とまでうたわれた美貌と艶麗な肉体を持つ静子夫人——また上流社交界のバラとうたわれ、フランスの大学で文学を専攻した程の教養も持つ静子夫人が、流れ者の巨漢のニグロ相手に、そんな常識を超越した惨憺な行為を演じる事になるとは——

千代は、しびれるような快感を噛みしめるのである。

やがて、そのうち、香港から来る事になっている動物とまで——千代は息苦しいような興奮を覚えた。

「その次は、いいか、調教室で8ミリ映画の撮影だ。捨太郎の奴の風邪も大分良くなってきたようだから。明日はびったり呼吸を合わせて、うんといいい商品を作ってくれなきゃ駄目だぜ。夕方まで五本のフィルムを撮る予定だ。——おい、聞いているのかよ。返事ぐらいしたらどうだ」

まるで、人間ではなくなったように、冷たく冴えた横顔を見せて、黙りこくっている夫

人を見ると、鬼源は腹を立てて叱咤するのである。

「——聞いておりますわ」

夫人は、ほのかな香気が立ちこめて来るような美しい顔を鬼源に向け、柔らかな口調で云うのだった。

「それがすめば、三十分の休憩、そして、竹藪の茶室へ行くんだ。そこにや、折原博士の奥様が、川田兄貴達の手で調教を受けておいでだ。そこで、折原夫人と特殊関係を結ぶんだ。そうした方が、今後、あの博士夫人の教育がやりよくなるからな」

「そのあとは、伊沢先生の部屋へ入って頂くわ」

と千代が口を出した。

先程から、夜具の上へぼつんと坐っている

伊沢の手を取って立上らせた千代は

「ごめんなさいね、先生。明日は朝から静子にサービスさせるつもりだったんですけど、第二回目のパーティも近いだけに、色々忙しいのですよ。そのかわり、夜は充分、お楽しみになって頂きますわ」

伊沢は、何かモソモソ、ポケットの中へ手を入れていたが、一枚の写真を取り出して、夫人の前へ持って行く。

「フランスから来た封筒の中に、こんな写真が入っていたよ。ついさっき、気がついたんだがね」

それは、雪を頂いたアルプスをバックに立つ美しいフランス娘と日本娘の写真で、恐らく娘時代の静子夫人の写真を見つけた旧友のダミアが手紙と一緒に同封して寄こしたもののだろう。

数々の心理的な責苦にぐったりになっていた静子夫人であったが、「まあ」と生気が蘇り「——なんて、なんて懐しい」

白蛾のような美しい頬をそよがせて、その親友と一緒にスイスを旅した当時の写真に入り、また、二十一、二の頃の自分の幸せそうな笑顔が懐かしく眼にしみたのか、夫人の二重瞼の美しい瞳には、キラキラと涙の露が光り出した。

「そんなものを見せたりすると、この奥さんたら、最近すぐおセンチになって、メソメソしちゃうんですよ」

千代は、笑いながら、伊沢の手より写真を取り、ハンカチを出して、涙に濡れた夫人の頬を拭き始める。

「さ、奥様、もうメソメソしちゃ駄目よ。フランスからの便りを届けて下さった伊沢先生

に大いに感謝して、実演スターの魅力を充分に発揮するのよ。まず、夏太郎さんに調教された成果を、はっきりお見せすれば——」

千代は、そう云って、伊沢を夫人の前に押しつける。

静子夫人は、涙を振り切り、実演スターの静子として、好色漢の伊沢と対峙したのである。

「——懐かしいものを見せて頂き、有難うございまして。そのお礼に、静子も先生にお見せしたいものがありますわ。ね、御覧になって下さいます？」

静子夫人は、かねがね鬼源達に指導された艶っぽい微笑をほんのり口元に浮かべて「ねえ、先生、静子のうしろへお回りになって」と甘い声を出すのだ。

「うん、立ってたって、御覧になれないわ。お坐りになって——」

身をかがめた伊沢の眼の前には、妖しい悩ましさをもち、ねっとり脂肪が乗った夫人の双臀があった。

「——うん、ねえ、早く御覧になって。何時までもじらすなんて、ひどいわ」

静子夫人は、さも、じれったそうに美しく盛り上った双臀を左右へモジモジ揺さぶり、精一杯の媚態を演じるのだった。

(未完)

無量寺訪問記——

ヤイト寺の大広間

石田賢治



大阪に、古くから「ヤイト」で有名な無量寺というお寺のあるのを、ご存知の方も多いと思う。

内心「お灸」というものに、異質の魅力を覚えるボクは、先日、老母がこの無量寺へ行くといい出したのを幸いに、付添いの形で同行したのだが、門前にズラリと行列をつくっている人垣におどろいた。お灸を据えてもらうために順番を待っている人達なのだ。

お灸というものに惹かれながらも、医学の発達している現代、治療のためのお灸などはごく限られた人だけのものと思っていたボクには、意外な人数による行列であったし、大半が年寄りや若者がいた中で、ちらほら若い女性や学生服の若者がいたことも、驚きの一つであった。あるいはボク同様の付添い人かとも思ったが、いずれにしろ、お灸というものが、日本古来の治療法として、いかに根

強く生きていくかを改めて認識させられたかたちであった。

やがて列が進み、寺内へ一步入ると、プーンと鼻をつくもぐさの匂い。ボクの全身がキーンとなる想いがする。

ボクの想定する「お灸の情景」とはもちろん違う雰囲気ながら、やはり内心はおだやかとはゆかぬ気持で、腰に印をつけて貰った母の手をひき次の広間へ。……そこでボクはハッとなる光景に出喰わしたのである。

広間一杯に、何列にもズラリと並んでいる男女の背中。申し合わせたように腰に二つずつもぐさを置いて貰って、それに別の女の人がつぎつぎと線香の火を移して廻っているのである。

もぐさはかなり大きい。人差し指の先ほど

もあるだろう。三十人ぐらいいはいると思われ人の列から、二筋ずつの煙が立ちのぼるのだから、むしろ壯観ともいえるが、もうもうとした煙の中で、「ウーン」「ウーン」と低いうなり声が混り合う。

もぐさが大きいだけに、熱さかなりのものだろうが、皆、齒をくいしばって一生懸命に耐えているようである。手をぐっと握りしめ、ひたいに汗をにじませている。

「熱い！ 熱いウォーッ！」

という若い声につられて見ると、まだ中学生らしい女の子が、可愛いセーターを捲り上げた腰から、二筋の煙をたちのぼらせながらお母さんらしい人に支えられて泣いている。

ボクのイメージに近づいた感じで、思わずドキッとなるが、一寸、可哀想なほど痛々しい思いもする。何の治療であろうか。

母が坐った場所の隣りが空いて、高校生ぐらしいの男の子が坐った。背の高いわりにあどけない顔をしていたから中学生かも知れないが、同じく腰に二つ印をつけて貰っている。こんな若い子が？ と疑うほど場違いの感じがした。

何の病気かは知らないが、やがて、もぐさの煙をたちのぼらせ、体をよじり出して顔が真赤になり、齒を喰いしばってガマンしているさまを見ているうち、ボクは、肝心の老母の付添い役たることを一瞬忘れていた。ボク

の「炎責め」のイメージにますます近づいた感じであったからだ。

あまり、この療法に慣れていないとみえ、もぐさが灰になるにつれ、体のよじり方がだんだん大きくなって、その又、隣に坐った中年の婦人から、

「あまり動くともぐさが落ちますよ！」

と注意された。どうも、この男の子の母親らしい。その婦人もお灸を受けるらしいのだが、注意された子のジッとガマンしている姿にボクはゾクゾクッとしてしまった。

その点、ボクの老母は、自分からいい出したせいもあるが、低く呻きはするが、お灸慣れとでもいうか、比較的平然としていた。

子供に注意していた中年の婦人も、相当据え慣れしているとみえて、オシトヤカ？ などもだえ方の部類で、口をきくと噛みしめた顔が一瞬熱さに耐えている表情を見せてくれただけで、或いはと期待したボクの心がはぐらかされた想いだった。

しかし、その高校生以上に、ボクをゾクゾクさせてくれる女性が、その母親？ の隣に坐ったのだった。

まだ二十二、三と思えるオフィスガール風な女性が、ハツとするほどの色白の腰をのぞかせ、もぐさを据えて貰って、煙を二条たちのぼらせ始めたのである。ボクは、老母を気づかうふりをしながら、二人置いた彼女の方

に注意を集中させた。

おとなしそうな整った顔の彼女は、ジッと長い睫を閉じ合わせていたが、腰のもぐさが燃えつきかけたのであろう、「ウーン」という可愛い呻きと共に、形よくひかれた薄紅い唇がキューッと歪められ、両肩がくねったかと思うと、上体が徐々に前に倒れ、ついに畳につっぶしてしまった。衣類を上下にわけて覗いている白い肌に、いま燃えつきたばかりのもぐさが、一円のアルミ貨ほどの大きさで黒く貼りついており、その罫りがポーッと赤くなつて、美しい肌色をつくり出し、なんともいえぬまめかしい。

熱さが去ったのであろう、ホツとしたように上体を起こす彼女が、しかし背後を行き来する婦人の手で、再び払い落とされた灸跡に、もぐさが盛られる。火が点される。じりじりと肌を焼く火が燃え下って行く、彼女のみもだえが、呻きを伴ってくり返えされてゆく。ボクは憑かれたようにそのさまに見入っていた。心臓がドキドキと脈打っているのが気兼ねなほど自分でわかった。

こんな若い女性が、自ら灸を据えてもらいくるのには、よほど苦しい病氣を持っているに違いないだろうが、あるいは？ と自分に引き較べて勝手な想像をしているのに気付いたボクは「済んだヨ」という老母の声に、叱られたような気になった。



まそひすむす・てらぷてぐす

あ　る　患　者

泉　　一　　郎

私が郊外の閑静な住宅地の中に医院を開業してからまだ三年程しか経っていない。表の看板には、内科・小児科と書いてあるが、都心を離れたこういう場所では、一応どんな患者でも受けかねばならない。他の科の病気で治療せねばならないという程でもないが、いわば医療の入口のようなことも内科の開業医はするわけである。

郊外とはいえ、バスに十分も乗れば一寸し

た繁華街もあり、そこには、外科、眼科、耳鼻科、婦人科をはじめ、総合病院さえあるのだが、やはり、それだけのことが、おっくうなのか、他科の治療も是非やってくれという人も時にはある。中でも面白いのは妙令の未婚女性は婦人科へ行くのが恥ずかしいのか、或は、婦人科医のところへ入るのを見られでもしたら困るのか、かかりつけの内科医に先ず相談を持ち込むことが多い。また泌尿器科

方面の病気も同様である。

話が横道にそれてしまったが、まそひすむす・てらぷてぐす（略してM・T）も、婦人科・泌尿器科方面で、その極となるわけである。診察台の上に横たわり、そのように拘束された状態で——もちろん、手足の自由はあるし、逃げだそうと思えば簡単だが、まさか診察を受けにきて、診察を逃げるわけにはいかない——すべて露出し、眺められ（医師からいえば視診という）、さわられ（同じく触診、指診という）るわけである。更にくわしい検査のためには、種々の器械類を使用される場合もあるわけである。

責めにもいろいろあるが、裸にされて観察されるという、比較的プリミティブな責めは近代人にとっては可成り苦痛を与えるのではないかと思う。この意味の責めを楽しむ（正確には責められるのを楽しむ）のが、先に書いた診察に関するマソヒスムス・テラプティクス（以下M・Tと略す）者であろう。

七月下旬の或る日、午前中の診察時間も終わろうとしていた。時計はもう十二時十五分である。出されたカルテの最後の一人もすんでやれやれ今日の昼食は何を食わしてくれるか

な、と思っていると、受付嬢が「先生、もう一人、いらっしゃいますか」

その人は、受付にもいわないで、じっと待っていたらしいのである。

もう終わりのと思って腰を上げかけただけになるべく早く済ませてしまおうという気があるので、すぐに診察室に招じ入れた。そのまゝ、私の前に腰掛けさせて、名前や生年月日住所をきいて、カルテに書きいれる。

「高賀美保子、昭和二十六年二月二日生まれです」——筆者註、氏名は勿論仮名——

「職業は」

「学生です」

「大学生？」

「ええ、一年です」

「住所は自宅ですか、それとも下宿ですか」

「そんなことまで云わねばなりませんか」

「そう。カルテには、氏名、生年月日、住所を記載する義務がありますからね」

「〇〇さん方に下宿です」

私は、その通りにカルテに記入した。

余談だが、診療を受ける時に氏名や住所を偽る人が時々、見られる。内科や小児科等では殆どないと思うが、婦人科や、泌尿器科の

受診では可成り多いと思う。健康保険を使用する際は嘘を云えないが、人に知られては困るような病気の場合、保険を利用せずに、名前や住所も本当のことを云わない人がある。

読者諸氏に警告しておくが、このようなことはしない方がよい。というのは、本当の氏名を述べたところで、医師が「誰々がこういういまわしい病気になった」というようなことを他人に洩らすことは絶対に無い。医師・看護婦の業務上の秘密を守る義務として法律で定められており、それを洩らせば厳罰がましかまえている。その上、若し、注射のシヨック等で嘘をついた人が死亡でもしたら、大変なことになる。家族に知らせようもないし、第一、そんな人はこの世に存在しないことになるから、身元不明の死体として扱われるようなことになりかねないからである。

さて、元に戻って、この自称高賀美保子さんというお嬢さんも、どうも嘘をついているらしい。終了間際に入ってきて、受付にも何もいわないで、しかも、何となくそわそわしている。私の経験からいえば、このような御婦人は、何か、人にいえない悩みか、恥ずかしい病気のことが多いのである。

「それで、どこがお悪いのですか」

「ええ、ちょっと……」

「ちょっとではわかりませんね」

「それが、あのう……ちょっと」

やっぱりそうか。看護婦にきかれるのもいやなのかも知れない。もうどうせ正午を過ぎてしまったし、恐らく、何かこっそりと訊きたいことでもあるのだろうと思って、看護婦嬢には、昼食に行ってもらうことにした。時間を過ぎた患者に些か不服顔の看護婦は、喜んで診察室を出て行った。すると患者の顔には、ほっとしたような表情があらわれた。

「さあ、お話を聞くのは私だけです。どんなことでも話して下さい。患者さんが医師に話した秘密は絶対に守られますから」

「あのう、実は、昨日の夜から、用をたす時に少しおかしい感じがするので」

「おかしい感じと云いますと？」

「始めに少し痛くて、終わってから少しむずむずする感じがして、いらいらします」

この症状なら、女性にありがちの膀胱炎と尿道炎だろう。尿の検査はしなくてはなるまい。診察の前に検尿をと、検査室から尿コップを持ってきて手渡し、待合室のトイレに行

って尿をいれてくるように命じた。

この程度のものなら、別に恥ずかしがった
りかくしだてをすることも無いのに、やはり
若いお嬢さんにはショックなのだろうか、な
どと考えていると、やがて彼女が尿コップを
持って診察室に戻ってきた。

尿を試験管にうつして、すかして見ても、
そんなに濁っていない。試験紙を出してみ
ても、まずは正常である。細菌が侵入して起
る膀胱炎や尿道炎では尿は細菌や白血球のた
めに、ひどく濁ってしまうのが普通である。

細菌が原因でないならば、膀胱や尿道の炎症
を無菌性膀胱炎・無菌性尿道炎といい物理的
な刺激、例えば排尿を我慢していたためとか
最近はやりと聞くヘビー・ペッティングで起
こすこともある。殊に女性は、旅行や遠足で
トイレか、適当なチャンスがないと、我慢し
てしまうので、こういう病気になることが多
い。

「尿は比較的きれいですね。細菌がいるかど
うかは、培養検査をしてみないと、はっきり
しません。恐らく膀胱・尿道炎でしょう。
診察をしますから、お腹を出せるようにして
ベッドに横になって下さい」

診察といっても、泌尿器科や婦人科ではな

いし、密室があるわけでもないのに、内科の
診察としては、膀胱のあたりを圧迫して見る
程度である。この種の病気は、自覚症状と、
尿の検査では見当がつくので、その程度で
充分である。見当がついたからといって何も
しないでは、これまた逆に、あの医者は何も
してくれない、とか、ろくに診てもくれない
と非難される原因になるおそれがあるので、
私も、その程度の気持で診察ベッドに上るよ
うに、そう云ったのである。

ところが、彼女は、急に元気になって、

「はい」

といって衣服を脱ぎはじめた。

普通腹部の診察には、スカートと下着を下
げる程度で、ことに最近の患者さんはものぐ
さになって、出来るだけ脱がないようにして
いるというのに、この人はまじめな人だと思
っている、まず、ワンピースをすっぱりと
脱いで脱衣籠にいった。次にスリップを取っ
てしまった。胸のあたりに花模様の小さな柄
のあるまっ白なスリップだった。スリップを
脱いだ彼女は、勿論、ブラジャーとパンティ
だけになってしまった。白い清楚な感じのも
のであった。

私は職業柄、ナイロンのパンティを着用し

ている女性を見ると、いやな感じを持つ。ナ
イロンパンティは何の利点もない非衛生なも
のだからである。洗濯には便利かもしれない
が、通気性が悪く、内部をむらして甚だよろ
しくない。女性はすべからず、綿のパンティ
を着用すべきであって、ナイロンのそれは、
下着を見せることを目的とする場合のみに限
るべきである。

さて、彼女、高賀美保子嬢はと見ると、綿
のものであった。そけい線ぎりぎりまでのも
ので、その下からは、肉づきのよい若々しい
太腿が出ている。皮下脂肪も適当で、皮膚の
つやもよい。若さがはちきれそうな肢体を惜
しげもなく私の目の前にさらしている。

おやおや、ずい分気前よく脱いだな、と思
っていると、何を思ったのか、診察ベッドの
足もとの方にある衡立（といっても座敷等に
あるようなものではない。鉄製の枠に白い布
の張ってあるものである）の蔭に入ってしまった。
こちらには、もう終わりたいと思ってい
るので早くしてくれないかなあと気がせくば
かり。すると、すっと手をのばして、衡立の
上に何か布きれをかけたのである。そして、
「失礼します」

といって、ブラジャーだけで出て来た。別

に恥ずかしがっている様子もない。

だいたい年頃の娘さんは、診察に際して必要以上に恥ずかしがる人が多くて、診察に必要な時間がかかったりして困るのに、このお嬢さんは大胆不敵というか、割り切っているのか、そのまま診察ベッドに横たわるとブラジャー一枚の全身を惜しげもなくさらし、両手は体の横につけ、丁度、不動の姿勢——といっても理解できない方が多いだろうか、いわゆる、「気を付け」の姿勢である——のまま、横臥しているわけである。

あまりのことに私もしばらくは、あっけにとられたが、医師の姿にかえって落着きを取り戻した。ここで、「そこまで脱がなくてもよろしい」等という言葉を出してはいけないのである。それは、患者に恥をかかせることになるからである。彼女の方は自分の苦痛のある部分をすべて診察してほしいのである。そのためには恥ずかしいというような苦痛はより小さなものであって、恐らくは、物心ついてからは、親にも、恋人にも見せたことのない全身をさらけ出すのは、医師を完全に信頼し、充分な診断と、治療を求めているからである。それに対し、こんなに脱がなくてよい、少し腹部をおさえて診るだけだという態

度は、この信頼をも裏切ることにもなる。医師と患者を結ぶもののうちで最も大切なものは、この信頼であり、それに報ゆる誠意であって、うわべだけの親切や、上等の薬ではないことは、開業新入生の私にもよくわかつている。

このような私の心のうちをよそに、彼女は微動だにしない。呼吸と共に、豊かなバストが上下しているだけである。しかし、心なしか、その起伏はやや早いようである。眼を軽くとじた顔はやや紅潮しているが、決して、恐怖や、羞恥からではない。

バストから続く腹部も適当な皮下脂肪でおわれ、思春期の少女の典型的な美しさを見せている。陰毛（甚だ不粋な表現で申わけないが、あくまでも医学的な観察であるので、お許し願いたい。恥毛というような言葉は医学用語にはない）は、日本人としてはやや薄いようだと観察する。このような観察によって、医師は、性ホルモンの異常はないだろうと判断するわけである。ことわっておくが女性の陰毛が男性のそれのように密で且、剛で広く存在するのは、決して正常ではない。これは、時に卵巣の異常を意味することがある。

さて外観の観察（これを医学上は視診という）を終わった私は、触診にうつった。余談だが腹部の病気の診療の主力は触診である。彼女の場合、自覚症状から判断すると膀胱部に異常が予想されるので、当然主力は膀胱部の触診である。

「膝を立てて、お腹の力を抜いて下さい」
彼女は、はっと我に返ったように、云われたとおりにした。私は、型通りに恥骨結合のすぐ上を軽くおさえた。

「こうすると、尿がしたくなりますか」
「ええ、出そうな感じになります」

これは膀胱炎の徴候の一つである。普通はこれ位の診察で終わりであるが、どうも彼女は何かもっと詳細な診察を期待しているようである。それでなければ、パンティまで脱いでしまうようなことはありえないだろう。

これは陰部の診察を求めているにちがいない。（普通には局部という表現をするが、医学的には正しくない。局部というのは、問題のある部分という意味であって、例えば、胃が痛いという人にとっては、上腹部が局部である。お尻にできものがある人には、そのできものの部分が局部であり、この場合の彼女にとって局部とは、膀胱部と外陰部、殊に尿

道部が局部となるわけである)

「用をたす時に出口のところが痛みますか」

「はい、出はじめにというか、むしろ出るま
でが痛みます。出はじめてしまうと、それ程
でもありませんが。それが何度もですので、
苦しくて。また痛むのかと思うと……」

「じゃ、そちらの方も診てみましょう」

彼女の顔をうかがっていると、大ていの人
はここで困ったなという態度をするものだが
彼女は逆である。やっとこれで診てもらえる
安心したという顔つきである。

「では膝を立てたまま、脚を開いて下さい」

望んではいるものの、いざとなるとやはり
若いご婦人である。そろそろと開いたが、つ
ま先の位置で三十センチぐらいである。これ
では、とても診察等、及びもしない。

「もっと思いきって。……恥ずかしがらない
で。恥ずかしいことよりも、充分に診察する
ことの方が大切ですから」

「はい」

さすがに、この勇敢なまないたの上の鯉も
左腕を顔の上にあげて眼をかくしたが、思い
きいたらしく、さっと私の指示に従った。息
づかいも少々荒くなったようである。無理も

ないことだが、私の任務としては、尿道口を
診なければならぬのである。

「では、ちょっと動かないように」

彼女は処女であった。しかし小陰唇と尿道
口、そしてその付近が少し赤く腫れている。
軽く押してみる。

「痛いですか」

「痛いというより、少しヒリヒリします」

そうだろう。これは外陰炎もおこしている
のだ。膣入口部もやや赤い。処女膜は異常な
いが、やはり少し発赤している。

「では、もう一度脚を閉じて膝をのばして」

元の姿勢に戻らせてから、次にはそけい部
の淋巴腺（正しくは淋巴結節という）を調べ
なければならぬ。両側のそけい線（大腿部
と下腹部の境の溝部）に沿っておさえてみる
が、淋巴腺の腫れている様子もない。強く圧
しても痛いとも云わない。まあ、結局のところ、
膀胱・尿道・外陰炎という診断だろうと思
いながら、

「はい、診察終わりです。服を着て下さい」

ほっとして、いそいそと服を着始めるかと
思いきや、彼女は起き上ただけである。

「あー、先生。どうしてこんなになったの
でしょうか。私はまだセックスの経験などあ

りませんのに」

「まあ、先に服を着なさい」

「いいえ、寒くありませんから。それよりも
お話したいこともありますし」

「あなたさえよければ、そのままでも構いま
せんが。あなたの病気は、性病の仲間ではあ
りません。あなたがバージンであることは判
っています。膀胱と、尿の出口である尿道、
それに外陰部が炎症をおこしているのです。
多分、尿道から逆に細菌が入ったのでしょ
う」

私は、早く切り上げようと思うが、彼女は
なおも喰い下ってくる。

「触ったりしただけでも、こういうことにな
るでしょうか」

「そうです。不潔なだけでもなることもあり
ます。生理の時の手当には、出来るだけ清潔
なものを使う必要がありますね」

依然として彼女はブラジャーだけの姿であ
る。目の保養になるどころか、そのまなざし
は、何か必死なものが見られる。これはおか
しいと直感した時、彼女は口を開いた。

「先生、私、先生を信頼出来る方と思って、
全部お話しします。実は……。先生、SMプレ
イということ、ご存知ですか」

「そら、おいでなすった。どうもクサイと思
っていたら、やはりそうか。」

「知ってますよ。医者はそういうことも知っ
てなくては、患者さんのことを理解できませ
んからね」

「そうですか。それで安心しました。実は、
私の友達がSで、私がMなのです。三日程前
に、かなりひどいプレイをしました。そのう
ちに、お医者さんごっこをしようということ
になったのですが、私だってかなり――

先生、おわかりになりますね、この精神
状態――恥ずかしいとは思いませんでしたが
何か悪い病気にでもなったら心配になって
それだけはいやだと抵抗しました。でも彼女
はどうしても許してくれず、とうとう、いや
がる私をベッドに縛りつけ、両脚も縛って無
理やりに、婦人科ごっこをされてしまいまし
た。その人がもう処女でないことは私は知っ
ています。それで彼女は、私ももう失ってい
ると思っていたらしく、おあそび以上のこと
をしようとするので私は思わず『やめてっ』
と叫んでしまいました。あまりの権幕に、彼
女は驚いたらしいのです。『私はこんな方法
で失いたくないの』といってやったら、やっ
と判ったらしく、暫らく私を眺めてから『そ

う、悪かったわ』といって、縄を解いてくれ
ました。先生、そんなプレイがいけなかった
のでしょうか」

「勿論、それが原因だともいえるでしょう。
しかしそういうこと以外の原因でも、こうい
う病気はおこりますから断定はできません。
しかし、そういうプレイは非常に危険ですか
ら、気を付けないといけませんね。幸いあな
たに、多少の理性が残っていたのでよかった
のですが、若しそうでなかったら、大変なこ
とになっていたかも知れませんよ」

「先生、私を変な女だと思われかも知れませ
んが、私、そういうプレイも万ざら、いやで
はありません。実は今の先生の診察の時も、
どちらかといえば楽しいような気分でした。
何だか、いけにえにされているような……」
「よく判りました。とにかく、今日のところ
は、お薬を二日分、上げますから、それを服
んでから、もう一度来て下さい」

「はい。でも先生、前に私の友人でやはり、
膀胱炎になった方が、何か、ゴム管のような
もので尿を調べてもらったと云っていました
が、私には、それはしなくていいのですか」
それで、いつまでも服を着ないわけがわか
った。彼女は、導尿を待っていたのだ。

厳密に検尿するには、消毒したカテーテル
を使って、他のバイ菌が混入しないように尿
を採取せねばならない。それが導尿である。
彼女は、友達から聞いたという導尿に期待し
ていたらしいのである。

「必要になったらやりましょう。今日のとこ
ろは、お薬だけで様子をみてみましょう」
内心では、ハハンなるほどと彼女の気持が
わかったのだが、私は強いてさり気なく、さ
らりと云ってやった。

「お薬を飲んでみた結果で、必要かどうか
わかると思いますから……」

「はい、よろしく願います」

と頭を下げて、衝立の陰に入っていた。
私は誰もいなくなった薬局で薬を袋にいれて
出てくると、彼女はもう服をつけ終わり、も
との清楚なお嬢さんに戻っていた。

「有難うございました。先生、本当によろし
く願います」

そして私の眼をじっとみつめてから、一礼
をして出ていった。

これが、その後数カ月におよぶM・Tの始
まりとは、その時は思いもよらなかった。

(未完)



見果てぬ夢の物語

塚 本 鉄 三

暮から正月にかけて私は関谷富佐子さんの夢を幾度となく見た。

それは全裸にした彼女の両方の足首に縄を掛けて左右に思いきり引っぱったり、胡坐に組ませた足首を括って海老責めの格好にしたり、開いた両足を高々と頭の上まで掲げさせたりして、私が荒々しく彼女を犯している場面の連続であった。

場所は漁具を入れた物置小屋の荒庭の上であったり、コンクリート造りの窓のない密室の板の間であったり、豪華なホテルのベッドの上であったりしたが、いつも彼

女は全裸で私に犯される役であった。不思議と夢の中では、カメラは一度も出てこなかった。

夢を見終わったあとは甘美な余韻があとをひいていたが、現実に戻ってみると、やりきれない空しさだけが物悲しかった。

この前、別れるときに、

「今度お逢いするときは縛られた私が貴方に犯されるところを写真にうつして——」

そう言った彼女の言葉が私の頭にこびりついていて、いつとはなしに、そんな内容の夢を見るようになったのだろう。

上品な彼女の口から「犯して——」という願望を聞かされたとき、一瞬、私は自分の耳を疑い、失礼とは思ったが聞きかえして、そ

の真意を確かめることが出来たのだ。

男女の愛の交歓をへ犯す」という言葉で示すM女性としての彼女の願望。正直なところ男性としての私も、へ犯す」という行為に、ありきたりの普通の行為の何倍かの爆発的なエネルギーを感じたものである。しかも、彼女はそれを細大洩らさず写真にとってほしいというのである。M女性としては、自分の責められ犯されている場面を数多くの人に見てもらいたいのであろうが、実際には不可能なので、せめてその代替行為として写真にとってほしいと願ったのだろう。

露出症気味の女性でカメラを向けてライトを照らすだけで物凄く亢奮するのがいた。実際には何にもしないのだが、自分が写されていると考えただけでハッスルしてしまい、そのまま昇天してしまった女性もいる。

関谷富佐子さんの場合は、それと全く同じではないと思うが、ムチ打ちに陶酔する表情を記録してほしいと願う気持の中には、一脈相通するものがあるように思う。

そんなとき、私の撮影助手志望者の手紙が編集部から送られてきた。せいぜいで二通か三通ぐらいだろうと考えていた私の予想をはるかに裏切って、それは四十数通にも達して

いた。

この前、関谷さんに写真を送る便に托して助手の方を連れていってもよいかと訊いておいたところ、その方が私としても嬉しい、という返事があったので、年が明けたらそうそうに助手の人を帯同して撮影したいと考え、早速、手紙の束に手をつけたのである。

年輩の人、若い人、近県の人、遠方の人、さまざまな環境の方から応募があった。

私はそれらの中から、適当と思われる人に連絡して、次回の撮影に来てもらうことにした。今までだったら、私

と関谷さんの二人の都合を考えれば日がきまったが、今度は助手の人の都合も考えねばならない。

しかし、関谷さんとの撮影日時の手合わせは、一週間か十日程前にやるのだし、それに彼女は今まで一度だって遅れてきたこともないくらい約束を守る人だから、その点は安心である。

或る晩秋の日、約束し

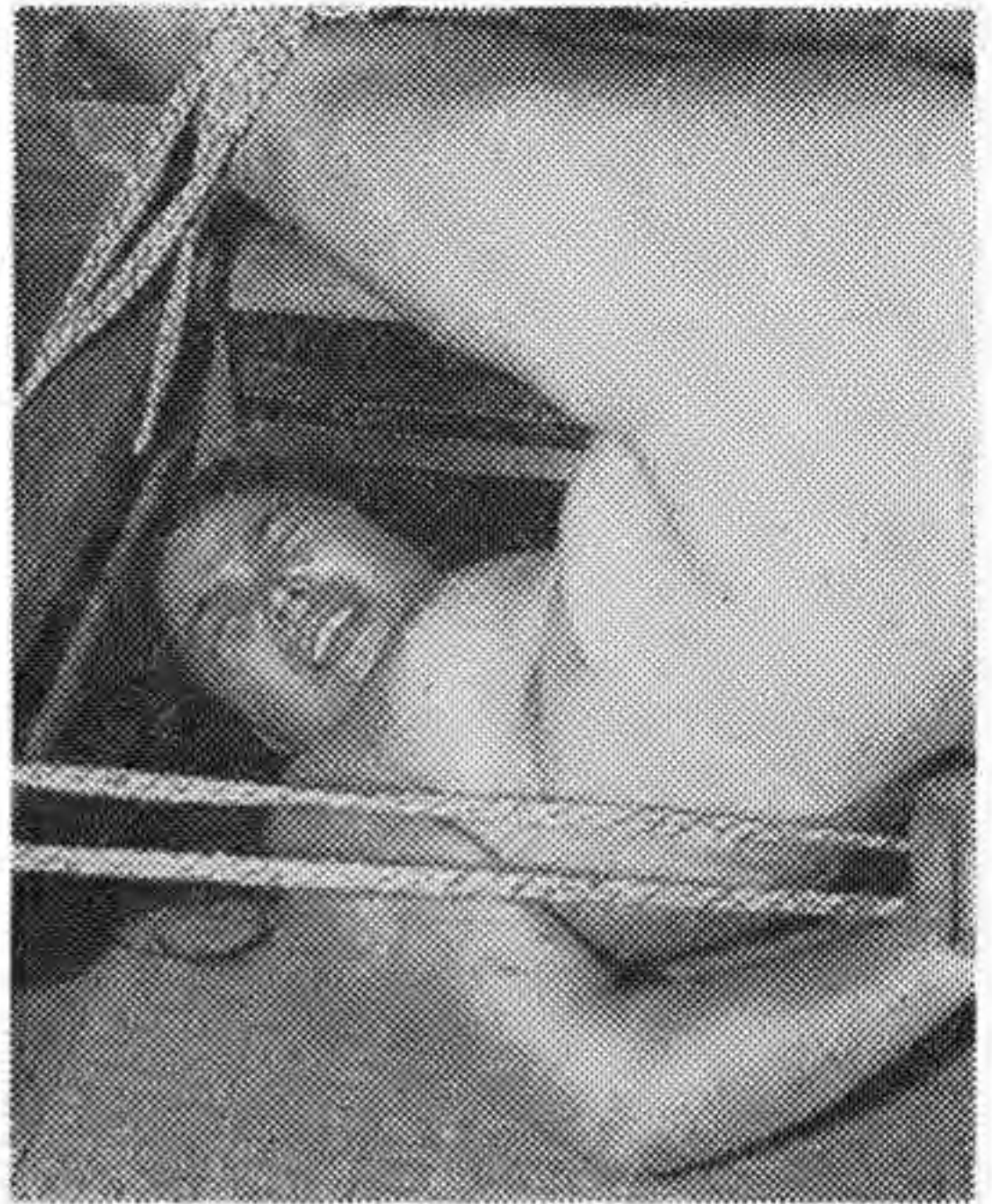


た日は凄しい豪雨であった。車軸を流すような雨が車のまわりを包んで、まるで滝の中を走っているみたいに視界もきかなかった。

こんな日は流石の彼女も来ないだろうと思っていたが、約束の時間より少し前、車を駐めて待っていた。

コツコツとガラスを叩く音に気づくと、関谷さんの白い顔がガラス越しに見えていた。こんなドシャ降りでも彼女は約束を守ってくれたのだ。

彼女の折りたたんだ傘から流れた雨水が忽



ちマットに水溜りをつくってゆく。横なぐりの雨なので、コート姿の彼女はすっかり濡れねずみである。

その日、予約しておいたのは由緒のある料理旅館であった。駐車場から生垣に囲まれた玉砂利道を二十米ばかり歩かねばならない。なにしろ車のドアを開けただけでバケツをひっくりかえたような水が注ぎかかってくるのだから、玄関口にたどりついたときには、下着にまで水がしみ込んでいた。

予約はしてあったが、とてもこんな豪雨の中を来ないだろうと思っていた料亭の人たち

は、「言っておきながら、お迎えに上りましたのに」と言ってくれたが、駐車場から連絡する方法といたら、歩いてくるより仕方がなかったのだ。

びしょ濡れになった二人を気の毒がって、三人の女中さんがつきっきりでタオルを持ってくるやら濡れたものを乾かすやらしてくれて、さて、そんな一騒ぎが終わると私は車のトランクに入れてあるカメラの入った鞆を取りにゆく、しおを失っていた。

取りにゆくのだったら、玄関にたどりついたとき、もう一度引き返えしたらよかったのだが、着くなり女将をはじめとした数人の女中に取り囲まれてしまった。「さあ、さあ」と引っぱり上げられるようにして部屋へ案内されてしまったのである。

冷えきった身体を浴槽で温めた二人が、浴衣に着かえて向かいあって坐ると、いつもとは違う妙な具合なのである。

彼女が入浴している間、私は撮影の準備を整え、私が入浴するようなことがあると、その間、彼女は化粧をしているのだったが今日

は撮影の道具も責めの道具も一切ないのである。カメラがないということは、私にとって陸に上ったカッパそのものといってよい。

外はまだ激しい雨が降りしきっているのか廊下をへだてた硝子戸に吹きつける雨の音がまるで滝の中にいるようだ。天気の日だったら、まだ陽の高い時刻なのに、すっかり暗くて、雨の音さえ除けば、あたりはひっそりと静まりかえっている気配である。

私は関谷さんに近づいて、腰紐を解いた。胸もとから甘酸っぱい体臭がぶんと匂ってきて一瞬くらくらすとする。武者振りつきたい衝動を辛くもこらえて、腕を逆手に捉えた。

前開きになった浴衣の両肩をぬがして腰紐で両の手首を背後にして括った。今日の責めは二本の腰紐とズボンのベルト一本だけである。これを最大限に利用して、あらゆる責めのポーズを研究してみようと考えた。

隣の部屋との境にある柱に後手首を括った紐の余りをつないだ。

そうしておいて、白いズロースを一気に足下まで引き上げた。きれいに剃毛されたすべすべした肌が剃玉子のようにあらわれた。

今日はカメラはない。私の目がレンズの代りである。

部屋中の電気という電気は全部つけ放して私は彼女の全身を観察する。目だけではなく手指を使って、触覚も楽しむ。

幼女のように露呈したそれを羞かしがって彼女は身をくねらし、腰をゆすって避けようとするが、それが一層、私の嗜虐心をあふりたてる。

もう一本の腰紐を使って右足首を括ると持ち上げて柱に縄留めをする。いやでも彼女は片足挙げのポーズをとらざるを得ない。

私の目というカメラのレンズは、あらゆるカメラアングルから、彼女の羞かしがる肢体に狙いをつける。それは真下からのローアングルでも可能なのだから、彼女は全身を波うたせて、視線を避けようともだえる。

いいポーズである。美しいポーズである。挑発的なポーズもある。羞かしさに消えりたいたいポーズもある。身をくねらすときの白い肌の動きの中にも、目を奪うような美しさが躍動している。

ここで私は皮ベルトを手にした。カメラを意識することはない。今日は打って打って打ちまくり、その激しい打撃に対して彼女の全身がどのような反応を示したかをとくと見きわめればよいのである。

皮ベルトを揮うごとに彼女の顔に美しい被虐が現われ、断続的な悲鳴が洩れた。一本足の不安定なポーズは、左足を中心にゆらゆらと揺れ、今にもくずれ落ちそうである。

身体がくずれれば、くずれるだけ、右足が逆に高く挙がる格好になるのだから、彼女にとっては益々羞かしいポーズになるわけだ。

私は彼女の女性自身がムチ打ちに対して、どのような変化をするかを楽しみに鑑賞しながら、胫、太股、膝頭、臀部へとベルトの雨を降らしていた。

ムチの音と悲鳴の伴奏に酔いながら、どのくらいの時間を過ごしただろうか。

柱に留めた後手首の紐がゆるかったために畳に近くまで、ずり落ちて、右足首を上にした奇妙な格好になっていた。畳についた足で必死に支えて全身の安定を保とうとしているのだが、それはカメラを向ける被写体とし

ての役を果していなかった。

私は改めて、彼女の足の指先からはじめて顔の表情に至るまで詳細に観察をくりかえした。彼女は私の視線が全身を舐めまわすと、堪えいりそうな羞恥に身をくねらし、

「お願い、解いて頂戴——」と嘆願した。

ムチを加えているときの悲鳴まじりの世迷言と違って、今は平静な言葉使いであるが、男の心をとろかすような甘い響きがその声音に秘められていた。

その柱縛りが序曲といえは序曲であった。



紐を解くと、ぐったりとうずくまった彼女の裸身を抱えあげて、隣室へ運んだ。ほてった臀部が私の腕に熱く感じる。

それから、私達二人はその密室で更に二時間ばかり過ごした。

雨は、さすがに小降りになっていた。

帰りの身仕度を整えているとき、彼女が

「今日は、お写真、一枚もお撮りになりませんでしたわね」

と言った。

豪雨という天候の異変が、とんだハプニングを演じてしまい、何んとも手持無沙汰で仕方なかった私は、改めて彼女の口から指摘されてみると、皮肉のようにも受取れた。

時間を守る関谷さん——ということを言おうとして、私の懐古は思わぬ長談義になってしまった。

とにかく、約束と時間だけは、きっちりしている関谷さんのことであるから打合わせだけ、ちゃんと事前にきめておけば、あとは心配ないのである。

助手志望の手紙の中に、こういうのがあった。

「関谷さんの表情を見ると、どうも演技の様に思われてならない。責められて真実あ

のような表情になるとはどうしても自分には思えない。それで今回の助手募集に際して志願して直接自分の目で確かめてみたい。しかし現在自分の仕事の関係で自由の時間がとれないのが残念である。」

と大要はこうである。

住所氏名が書いてないの
で連絡のしようもないが
事情を宥せばこういう人
こそ、撮影の現場に立ち合ってもらって、真実のものであるかニセ物であるかを判断してもらいたいものである。

ピンク女優なんかには、苦痛の表情を出すのがまことに上手な人がある。演技として、そういう真迫の表情を瞬間にして出すことは女優としての第一条件であるかもしれない。

しかし見る者には、わざとらしさやオーバーなアクションがすぐ食傷気味になるのはマニアのとくと経験するところである。

マニアのベテランは、真実のものと真似物とを一見して嗅ぎ分ける鋭い嗅覚のようなも



のを持っているから、ごま化しはきかないのであるが、写真を見ただけで見分けのつかない向きには直接見てもらうより仕方がない。

嘗て伊藤晴雨氏が

「責められる女が苦痛の表情をあらわさず、一見無表情のような状態を示することがあるが、女が陶醉状態にあるときは、間々そういうことがあるものである。従って激しく責められているのに、女の表情に現れていないという非難は当たらない」

という意味のことを書いておられるのを読んだことがあるが、責め実践の第一人者であ



る晴雨氏の体験談であるから間違いはないと思う。私もM女性のモデルを相手にして、そういう場面に出合った経験がある。

責めれば責めるほど、うっとりとした表情になってしまふのである。写真にして、これほど困ったものはないが、しかし責めを好む女性の中にはこういったケースも少なくはないであろう。だが関谷富佐子さんは違う。表

情がまことに豊かなのである。といって演技で殊更つくったこしらえものではない。

彼女の天性からにじみ出た個性のようなものであると思う。他人が真似して出来るものでもないし、どうしろ、こうしろと要求して出来るものでもない。M女性として素人の彼女のナマのキジが、そのまま天真爛漫に表現されていると見てもらっていい。

Sファンの男性読者からの通信に、こういうのがあった。

「この世の中に本当にMの女性っているのだろうか。雑誌に書いてあるMの女性を責めたというような記事は皆作り物ではないのか。自分は永年Mの女性を求めているが、自分の周囲に一向にそれらしい女性を見つけることが出来ない。それでこの世の中にMの女性なんていないんじゃないか、誌上に書かれている記事は創作ばかりではないかと考えるようになった」

これは、ごもつともな意見である。この方の言われるようにMの女性なんて、そこらにごろごろしているわけではないし、第一、首にへ私はMですと看板をぶらさげているわけではない。それに、そういった傾向を持っていると自覚した女性は、どうしてもかくそ

うとするだろうから、尚更見つけだすのは困難であるわけだ。そして結局、この世の中にMの女性なんて実際にいるのだろうか、という疑問となってくるのだ。

もう大分、以前のことになるが、私は編集部から一通の手紙を見せられて、御足労が一度当たってみてくれないかと頼まれた事がある。封筒は女名前になっていて住所は書いてない。手紙の文章を読んでみて、これが若い女性の書いた文なのかと私は疑った。

便箋五枚に書かれた手紙の内容は、これすべてMの願望と空想なのである。読んでみると実際に経験したことなのか、空想なのか区別のつかない箇所もある。女性の文章はリアルで露骨だといわれるが、内容はちょっと公開できぬくらい、あからさまなのである。

住所も書いていないし、これは男性の悪戯ではないかと思ったが、最後のところに待合わせの場所、日時、それに目印に左掌に白いハンカチを巻いているというのである。

ホームで待っているというのだが、その駅は急行の停車駅でもないし、時たま到着した普通車の乗降客が去ってしまうと、二十分や三十分は人影もない閑散な駅なので、欺されたと思って、暇つぶしに出かけてみた。



百歩無駄足だと思っていたのに木製のベンチにちょこんと坐っている若い女の左手には白いハンカチが巻かれている。電車の到着にはまだ時間があるのかホームにある人影はまばらで、ベンチに坐っているのは彼女一人だったので、すぐに判った。

ここでは、ゆっくり話も出来ない駅前の喫茶店へ誘ったのだが、私が話しかけても、「ええ」とか「いいえ」とか返事するだけでとても、あんな凄いMの願望を書いて寄こした女性とは思えない、控え目な態度。羞かし

がっていると、遠慮していると、それ以上私の目には、むしろ私の話しかけを迷惑がっているという風にしか見えなかった。

さすがにホテルの一室で二人きりになって縄と緊縛に移ると、M女性の本領を発揮して全身に喜悦の反応を示し始めたが、表情の方は相変わらず無表情なのである。というより何か顔をかくしたがる風である。責められて喜ぶ表情が顔面に出るのが恥かしいから殊更忍び押しかくしている風にも見えた。

写真の発表は困るというので、余り枚数は撮らなかったが、二度三度と回を追って飼育してみたい意欲にかられた女性であった。しかし、その後改めて連絡するといったまま、便りもないので、謎めいた女性として、今に至るまで心に残っている。

無表情というには余りにも冷たい表情、彼女を行きずりに、ふと路上で見かけたとき、

誰が彼女の内に秘めたMに対する激情を知ることが出来るのか。

従って前記氏のように「この世の中にM女性なんて実際にいるのだろうか」という慨嘆になってくるのだろうか、M女性というものは探求するものではなくて発掘するものであるといわれているから、一つ観点を交えて見る必要があるのではなからうか。

M女性の見分け方というのを、性格とか外貌から判断する方法を述べている人もあったが、多弁で活発な女性の中にもM傾向の人も多いので一概に論ずることが出来ないような気がする。

しかし、逢って話をする機会さえあれば、これは脈があるとか、とても駄目だとか、第六感で或る程度の判断が出来るのではなからうか。

そんな、とりとめもないことを、あれこれ考えていると、関谷富佐子さんからの便りがきた。

助手の人と一緒に撮影した彼女の写真が、いずれ誌上を飾ることになるだろう。どうか期待していただきたいものである。

——(おわり)——

スクラップよりの幻想



あるマニアの

たわごと

須 渾 朔

マニアとして余り珍しいことでもなさそう
で気がひけないでもないが、私もまた切り抜
き狂の一人だったことがある。私好みの記事
フォトを、馬鹿みたいにあさってはスクラッ
プしたもの。それは、我乍ら珍妙という他な
い肥満体狂崇、マゾの記事とフォト（といっ
ても私好みとなるとごく限定され、又、随分
と気まぐれのせいで散逸しがちだったりもし
て、労多いわりには集められなかったが）で
あった。

私の肥満狂崇癖は幼年時代からのものらし
く、その昔、玉錦という横綱がとっても好き
になってしまい、そのメンコや手札型のプロ
マイドみたいなものを集め、更に、日光写真
なんていう、チャチなオモチャがその頃少年
間に流行、私も角力取りの、特に、専ら玉錦
のを、やたらとこしらえては悦に入っていた
ものだ。

ホモでもあったといわれる詩人ジャン・コ
クトー、彼が相撲取りに桃色の巨人という讃
辞を呈したのは有名だけれど、その讃辞は主
に玉錦へ与えられたものと考え得ないことも
ない。というのは、彼の来日時のチャンピオ
ンはこの玉錦だし、今でも私の古いスクラッ
プブックには、コクトーや藤田画伯と並んだ

見事にはりきった玉錦の肥満体（コクトーは
珍奇さのいくらか混じった、やや憧憬的な、
外人特有のオーバーな眼差しで、この桃色の
巨人に視線をやっている）の、古い相撲誌か
らの切り抜きがはられている。

そして少年の私は、この玉錦から、いつし
か狂崇の対象を明治の角聖常陸山へと移行し
ていたのだった。もとよりお目にかかった筈
もない常陸山、その記事や写真はなにかと、
（私には肥満体狂崇的な、ホモ、それも主に
ウールニング的空想傾向が存在することを否
定し得ない）探し廻った覚えがある。この常
陸山の、豪快で男性的な性格や取口を読み、
そうした性格もさることながら、はり切った
迫力ある太鼓腹（この太鼓腹という字を見た
だけでゾクツとする）や、勇ましい風貌が揃
っている、私という人間は、実にたまらな
くなる。まことにへんな少年であったのだ。

それが、戦後は相撲取りに殆ど関心を抱か
なくなったのだが、もう十年前も前、「肉体へ
の讃美」なる本を見つけて感激。何故といっ
て、そこには肥満体への讃美的記事で満たさ
れ、泰西肥満美女の、何とも魅惑的な挿画も
挿入されているのだった。私にとり印象的な
記事が少なくなかったが、例えば、太平洋の

某種族では、酋長になる資格としてバツグンの肥満体でなくてはならず、余りのでぶちゃんのために酋長は小屋でねられず、戸外で就寝する。なんてマンガ的なことが列記してあり笑ってしまった。又こうして肥満狂崇拝は、世界の殆どの種族に見られるが、その例外は日本と中国のみ、とあって、成る程と思ったものである。その理由は色々あるだろうが、日本人特有の肉体的（容貌も含めて）な特徴によるのでは、と考えたりした。

西洋人の（黒人もそうだが）もともと黒人の場合、白人のそれより一層手足が長く、そのいくらか変調なプロポーションが、R & Bジャズなんかの黒人音楽の成因の一つではないか、と考察する評論家も存在するが、あのプロポーションのとれた格好。立体的な、容貌。それが肥満した場合の魅力（もちろん私にとつての）を考えたときにうなずけるような気もする。あれを読み、日本にこの肥満狂崇なる伝統がまるでないらしいことを、マニアとして淋しく思ったりしたのだが、私はマンガが好きだし、西洋人肥満美女のカリカチュア的な挿画は、奔放に誇張されて全くすばらしい。

最近では切り抜く回数も全然少なくなつて

しまったが、それでも「世界の女」展でのロシア篇、妊娠何カ月のロシア女性の何人かがそのすてきな太鼓腹を天井に向け、妊娠体操の真最中。私好みの外人大女が、何ともすばらしきエロとグロを適度に発散、その迫力が圧巻でユーモラスで、思わずため息と共にハサミを持った私だった。（それにしても西洋人大女のすばらしさ。東京オリピックの時はちょっとばかり楽しかった。テレビでタマラ・プレスさんを見れたから）

更に、某家電メーカーのカラーテレビの新聞広告。珍しい肥満体の鬼登場。見事な太鼓腹した鬼氏が金棒にもたれ、虎か何かの輝もユーモラス。何度目かになると、最初のサイズがぐっとでっかくなり、同時に赤色カラーの鬼となり笑っちゃったけれど、これは新聞広告としても傑作にちがいない。

もう一つは、M新聞にのったもので、実は何ともマゾヒスティックなものをおぼえて仕方なく、切り抜いておこうと思いつながら、何かの都合で後廻しにしたのがいけなかった。後から探しても見当たらず後悔したものだ。某要人（わざわざ書くまでもないので）が、某国訪問の際の何ともマゾ的で皮肉な（ことわっておくが、勝手に私がそう感じたという

だけの話）もの……。というのはその人々の表情が実に傑作だからで、彼は講演のために某大学に行くのだが、男女学生達に、「ヤーイ、戦争きちがい」とはやされている。それに私は、田沼醜男氏好みの世界そっくりみたいな連想を禁じ得なかったのは、どうしたところか。

その秀抜でカッコいい容姿、実に知的でギリシャ彫刻のような容貌の美しさと、罵倒され、はやされたためにムキになって口とんがらせた硬直した顔。——余裕たつぷりの前者と逆の後者。その対比の何ともいえぬマゾ的（そう思ったのは私のみか？）なことよ。こうした国辱的？ 写真をのせるようになった新聞を持つ我が国の文化も、考えてみると進歩？ したものの。

ボードレールの日本人猿説？ 同じ仏詩人アンリ・ミシオオの有名な文句（要するに、皆、豚の眼をして口は突出、能面づらした下等人種だなんて、何ともにくたらしいのもいところ、全くひどいことまで記した日本紀行文）から何十年。旧号「手帖」等で指摘された沼氏の、白、黄の優越、劣等感についての考察的な文に接してからも既に何年かを経過。現在の日本は実に経済的大国だなんて言

われる如くなってるのだから、この印象的な写真が一九六〇年代に現われたことに、ある種の感慨を覚えざるを得なかったのは私のみだろうか？

「もし、彼が白人の要人だったら、学生達の表情は、もっと別のそれであつたにちがいない、と考えられないか？」だなんて、無理に考察してか、こつけちゃったつもりになったけど……。

さて、何とS・Y氏、突如随員どもの前か

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

ら煙の如く行方不明、といつてまさか四次元の世界に迷入ししまった、だなんてしゃれた話なんぞ起こるはずもない。実は戦争狂だなんて云われるほどの彼は、平和愛好者とかいう、白、黒ヒッピー？ 達に美事つれ去られかんぶくろにいれられ、とある倉庫の中へと監禁という、実に、とっても大ピンチ。かんぶくろからやっと出されて、今度は手錠かけられロープで縛られ吊るされ……あとは田沼シコオ氏お得意のマゾ小説的となる。

手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

だから、当然一味のボスは金髪美女大女、そう、アニタ・エグバークばりの（いや、ちよっと古すぎるかな、まあいいや）美人で、ただ縛っちゃったり、鞭打ったり、けつとばすだけじゃ面白くもない。それだけの値打ちもないということ、

「こんちくしょうのしょうねを入れかえてやるために、ホワイトさまのハルンでもおし頂かせてやろうじゃんか」

これは、もちろん、女ボス。

「ウァッハッハ。おありがたく思えってんだ黄色い、えて公のくせに」

金髪美女はさもゾクゾクしちまったてえ顔でもっとやれとばかりに男共をせかします。（一流大学生にしてはあんまり品がよくないなヒッピーにしては人種差別的すぎるしネ）

「こいつの口を見てみるよオ。まるで魚みてえだぜ」

「兄弟のやつは鳥みてえだったがよオ」

てなわけで、これは勿論、私の見ちまった夢でありました。翌朝、新聞を見たら、この彼が、別にきかれもしないのに、さも得意になつて？ こちらの記者団にしゃべってる。

「私を下品に罵倒した大学生なんて、ほんの一にぎりのやつだ」なんて。全くお粗末。



懸賞創作

おナベの浮気

林 タ ケ シ

遠くの方で汽笛が鳴った。もう朝靄^{もや}をついて、出航する船があるのか。それとも、はるか異国からやって来た船だろうか？　ここは山手の住宅地なのに海の様子は空気を伝わってわかるのだ……。

ボクは、ぼんやりした頭で、そんなことを考えていた。

突然、

「お前も男の仲間入りしてるのやったら、度胸あるやろな」

「姐^{あね}さんに手出したからには指の一本や二本ですまんぞ。え、何とか云うたらどないや」
赤錆^{ささ}びた鉄をこすったような声で、男が怒

鳴った。

「まア、ええがな。みればまだ若いんやし、俺らから見たら子供やないか」

「そやけど親分、わいらが見たんは子供のすることやおまへん。結構、ええ線いってましたで……」

「ほんまに、今はやりのレズかなんか知らんが、シロシロでショーしたら、よう儲^{もう}かりますせ」

巻舌^{まきず}を使って、もう一人の男がボクを見ながら云った。

白い晒^{さらし}を巻きつけた台と、短刀が一振り、豪華な応接セットのテーブルの上に置いてあ

る。どうせオドシにきまってるだろうが、無気味なことこの上なしだ、ヤクザの世界では、指をつめると云うことなどは日常茶飯事だろうが、素人のボクが、幾らへたうったからと云って、大事な指を落とされてはたまったものじゃない。

耐えがたい恥ずかしさと恐怖に唇を噛むボクの前には、五十がらみの脂ぎった、親分と称する男が、ふかぶかとしたソファ^{ゆふきつ}に悠然と腰を降ろし、結城紬^{ゆうきつ}の着物の胸許から、懐手の右手を出して、頬の傷痕を撫でている。ボクは空になった胃袋から、気味の悪い粘液が、ぐぐっと、込み上げて来るのを感じ、慌

てて口許に手をやった。

嘔吐しそうになったのは、飲みすぎや睡眠不足だけではない、彼等への生理的嫌悪、いや、それよりボク自身の愚かな悔恨と、屈辱の塊によるのかも知れない。

昨夕は、十日戎だった。商売の神様のエベッさんの晩が、どうしたとか、全く閑古鳥の鳴く閑さであった。宵から、まだ、いつもボクをご指名になる小母さま一人。少しばかり飲みすぎたボクは、大いにハッスルして、かなり濃厚なチークダンスをした。

「タケシ、とてもダンスが巧いのね……」

と、うっとりした小母さまの声が、ボクの耳許で囁いた。

有線放送の曲は丁度「ジュテーム……」惱ましい溜息の部分が、もうすぐ流れ出す。そう、あの本国でも発売禁止になったとか云う「ジュテーム」……いい曲だけど、発売禁止になっても仕方がないな、と思ったりする。

ますます身体をくっつけてくる小母さまをボクは少々うんざりしながら、

「小母さまこそ、何てお上手なんでしょう。

ボク、とても倅せ。夢のようよ……」

と、意識してハスキーな声音で、営業用科

白を吐いた。そして、ぐっと腕に力を込めて彼女を抱き締め、唇を熱く燃えた項に這わせでいった。

オーモナムール……オージュテーム……

そのうちボクの体内で、アルコールではない、何か別の熱いものが騒ぎ出した。明子とでなければ、感じてはならない苦の感情が、チークダンスに引き出されてくるのである。

思わずボクは、ぶるぶるっと戦慄し小母さまの耳許に切ない吐息をもらしてしまった。

小母さまの方はもっと燃えているらしく、握っている手が、じつとりと汗ばんで来た。体重がズシリと重たくかかってくる。

「よう、よう、御兩人！ お熱いわ……」

ママがカウンター越しに声をかけてきた。

「ウルサイね。邪魔しないで、ムードこわれるわ……」

何かと云うとママはすぐ声をかけるので閉口だ。昔、ゲイバー時代、ショーの時に野次って景気付けした習慣が残っているのだろうけど。このゲイボーイ出身のママをボクは少しも尊敬していないし、もちろん同じ倒錯者だからと、最初寄せた信頼感も取り払った。何だか腹黒そうで無気味なところさえある。それに、やっぱり経営者と従業員だから、あ

る面では共通の利害関係があっても、結局搾取者と被搾取者で対立する訳だ。ボクや、マネージャーのマーク、同僚のケンとアキラの四人が一生懸命働いて、店はかなり繁昌しているのに、「お店は開店して一年足らずですよ。赤字なのよ。儲かったら、みなさんお給料アップするわね。約束するわ」と口癖のように云うのだが、入店以来ボク達は、一日千円の日給月給の上ったこともなく、ただお客さんが、

「何かお飲みなさいな」

とすすめてくれる時、

「コークハイいただきます」

と、ちよっぴりウイスキーの入った、通称ヒガシマル（うすくちのこと）を飲んで、後で百円払い戻しをされるのが、楽しみなだけである。

このヒガシマルのドリちゃんを、平均五、六杯稼ぐし、チップと合わせると月収は四万円余り。アパート代は店持ちで夕食付、と云うので、十九才のボクにしては、並のオフィスガールより少しはましな生活なのである。

ボクはせっせと貯金して、いつか小さなお茶漬屋か何かの店を、明子と二人で開くのが夢。苦しくても、絶対に力を合わせて実現し

ようと、昨日も彼女と誓ったものだ。ほんとにお嬢さん育ちの明子は、感心なくらいよくやってくれる。ボクは自分の甲斐性の無さが恨めしいくらいだ。

今年の正月は、家出して初めての帰宅だったが、母さんが、

「お前、神戸で一体、どんなお勤めしてんのや？ いつまでも我俣せんと、家にいて父さんや母さんのお手伝いしてえな」

と例によって愚痴った。ボクの家は、Sニータウンの中のスーパーで、小さな食料品店を営んでいるのだが、人手が無くて困っている。妹二人は、まだ小さくて、学校がせい一杯と云うところで、とても役に立たない。全く親不孝だと思ふけど、ボクはナイチンボーイの生涯を親と一緒に生きられないと思うのである。

いくらマスコミによって、レズだのホモだのと騒がれても、大正生まれの父さんや母さんにボクの倒錯の真実がわからう筈もない。小さい時から、男の子のように振舞ってきたボクでも、年頃が来たら女になって、養子を迎えて、孫の顔も見せてくれるだろうなどと思っているに違いなのだ。親子の断絶、と云

うより、ボク達倒錯者と、正常な社会の人間との断絶、と云うべきだろう。

昨年お店に、ある雑誌社の人が来て、「あなた方、いや、君達の生活と意見を聞きたい」

と云って、パチパチ写真を撮り、マネージャーを始めみんな真剣に語り合った。結局ボク達だって何も妖怪変化ではなく平凡な人間なのだから、つまりは幸福な生活がしたいだけだ。すべての人間は平等で、幸せな暮らしを送る権利がある、と憲法にもうたっているではないか。などと主張すると、彼等はふんふんうなずいていたが、果してどれだけ理解してくれたやら……。

ま、法律では特に同性愛を禁止してもいいし、ある程度の自由は認められているようなものの、古くさい因習にとらわれた人達はまだまだボク達を奇異な眼で見る。又ボク達の仲間にも、妙な道德観をもっていて、「何と云っても、同性愛は世間では認めてくれません。ぜったい多数のノーマルな人々には、永久に背徳として存在するのです。私達は、自然の摂理に悖り、神の道に背いているのですから、ひっそりと社会の片隅で生きて行かねばなりません」

などと云うのである。ボクはその人達よりうんと若く、新しい時代に生まれて来たせいとか、それとも本質的に、楽天型なのかはわからないが、何も世間に気兼ねなどしないで、堂々と生きているつもりだ。しかし、父さん母さんの前で、本当の男のように、明子を女房扱いにはできない。やっぱりボクの感覚も規制のモラルに毒されて、古くさくなっているのだろうか。

梅田の駅まで送って来た母さんが、「ほんまに早よう帰って来てや。神戸は近いけど、商売してたら、仲々見にも行かれへんさかい……」

と云って、お餅の包みを手渡してくれた。「何も心配せんといて！ ウチはウチで、何とかやってるんやから、あんまりうるそうに云わんといて」

と答えながら、ふと可哀そうになった。「明子ちゃん、元気かいな？ よろしゅう云うといて」

「うん。相変わらずや」
「一ぺん遊びに来たらええのに。高校の時はあなによつ泊りに来てはったのに……」
どきんとした。何も知らない母さんが、皮肉を云う筈もないのに、どうも神経質になり

すぎる。昨年の春から、神戸の喫茶店に住みこみで勤めていることになっているから、今も二人は親友と思われているはずだ。

ボク達が深く結ばれたのは、丁度、冬休み前の試験にかこつけて、ずうと明子が家へ入り浸っていた頃だから、もう一年以上になる訳だが、考えてみれば不思議な縁だと思う。寒いホームで電車を待ちながら、明子とのきかけを思い出した。

一昨年の七月、ボクたちは小豆島へ遊びをかねた合宿に行った。明子も、ボクも身長は一メートル六二センチで同じだったが、ボクが色浅黒く細く締まって筋肉質な感じなのに比べ、明子は皮膚が滑らかで、青味がるほど白くて、病身ではないけれど、繊細でしなやかなのだ。卓球部では、二人ともまアマの技量だったが、ボクの鋭いスマッシュと、明子の軽やかなショットがダブルスに組むと不思議な強味を発揮したものだ。

小豆島のKと云う海岸は、それはそれは素晴らしくて、白砂青松、と云うか、都会の海とはまるで別世界のようなたたずまいで、ボク達を喜ばせた。海の家を一週間借りて、ボク達は先生も入れて十五人、ワイワイ、キャ

アキャア、春の駆け足修学旅行と違って、全く楽しいこと、この上なしだった。

午前中は、島の高校の体育館を拝借して練習にはげみ、午後は大い泳いで暮した。ボクは子供の頃、和歌山の親類へしょっちゅう行っていたから、泳ぎは得意な方だった。明子たち泳げない者は、モーターボートに乗ったり、砂浜で、オリーブを全身に塗って、肌を灼いたりしていた。泳ぎの出来る者も、遠浅の海岸線に沿って平泳ぎや横泳ぎなどで、用心深く右から左へ、左から右へと移る程度で、あまり沖へ出る者はいなかった。ボクはカッコいいところを見せたくて、先生がハラハラするほど沖へ向かってクロールの抜手をきってみせたものだ。

あの日、エメラルドを溶かしたような海から、ボクは水しぶきを、ぶるんと払って、砂浜に上った。濡れた波打際から、灼けつくほど熱い乾いた砂の上を歩いて、よしず張りの小屋まで行くと、ボートに乗っていた良江があわてて後を追って来た。彼女は、何かと云うとボクの世話をやきたがる。丸まっちい身体を、グリーンと赤の派手な花柄のビキニでつつみ、人の好きそうな八重歯をちらつかせながら、いい寄ってきた。

「武子、疲れたやろ。あんなに遠いところまで泳いで、ウチ心配やったわ」

「平気や。このくらいで疲れへんわ」

そっけなくボクは云って、コーラを買いに売店に向かった。すると丁度、売店に立っていた明子が、

「武ちゃん、はい、どうぞ……」

と云って、よく冷えたコーラを、すっと渡してくれた。そして、

「武ちゃん、ずっと見てたんよ。とってもカッコいいわ……。魅力よ！」

と云いながら、ボクの濡れた髪に触れた。ボクは思わず、茶色の泡立つ液体にむせそうになった。何故だか突然、電流に触れたように、身体の中を通り抜けたものがある。今まで一度も、誰と触れあっても、接吻していてもさへも感じたことのないものだった。ボクはふっと赫あかくなった頬を意識した。明子のオレンジ色のショートガウンの前が少しはだけて良江などとは違ってセンスのよいビキニから可愛らしいおヘソが見えている。ボクはドギマギしながら云った。

「コーラのお金、払うわ」

「いいの。オゴってあげる」

明子は、形のよい唇の辺りに微笑を浮かべ

て云った。良江が横でふくれた顔をしていたが、ボクは全然、平気だった。

夜に入ると、町のゴーゴースナックに遊びに行く者もいたが、ボク達は自然美の中にいる方がいいと云って砂浜に出て寝ころんだり歌ったり、しゃべったりした。昼間はかなり賑やかな海岸だが、もう人の気は殆ど消えてゆるやかな波の音がザワザワと聞こえるばかり。少し中心からはずれた所は、漁船がひき上げられていて、コールトールを塗った舟底をかがせている。ロマンチックなムードが一杯だった。

ボクの傍には、大てい良江がいたが、その晩は夕食前から、頭が痛いと言っていて、早く床に就いてしまった。ボクが冷たくするのが原因だと云うのだ。良江とボクは、接吻くらいする仲だったが、彼女を好きだと思ったことは一度もない。ボクが今までに、夜も眠れないほど好きになった人は、高一の時の国語のF先生ただ一人だ。先生は野際陽子張りの美しい人だった。長い睫がいつも悩ましげに瞳に翳^{かげ}って、ノーブルな鼻や知的な頬の線を和らげ、ボクの心を憧れで一杯にした。

ウルトラHのK先生や、キザ氏のY先生が追いかけて廻していると云う評判だった。ボク

は勉強はあまり好きではなかったが、F先生に気に入られたくて、国語だけは必死で勉強した。先生への思慕は日毎に激しくなり、夜はなかなか寝つかれず、眠っても先生の夢をよく見たものだった。しかし残念なことに、たった一学期でボクの女神は東京へ行ってしまった。初恋は片想いのまま、空しく潰れてしまったのである。

それからボクは、宝塚にも熱中した。しかし、彼女らとは舞台と客席の関係にとどめておくべきだと悟った。オフステージのスターと交際するにはお金がかかりすぎる。自尊心を失って女中にでもと言うファンもいたが、ボクには出来ない。

ボクはその後、クラスメイトや上級生、下級生、何人かの人とエスをした。と云っても心から愛情の湧くような関係になったことがなく、全く他愛ないものばかりだった。今のところ、良江が最も一生懸命になっているがボクの方はうんざりしている。

その良江は、もう眠ってしまったのだろうかと思ふと歩いて歩き出した。満天には、降って来そうな沢山の星があった。後から誰かが、サクサクと砂を鳴らしてついて来る。明子だった。ボクは予期していなかったので戸惑っ

たが、胸がときめき、オーバーに表現するなら、運命、を感じてしまったのである。

「武ちゃん、独りで散歩して、ムードに浸ってんの？ 私と一緒にいていい？」

「みんなどうしたん？」

「まだ飽きもせず歌うてはる……」

「ほんまによう飽きんことや」

ボク達は、肩を並べて少し歩いた。

「明ちゃん、ボーイフレンド多いんやてね」

「ウソやわ。噂だけなんよ。本当に付合ってるの、一人だけなの」

「ふうん？ あんまり美人やさかい、いろいろ取沙汰してくれはるのや」

「おおきに。でも男って、自分勝手なことばかり云うて、我儘で、第一ムードがあらへんわ。もうすぐ別れようか思うてるくらいよ」

「彼、そやけど、すごいハンサムやそうやないの？……カッコいい車も持ってるし、ボンボンやろ？」

「お金持ちがどないしたん？ そりゃお金あるにこしたことないわ。けど、人間ってお金ですべてやあらへん」

ボクは不思議なものを見る目つきで、明子をまじまじと見つめたものだ。

ボク達の学校は、女子の私立にありがちな

華やかな外見ばかり追う虚栄心の強いお嬢さん連中がかなり多かった。明子もそのグループの一人だったし、ボクはそれまで敬遠していたのだが、彼女は案外内面的な深みを持っているのだな、と思った。

「彼、どこの大学？」

「いややわ、武ちゃん……。そんなこと、もういいやないの」

明子は会話を打ち切って、丁度行きついた漁船の舳先^{へさき}の近くに

「ここに坐って」

と云ってボクの手を取った。

明子は生粋の浪花っ子で、田舎は全然知らないことだった。家は船場で料亭をしていて、独りっ子の明子は文字通り箱入り娘だった。小さい時からお稽古事ばかりやらされて、都会流に育てられた彼女は、ボクの話す和歌山の海辺の村の生活が楽しそうだと云って羨んだ。

「一ぺん一緒に行ってみえへん？ 明ちゃんと二人で暮せたら楽しいやろなァ！」

「ほんと？ 連れてってくれる？」

「うん。きつとや」

「いやあ、武ちゃん、好きやわ！」

明子はそう云うなり、ボクに抱きついて来

た。一度に、血が上るのを感じた……。そして、明子を愛している！ と思った。ボクはそっと、空いた方の腕を廻して彼女を抱きかえした。明子の長い髪から、微かにヘアトニックが匂って、ボクの鼻をくすぐった。

ボク達は自然に船蔭の部分に横たわり、接吻した。甘い味がした。明子はすぐ応えてきた。ボクは明子を力一杯抱き締め、ぐいぐい砂の上に押しつけた。明子の髪が乱れて海藻のように広がっている。

やがて、ボクは胸の奥が疼くような感覚に襲われた。そして明子ともっと接触したいと云う欲望を感じた。

週刊誌などで、セックスの知識は豊富だったが、現実には、ボクはまだ何も知らなかったし、むしろオクテの方だったから、自分でも驚いてしまった。どうしていいかわからないのである。おそろおそろ右手で明子のワンピースの裾を掴んだ。頭はガンガン鳴って、胸が早鐘のようにドキンドキンと脈うっている。明子は、あわてて唇を離すと、

「ダメ！」

と小さく叫んだ。けれども、少しも拒絶する様子もなく、むしろそれからボクの手を導くようにした。ボクはすっかり夢中になって

いた。その時、突然人の気配がして、ボク達は息をひそめた。

「あなた達、こんなところにいたん？」

船腹の向こう側で声がした。

結局、ボク達はその場かぎりチャンスを失ってしまった。大阪へ帰るまで、良江がくっついて離れなかったし、あんなに熱烈な接吻をしたのに、明子は忘れたようにずっとそ知らぬ振りをしていた。ボクは熱い眼をして彼女を追ったが、彼女のそっ気なさに、自尊心が傷ついて、それ以来こちらも無視の態度に出ることにした。

内心、苦しくて苦しくて仕方なかったのは云うまでもないが、ボクは卑屈になって愛を請うなんて、とても出来ないのだ。ボクの信条は、いくら貧しくても、心は王者の如くであるから、物質的にはもちろん、精神的にでも頭を下げるのは大嫌いなのだ。それで、明子とは新学期が始まって、今まで通り、通り一ぺんのクラスメイトであり、卓球部員であった訳だが、期末試験のノートを貸し借りしたこと、ふたたび二人の仲に微妙なムードが、漂い始めた。きくところによると明子はK学院の彼と巧くいってないと云うことだった。

「今晚、徹勉しない？」

明子の方から申し出て来て、ボクはすっかり有頂天になった。チャンス到来と思った。

ボクは二階に四帖半の独立した部屋をもらって、妹といえども無断で入れない自分だけの城を作っていた。およそ女の子の部屋とは思えない、といつもお母さんを歎かせているほど、車の写真や、黒人のジャズメンのポスターや、大学のペナント、女優のヌード写真などはりめぐらしていた。ボクはその城にたてこもり、深夜放送をききながら、すっかり男になったつもりでいたのである。Gパンはいて寝そべり、煙草をふかしたり、こっそりお酒も飲んだ。ボクは将来、家の商売を手伝うより、計理士かなんかになりたいと思って、大学はK大の経済をめざしていた。しかし、チャンスは一度だけだと因果をふくめられていたら是非でも通らなければならなかった。明子はS女子大の短大部に行くはずだった。どうせ彼女らは花嫁コースに決っている。

ボクがいつも連れてくる子は、平凡な良江クラスが多かったが、その晩八時頃、初めて明子が姿を見せると、母さんは彼女のゴージャスな大人のムードや、上品な容姿にすっか

り驚いたらしく、大人に対するような、改まった挨拶をした。

それから二人は電気ゴタツに向かいあって本やノートをパラパラめくっては、申し訳のように勉強したが、一向にペースに乗らなかつた。乗るはずもない。ボクの頭はカッカッと燃え上っているばかりだった。明子は淡い水色のセーターに、タータンチェックのミニスカートがよく似合い、うっすらと化粧もしていて新鮮で匂うような美しさに見えた。ボクはうわの空で彼女の瞳をじっとみつめた。明子はうつとりした表情でボクの目を見かえしていた。心なしか彼女の瞳孔はキラキラしていた。まるで燃えている情熱の反射のようだった。

「今夜は夜明しや。ちょっと休憩しよう」

「そうやね」

「ステレオかけよか？」

「夜遅うでも、かまへんの？」

「かまへん、かまへん！」

ボクはコタツから立ち上った。レコードキヤビネットは彼女の背にあたる場所に置いてあり、ボクは明子の後ろに回った。その時二人の身体が触れ合った。彼女の手がボクを掴んだ。ボクは思わずよろけて彼女の上に倒

れかかった。それから夏の浜辺で起こったことが再現されたことはもちろんである。あの時は途中で人が来たが、今夜は誰もさえぎる者はいない。

明子はバージンではなかつた。ボクは多分そうだろうと想像していたので、大して驚きもしなかつた。かえって、リードしてくれるので、都合がいいとさえ思った。それからボクは激しいショックを受けた。ボクは自分の性を呪わしく感じていたから、女性のことが精しくわからなかつた。わがらうとも思わなかつたせいもあるが、だから全く驚いてしまった。ただ明子にいわれるままに従った。

どの位時間がたったかわからないがボクが我にかえった時、明子はぐったりしていた。どうにかなくなってしまったのではないかと、むやみに心配になった。

「明ちゃん、明ちゃん、ね、明ちゃん」

云いながらボクは彼女の頬をピタピタとたたいた。明子は「ん……」と、ふと遠いところを眺めるような、うすぼんやりした瞳をあけた。そして、たちまち恥ずかしそうに、ボクの胸に顔をふせた。

二人は照れながら冷えたお茶をのんで、ぼつりぼつり話し合った。明子がエゴイストの

ボーイフレンドと別れたいきさつや、二号をかこって母親を泣かせている父が嫌いだから家出したい、などと打明けてくれた。ボクは家庭的には悩みはないが、男の子をどうして好きになれず、今まで女の子ばかり目について、自分は男に生まれるべきだったと悩んでいるが、こればかりはどうしようもないと話した。

「私、考えてみたら武ちゃんを好きや云う潜在意識が働いて、彼と別れたんやわ」

などと明子は云ってくれた。

こうして、それからのボク達は試験中も、冬休みも、正月も、夢中になって愛し合うことになった。溺れすぎて、受験勉強も手につかなかった。

しかし、学校や、ボクの家族の目から、かくしおさせたが、まずいことに、明子の母さんに見つかって、エラいことになってしまった。ある日、急用で出ていった明子の母さんが変な時間に帰って、明子を呼んだのが全然耳に入らなかった。お手伝いさんも丁度ルスで、二人ともいい気になってバスルームで戯れていたのをそのまま見られた。母さんの表情には、蔑すみとも怒りとも憎しみとも、形容し難いものが凍りついている。

「あなた方、何です！ 汚い！ 穢らわしいわ！ 出て行きなさい！」

激しい言葉と共に自分の方がとび出して行った。ボクは羞恥と屈辱に真赤になりながら手早く濡れた身体のまま服を着けた。明子は呆然と裸のまま蒼ざめてつつ立ち、唇を噛んでいたが、

「後で連絡するから、待ってて……」

かすれたような声で云った。

二月の風はヤケに冷たく、ボクは駅に向かいながら、何か腹立たしくなってしまう、

「チキシヨウ、チキシヨウ！」

と、小石をけりながら歩いた。明子の母さんが怒るのも、考えてみれば無理はない。しかし、男と女の場合だったら？ ボクの心の中に、恥ずかしい感情は消え、ふっふっと照れくさくても、男女だったら、汚いもの呼ばわりされることはないだろう。

二人とも受験に落ちて、とうとう駆け落ちしてしまった。

明子の友人が、神戸の三宮で勤めていたので頼って行ったのだが、文無しになったので働くことにした。こんなボク達が自活するとすれば水商売しかない。明子は友人の紹介で洋酒スタンドにすぐ口が決まり、今も続いて

いるのだが、ボクはどこへ行ってもすぐ客とケンカしてやめてしまった。

スタンドでは男のように振舞っては、どうも巧くない。ボクは悩んだ。バーテンの仕事も一生懸命勉強したが、女子バーテンなんて、つまるところ技術より「女」を売りものにしなければならぬし、色気のいらぬ店では男のバーテンの補助にしかならず、どっちみちボクのプライドは傷ついてしまう。

たまたま明子のお店のお客にゲイバーの人がいて、仲間の人がレスビアンクラブを開店したので、ホストを探している、と云うニュースが入った。ボクは、これならいける、とこ躍りしてよろこんだ。

ボクはやっとなが道が開けた思いがして、大いにファイトを燃やして働いた。やっぱり汚い世界。酒と色と欲が渦巻く現実、ボクはすっかりノイローゼになった。助平ジジイが、好奇心を燃やして言い寄ってくる。

「ワシと一ぺん寝てみんか？ 金なら幾らでも出す……」

何云ってやがる！ だ、まア、ママがなんとか助けてくれるからいいようなものだが、とにかく男の客には閉口する。

最近やっとなつて、どうせバラ色の人生なんてありやしない、わが道は灰色の道だ、と達観出来るようになった。こうして割り切つてしまえば、有閑マダムやバーのホステス連中を相手に、ダンスをしたり飲んだり話したりが、結構楽しい。

アパートに帰れば、明子との甘い生活が待っている。ボク達は毎日晩に帰って昼間が二人だけの時間だ。全く普通の人と正反対のスケジュールだが、快楽の追求には、昼も夜も変わりはない。一年の同棲で、明子とボクはすっかり呼吸が合うようになり、複雑になった。二人は、身心共に満足しきっているお互いを発見して、幸せに酔うのである。

しかし、困ったことに、最近ボクは自分の欲望の奴隷になりつつある。ボクは危険な斜面に立っていた。

ダンスの後で小母さまは、いつも云う。

「タケシは、だんだんセクシーになるわね」

「おばさまの魅力のせいよ」

「まア、お世辞のうまいこと」

「ほんとなのに……。ボク小母さまの恋人になりたい！」

「あら、誰かさんが怒るセリフじゃない？」
「少しも好きだなんて思わないのに、ほんと

にそう考える。明子を死ぬほど愛しているのに、時々ふつと浮気心がおきるのも、ボクの若さからくる欲望のせいなのだ。

三十ちよつと過ぎの小母さまは、美人ではないが、何となく退廃的な独特のムードがある。主人は外国航路に乗っていると云う話だが、店のみんなは、二号タイプだと噂している。「私は東京にいる頃から宝塚のファンだった」とか、「高校時代のエスの味が甦えった」だの云っているけど、ほんとに欲求不満なんだ、とこれはボクの観察である。

「今夜はいやに閑ねえ。うんと飲みましようよ、みんなで……」

「あーら、うれしい」

ママがカウンターから出て来て坐った。

「小母さま、今夜は貸し切りみたい」

ケンが甘えた声で云った。

「さあさ、お二人さんは真中に」

おどけた口調でアキラが、ボクと小母さまを中央に坐らせ、みんなで囲むようにとりまいた。ボクは小母さまのウールレースのドレスの肩に左手を回して、軽くひき寄せた。閑な日の客はいい迷惑だろうと思う。店中がよってたかつて、一日分の売上を上げようくらの意気込みで飲みだすのだから。でも彼女

はお金持ちだからこたえないだろう。ボク達はいいつも手の切れそうなお札でチップをもらうし、船員の奥さんて、全く「結構やナー」である。

「タケシ、このスーツ、少し地味ね」

小母さまがボクのツイードの三ツ揃いを見ながら云った。

「そうかなア？」

細かい白と黒だから全体にグレイに見え、相当派手なサイケ調のネクタイを締めているんだが、まだ地味かな、と思った。

「タケシなんか、ビバヤング！ だから、紺系統がピッタリくるのじゃない？ 紺は青春のシンボルよ」

「残念ながら、ボク、紺のスーツ、無いの」

「じゃあ、私に作らせて！ ね、プレゼントさせて……」

「でも悪いなア」

ママが、作ってもらいなさいよ、と自分のことのように眼の色をかえて云った。

ボクは決してスーツ一着くらいに目が眩んだ訳ではない。マークから聞いている東京や大阪あたりのベテランのおナベみたいに、お金や品物が目的でお客と寝るなんて、むしろ軽蔑している方なのだ。なのに、小母さまと

その晩ホテルに行く気になったのは、やっぱりボクの異常に開発された欲望の誘惑のせいなのだ。

午前二時の街は、凍えるように暗く寝静まっている。

小母さまは、自分のスリーエースを駐車場に預けたままで、タクシーに乗りとうと云って

歩き出した。

通りの街路樹は、みんな裸でブルブルと震えているみたいだ。深夜族が、この辺にも増えて、酔っぱらってフラフラしているのやアベックやらと、すれ違った。

明子の幻影がチラリと浮かんで、ボクはよほど引返そうかと思った。だが、何かの力が

もうどうしようもない傾斜に向かってボクをつき落とした。もう引返せない。すぐに空車が来て、小母さまが先に乗りこんだ。ボクが足をかけた時、後ろでヤクザ風の男が二人、上品にすましている小母さまを見て囁いてるのがみえた。

●躍進記念● 百萬元懸賞 △原稿募集▽

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千元	20篇

▽内容△

一、特異な風俗文庫誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェティシズム、一般女性切腹、男性切腹、男女性、美、女相撲、女斗美、生首狂、変装、風俗嗜好、見世物、奇態、珍聞、奇習、珍奇風俗、風俗文庫誌、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、題材を広くとりあげて下さい。

一、歓迎します。特に従前本誌にて余り扱ってない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品の中に引用部分があれば、その出処へ作者、書名などを明記願います。

一、原稿は、原稿用紙を四百字詰原稿用紙に換算して三十枚以上二枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙を毎月十五日。入選作品は順次次の懸賞第一原稿に発表いたします。

一、懸賞第一原稿は、他の一般原稿と区別するため、第一原稿の原稿に「懸賞第一」と書き下さいます。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、曙出版株式会社、奇ク編集部懸賞募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によります。下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。

一、採否は誌上発表を以てご承知願います。

ホテルを出たところを、いきなり数人の男にとり巻かれたボクは、小母さまと引き離されて車に押し込まれ、ある家の奥へ連れて行かれたのだ。

グルリとボクを取り巻いているヤクザたちの、ムカムカするような男の臭いが、ボクの胃袋をつき上げる。恐怖ももちろん作用してはいるのだろうが、このやりきれない嫌悪感にはむしようにボクを責めつける。

「おまえ、としはなんぼや」

親分の問いにボクは答えなかった。いや、口を開けば吐きそうで答えられなかった。

「オイ！ なんとかいうたらどやね！」

男の一人が、ボクの頬をぎゅっと掴み上げた。嘔吐感が一層増して、ただむやみに総毛立つような生理的嫌悪が、怖さを上廻ってボクを包みこんだ。

秘聞・象牙の塔

助教夫人受難譜

風流極道軒



平伏したまま顔をあげたのは、同じ文学部の助教白木学である。三十七歳、新進気鋭と噂される考古学専攻の学者であった。

云った。

「女、女じゃよ、白木！」

あわてふためいてたち上り、女将の所へ飛んでゆく学の後姿を眺めて、二人はニヤツと笑った。

翌日のひるさがり――。

熊倉が白木を研究室によびつけると、

「君、あれが女かね。あのモモンガアのような醜いバケモノが。ありゃあ君、豚だよ、もう、く、豚だよ。僕は五十五歳になる今日まであんな醜惡な女は見たことがないよ」

と、いいながら、白木のさし出した分厚い封筒を一瞥すると語調を柔らげた。

「白木君、たのみがあるんだがねえ。君も知

一

H市の繁華街を外れた瀟洒な料亭で、H大文学部主任教授熊倉邦雄は、紫檀の卓におかれた白い封筒にチラッと目をやると、

「これだけじゃあねえ、君。十万じゃあどうにもならないよ。博士論文の審査というやつには、意外と金がかかるものでねえ」

「この倍は要るねえ、それに……」

横から声を出したのは猿田教授、あから顔

を酒でいっそうあかく染めて、

「君も将来は我が大学を背負ってたつ人物、十万、二十万の金にけちけちなさんなよ。第一、僕達はもう相当に酔っておる。粹をきかせて、ねえ、白木君、僕達も木石じゃあないんだから」

不審げな白木に、吐き捨てるように熊倉が

つてのとおり僕は法制史、なかでも刑罰史を研究している。五百枚の原稿を大手の出版社からたのまれてねえ、苦心している所だよ。

と、いうのも、モデルがいない。なにさま今度のやつは俗うけを狙ってる。文章もかたいものでなく艶っぽいものにしてくてねえ。そのためには、実際に、刑罰をうけている男や女の肉体がどう変化するものか、ことに女ってやつは、拷問されると色気がでてくるといふ、こいつを現実に見てみたくてねえ」

熊倉の視線をうけた白木はとまどいながら「で、私に、何かそのお手伝いができましようか。先生のためなら、何なりと……」

白木は今度の論文『日本考古学上、土偶の占める位置について』に、十年間の研究を結集していた。これが審査をパスするかしないかはH大学教授会にかかっており、それをリードするのが、他ならぬ主任教授の熊倉なのである。

(できる限りの事はしなくては……。博士号をとらなければ、教授にもなれない)

そう云う必死の思いをこめた白木に、

「実は、女なのだよ。玄人筋の女を二、三人アルバイトで備って実験してみたのだが、どうもうまく行かない。何ていうのかなあ、女

の羞恥心というものが、まるでないのだよ。そこで、たのみと云うのは」

熊倉は、愛用の葉巻の灰をおとすと、

「ずばり言う、白木君。君の奥さんを貸して貰いたいのじゃ」

呆然とする白木に、

「何カ月もというわけじゃあない、二晩か三晩でいい。ただ、モデルになって貰うだけでいい。それ以上のことは何もしない」といい、言葉を強くして、

「君も、今度の論文がパスするかしないかが今までの苦勞がむくわれるかどうかの岐れみち。パスさえすりゃあ、きみ、来年停年退職する葉山君の後任は、まず確実……どうかね白木君」

「お、おことわりします」

白木は、口ごもりながら答えた。出世欲はあっても、妻の和子を犠牲にしてまで教授になるつもりはなかった。

「そうかね。じゃあ、仕方がない。府屋君にでもたのむことにしよう。が……知らないよ、あとのことは。白木君」

叱責に近い口調を耳に、よろよろと白木は研究室を辞した。

広い校庭をひとり歩きながら白木は、考え

つづけた。

教授になり博士になるのが長年の夢であった。その夢が、あと一步の所で叶えられようとしている、あと一步の所で。論文審査にスキャンダルはつきものではないか。和子がハイと云ってくれさえしたら、俺はH大学のれっきとした教授になれる。あとの栄耀は心のまま……。和子のふっくらとした優しい顔がうかぶ。三十二歳、子供はまだなかった。それは白木自身の責任のようであった。いずれにしても女盛りの、同僚からも、いや学生たちの間でも評判になっていく美人であり、白木もそれを誇りにしていた。

(ええいっ！)

白木が熊倉の研究室へとび込んだのは、夕暮が近かった。

「先生、二、三日、考えさせて頂きたいと思っています」

その一言で、むつかしげな顔付にたちまち笑いをうかべた熊倉は、

「悪いようにはしないよ、白木君。僕にまかせておきたまえ。そうだな、この事は奥さんには知らせないでくれ給え。モデル……と覚悟きめて来てもらったのじゃあ、意味がないんでね。何も知らせず、ちよっとした用事を

いいつけてよこしてくれ給え。抵抗するモデルでないと、実感が湧かなくなつてねえ。その代り、あとはよろしく頼むよ。まさかとは思うが、これが公表されたり、万一、裁判沙汰にでもなつたりすると僕も君も一巻の終わりだからねえ。一蓮托生——一味同心。いいね白木君」

といい、たち去ろうとする白木に、

「今度の土曜がいい、十一日の土曜、時間は午後二時。いいね、僕の家だよ」

と、つけ足して熊倉は、ニヤツと淫らな笑いを顔一杯にうかべた。

二

H市郊外の小高い丘の麓にある熊倉邦雄の家は、数百年つづいた名家であった。その白壁の土蔵が、暑い夏の陽ざしを浴びる十一日の午後二時、夫の学から頼まれた書籍を風呂敷に包んで和子は玄関に立っていた。三度目の訪問であり、和子は熊倉の妻の君江が花柳界の出であること。二人の子供は独立して、ここにはいないこと。女中の真理のこと。広い庭や、池に鯉が十数匹いることなど、大體のことは知っていた。従つて今朝、夫から

書籍を持って行くように頼まれたときも、別に不審とも何とも思わず、素直に出かけてきたのである。

泥藍染めのさえた藍色で織り出した菊五郎格子の結城つむぎに、塩瀬の九寸名古屋帯を胸高にしめ、日傘を手にした和子の姿は、あたりの鄙びた風景のなかでひととき美しく映えていた。

呼鈴に応じてでてきた女中の真理が、書籍だけを渡して帰ろうとする和子を、

「御主人様が、是非お目にかきたいものがあるから、と申されてますから」

とひきとめ、拒絶するのも失礼と和子は、長い廊下を奥座敷へと入った。

「よう、これはこれは奥さん」

上機嫌の熊倉は、「どうしてもこれをお見せしたくて」と、和子を、奥座敷から、さらに狭い廊下をつきあたりまで案内すると、

「この部屋は、めったな人には見せたくないんですが」

と、かたわらの紫房をひくと、がんどろ返しになっている板壁がくるりと廻って、驚く和子の手を取った熊倉は、

「ころばないように、奥さま」

と、階段を手さぐりでおりて行く。

アツと云うまの出来事で、「帰してくださいませ」というひまもなく、和子は、十数段の急な階段をこわごわとおおり、一筋の光の洩れる扉のまえに立った。

途端、扉がなかから開いて、現われたのは猿——猿の面をかぶった男であった。ひょつと、これがこれに続いた。

「こ、これは一体？……熊倉先生！」

ふり返った和子の目に熊倉の顔はなく、巨大な熊の面をつけた男がたっていた。

「熊倉先生、これは。こんな。ああ、一体どうなっておりますのしょう！」

部屋は、徳川時代の牢を思わせるつくりで周囲の格子には、和子が見たことはおろか聞いたこともない責道具の数々が並び、片隅で二人の見知らぬ男が、太目のもめん縄をしごいて立っていた。熊倉研究室の助手、浅羽と丹沢である。

「いったい、あなたがたは何をなさろうというのです」

和子は、迫ってくるひょつとと猿から身をさけて、牢の片隅に退かせ叫ぶ。

「妾は、白木の妻です。帰らせて頂きます。おどきくださいませ！」

怒りを含んだ和子の姿は、くもの巣にかか

ったものの、まだ脱け出すチャンスがあると
けなげに羽をひるがえしている蝶のように、
美しく輝いていた。

「白木和子……^{すり}拘摸常習のかどにより逮捕す
る。神妙にせい！」

熊が、押し殺した声で云う。

「御無体な！ そんな覚えは……」

ここまで云った和子は、ハツとして、

「へんなお芝居は、おやめになって下さいま
せ。熊倉先生！ 先生！ 一体、何の真似で
ございます！」

「芝居ではない。白木和子、よくまわりを
見るがよい。……神妙に縛につき、罪を白状
せぬならば、これらの責道具が、お前の肉を
破り、骨に喰い込み……お前は、羞恥にのた
うたなければならなくなるぞ」

地底から洩れるような声が、熊の面からし
ばり出される。

（こんな事であるかしら。あなた！ 一体
妾は、どうしてこのような所へ！ 助けて、
助けて頂戴！ あなたあ……何か、何かの
間違いだわ、きつと……。それとも、夢、夢
なのよ、きつとそうよ……）

和子がこう心に云いきかせたとき、背後か
らしのびよった浅羽が、右手首を、がっしり

と捕えた。

「アッ！ な、なにをなさいます」

振り向いた和子の、今度は左手を握った丹
波が、きりきり、つと二巻き、白い手首に縄を
巻きつける。

「アレッ！ な、なにをなさいます！」

左を向いたすきに、浅羽も右手首に縄をか
らませ、二人同時にそれぞれの和子の腕を背
後に回すと、重ね合わせた手首にぐい、ぐい
と縄を結びつける。

荒い息をはき、

「お、おやめくださいませ。ね、おやめにな
って。……ほんとに、お、お願いですからこ
んな事は、……へんなおふざけはおやめに、
なつてくださいませ！」

と、絶叫しつづけた和子も、がっちりと後
手縛りにされてしまうと、よろよろと蹲り、
全身を波うたせ始めた。

この間、猿は、カメラで十数枚の写真を
とった。

「得難い収穫ですな、教授」

ひふつとこが、熊に云った。熊の面、つま
り熊倉は、真白い縁なしの畳の上に崩折れて
いる和子に近づき、

「猿田君、いいね。またとない、このチャン

ス、逃すなよ！」

と叫ぶと、藍色の結城つむぎの襟に手をか
け、ぐいっと、背後に回された手首のところ
までひっぱがす。

紹友禅の長襦袢が、男たちの胸をときめか
す。熊倉は、和子の胸元に顔をつけるように
して、その襟に手をかけると

「や、やめてください！」

激しく上半身を悶えさせるのもかまわず、
再び、ぐいっと、一旦、持ちあげて襟元を開
かせ、背後へと、ひっぱがした。

「キャアッ！ や、やめて！ こんな……ひ
どい。やめてよう」

和子が泣き声をあげる。

フラッシュが、何度も閃く。

和子の上半身をつつむものは、ガーゼの肌
襦袢、いちまい……半袖の短い袖先からは、
まるで淡雪のような二の腕の一部が、のぞき
始める。

熊倉が、その右脇腹の真紅の紐に手をかけ
たとき、ひふつとこ——つまり、白木学のラ
イバルである府屋助教授が、叫んだ。

「教授、そ、そいつは、あとで、あとで」

チラッと振り返った熊の面は、（チッ！）
と舌打ちすると、三步四歩、全身をかたくこ

わばらせている和子を眺めながら後退し、

「猿田君、撮れたらうね。失敗は許されないよ。とくに顔の表情、おそれおののく顔の変化を確実にクローズアップして撮っておいてくれよ」

といい、丹波と浅羽の方に、顎を振ると、

「鈴、鈴だよ、君たち！」

その怒鳴り声に、丹沢が、赤松材の三分角格子にからまっている小さな錫の小鈴を取り外すと、そのひとつを浅羽に渡す。

「奥様、おみ足をどうぞ」

と云ったのは丹沢であった。このH大学熊倉研究室の助手は、女言葉を使うほど、女性的な、多分、ゲイボーイの気質のある男であった。

「おみ足……そう、もっと、おひらきになって、もう少し……そう、右の脚を」

などと云いながら手助けにでたひ、ふ、とこ面と浅羽が、しっかと合わせて正座している和子の両膝を割り、崩れた両脚からふくらはぎを抱え込んで、右足首に、小鈴をつけようとするのに、茶々を入れる。

和子は、必死の思いで内股を合せる。「女のまたの力」を「努」と云い、また「努力」とも云う。その和子のけなげな努力も、二人

の男、いや、その上にカメラを捨て置いた

猿——つまり、猿田と、三人の男たちの前では、如何ともし難く、和子の大きく割れた膝頭は、到々、あぐらをかくような形に、次の瞬間には、短距離を走る女子選手が、スターラインについたような片膝立てのポーズになり、濃い藍色の結城つむぎの裾から、目もさめるような内股までが、あらわになる。

「スキヤンダル……これは、たしかにランバンのスキヤンダル」

熊倉が、鼻をうごめかした。

「スキヤンダル……何ですか、それ」

猿が云った。

「ハッハッハ。ランバンのスキヤンダル……香水の名よ、猿田君。しかし……と、この匂いは、その上に」

熊倉は、立膝ついた和子の両側に勝ち誇ったように寄りそって左右の足首に、鈴をつけている三人の男たちのなかに割って入り、大きく、めくれあがった紹友禪の長襦袢の裾から、チラチラと見えかくれする純白の湯文字を指ではさんで、

「ランバンの上に、体臭……この和夫人の女盛りのえも云われないこの香り……」

と、その本紋綸子の端を、鼻に持っていこ

うとした途端、鈴が、

——チリ、リン、チリ、リン、リンと無心に鳴った。

「教授。つけ終わりました」

浅羽が、ホォーッと大きく吐息して云う。

「次……、わかつとるじゃろう」

熊倉が、威厳を保って答えた。

慇懃に礼を返した浅羽は、片隅の朱房を引き、滑車をおろす。その尖端の鉤に、丹沢がさっさと和子を縛った後手首をつないだ。

——キリッ、キリッ……

と滑車が二度、廻り、和子夫人は、後手のまま、腰が辛うじて畳につくか、つかないかというところまでひきあげられる。

鈴は、まだ、鳴らなかった。

その代り、立った右膝と左脚の間が、十糎ばかり余計に開いた。もう、九寸名古屋の帯はゆるみきって、帯留めの真珠が、あたかもここよと存在を示すばかりに、くつきりと、ふたつに割れた結城つむぎの間に落ち残っていた。

浅羽が、塩瀬の帯をくるくるとほぐのにさほど時間はかからなかった。鹿の子絞りの帯揚げが丹沢の手から宙に投げられ、高麗打ちの組紐が浅羽の手でもどかしそうにほどか

れ、藍色の結城つむぎが、まるで、ぼろ布のように、和子の背後に縛られた両手首のあたりにまるく、くるめられ、桃色の腰紐に、浅羽の手がかり、ぬきとられ、長襦袢も同じように、和子の背後にかくれて行く。

「もう、このガーゼの肌襦袢と、この湯文字一枚……」

猿の面が、フウッと、息を吐き出して云う。ひょっとが、

「まだ、鳴らないな、この鈴」

と、今まで、左膝の上に、懸命に右膝をのせて、女の羞恥を守りつづけてきた和子の足首に手をやって、チリリンと鈴を鳴らす。

「今度は鳴らして貰うさ」

じいーっと、和子を見下ろした熊倉は、

「下から、それとも上から？」

と尋ねた。和子に答えのあろう筈はなかった。怒りののしることも忘れて、男たちを、唇をかみしめて見上げるだけであった。

「ハッハッハッハ……」

哄笑した熊倉は、目のまえに大きく息づいている和子の右足首をつかむと、ぐいっと引っ張り、そのままずると、まるで、鶏肉とりにくをほおばるときのように引き裂いて行く。負けじとばかり、猿田が、左足首を両手で押え

る。

次には、どうされるか——。

「ウウ！ キヤアッ！……」

和子の悲鳴よりも早く、左脚は、膝を守る純白の本紋綸子を見捨てて大きく、左に引かれ、牡丹雪のように柔らかく淡い内腿が、丁度男たちの淫らに輝く眼に八文字に、晒し出されて行く。

「ウッ……ウ！ や、や、やめ」

て、く、だ、さ、い——と云おうとする言葉は、和子の唇の内側で押し殺されて、鈴が、チリリンと鳴り、スキャンダルの得も云われぬ匂いを漂わせながら和子は、がっくりと顔を伏せた。

「教授！ どうぞ！」

と、呻くように云ったのは、府屋助教授である。自分で、解ときたくてしょうのないライバル白木学助教授夫人和子の肌襦袢の真紅の紐を、主任教授であるがゆえに熊倉に譲る。

「熊倉教授、女という砦を守る最後の一枚をはぎ取ってください。私たちは、その瞬間をあらゆる角度から撮影して、先生の論文に、光輝あらしめましょう……ぞ」

府屋の言葉も耳に入らぬように熊倉は、和子の前に、にじり寄る。すぐ、五糧も離れて

いないところに真紅の紐があり、その中で、まるで、いきもののように波立っている双つの乳房、そして、豊満な裸身を想像させるとき色ひとのの二布を上半に、下半を純白の本紋綸子で綴った湯文字。……浅羽たちが、ごくんと唾をのみ込む。そのとき熊倉の指は、鶉色の湯文字の紫の紐にかかっていた。

「府屋君、よく見ておくことだな。女が、人妻が、責め場にひきすえられ、捕吏や岡っ引きたちに、素裸にされる、その瞬間を。猿田、のがすな、このチャンス！」

熊倉の手が大きく舞い、鈴が、チリリン、チ、チロ、チリ、チリリンと大きく鳴る。

「これも、ごいっしょに、ね」

丹沢が、真紅の紐をナイフで切り、サア、サア——と、肌襦袢を肩から背中へと、ゆで卵でもむくように剥がしてしまふ。

夫の同僚であり、恩師であり、そして後輩たちである男たちの前で、学生たちの間にまで噂された美しい奥さま——和子助教授夫人は、身をおおうものとてもなく、いたずらに鈴を鳴らしつづけたのであった。

「女囚白木和子を、縛り直せい！」

ひょっとこの面を外した府屋が云う。

「あ、あなた、あなたは、府屋さん！」

和子が叫んだ。今まで自分を、さいなんでいた男が、夫のライバルであろうとは！

「すると、こ、こちらは、猿田、猿田先生では……」

和子が思わず身をのり出すより早く、猿田面をとった。夫の先輩、猿田教授にまぎれもなかった。何度か、喫茶店へゆき、音楽会へゆき、おごり、おごられた仲ではないか。

「ど、どうして、府屋さん……猿田先生……こ、このようない！」

言葉なかばに、滑車がきしきし、丹沢が、和子夫人の後手の縄から鉤を外す。

「お、おやめになつて！」

一声叫んだ和子夫人は、よろよろとたち上り、入口の方へ走った。ガーゼの肌襦袢、紺友禅の長襦袢、目もさめるような藍色の結城つむぎが、だらりと、輝くように白い背中の下、後手に縛られた手首の所にひっかかって裾を長く畳の上に伸ばす。

「ハッハッハ……その扉をどうしておあけになりますかな、奥様」

背後で猿田が高々と笑う。

事実、その検材の大きな扉を縛られたままで開くことは不可能に近い。くると和子夫人は、男たちの方に向きをかえた。夫人の素肌が、あらわに熊倉たちの眼にさらけ出される。

——カチッ、カチッ……

シャッターをおろしつづける浅羽。時々、フラッシュが、和子の白い裸身に稲妻のように襲いかかる。

「か……かえして！ 帰してください！」

夫人は絶叫し、男たちに哀願に近い顔を向けた。

「お、お願いです。帰して、帰して！」

返事はなかった。

静寂が、牢内に流れる。熊倉と、ろくに視線を合わせた夫人はもう一度懇願したが、ニタニタと笑いかえされた夫人は、ずるずると扉に沿って崩れおち、声をしのばせて泣きじゃくり始めた。

スキヤンダルの匂いが、ひときわ、男たちの鼻をくすぐる。

「始めましょう、教授！」

府屋は、大股で和子に近よると、花卉のようになまつわり乱れている着物類を、くるくるとひとまとめにし、後に曲げられた双つの

腕の間へ押し込んでしまった。丁度、背中に藍や真紅や白や桃色の巨大なつぼみを背負った様な形になった夫人の、縄一筋かかっている裸身——というのも、後手を縛った縄は着物類にかくされて見えないので——腋の下に手を入れると強い力でひきおこし、牢の中央、畳の上へ連れて行く。

「おすわりになつて」

丹沢は、夫人を正座させると、

「先生の御趣味なの。菱縄縛りにさせて頂きますわ。堪忍してね、和子さん」

もう、このように全裸になった以上、奥さ

まどよぶ必要はない、僕達の所有物だと思ふのだろう、和子さん。と名前を呼んだ丹沢は、新しいもめん縄をとり出すと左の二の腕にきりきりと喰い込ませて行く。気持のよいほどふかふかと縄が喰い込む。右側を同じように浅羽が、立て膝をついて縛ってゆく。別の縄の一端を輪にした丹沢が、いやいやを激しく繰り返す夫人の頭からすっぽりとかぶせ、結び目が乳房の谷間と、大きく波打っている臍のあたりにくるように、ためしたあと、

「先生。変型ですが、仕方ないでしょう、さきに後手に縛つてあるので」

浅羽が言い、夫人の前面に垂れる太いもめ

ん縄の二つの結び目の間に左右の二の腕を縛った縄をかけて、ぐいっと引く。

「おっと、こっちもかけなくっちゃあ」

浅羽は、前面の縄を丹沢にわたし、麻縄をとり出すと、夫人の首を一廻りする縄にかけて、輪の中心に首がくるように試してから、

「さあ、思いきって、丹沢君」

「少し早いけど、やりましょうか」

と、丹沢。二人がかりで、肉づき豊かに正座している夫人の膝を割り、前面の縄をくぐらせ、

「キャアッ！」

と思わず立て膝をする夫人の背面の麻縄に固定する。

「このままなら、縦縛りってところね」

両肩を押えて、再び正座させられた和子夫人は、思わず、

「イ、イタ、イタイ！……」

と叫んでしまう。豊かな白い、かと云ってぬけるような形容される病的な皮膚の色でなく、健康さに溢れた淡い小麦色の柔肌に、強く締め上げた麻縄が更に喰い込むからだるう。

「痛い……痛いわ……猿田先生！」

眉をひそめて苦痛を訴える。名前を呼ばれ

た猿田はニヤツとして、

「どこがですか、奥さん」

近寄ろうとするのを熊倉がとめた。

「猿田君、拷問の最中、手助け無用」

猿田の足がとまる。

フラッシュが閃く。熊倉が、

「苦痛の顔……羞恥と苦しみへの、たう、表情を撮影しなくっちゃあ」

二枚、三枚……と、日頃のつつしみ深さも忘れはてて、もじもじと身をくねらせつつける和子夫人に向かってシャッターを切る。

この間に丹沢と浅羽は、左右の豊満な、着物姿ではうかがうことのできなかつた見事な乳房を菱形の縄でかこみ、きりりとひきしまった線を描き出している腹を、四筋廻った縄目もかくれるほど、強く、縛りつけてしま

う。

「アウ……や、やめて、く、ださい……おねがい……おやめになって……無法な……キャアッ……痛！ 痛いわ！ や、やめて！」

熱っぽい唇をあえがせ、咽喉をひきつらせ

て身悶えつづけた和子夫人も、

「これで一応おわりましたわ、和子」

今度はさんづけせずに、夫の勤務している研究室の若い助手に呼びすてにされ、さすが

にがっくりと頭を垂れて、肩で呼吸をするばかりであった。

「お乗せ申し上げなさい」

府屋が、冷たく云うと、牢の隅にある青竹の木馬を持ち出してきた。

木馬は木できていたものだが、これは青竹でできている。今日、和子夫人を乗せるためにつくったものであることは、太い青竹の真新しさからも、うかがえた。背梁に渡された五寸も直径のある猛宗竹……変わっているのは、その上に直径一寸位の白い布でくるんだ別の竹が打ちつけてあった。

「和子、お乗り遊ばせ」

丹沢が右脇を、浅羽と猿田が左腕や、腰をかかえて、

「イヤ！ イヤヨ、妾！ こんなものに！ ダメだってばあ！」

と、ばたつかせる左足の足を府屋と熊倉が抱えて、五人がかりで、木馬の上にかつぎ上げる。両足の鈴が、激しく鳴りひびく。

「さあ、和子奥さま」

猿田が、花嫁御寮の乗った馬の手綱をとる婿どののように、

「お動きになりますと鈴が鳴りますぞ。と云うことは、あられもなく貴女が身悶えしてい

る証拠」

といいながら、新しく二箇の鈴を、両膝にくくりつける。

「それに……この白い布。お判りかな」

悲し気に木馬の白布に目をやった和子に、

「真新しい汚点ひとつない知多ざらしの木綿……これが、十分後にどうなるか、半時間後にどうなるか。もし……」

と熊倉や府屋と顔を見合せて、ニヤリッと笑う。

和子夫人の背中を、悪寒が走った。

(ああ何という恥知らずなことを！)

男たちの計画を知った夫人は、

「恥知らず！ 恥知らずな……こんなことまでなさなくても……もう一度、申し上げます。

熊倉先生、大学教授としてこれは到底許されるべきことではありません。すぐ、すぐにおやめ下さいませ」

和子夫人は、心頭から発する怒りに、冷静さを装わせて厳肅に云った。女として、このような男たちを許してはおけない……と云う決意が、うすく刷かれた眉に、毅然とした鼻に、真一文字の朱唇にあふれていた。

が、返ってきたのは次のような言葉であった。

「ハッハッハ……お説教ですか、奥さま。奥さまが今、どんなポーズをなさっているか、よくお考えになることですね。スッパダカの上、首繩、菱縄縛り」

府屋助教授は、和子の太ももに手をあてると、軽くまさぐりながら、

「ほれほれ、こんなにされても、じっとしていらっしゃるお身の上」

丹沢が、大きな鏡を持ち出して牢格子に立てかける。いやでも和子が、自分の惨めな姿を見なければならぬ位置に置いてニヤッと笑う。

「キャアッ！ アツ、アウ……」

一毅然とした態度をとろうにも、これでどうしてとる事ができよう。鈴が悲しい響をたて和子の白い裸身が、くねくねと動き続けた。

扉が開き女中の真理が酒肴を運んできた。

もう四十を越えたのに男を全く知らないこの中性的な女中は、チラッと、木馬上の和子のあわれな姿を一瞥したが、別に感動も示さず次々と卓の上に麦酒やつまみを並べて行く。

熊倉が坐り府屋が腰をおろした。

「猿田先生、和子奥様が音をあげるまでには少々時間がかかりましょう。ゆっくり御鑑賞申しあげながら、どうぞ。一杯」

声に応じて猿田も坐り、浅羽もあぐらをかいた。丹沢がひとり、縄目に沿って指を這わせながら、ねちねちと颯りつづけている。

もう、ここには、象牙の塔の奥深く孤高を保つ大学教授たちも、学問研究に専念すべき助教授・助手たちもいなかった。ひとりの女——人妻を、捕えた五匹のおすが、脂ぎった肉体を燃えたたせているだけであった。

その視線をうけてひとりたつ和子夫人は、五匹に我れを忘れさせるにふさわしい美しい女性と云えた。今、木馬の上で屈辱に耐え、白い咽喉をそらせ、うつむき、乱れる黒髪を左右に振り分け、胸から乳房にかけて、ほんのりと桃色にそめている姿は、どんな浮世絵に描かれた女性よりも美しかった。

「春信ですなあ、この奥さまは。歌麿でも清長でも一筆斎文調でもない。丸顔で、ふるいつきたいほどの美人と云えば、春信描く笠森お仙……」

猿田が、ビールをほしながら云う。

ひとしきり、浮世絵をめぐって話の花が咲いた。

和子夫人が、木馬に追いあげられてから、三、四十分が経ったであろう。

「アッ……アウ……」

和子夫人の唇から耐えられぬような呻きが洩れ、足が動き、鈴が鳴った。

「鳴りましたな、鈴が」

猿田が、熊倉と顔を見合せた。

「ああ……もう、もう、許して。許してください。……アッ……アウ……」

耐え忍んでいた苦痛が一度にはとぼしり出たように、和子のかみしめられた唇から火のような息が吐き出され、胸が大きく上下し、乳房の谷間からふき出した汗が二筋、白い、もめん縄までながれて吸い込まれて行く。丹沢がたち上った。鈴が激しく鳴った。

四

ぐったりと、前かがみに木馬の上でうつぶせてしまった夫人を眺めて、熊倉が、

「降ろすぞ、猿田君」

と、熊倉が背をかかえ、猿田教授が足を抱いて、畳の上に、そおっとおいた。とたん、くるりと、うつぶせになる和子夫人。

が、男たちの目は木馬の上の白い布にあった。顔見合わせた熊倉たちは、その布を丁寧に、はぎとる。

一方、浅羽と丹沢は、うつぶせている和子夫人の上に馬乗りになるようにして、縄を解いて行く。縄というものは、縛るとき以上に解くときの方が、時間のかかるものである。

縄一筋でもかかっている方が、恥がすくなくてすむ——という女性たちが多い。和子夫人もその一人であった。丹沢が後手の縛目をとき、背中でもまるめられていた色とりどりの着物類を、まるで、ボロでも捨てるように、ぽいっと、牢の隅に投げ捨てた途端、夫人は乳房を両手でしっかりと押えて、坐ったままあとずさって、赤松材三寸角の格子に右半身を寄せて大きく喘ぎ始める。もう、どんなに許しを請うことも無駄であり、逃走することもできない……どんな、いたぶりを受けるかともかく男たちに任せるよりほかにない捕われの和子夫人であった。

「これも外しましょうね、奥さま」

大腿で近よった丹沢が、左膝と足首の鈴をとった。一段と夫人の肌の香りが、鼻をくすぐる。

「さあ、反対側」

浅羽が、邪慳に、和子を右向きにすると、右側の二つの鈴をとり、チリリンと、和子の耳元で鳴らしながら、

「よく鳴りましたよ、奥さん」と、熊倉たちの方を眺める。

「よおし。準備OK！ そうだな、やはりもう一度、縛ってさしあげるか。その方が十分御覧になることができるだろう」

熊倉の言葉で浅羽は、ニヤツと笑うと、「では、生物学的に、女体標本とでもいいますか……」

と、胸元へ手を伸ばして乳房をおおっていた右手首をとらえ、くるくると三巻き、その縄を、上段の格子にかけて、ぐい、と引く。

「アレッ、なにをなさいます」

和子の裸身が半分廻って、そのまま、膝を立て、足で立つ。その左足首をぐい、とつかんだ丹沢がくるくると四巻き、縄をかけると中段、丁度、和子の肩くらいの所の格子にひっかけて、ひっぱる。

「キャッ！ なにを、何を！……」

と叫ぶのもかまわず左足首が、乳房の高さまで上るほど吊りあげると、

「今度は、ほうれ！」

と、太ももを一筋、ビニールの透明な縄で格子に固定し、自由な左手をも、右手と同じように吊り上げてしまった。

両手を上に、万才！ の恰好で、左足を乳

房の高さまで吊り上げられ、右足一本で立つたまま、はりつけられた和子夫人を、五人の男がとりかこむ。

「よおく見るといいね、奥さん。これは、何かね」

熊倉が、白い布を拡げる。

「イヤ！ イヤです！」

顔を右に左にそらして見ることを拒む夫人の両側に身をすりよせた丹沢と浅羽が、がちりと、ふくよかな頬を正面に向けさせる。

「イヤですったら！ そのようなもの、見たくはございません」

「見たくなくても、こちらは見せたい」

熊倉は、和子の目の前にそれを見せつけ、ついで、自分の鼻先きにあてて嗅いでみる。

「スキヤンダルにつつまれた和子夫人の肉体の香り……」

おどけた熊倉の声に笑いが起こり、ひとしきり、和子のまわりで男たちは、今までの緊張感をほぐすかのように、下卑た声をあげて騒いだ。あからさまに人間の醜さをむき出した男たちのいたぶりに、もう、見栄も外聞もなく夫人は、はねあがり、おどり、いやでも応でも、苦しみにみちた笑い声をあげさせられたのである。

「教授、もうこの辺で始めませんか」

猿田がカメラを取り上げて云ったときには、午後七時になっていた。夫人は、五時間責められていたことになる。

換気装置のない地下部屋に、むんむんと女性の香りと酒くさい空気がたちこめていた。

熊倉が、腕時計を見ながら、真顔で、

「まず、石責めから」

というと、牢格子の外に浅羽が出た。そこには、せまい土間があった。二枚の荒筵を拡げた浅羽は、その上に、半間四方の一枚板の一端に五寸角の高さ一メートルほどの角柱のはめられた責め具を、置く。

「さあ、奥さま。女囚は、囚衣を」

丹沢は、府屋といっしょに、牢格子にはりつけられている夫人の縄目を解き、無理矢理に囚衣をさせ、その上を高手小手菱縄縛りと型どおり縄をかけて行く。さすが法制史、なかでも刑罰関係の書物を出版しようという教授を主任にいただくだけあって、助手も助教授も、堂に入った縄捌きであった。

「待て」

熊倉が、冷たく参考文献を眺めながら、

「上半身は、裸に」

「先生、女囚を拷問する場合、裸にすること

は、寛保二年の御定書百力条で禁止されおりますが……」

「知らない僕と思うか、府屋君。今度の著述は、歴史的、事実じゃあない。まあ、売ればいいって本だよ。僕にしてみりゃあ、アルバイトだ。売れねば困るんだよ」

「申し訳ありません、先生」

府屋が、いったんかけた縄を解き、むんずと和子夫人の両肩を押え、

「おききのとおりです、白木助教授夫人」

襟にかかった手が、バナナの皮でもむくように囚衣をはだけて、双肌をぬがせ、

「それ！ 先生」

と、和子の背中をうけもつ丹沢からさし出された麻縄で、まえよりも厳しく、白く柔らかない上半身に縄をかけていく。

和子は、もう、一言も口をきかなかった。

口をきかないことが、自分に残されたただひとつの反抗であるかのように、唇をかみしめて、屈辱に耐えている。そのけなげな悲壮美にみちた顔を、猿田が次々とフィルムにおさめる。

「責めい！」

熊倉の声とともに、今まで囮られていた牢内から土間へと一歩踏みおろした和子夫人の

素足は、例えようもなく美しかった。どすくろい土間の土の上に、白いまるで大唐帝国の白磁に生命をあたえたような足首が、かかどが、五本の指が、ためらいがちに降り、震える右足がつづいた。二つの脚と、十本の指が内股で数歩あるいて荒筵を踏み、鼠色の分厚い板の上でとまる。

「坐れい！」

熊倉の命令どおり、内八の字に揃えられた足の甲が、囚衣の膝頭で隠れ、なまめいた匂いが洩れて腰があり、軽く左右に振られた。和子夫人の、正座の姿勢が、男たちの前に、ひととき輝く頭上からのライトをあびて浮かび上った。

すばやく浅羽が、五寸角の柱に縄尻を固定する。

「始めませい！」

熊倉はどこまでも芝居がかった。声に応じて府屋が、三尺に一尺、厚さ三寸の石材を持ちあげ、夫人の膝の上に置こうとした。

夫人の顔に、恐怖のかげが走る。

猿田のカメラが、シャッターをきる。

「きりきりと白状しませい！」

府屋も芝居がかかった声を出した。石が、和子夫人の膝にのる。

「キヤアッ……アア……」

夫人が、悲鳴をあげる。

——が、膝の上の石は、思ったより軽かった。木材に、塗料をぬって石に見せかけたものであった。

二枚、三枚、四枚……と石が重なり、シャッターが、ひっきりなしに夫人の前後左右からきられ、五枚ものせられた時、豊満な乳房がなかばかくれた。木材とは云え、その重さは和子の膝からふともを責めるに十分であった。額から頬にかかった黒髪を口にくわえて、苦痛をこらえる凄まじいまでの顔……呻き……。六枚目がのせられた時、

「よかろう、その辺で。猿田君、君の写真技術に期待してるよ」

熊倉は、自分で、石をどけていった。

倒れ込もうにも後手の縄尻に支えられ、ぐったりと顔を、自らの緊縛された乳房の谷間におとして、玉のような汗をながしながら、和子夫人は大きく肩で呼吸をしつづけた。

（なぜ、……こんな目にあわねばならないのか。夫の学は、今どこにいるのか。あなた！早く、早く助けにきて頂戴……）

祈るような夫人のポーズは、さらに男心を刺戟する。

「吊り！」

嫉ましそうに夫人を見降ろしていた熊倉が叫んだ。夫のことを考えていると察したに違いなかった。丹沢と二人で和子をひきたて滑車をきしませて土間から一尺も足があがるほど吊り上げた。勿論、腕の折れるのを考慮して、瞬間でおろすことは忘れなかった。

「海老！」

浅羽と猿田が、海老縛りにする。

「鉄砲責め！」

丹沢と府屋が、夫人の右手を肩から首筋に沿って背後にまげ、左手を縛った縄と連結しこれ以上、哀れでぶざまな恰好はない夫人に腰縄をうち、そこらあたりをひき廻した。

猿田たちがオヤツと思ったのは、熊倉が次のような意外な刑罰を口にした時である。

「羞恥責め！」

「先生、そんな種類がありましたか」

いぶかしげに問う猿田に、

「ウッフッフッフ……。つくるのよ。我々で創作するのよ……」

熊倉は、土間から牢内へと和子をひきたてると、丹沢に梯子を持ってこさせ、その上に夫人を坐らせて、手すりに当たる部分に両膝をそれぞれ縛りつけ、今まで縛っていた上半

身の縄をとく。

「丹沢君、暴れられると大変」

と、両手が自由になったときの和子の抵抗を警戒して、丹沢に両手をしっかりと押えさせておいて背中を押し、和子の身体を弓なりに、頭が、梯子の横木につくまで弯曲させると、しなやかな両肘を、手すりの両側に別々に縛りつけてしまった。

和子の目には、男たちの膝が見え、胸が見え、あごが、淫らな笑いをうかべている顔が見えた。

「こいつは、邪魔だな」

熊倉が、わずかに帯がわりの荒縄一本でとまっていた囚衣を筆取る。

「アウッ！」

これだけ責められても、なお女として、H大学文学部白木助教授夫人としての、気品と羞恥を失わないかのように和子が呻いた。

梯子の上に、白い豊かな肉体で、半円を描いて、反りかえっている和子の裸身。胸から脇腹へかけて静脈がうき、淡く桃色に染まっていた。ななめに熊倉達を見上げながら、

「く、くるしい……わ……。熊倉さん……いたいの……。いたっ！」

うっすらと目をあけて和子夫人が呻く。

「すぐ、楽にしてあげるさ、その前に」

熊倉が、丹沢、浅羽たちに顎をふった。

「ヘッヘッヘッ……主任、いよいよですか。」

照臭いような、有難いような

浅羽は、丹沢と顔、見合せてニヤツと笑うと、背広をぬぎ始めた。

「わかりますわ、和子夫人の恥かしさが」

丹沢は、シャツを脱ぎながらいう。

「キヤアッ！」

思わず叫んだ夫人は、あらん限りの力で身悶える。猿田のカメラが、シャッターをきりつづける。

熊倉は、もう、感覚を失いそうになっている和子の背骨の痛みを柔らげるために、座布団を二枚、ふたつ折りにすると、そり返った背中の上に、さし込んだ。

「フウ……」

吐息を洩らした夫人は、白い座布団に身体をあずけた。今度は、手首と足首が痛い。しかし、その痛みは、当分、耐えることができるように思われる。ただ、高々と弧を描く弓なりの姿勢をどうしようもなく、前にもまして、夫人の顔を上気させる。

「若い女囚が拷問に強いのは史実にもあきらかなこと。されば、痛め責めに耐えたおなご

には……。わかるじやろ？ 丹沢君。羞恥責めというのがあったとしても、不都合じやなからうがな」

ニヤニヤする熊倉。

「よくわかります」

熊倉の言葉に、同調する丹沢が、上半身をむき出して夫人の眼に晒そうとする。

「や、やめて……く……ださ……い」

の言葉をのみこんで、夫人は眼を閉じ顔をねじ向けようとする。

猿田のカメラが、その表情を追いつづける。

「なるほど、これはまた……」浅羽が、感に耐えぬように唸り、

「全部脱ぐと、どういふことになるか、実験を……主任」

「今夜はともかく、明日になれば……。なにもしない」

と熊倉は、羞恥に慄える夫人の美しい顔をのぞき込みながらニヤリと頷き返す。

「主任教授、次の機会を早くつくりましたよ。だが、なぜ今夜は見送りになるのでしょうか。だいいち、明日などといっては、奥さんが来るかどうか……」

「その心配はあるまい」

S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の方の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差し支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

熊倉は夫人から眼をはなさず、

「この奥さんだって、何十枚もの写真を撮されている。ネガがこちらにある限り、心よく協力して下さるだろうて」

浅羽と、丹沢が眼を見合わせて、残念そうに夫人のふくやかな頬をつつく。

夫人は、もう気を失ったように、丹沢のするがままにまかせきっていた。

その時であった。

扉を、こつこつと外側から敲く音がして、熊倉の妻である君江が姿を見せ、その後には深酒のためであろう、顔を真赤にした白木学助教授が立っていた。

「主任、熊倉先生……妻の責め折檻に、この私も立ち合わせて下さい……いいや、立ち合う権利が、夫、夫である私にはあるはずです。そうじゃあ、ねえか、なあ、熊さん、熊倉さん……府屋君……」

呂律の廻らぬ口調で、まくしたてると、あかく濁った目で、男たちを見廻し、やがて、そこだけ、白く輝く自分の妻、和子夫人のみじめな姿に、憐れむような、蔑むような視線を送った。

カット
柏木真佐男



寥々たる M 派

花村崇という男は、
「俺ほどのマゾヒスは、そんじょそこらには
居ないぞ！」

とマゾヒストであることを誇示しているよ
うな男で、マゾのプレイなら、あらゆること
をやってきたと言う。

M 派 交 友 録

(4)

（花村崇の巻Ⅱ）

鬼 山 絢 策

話ばかりでは信用できないから、実際に行
動して見せてもらおうということになり、当
時、私はカメラに凝っていて、Mのフォトを
製作してみたいと思っていたので、彼にモデ
ルを頼むと軽く引き受けてくれた。

池袋のヌードスタジオで、サジスティック
な女王の役を引き受けたモデルが居たので、
私は友人の春木君、花村の三人で、そのスタ
ジオで写真を撮った。

ついこの間のことだと思っていたのが、早
いもので、もう二十年も前のことになってし
まった。

モデルは、身体はどこを撮されても構わな
かったが、顔を撮られることだけは否定した
ので、髪を垂らして、顔を隠してもらった。

花村という男は、女性の靴フェチシスムの
ある男だったので、ヌードになっても靴だけ
ははかせて、靴で肩を蹴ったり、頭を蹴っ
ばすような場面を主に撮った。

スタジオには日傘だの浮輪だのが置いてあ
ったので、それを使って何枚か撮った。

最後に花村を仰向けに寝かせて、その上に
モデルが靴のまま両足とも花村の身体の上に
乗せて踏みつけるところを撮った。

片方の足は花村の太腿のあたりを、片方の足は喉元へ、ヒールが喰いこむようにして踏まえた。

「いいの？ 痛いでしょ、靴で踏んだら」

「いいよ、いいよ。大丈夫」

と、花村は下からモデルを見上げて言う。両足を、かなり捻げて踏んばらなければならぬから、上へ乗っかるとグラグラして不安定なので、すぐ片足を下ろしてしまった。

「ダメよ。危なくて」

それじゃ、と春木君をアシスタントに出して、モデルの片手を持ってもらった。

これは、私のカメラだけがとらえた。

比較的、小柄だが45キロはあるかと思われ、女性の全重量を、尖ったヒールに乗せて踏まれるのだから、これはかなり苦痛である。

それでも苦しい顔を女に見せまいと目をつぶって頑張る花村の表情は、何か受難を甘んじて受ける清教徒の様な清らかさを感じた。こんなことをやっていると、アッという間に一時間たってしまった。

私としては、もっと凌辱的なシーンとか、緊縛シーンなども撮りたかったのだが、モデルから「あまりひどいのはやらないでくれ」との要望もあり、初めてでもあったので、あ

まり突込んだことはやれなかった。

それでも結構、三人とも満足していたと記憶する。

何せ、その当時はMフォトなどというのは本家の本誌でさえ、まだ載せていなかった。

本誌がMフォトを載せ出したのは、昭和28年からで、春日ルミという女性モデルが登場したのが、はじめてである。

ちなみに当時の本誌を見ると、圧倒的にS派の作品が多く、吾妻新、松井頼子などという人々が活躍していた。M派では常連は私ぐらいのもので、馬族保、芳野眉美、などが時々書いている程度。沼正氏の「マゾヒストの手帖」が載り出したのが昭和28年の6月号からだから、M派はまことに淋しかった。

それが今は多士済々、まさに女上位時代を實現させている。

だから昭和二十六、七年頃は、もっぱら口絵や挿絵だけで満足していた時代だったのである。春木君などは、どこかの雑誌にすばらしい挿絵が載っていたという、それだけで買ってしまうという時代だったのである。

いま十八年前に撮った写真を見ると、なにか子供の頃、描いた画でも見るような、なつかしさを覚えるのである。

倉田由紀登場

第一回のMフォト製作で一番満足したのは何といってもモデルになった花村である。

「どうです。また今度、撮りませんか」

とすぐ二回目を希望してきた。青木君にも異存はない。

だが私は、もひとつ、もの足りなかった。

というのは、モデルの顔が十人並みで魅力に乏しかったし、それにバックが真黒か真白というのも単調で妙味がない。

その時、私はもっと適当な或る女性モデルの候補者のことを考えていたのだった。

「そうですね」

と私は、気のない返事をした。

「いつにしますか」

と花村は突込んできたが、私は返事を、にごしておいた。

私が本格的にMフォトを撮りはじめたのはこの次からである。

さてそうになると、ここで倉田由紀に登場してもらわなければならない。

人間関係には、たしかに縁というものがあ

るように思う。人によって同じ苗字や、同じ名前の男性、女性に奇妙に縁があることは、人それぞれ思い当たることがあるであろう。

私が交際した女性には、ふしぎに「ゆき」という名前の女性が多かった。バーのマダムホステス、デザイナー、人妻、女優の卵……と字は違うが、いずれも「ゆき」という呼び名の女性が六、七人は居る。

そこでお断わりしておくが、私と交際した男女諸君で、これから登場する倉田由紀なる女性を、呼び名が「ゆき」というところから連想して「ああ、あの時の「ゆき」か」などと勝手に想像、推断してもらっては困るのである。なぜなら六、七人もいる「ゆき」女史達が、あらぬ噂に迷惑することにもなりかねないからである。

倉田由紀は、他の同名の「ゆき」なる女性の人格や性行を織りまぜることなく、あくまで純粹の倉田由紀個人だけの性格か性行のみを書いて行くつもりである。

S 気のある美人

倉田由紀——

当時は二十七才だった。人妻である。

かつてバーのマダムをやったことがある。こう書くと、さては、あのバーのマダムのことだな、と思う私の友人がいるかもしれない。だが、別人である。

もうとっくにやめて、結婚しているのである。旦那さんは或る官庁の課長さんである。

御承知のように〇〇省の課長ともなれば、そんじょそこらの会社の課長や部長とはケタが違う。配下に課次長をはじめ、係長その他五、六十人の部下のボスである。

金属工学の權威で、著書も何冊か出している。私は仕事のことでのM氏（倉田とは言わない）の家へちよいちよい行ったが、その夫人の由紀さんが非常に好意ある接待をしてくれた。遅くなった時は、泊ったことも何度もある。そして、この非常に美しい夫人は、私にコケットな態度で接してくる。

読者諸君は当然、私と夫人の肉体関係を想像されるだろうが、実は、ないのである。

最初は私も勘違いして、夫人は私に気があるのかと思った。だが私に見せる好意は、かなり親密で、しかも色気タップリなのであるが、どうもダイレクトなセックスまで望んでいるのではないことが分かった。

元来この家を訪れる客は、皆堅い人間ばかりで、高官とか学者とか、ゆう通のきかない奴ばかりで、極めて堅い接待ばかりさせられてきた。そこへ私みたいなザックバランでガムシヤラな男が行ったので、気を許してつきあえるものらしい。

「亭主の前でワイ談のできるのは、あなただけよ」

と言われたりした。つまり私にだけリラックスムードでつき合ってくる。それが、もとバーのマダムをやったりしたから、装わずして色っぽくなるので、こっちもウツカリ勘違いしようというものである。

由紀さんと、由紀さんの友達のバーのマダムと三人で旅行したこともある。後には由紀さんと二人で温泉に出かけたこともある。

もちろん御亭主には内密である。息抜きにそうしたアヴァンチュールをたのしみたいのであるうけれど、

「鬼山さんなら、ほんとに安心して一緒に行けるわ。鬼山さんは「狼」じゃないからね。ウフフフ」

ほんとに信頼されたのか、それとも「手を出しちゃダメよ」と釘をさされたのか、そのところが、どうもよくわからない。

だが、こんな信頼のされかたは男として屈

辱を感じる。私だって、まだ男だから。男の本性を見せてやろうかとも思ったが、私という男は妙に臆病な処があって、あれやこれやと先を考えて行動が鈍ってしまうのである。その旅行先の温泉宿で、彼女から御亭主の閨房の秘事を、のろけまじりに聞かされたのである。

あの謹厳なM氏が、閨房ではまるで痴呆のようになり、犬のように由紀さんの足もとにジャレついてくるのだと言う。

「妾ってサジっ気があるのね。そういう時はウンといじめてやるのよ。足なんか舐めさせてやると、喜んでペロペロ舐めるわ」

「あなたの足なら、私も舐めさせてもらいたいな」

「おやすい御用だわ。足だけでいいの？ ウフフ」

と笑いながら、ジッと私の顔を見た。

笑いが、ふと消えた。人の心の奥底まで見すかすように見つめる目に炎があった。

「ああ、このひとは本当のサジスチンだ」

と私は思った。

このひとの目で見据えられたら、たとえM派の人間でなくとも、喜んで彼女の奴隷になるだろう。

「足を舐めさせるだけですか？」

「イヤなひとね。どこだって舐めさせるわよ夫婦だもん。そんな質問、あなたらしくもないわ」

「こりゃ、失礼しました」

「でも、ただは舐めさせないわよ。この指輪を買わせた時は失神させてやったわ」

「こりゃスゴイ！ 私も失神させてもらいたいな」

そこで私は――

いやこれから先の話は、いまはよそう。

いま私は花村崇のことを書いているのだ。

そのパートナーとなるべき必要上、倉田由紀さんのことを書いている。由紀さんのひととなりは一応、紹介する必要があるが、その由紀さんと私とのことを書いたのでは、主題から逸脱してしまう。

だから後廻しにすることとして、ともかく倉田由紀という女性は、ザックバランで俠気のある女である。

しかも美しい。応蘭芳に以ているが、応蘭芳よりも、もう少しきつい感じで、もっと綺麗である。もしも、このひとがモデルになつてくれたら、すばらしい写真ができる。

と私は期待にゾクゾクするほど昂奮した。

しかも都合のいいことに、彼女は本誌の愛読者でもあるのだ。

Mの世界の理解者でもある。御亭主がMと言えるかどうか？ 純粹のMでなくとも、多少その気がある。むしろ由紀さんを溺愛しているところから発するM的なプレーとも見られぬこともない。が、ここではM氏は関係ないから、どうしても構わないが、とにかくMプレーの経験者でもある。

男を犯す

その頃は、もう御亭主のM氏と私の仕事は終わっていたので、ここ暫く彼女の家へは御無沙汰していたが思いきって電話してみた。昼間だから旦那さんがいないのは承知の上である。

「実は、ちょっとお願いがあつて……」

と、きり出すと、

「何よ、ウフフフ。何かわるいこと、たくらんだんでしょ」

と勘がいい。

「そうなんですよ。ちょっと会ってくれませんか」

「いいわよ」

私はハリきって仕事を済ませ、約束の五時半に銀座の電通の喫茶室へ行くと、もう彼女は先に来て待っていた。黒いスーツが色白の美貌によくマッチして、妖艶さが漂い、美しい気品がある。

「すみませんね、遅くなって」

「お忙が氏の編集長さんを待たせちゃ悪いと思っ

「イヤ今夜は仕事は全部、済ませたのです」

「ああ、そう。妾も、ゆっくりできるのよ。」

「え？ 御出張ですか。そりゃあ、丁度いいチャンスだ」

「何なの？ お話は……」

由紀さんの目は好奇心にかがやいている。

こんなきれいなひとがモデルになってくれたら最高だと思ったが、すぐきり出して、もしも断わられたらアウトだと思うと、慎重にならざるを得ない。少し酒を入れて酔っぱら

わせてからと思い、夕食に誘った。

「コックドール」でブランデーを飲ませ先ず本誌の話を持ち出した。こういう時に本誌の読者であることは、まことに都合である。

彼女は、Sものの記事は不愉快だから読まないと言う。

「だってそうでしょ。女が責められるなんて不愉快よ。たださえ女性は男の蔭にかくれて小さくなってるんだもん。せめて夜の世界では女王として君臨するんでなくちゃ気が晴らせないわよ。朝も昼もそして夜まで責められるんじゃ、生きてる甲斐がないじゃないの」

「全くそうですな。殊にあなたのような綺麗なものとはその美貌を利用して世の中のあらゆる男性を足もとにひざまずかせるべきですよ」

「妾ね、それを考えてるの。男は千人斬りだなんて、女を犯すことを誇りに思ってるでしょ。だったら女も男を犯してやるわ。だけど普通の肉体関係を結んだんじゃソンよね。それじゃ犯されることになるんだもん。女が男を犯すのは別のやり方でなくちゃ意味ないと思うわ」

「それには男を奴隷にすればいい」

「妾の奴隷になる男、いるかしら」

「いくらでもありますよ」

「妾ね、このやり方、とてもフェアだと思うのよ。だって、そうでしょ。人妻である以上妾がやたらと男と関係を結んだら不貞になるでしょ。それだったら夫に申し訳ないけどさ肉体関係を結ばなければきれいなものじゃないの。しかも相手の男もすべて承知で自ら奴隷を望んでくるんだから、その願いを叶えてやるんだもの、やるのがヘンタイだの何だのと言ったって、それはプライバシーのことで、何もひとにしゃべるわけじゃないし、他人に迷惑を、かけることはひとつもないんだからかまわないじゃないの。ねえ、そうでしょ」

「その通りです。私も由起さんと全く同感です。それなら早速ですが由起さん、あなたの奴隷になりたいという志願者が居るんですが」

私は、きっかけを見つけて本題を、きり出した。

「ウフフフ、だあれ？ 妾の知ってる人？」

「イヤ、あなたの知らない男です」

そこで花村のことを話し、写真のモデルになっ

てもらいたいと話した。

由起さんは、プレーをするのはいいが、写真

を撮されるのは困ると言った。

私の思っていた通りだった。

そこで私は次の三つの条件をだした。

1、写真撮っても絶対に人に見せない。

2、花村にもその写真はわたさない。

3、私のところに絶対安全な方法で永久に保管しておく。

この三つの約束を絶対に厳守するから是非私の願いを叶えてくれと口説いた。

「現像も引伸しも全部、私が一人で秘密にやるんですから、他人の目には絶対ふれさせませんよ」

私がD・P・Eをやることは、かつて彼女の邸で旦那さんと一緒に何枚か撮ったのを贈ったことがあるから、D・P・Eに対する私の技術は信用されていた。

「いいわ、やってみるわ」

ようやくOKさせた時は、興奮に胸がドキドキした。

御機嫌の変わらぬうちにと、すぐ日取りを決めるべく、その場で花村のところへ電話した。

花村は当時、奇数日は進駐軍へ勤めて泊りになる。今日は十五日だから彼はキャンプにいます。

当時はまだ地方へ直接ダイヤルを廻して通じる時代ではなかったから、局番は二ケタの時代だった。だが進駐軍の局番は四ケタの局番なので、ダイヤルを十回、廻すのが面倒に感じる時代だった。

夜十一時を過ぎていたが、花村はすぐ電話に出た。

偶数日が彼の休みなので「明日はどうか」

と言うと喜んでOKした。もちろん由紀さんもOKである。午後三時に代々木駅でお合点にしようとした。

「相手の男は花村という進駐軍に勤めている男なんです。もちろん、あなたの身分、住所一切、相手には知らせません。この花村という男は、女性の靴に対して凄く愛着をもっているんですよ。それもヒールの高いのを好みます。だから、ヒールの高く尖ったのを、はいてきて下さい」

と頼んだ。

サテンのガウン

翌日、由紀さんの邸へ車で迎えに行った。

由紀さんは何やら風呂敷包みを車の中へ放りこんだ。由紀さんに乗せて代々木駅へ行くと花村は、もう来て待っていた。

代々木に「花房」というデラックスな旅館がある。温泉マークの連れこみ宿ではあるが各室がかなり広く、四方の壁もバラエティに富んでいて調度もぜいたくなものを置いてあり、写真のバックとしては申し分なかった。「連れこみ宿へ三人で入るなんて、何だかへ

ンだわね」

由紀さんはテレくさそうにしていた。

「二人なら、いいんですか」

「そうよ、二人が当り前じゃないの。何だかあたし一人で二人を相手にするみたいに見えるから……」

「事実そうじゃないんですか」

私は、まぜっ返した。出てきた女中が三人とみると、確かにちよっとヘンな顔をした。

私は広い部屋を希望した。

通されたのは二階の奥まった部屋で、十二畳はタップリあろうかと思われる洋間で、六畳ぐらいの次の間がついていた。

かなり豪華な部屋だったが三時間の休憩で六千八百円取られたのには、びっくりした。

当時の六千円と言えば、いまでは一万五千円ぐらいになるだろう。

由紀さんは、花村とは口をきかぬようにしていたので、私が二人のかけ橋になって、気づまりな言葉の途切れをなくするように努めた。だが由紀さんは花村をひと目見た時からのものでかかっている様子が見え、貴婦人としての気品を見せていた。

花村も由紀さんの美しさにうたれて、喜んで奴隷の役目を期待しているようだった。

「なかなか、いい部屋じゃないの」

由紀さんはこの「スタジオ」が気に入ったらしい。

「お風呂場は、どうかしら？」

バスルームを覗きに行った由紀さんは、

「あら、すてき。あたし、ちょっとひと風呂あびるわ」

と早くも服を脱ぎはじめた。

由紀さんの裸身が、すり硝子ごしに、ぼんやりと見え、やがて脱衣場から浴室の方に消えると、花村は、

「すばらしい、ひとですね。あのひとがSであることは、ひと目でわかりますよ。じいっと見つめる、あの目でわかります。あの目で見据えられると、ゾクゾクして身体がうずく思いがしますよ」

私は早速、ボストンバッグからライトを取り出して、取りつけにかかった。五百ワットと三百ワットの写真電球二個をコンセントにつないでテストした。昼間だから、この二つで光量は十分である。ライトスタンドは重し、かさばるから持って来られない。クリップで電球をとめるよりない。日本間だと鴨居だとか唐紙の上部へとめられるのだが、洋間だと、とめるところがない。しかたがないか

ら三面鏡の上の方へとめた。

「一体、彼女はどういうひとなんですか」

「れっきとした人妻ですよ」

「まさか貴方の奥さんじゃないでしょうね」

「違います。だが彼女は、いろいろ聞かれることは好まないから、そういう質問はタブーですよ」

最初に、どこで撮るか、構図を定めなければならぬ。邪魔な家具をどかしたり、必要なものを据えつけたりするのに結構、時間がかかるし、また重労働でもある。

風呂からバスタオルを巻きつけて出てきた由紀さんは、

「ちょっと、その風呂敷包とって頂戴」

風呂敷包の中には黒いサテンに白いピンズでアクセサリーしたガウンが出てきた。

これを素肌にとって、三面鏡の前に腰かけて化粧を直した。鏡にうつる由紀さんは妖艶きわまる魅力が、あふれていた。

「すごいガウンですね」

「いいでしょ。今日のために昨夜、いそいでつくったのよ」

「エッ？　ほんとですか」

私も凝り屋の方だが、彼女もまた、負けずに凝る方とみえる。

更に包みの中から、まだ一度も土を踏んだ

ことのないハイヒールが出てきた。ヒールが細く、きゃしゃな作りだったが、先端が細く銀色の金具がついていて、いかにもMごのみの靴だった。

花村の目が、早くも興奮する。

由紀さんは黒いガウンの裾を大胆にまくりあげて足を組み、ハイヒールをはいた。

枕の価値

「サア、どんなことするの？」

由紀さんは「何でもやりましょう」という気構えだ。

折角、御持参の靴を活かすべく、最初は靴踏みから入った。

床に横たわる花村の背中を、肩を、頭を、ところ嫌わず踏みつけた。花村の半身を起して、更に肩へ足をかけ、脳天を靴で踏みつけた。由紀さんの足が高くあがり、ゆるくまとったガウンから、かっこいい脚線が惜しみなくライトの前にさらされた。

だがこの靴踏みの場面は前の池袋でも撮ったから、このへんできりあげて豪華なベッドを写し場にした。

サアそうなるをたいへんで、ライトの位置を全部、変えなければならぬ。椅子の先へはさんだり、窓枠にはさんだり、家具をどかしたり、また重労働がはじまる。

その間に花村は宿の浴衣に着替えた。由紀さんは非常に大胆だった。それだけに私もポーズが次々と淀みなくつけることができた。

最初からこんなに調子よく行くとは思わなかったくらいスムーズに行った。彼女が口にしていた「男性圧服」のシーンに入った。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為最、切手代用、(一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、景通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に八本号にて前金切りの列を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受け取りにならざる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

はじめ花村は枕をしていた。これでは全然「絵」にならない。

枕をした寝姿には、人間としての格調がある。畜生は枕などする知恵はない。奴隷が枕をするなどは僭越である。

それと光線の具合も悪い。花村の頭の斜め前方から当てているライトが、枕をするとなつて影をつくってしまう。大きな障害物となつて影をつくってしまう。

「枕をとって下さい」

由紀さんは両膝を突っ張って花村の上に居たが、サツと右手が枕の端にかかると、グイッと引っこ抜いた。ストンと花村の首が落ちた。枕は足元の方へ抛りなげた。

「冗談じゃない、枕をするなんて常識だ」私は花村を叱った。奴隷なら奴隷らしい神経を使ってもらわなければ困る。

花村は眼をつぶって羞恥のいろを見せた。だが花村の羞恥の表情を見て私はおかしくなった。かなり屈辱的なポーズをさせられても、羞恥の色など見せなかった花村が、私の

ひとり言のような一言に、羞恥するところがいかにも花村らしいと思った。

マゾヒストとしての誇り？^{マゾ}をもち、模範的な奴隷たらんとしているその虚をつかれた思いがしたのであろう。

いま眼をとじ、唇を半開にしている花村の顔は初めての接吻を待ち受けている少女のような可憐さがあつた。

カメラという介在物さえなければ、とうに埋没の世界に入っていたのであろうが、ワンカット、ワンカットとギクシャクした動きは奴隷に焦燥を与えていた。御馳走を眼の前にしてお預けをくった犬みたいに、花村は時々眼をあけて、すぐそばに迫ったものに、鼻をヒクヒクさせて焦れていた。

由紀さんの方はゆとりがあつた。そうした奴隷の顔を見下ろしてたのしんでいるようだった。

はじめての接吻というものは最高の感激がある。私はその瞬間を貴重なものとするべく、ムードをもちあげて行つたのだ。

由紀さんの表情は実に美しい。私は何度もファインダーから眼をはなして、その美しさに見とれてシャッターを押すのを忘れたくらいだった。

いままでも接吻の写真は何枚も見たが、私の気に入ったものは、ひとつもなかった。

仰向けに寝た女性に対して、男性が愛情をこめた接吻をしている。

つまり男性が能動的であり、主権は男性にある。接吻したくなつたから接吻したのであり、従つてやめなければいつでも男性の方からやめられる。やめる権利がある。

これでは極めてノーマルな、言葉を変えて言えば極めて平凡などこにでもある風景で、恐らく男性の誰しもが経験していることである。男性が自ら求めたものであり、そこに屈辱感はない。仮にこの場面をM派の人々が見た場合は、屈辱感を覚えるかもしれない。だがそれはM派の人種特有の、自分のイメージに合わせた見かたであつて、それはむしろ嘸うべき妄想的な見かたとしかな言えない。そこに展開している事実、あくまでもセックスのテクニク^{テクニック}の一種としての前戯にすぎないのである。

M派の理想とする行為は、すべて女性に主権がなければならぬ。

それを形に具^{あは}わしたものでなければならぬ。そのためには女性と男性の体位^{たいゐ}というのが極めて重大になってくる。

その一番普遍的なポーズを、いま由紀さんはとっているのだった。

“犬”は焦れに焦れていた。

由紀さんのポリュームのある太腿がぴったりとおさえつけていた。弾力のあるやわらかい太腿は、自らの圧力によって、異状に平べったく、のし餅のようにひろがって、犬の顔を掩っていた。

奴隷が望んでいたものは遂に与えられた。一瞬、花村は目をつむつた。

由紀さんは心なしか目をうるませていたが、パツチリ開けて見下ろしている。これが奴隷の接吻というものである。女性は絶対に目をあけていなければならない。そして常に能動的であり、奴隷をリードして行かなければならないのである。

冷静を装つてはいても、由紀さんはまだ真からのサジスチンではない。いやこれからだんだんそうなるかもしれないが、現時点ではまだ初心である。やはり女らしさも多分にもっている。

だからリードした瞬間、目を細めた。

一度与えられると奴隷は渴きをいやすために、はげしく求めた。

奴隷の顔は次第に見えなくなつて行つた。

菱縄マニアも、なかなか浅ましい。

小林弘の世界選手権試合があるというのに、裏番組で「大江戸の鐘」があるとなると、大好きな拳斗も見たい。嵯峨三智子が囚衣姿で菱縄を打たれ、江戸中を引廻されて行く場面が見たいからだ。

「大盗小盗」が放映されると、お昼からテレビの前でソワソワしている。泉京子がグラマラスな体で、きっちりした菱縄を打たれ引廻される姿が、たっぷりと見られるからだ。

この二つとも、もう

ずっと前の映画で、私も一度は見ていたのだが、それでもこんなに取り乱し？ ているというのは、我ながら浅ましくなるうというものである。

こんどから、月に一度は菱縄デーを設けたいと思っている。

慶子との緊縛プレイとは別に、その日は私は一日中、裸身に菱縄をかけられ、勿論

股間縛りも施して貰うのである。といっても女王さまに奉仕する奴隷の一日をやるうというのではない。慶子とは縄かけの時と、後は必要な時だけの交渉にとどめて、私は私でいつものように自由にふるまうのである。本を読みたい時は、その姿で机の前に坐り食事の時は、そのまま慶子と向かい合う。外

と、後手に縛って貰って「ちょっと責めてくれよ」なんていうのも乙なものではないか。夕方、菱縄つきのまま、風呂に入る。一日中、裸でいたので何となくこわばった体が温い湯でじーんとほぐれていって菱縄がしつとりと水を吸いジッジッと裸身に喰い込んでくる悦びに身を委せる。裸身に喰



マニアの一日

菱 縄 デ ー

早 木 夢 二

一生の好伴侶と別れなければならぬ悲哀がしみじみと、こみ上げてくる。

濡れた縄が物干竿にかけられている。窓ごとに眺めながら、あの縄もやがて痛んで別れなければならぬ、と考えたりしてしかし私の肌に残る縄の思い出は忘れることはあるまいと、いつか知らず知らずにと我が身を撫でさすっているのだ。



ある混浴場

結城春哉

久米の仙人は、白い婦人の腿を見て足を踏みはずし、出っ歯の亀さんは、女風呂をちょっとのぞいたが為に今なお悪名をさらしている。然し、今や世は昭和元禄。女の裸で腰をぬかす者もなく、ましてや女風呂をのぞくと云うケチな奴もない。とは云っても、いつの世も女の裸を見たいのは男の常。いやはや女のすたれる時はないものと思える。

さて、ここに結構な温泉がある。大体どの県にも温泉の一つや二つはあり、男女混浴の露天風呂もたまにはある。だが、あまり艶な感じはない。登別の千人風呂、別々に入れば、会うのに骨が折れるくらいの広さである

し、九州は指宿のジャングル風呂、これまた油断すれば姿を見失うと云うくらいのものがある。

ところがここに、レッキとしたヘルセンターでありながら男女混浴と云う、結構な温泉がある。湯槽こそ六つあるが、隅から隅まで一目で見渡せ、人の顔もはっきり見られるという世にも素晴らしい温泉なのである。勿論、女風呂は別にある。然し狭く女客の圧倒的に多い所なので押すな押すなの大騒ぎ、まるで土用の鎌倉海岸のようなものである。誰でも広い浴場へ行きたいのは人情だ。そこをうまく考えてあるのが当ヘルセンターと云

うわけである。まことに心憎いばかりと云うべき。

男共は、浴場に足を踏み入れると一様にきよろきよろと隅から隅まで眺めまわす。お目当ての白き裸身が目に入ればほっとしてゆっくりとその側に近寄る。お目当てのいない場合はすぐ脱衣所へ引返し、上映している映画を見るか、まぬけ面の動物を見るのである。

然し、休日ともなれば、まず無駄はない。必ず団体の御婦人たちの白き裸身にお目にかかれるというわけだ。ほとんどは五十才前後の老年に近づいた者や中年増である。だがガ

ツカリはしない。気長に待っていればおいしいエサにありつけるからである。来るバスで一緒だった若奥さん、新婚らしい美しい人、中学生らしい可愛らしい子。みんな一糸まとわぬ裸で入ってくる。いや正確に言えば一枚の手拭を持ってである。

或る日、もつとくわしく云えば十月の祭日である。朝から雲一つない好天であった。私は久しぶりに例の温泉、ヘルスセンターに行くことにした。汽車も、バスも人であふれている。世はまさにレジャーブームである。ヘルスセンター行きのバスにはいろんな人々が乗っている。やはり御婦人が多い。子供連れの中年夫婦、中には新婚さんらしきカップルまでいる。

この車中の何人と、浴場で裸の対面ができるだろうか。この若奥さん、こちらの中学生らしい少女、顔つきはまだ子供だが身体は相当の成熟を示している子、色の白い大鵬型の初老の婦人、眼鏡をかけた教育ママらしき中年増。まことに興味は尽きない。

そんな下心のある人間がここに少なくとも一人は同乗しているとは夢にも知らないであろう方々は実に楽しそうな表情をしている。あの美人はどうだろうか、こっちの新婦さん

らしいのは……などと、とりとめのないことを考えているうちにバスはヘルスセンターのアーチをくぐり、到着したことを告げる。

若いアベックはいても、男の一人はどうやら私一人。何か気がひける思いである。前に子供を連れて来たことがあるが、風呂に入ればあちこち走り廻り、ちよっともじっとしていず挙句の果ては足をすべらして転ぶ始末。泣き出すのをようやくなだめ、老婦人たちの注目をあび、ほうほうの体で逃げだし、生きの悪い払い下げの動物を眺め、疲れきって帰った苦い思い出がある。全く何の為に温泉に来たのかわからない。それっきり二度と子供連れで来ないことにした。入場料三百円也。毎年いくらかずつ上っている。家族何人かであれば、かなりの散財である。まあ、遠くの行楽地へ出かけるよりは安上りではあるが。

私の場合は別に高いとは思わない。この節らしくに見せないストリップでも五百円や千円はとる。年令別の御婦人の全裸を心ゆくまでそれも妙にかざったり、作ったりしたものでなく、自然の、ありのままの姿を見せてもらえるのである。それに湯当りを防ぐ間に映画も見られるのである。極めて安いと云うべきであらう。

さて、中に入るや否や真直ぐ大浴場ジャングル風呂に行く。脱衣所は別々だから、勿論私は男の方。婦人の入口は、まさに押すな押すな盛況。大漁である。私は高なる胸を静めて、急いで脱衣する。

そして、期待に胸おどらせて浴場に入る。

さて今日はどんな裸にお目にかかれるかな。一緒のバスだったあの可愛らしい奥さんは、果たして入ってきてくれるだろうか。まだ胸のふくらみ初めたばかりの少女がいるだろうか……などと期待する気持は、ちよどストリップ劇場へ入る心境である。看板写真の若い娘たちの何人が全て脱ぐのか、この日舞の美人はどんなポインを持っているのか等々。

私は、実際に実物を見た時よりも、この期待の一時の方がはるかに……というほどでもないが、余計にワクワクするのだ。

一歩中へ入ると、思わずドキッとした。すぐ目の前をタオルを前に当てた中年の婦人が行く。歩きたびにタオルが躍り、目をひきつけるものがちらちらする。中へずいっと踏み込むと、凡そ六、七人の女体がある。居ると云うよりあると云った方が適切であらう、白き柔肌と云うには、ほど遠き初老の婆さんである。たるんだ太ったのが多い。

今まで高なっていた胸は、急に鼓動を静めた。まことに当然というべき。

私は、さり気なくよそおい、隅の浴槽へ身を沈める。そして今度はゆっくりと頭を廻し獲物を探す。いた。入口からは影になって見えなかった浴槽に、まだうら若い、然も割合美人なのがいる。

私はそれに注目することにする。概して若いのは防備が固い。胸と腰を頑強に守っている。申し訳程度にタオルを当てているのは年寄りだ。そうでなきゃ細くて乳首だけしかないような中年の女である。

見たいのは見せないし、見たくないのは見せる。世の中というものは、全くヘソ曲りに出来ている。そう云えばストリップもその傾向がある。

いつ入って来たのか、恐らく一人の獲物に氣をとられている時に現われたのであろう。すぐ目の前で体を洗っているのがある。細い乳首だけの中年だ。色が黒い。湯に浸るのだから当然ながら、身には一糸もなく完全なる露出。しかし、平然と体をこすっている。あまりの無遠慮さに私も大胆に注視する。そして、じっと見つめた視線を顔に当てる。顔も黒く、しかしなかなかホリの深い顔である。

ニヤリと笑うと、顔を赤らめるか、そ向けるかと思いの外、そ知らぬ顔で、湯を浴び続ける。なお、隠すようすはない。

馬鹿らしくなって目を他に移すと、夏は水を入れプールにしておく大浴槽に、すつくと立ち上った少女がある。太った、体格の良い中学生くらいの年頃だ。乳房は丸く大きくふくらんでいる。別に恥ずかしがる素振りもなくそのまま上ってくる。少女は、堂々として女風呂の方へ入って行った。

乳房は丸く大きくふくらんでいるのに、まだノッペラボウの少女には、今まで何人か会った。ふくらむより芽の出る方が遅いのである。それとも体質であろうか。そう云えば太った体質の少女が多かった。その道の研究家のH氏の発表にも、「太った色の白い人に無毛症が多い」とある。

それにしても、この頃の少女の発育の好いこと。まだ幼いのに、乳房だけ丸くふくらんでいる、そんな女の子が多く見られる。文明の進歩は、子供を早熟にさせるのか。

その少女と入れ違いに三人の女が入ってきた。あつ、あの奥さんだ。バスの中で一緒だった、可愛い美しい奥さんが、入ってきたのだ。いつもブラジャーをしているとみえて、

ブラジャーの形に白く跡がついている。恰好のいい乳房だ。この混浴場ではめったにお目にかかれないポインである。大体、ブラジャーで押さえねばならないような乳房は、ここには、めったに現われない。腰にはタオルがしっかりと当てられている。

あとの二人もまあまあだ。一人は乳房は小さいが腰がしまり、スタイルはなかなか良い方だ。健康そうな若々しい肌である。もう一人は乳房は下がり気味であるが、色がきわだって白い。三人ともに近來の掘り出しものだ。もちろん私は、この三人を等分にマークすることに決めた。

あつ、そうそう、さっきの美人を忘れるところだったと視線をずらして思わずニヤリ。女が多くなると、つい緊張がゆるむのか、それは女風呂とでも錯覚するのであろうか、タオルでの防備がゆるくなる。さっきまでしっかりと守っていたタオルのすきまから、防備対象のモノがちらちら顔を出している。そして最後は、タオルを前面からはずし、それを手に持ったまますつくと、立ち上ったのである。ほとんどの婦人の代表的な型と云われる逆三角形である。私は、その全貌を見てしまったので安心した。そして、新しい獲物の三

人の女に目を向ける。

色の白い太ったのは、タオルのガード振りがまずく、ちらちら見てとれる。また乳房の小さい方は、タオルを当ててない。湯槽のわきに置いている。本命の方はまだ依然として湯槽の中に沈んでいる。恰好のいい乳房は、ちょうど水面に白く花びらのように浮かび、はっきりと見てとれる。乳首もツンと上を向き、弾力もありそうだ。

あつ、立った。いよいよ立ち上った。タオルを手で押さえる時、密着性が薄れ、ほんの一瞬だが目に入る。そのままつと湯槽を出ると白いパンティの跡をはっきりと見せて後向きに体を洗い出す。大きい尻だ。柔らかそうなお尻である。

体格のいい人が入って来た。背が高く大柄な人だ。乳房は大きくたれ下がっているが、肌は餅のようにぬめぬめと光っている。さつさと体を洗うと、すぐに鏡の前で体を拭き始める。どうやら混雑する女風呂をさけて、ただ上り湯だけでもと思ってきたものらしい。こちらに向かってすすくと立ち体をゆうゆうと拭いている。それこそすすくという恰好である。堂々とわるびれるところなく、防備は完全に解放されている。まるでいいところのお

姫さまのように。いや、全く賛成である。立派である。

大体、温泉に来て、こせこせ身をかめ、卑屈に隠すことはないのだ。この堂々たるお姫さまは悠々と体を拭くと、男のような足どりで、さっさと出て行った。

そうそう、歩き方と云えば、実に種々様々である。大腿にさっさと歩くもの。静かに小股に歩くもの。しっかりとタオルを押え前かがみにおずおずと歩くもの。眼をあちこちに配り、警戒しつつ歩くもの。大胆不敵にふるまうもの。また若き男の、タオル下の存在顕著なるままに歩くもの。少女の、タオルを胸から膝まで長くたらしめているもの。腰にしっかりとタオルをまきつけているもの。それぞれみな趣きがある。

概して、あまり警戒し過ぎるのは不自然であり、かえって注視されるのではないかと思う。第二次性徴期の少女、新婚間もない若奥さまに多い。自然いろいろな面で意識過剰になるのだろう。男の裸にも興味はあるし、恥ずかしい気持もある、といったところと、みえる。だが、まだ顔は幼いくせに、必要以上に警戒する少女を見ると、一体ここに何をしに来ているのかと思う。

ただ、タオルを長くたらし、うろうろ歩きまわる女の気持は不可解である。中には、湯に入ろうともせず、二、三人ぐらいで来て隅から隅まで歩き回って、そのまま出てしまふのがいる。その心情たるや、まったくもってわからない。

今しも若々しい奥さんが、三人の女の子を連れて入ってきた。すらりとはよく脚の延びた長身の人である。乳房も恰好よく張りきっているし、全体に締まった体つきだ。連れている女の子の年からして、相当の年配と思われるのに、一見二十歳台の体つきである。すぐ前の湯槽で、何杯も湯をかぶり三人の子供を湯槽に入らせる。やがて洗い場に上り、やや斜めに坐り、おもむろに体を洗い出す。タオルでこする度に弾力のありそうな乳房がぶるぶるとふるえる。

いつかこちらがポカンとしてしまっているのに気付く。私の好みのタイプである。注視するに忍びない。これでは毒だ。目が疲れてきた。さっきからかなり眼を酷使している。蒸し風呂へでも行って少しのんびりしよう。

あまり浸りつめていると体によくない。暫時休養だ。だれもない蒸し風呂で長々と横になる。目をつぶり、今までの収獲を反芻す

る。バスの中で一緒だったと記憶に残る顔はほとんど、この場内で再会できたように思える。

いや、待てよ。あの色白の若奥さん、純日本風のやさしそうな面影はまだ現れない。そして、すぐ側に坐っていた可愛らしい少女もまだだ。あの娘は、あの奥さんの子供かしら。いや違う。あんなに若く水々しい人になん大きな子供があるはずはない。近所の子供なんだよ、きっとそうだ。

蒸し風呂の中は熱い。もうがまんできん。私は耐えられなくなって出てしまう。結局たいた休養にはならない。今度は一番ぬるい湯槽に入らねばと、プールの中へ入る。夏は水を入れてあり、十月からは、ぬるいお湯を入れてある。

少しつかっていると、体一ぱいの汗はひっこみ、ぬるぬるした感じもなくなる。ようやく心地がつく。ほっとして辺りを見回す。いた、いた。少女が二、三人泳いでいる。あつ、あの少女だ。すると若奥さんもいるに違いない。さりげなく視線を隅々に……。

案の定、少し入り込んだ湯槽に、ひっそりとつかっているのが目にはいる。抜けるように白い体だ。然しタオルでしっかりと腰を覆

っている。私はじっと、可愛らしい乳房に視線をそそぐ。白くふくらした小山の上にピンクの乳首が上を向いている。ほっそりとした柔軟そうな体つきが、私の心をそるように動く。ふと上げた奥さんの目が、乳房にじっとふりそそぐ私の視線とかち合う。みるみる首すじまで赤くなる。そして、タオルを乳房の上までたくし上げる。

しかしこれは、結果的には奥さんの失敗である。私はすぐ、さり気なく別の湯槽に移り向きを変えた。そして、人の影から奥さんの正面がよく見える位置になったのである。奥さんは、私の視線から逃れてほっとしたのか一度湯の中に体を深く沈めると、さっと立ち上った。

奥さんの失敗というのはこのことだ。さつき乳房の上までタオルを上げたままなので丁度ヘソの辺りまでしか隠れず、肝心の全貌を私の視線にさらしてくれたのである。奥さんはうっかり立ち上ったものの、大事なボディガードが方面違いにあることに気づくと、すぐに降下せしめた。そして又も、赤くほおを染めたのである。

少女は楽しそうに泳いでいる。小学生かなと思っていたが、意外に丸くふくらんでいる

乳房に驚く。ゴムマリのようだと云う形容はこの少女の為にあるかのように、白く柔らかそうにふくらんでいる。小さなピンクの乳首がなんとも云えない。

だが、この少女の防備の固さにはほとんど困惑した。しなやかな、やや痩せ型の体型から推して、あるいは？ と必死に探求したがタオルは執拗に少女の腰にまといつき、一分の隙もない。これほど懸命に防備するところをみると、きっと理由があるに違いない。そうでない少女はこれほどは隠さない。かなり乳房の発達した娘でもオーブンなのが多い。

そう思っただけで見るせいか、顔もバスの中に見たよりずっと大人びて見える。可愛らしさを通りこして素晴らしい美人である。成長すれば、きっと男を泣かす美女になること疑いなしである。結局、懸命の努力にもかかわらずその美少女の堅固なる防備理由は拝見できなかった。さんざんじらした挙句、奥さんと共に、こちらの努力をあざ笑うかの如く、悠然と退場して行ったのである。

やる方なかった。チクショウメ、なんでもあも固く防備するのか、まだ幼いのに一流のストリッパーのように。私は見せそうで見せないストリップを見せられたようにいら

してきた。そして、以前同じような美少女を追跡して成功した時のことを想い出した。

確か一昨年のやはり十月であったろうか。その時も混んでいた。その美少女は、初老の上品な婦人と一緒に入ってきた。やはり防備は固かった。しかしエチケットを心得ていて湯槽に入る時はタオルを湯槽のふちに置いて入るのだ。銭湯では、絶対に手拭を湯槽に入れないことと注意書きがしてある。この人々も銭湯愛好者なのであろうか。それとも家庭の躰として守っているのか。ともかくそのために美少女の梳いたような美しさを望見することができたのだ。

感激だったなあ、あの時は。私は、あの時の少女を、今の少女に置き換えてみることでようやく、いらいらを鎮める。

ふと気がつく、ついさっきまでいっぱいた人々がいなくなっていた。潮の引くように、いつの間にか、いなくなっている。私は張りつめた気持がゆるむと、急激に腹が空いてきた。そうか、食事時なのだ。成程いなくなるはずである。私の腹時計がかなり確かであることは、今までに証明済みである。急に眼の前に、さまざまな食物が並ぶ。

食堂で簡単な食事をする。いつも思うこと

であるが、何故こういう場所の食堂はまずくその上高価なのであろう。かなり空腹のはずであったが、少し箸をつけるとすぐ食欲がなくなる。それでもようやく平らげて映画を見に行く。

老人や婦人客が我物顔にのさばり、男共は小さくなっているような演芸場には、とてもじゃないが入る気にはなれん。映画は、時期早い「忠臣蔵」をやっている。祭日ともなれば二本立て上映である。古い映画であるが内容は結構楽しめる。いっどこで見ても、また何回見ても、同じような感動を覚える。これが日本人のよい所でもあり、また欠点でもあろう。私もまた典型的な日本人であることを自覚せしめられる。

食堂にいた時も、ここへ来た当初もポカポカと暖かく、汗が流れ出ていた。ところがいつか汗が引いたと思うと、急に寒気がしてきた。長い時間、温泉につかり神経を緊張させていた報いかとも思ったが、風邪を引いてもつまらないし名残り惜しくはあったが映写室を出る。そして再び風呂に入ったのである。

さすがに中は空いている。この時間帯には収穫は期待できない。それは今までの経験でわかっている。

よく見ると老人が一人、ポツンという感じで真中の浴槽につかって、わけのわからない民謡をうなっている。予期はしていたものちよっと拍子抜けの感がなくもない。しかしまあ、今度はゆっくり湯につかれるわい。そうだ、この際折角用意してきた剃刃であご髭など当たり、体を洗おう。さっきはそれどころではなかったからな。

隅の鏡の前でゆっくりと髭を当てる。固い髭が剃り落とされると、下からまだまだ結構若い顔が現われる。「おれもまんざら捨てたもんじゃないや」などと自讃していると、私の顔の横に白い体と黒点が浮かびあがった。あっと驚くなんとやら、私ははっと振り返ろうとしてやっととどめた。どうやら後ろ向きになっている私は認めているが鏡のことは念頭にないらしい。わざわざ振り返って相手に警戒させてはつまらない。まさか鏡にバッチリと写り、私に見られているとは夢にも考えていないだろう。

わざわざ知らせるような失礼な行動はこの際、慎しもう。そっと私の心の中にしまっておくべきだ。

私は鏡の中に白い体の一部分を見た時、探偵や殺し屋が小さな鏡を利用して、後から忍

び寄る相手を倒すシーンを思い出した。「おれなら、この黒点をさっと振り返りざま射ち抜く」などと考えると、一人でにおかしくなる。ただ残念なことはヘソの上下ちよつとのところしか写っていないことだ。顔とオツパイを見たい。

人間の欲は限りがない。見たい所が見えれば、次の見えない所、そこが見えれば又、次の隠れている所、と際限がない。最近のストリップ業界の苦しみも、そこら辺にあると聞く。今や西欧諸国の性の解放は物凄く、堂々と街の映画館でセックス映画がノーカットで上映され、書店ではいたる所に全裸無修正の写真集が陳列してあると聞く。もはや裸は珍しくなくなっていると言う。

『しかし、そうになったら日本の夜の遊びも変わるだろうなあ。ブルーフィルムやエロ写真はさっぱり売れなくなる。暴力団の経済面も変わってくるだろう。ストリップはどうするかな。全裸はもはや古い、などと云われ、最初に裸で出てきた女が音楽に合わせて次々と衣装をつける。まるでファッションショーの新手のようなものになるのではなからうか』髭剃る手が止まり、私は物思いにふけていた。

『馬鹿馬鹿しい。この島国の、封建性の強い教育ママなどと云う存在がハバをきかし、ちよつとした看板やスチール写真にまでやいのやいのと文句をつけ、そのくせ、自分は暇を持て余し真昼の情事に溺れるヤツもいるだろう。警察は警察で、交通事故や三億円の犯人を全力で追えばいいものを、つまらん全スト等を取り締まっている。「黒い雪」はワイセツである。なにがワイセツだ。見る奴がワイセツな心を持って見るからワイセツに見えるんだ。ワイセツだの、何だの云う前にあの女たちの悲劇の本質について考える必要があるのだ。そして本質をよく理解して、あのような悲劇をくいとめるために懸命になるのが役人の務めと云うもの。枝葉末節の部分部分にのみ目を光らせ、自分の勝手な解釈でワイセツだなどと鬼の首でも取ったように騒ぐ。全く困ったもんだよ。セックスをみにくいもの隠すものと教える方がまちがっている。しかし、長年の風習は一朝一夕にはなおらんで。まだまだ欧州諸国とは大きな隔りがある。まあ、おれの若さの残っているうちには無理かも知れんて』

そんな好き勝手なことを次から次へと考えていると、「あの、すみませんが石鹸かして

頂けません？」すぐ耳許でやさしい女の声が出て、はっと空想を破られる。見ると、すぐ横の鏡の前に眼鏡をかけた四十にはまだ少し前と思われる御婦人がいる。細そりした体つきだな、いや、あまりじろじろ観察するのは失礼というもの。「あつ、どうぞ」と石鹸を渡す。「ああ、おれはまだ髭剃りを終わってないんだっけ』と思ったが後の祭り。仕方なく、前につけて、ややかわきつつある泡をお湯でとかし、またゾリゾリと始める。

剃りながら、やはり隣の人気が気になる。直接首を向けて眺めるのは悪いし、またいい案配に鏡に上半身が映っているの、前の鏡をのぞくふりをして横の鏡に目を走らせる。色はかなり白い。乳房も大きくはないが、まだくずれてはいない。眼鏡が面白い働きをしている。全裸体に眼鏡というのはなかなかエロチックである。

あつ、憶い出した。この人は、バスの中で一緒だった教育ママさん然としたあの人だ。さっき、ちよつと見たときから、どうも見たことのあるような気がしていたのだ。あの時一緒だった小学生らしい女の子はどうしたんだろう。

「奥さん、子供さんはどうしました」思いき

って声をかける。「主人と一緒に動物園へ行ってますわ。わたしも行くはずだったんだけど、せっかく温泉へ来て入浴しないのも変なもんでしょ。でも女風呂は狭くてきたないし思いきってここへ入ってきたの。今だったら空いてると思ってきたら、案の定だれもいませんわ」顔に似合わず物柔らかな人見知りをしない奥さんである。

人間は裸になると虚飾がなくなると云うがこの奥さんも、今の一時ぐっとくだけているのであろうか。

「でも私がいたんでがっかりしたでしょう」「いいえ、一人ぐらいいでしたら何とも思わないわ。たくさん男の人がいると厭ですけど」「一人しかいないから、かえって危いかも」私もいつかおしゃべりになっていた。「まさか、あなたが、ホホホ……」

どういふことなのか、このホホホは。私は思わず鏡を見る。成程、来た時とは違う。生っ白い柔和な顔がそこにある。髭の顔とうしてこうも違うのか。いっそ髭を立てようかと真剣に考えたこともある。貫録をつけるには一つの方法である。

女房は、髭を剃った方がずっと若くなって素敵だと云う。そして、髭を立てるなどと云

うと、きまって「髭を立てたら夜中に切つてやる」と云う。

「でも、わかりませんよ。男は紳士と云えども油断はできませんからね。ヘソから下に人格はないなどと云いますからね」「ホホホ……面白い方」教育ママさんは、タオルに石鹸をしこたまぬりつけると悠々と体を洗い出す。旅行用の小さな石鹸はみるみるその形をくずし、あるかなきかの残骸と化す。「ちえっ、まだこっちは使わねばならないのに」ようやく痛い思いをして剃り上げ、水で顔を洗う。顔を拭き、鏡をのぞき込むと、丁度中腰になったママさんのお腹の中心部がバッチリと映っている「あれ、さっきの黒点と同じだぞ」黒点の正体見たりである。

「どうもすみません」洗い終わるとママさんは、小さくなった石鹸を返してよこす。「おかげでさっぱりしましたわ。だって女風呂って汚れているでしょ。中に入ると垢でいっぱい、お湯も脂肪でぬるぬるしてるのよ。気持ち悪いっいたらないの。もう恥も外聞もなくこっちへ来たってわけなの」さもあろう、と私は思う。聞けば銭湯の風呂よりも小さいと云う。そこへ女客の数を考えれば答えは明白。「でも不思議ですね。今日の女客はもの凄く

多いはずなのに、こっちへ来るのは、ほんの一部分。特に若い人は絶対入っては来ない。

きれいな若い人がよく狭い女風呂で我慢していますね」「そうね、若い人はみな女風呂で我慢しているようね。女学生とか、そうね若い人ばかりだわ」「今の若い人は近代的で、裸になるのなんか平気だと思っていたが意外だな。ほんとそう云えば独身と思われ若い女の人を見たことがない。新婚らしい若奥さんはたまに入ってきますがね」「若い人はちゃっかりしてますから、ただで男の人に裸を見せるのは損だと思ってるんですわ、きつと」「成程、そうかもね」それにしても面白いママさんだ。人間は、顔ではわかりません。

「でも女の人はいいですよ。別に変化しませんからね。男が女風呂なんかに行ったら、それこそ身動きできませんね」「えっ、変化。なんのこと？」ママさんはしばし考えていたが、ようやく思い当たり「あらいやだ、ホホホ……」

ママさんは一度とっぷりと湯槽につかり、上り湯をさっとかけると退場する。そろそろ主人が動物園から帰ってくる頃になったのだろう。それにしても話せる奥さんだったな。

服を着けている奥さんとは別人のようだったな。全く人間は外見だけではわからない。じっくりつき合ってみて初めてわかるというもの。（実際はじっくりでもなかったな。しかし可能性はあったな。惜しかった）

どうやら映画も演芸も終わったらしい。いつの間にかかなりの人が入っている。すぐそばの浴槽に三人ほどの初老の御婦人がつかっている。そこへこれまた三人の爺さん連が入ってくる。しばらくは言葉もなく、お互い牽制していたが、いつどちらからともなく話し出す。「どこから来たかの」「おらたちやすぐ近くだよ」「よく来るのんけ」「まあ、そうだな、年に三回ほどのか」

初めはごく普通の会話である。しかし、中の一人が湯槽を出て流し場に寝ころび、婦人の方も出て体を洗い始めると会話がきわどくなってきた。「あんれ、おばあちゃんまだええオッパイじゃの」「そう云うお前さまもいモノじゃ」「ばあちゃんさ、ここさいるとお互いにいくらでも見られるなや」「これがかや」中の太った婦人が自分のどこかを指さす。「うんだてや。だどもばあちゃんの方も見られるからあいこだよ」「おら、別に見たくて入ってんじゃねえよ」などと、やり始め

る。

どうやら爺さん連は少しお酒が入っているらしい。「一つ流してやるべさ」手拭を取って色の白い太った大鵬のようなばあさんの後に回ろうとするのを、「いいや、やめれ、おら一人で洗えるだ」「背中さ一人で洗えめえし、遠慮するなて、恥ずかしがる年頃でもねえべよ」結局おとなしく流されている。しばらくすると、三人連れの爺さん連は出て行った。手拭を肩にかけて通り過ぎるのを、じっと見つめている婦人もいる。女は視覚によって欲情はしない、などと云うがやはり興味はあるものとみえる。心中、亭主と比べてみるのかも知れない。男たちは大体がオープンである。中に子供連れの良き父ちゃん然としたので、たまにタオルで覆っているのがあるだけだ。色の白い男に隠すのが多いのは、体質的なものであろうか。ホルモンの関係で女性的な心情になるのであろうか。

今しも登場した、まだ若く色の白い男は固い防備で隅の大きな湯槽につかる。内気な性格らしく、他の男のようにきよきよもしない。静かにじっと身を沈めている。「あああ、新婚らしいアベックの片割れではないか」女房はどうしたのだらう。美人と云うタ

イプではないが、現代風の愛くるしい顔をしていた。小柄ではあるが、スタイルもよかったな、特に、ツンと突き出した胸が立派だった。「やはり恥ずかしくて、狭い女風呂で我慢しているのかな」それにしても頼りなさそうだな。淋しそうなようすだ。一緒に入ってやればいいものを、などと思っているとやっ、入ってきた。確かにそうだ。あの人だ然し貧弱な胸だなあ。人違いかな。いや顔は確かにそうだ。然し、あの盛り上った胸はどこへ行ったのか、きっと、脱衣所のボックスの奥の方に突っ込まれているのであろう。

最近では精密なものができているとか。満員電車でもまれても絶対背中の方に移転するよなことはないと聞く。真の女の全貌は裸でしかわからない、とだれかが云ったが、全くその通りである。

その若奥さんは、中に一步入ると目で場内をすっと見渡す。そして隅の生っ白い男の上で、はたと止まる。男も目で合図する。然し男のそばには二、三人の男がいる。さすが行きかねて、女の多い湯槽に入る。小柄な体で胸が貧弱となると、さっぱり栄え^はない。ごく平凡な女になり下ってしまった。興味は薄れる。次の獲物を探すことにしよう。

その時、ちょっとしたハプニングが起こった。二、三人一緒で入ってきたママさん連がある。その中の一人が子供を抱いていたがその子供の足が当たるところが問題であったのだ。ママさんは気がつかないらしいのだが、それを見て、連れの奥さんが大声で笑い出した。やがて気付いた当の奥さんも声を出して笑いくずれるのである。「まあ、あんた、いやだ」ケラケラ笑う声が実に健康的である。幸福なんだな、と思った。

続いてドーラン化粧の女が入ってきた。場内の視線が一斉に集中する。思わずドキッとしたらしく足が止まる。演芸に出ていた女らしい。押すな押すなの女風呂に、仕方なくこ

っちへ来たのであろう。然し、男のみならず女たちの注目をも浴びて進退きわまった様子である。それでも一瞬の後、意を決したらしく一番人のいない湯槽に入る。やや細い体格で、色は黒く乳房も普通、と云うより貧弱な方である。化粧して、美しい衣装をつけてライトに照らされると華やかな存在となるが、裸になって裸の中に混じると、ごく平凡な、さっぱり自立たない存在となってしまう。餅は餅屋。人間は自分の持ち場で働く時が一番美しいと云われる。

私は何年か前、天下の美男子長谷川某に会った時のことを思い出した。初めはわからなかったな、あの時は。出て来た時は一瞬こつ

い土方のおっさんかと思ったものな。よく見なおして、ようやく長谷川某であることを認めたものだ。しかし、その人が美しく化粧して衣服をつけければ、忽ちにして天下の美男子になるのである。裸になりや皆同じか。ヘソ下に人格はない、とも云うが、よくわかる気もする。

浴槽につかるにはつかったが、さすがにドーランを落とし、ゆっくり体を洗う勇氣はなかったのか、女はすぐ出て行った。今までもドーラン化粧の男が、時々入ってくることはあっても、女は珍しい。今日、このひとつでも収穫はあったと云わねばならない。今日のハントは、とどこおりなく終了したのだ。何か快い疲れを感じる。さあ、幕は下りた。帰るとしよう。

帰りのバスの中も結構混んでいた。見た顔も多くある。然し、裸を憶い出そうとするとなかなか憶い出せない。裸の時と着物を着た姿が、こうも変わるものか。着物を着ていた者が裸になった場合はよくわかるのに、裸の人が着物を着るとわからなくなってしまう。どういふわけなのだろう。

——(おわり)——

「伝言板」

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、切手代用、(一割増)振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。



三 回 分 載

女

狐

(上)

光 谷 東 穂

花の妖精

KK化学の常務、中原巧三は、ゆったりしたベッドのなかで目をあくなり、キョトンとした。室内の模様が一変しているのだ。

(はてな? まだ夢のつづきかな)

彼はしばらくぼおっとする。首をゆするとやけに頭が重く目の前がぼやけた。が、夢の中の出来事ではなく意識もたしかなようだ。

(変だな。ゆうべ、おれは車に乗って……)

おぼろな記憶をまさぐり、一瞬、おどろきでからだがかねばる。勢いよくはね起きた、

とたんに太い眉根をしかめた。頭のしんがズキンと響く。明らかに二日酔の症状だ。

(たいそう酔っぱらったらしいな)

おのずと自嘲的なにが笑いが浮かぶ。だが彼は、いまだかつて、自分の帰るところを間違えるほど、深酒をしたためしなかった。

(……信じられんな!)

しきりに首をひねり、中原は妙にひっそりした部屋のなかをうかがう。すこし気味が悪くなつてキョロキョロした。

その鼻さきへ、どこからともなく甘い花の香りが匂ってくる。小刻みな息をしてそのにおいをかぎ、彼は、やわらかくただよう香り

がいけ花のものではなく、質の良い化粧品のにおいだということに、すぐ気がついた。

(すると、ここは女の部屋か——?)

ドキンとするようなおどろきだが、そういえば室内のたたずまいにも、女のすまいらしい気配がしみこんでいる。

(怪しいぞ。どうしたのだ、おれは——?)

思考がもつてはつきりしない。目を閉じた中原は、うつろな思いを絞り出すように重い首すじをもみほぐしながら、昨夜、自分の歩いた道筋をたどりはじめた。

予定の宴会は意外に早く終わり、そのあとし貿易の重役を誘ってキャバレーをのぞき、

しばらく時を過ごした。客と別れてひとりに
なって、急に若い息ぶきが恋しくなり、気ま
まに遊べるナイトクラブへ足を向けた。

途中、旧友のH大教授に会い、いっしょ
にハメイト・MVの奥へはいった。

顔見知りの若いホステスに囲まれ、罪のな
い戯れに興じて単純に悦び、やがてマダムの
みな子が加わるとむかし話に花が咲く。すっ
かり若返って、忘れていた青春の気風をとり
もどした心地になり、痛快に酔った。

かなり遅くなってから、女たちに見送られ
て車に乗った。行き先はもちろん、宿泊中の
Jホテルである。——そのはずであった。

中原はアツと思う。ただどしい記憶はそ
こまでで、あとはプツンと途切れている。

(あいつは、どうしたのかな……)

帰りぎわ、大学教授の姿がなかった。どう
したのかよく覚えていない。いや、他人のこ
とはどうでもよい。ホテルへもどったはずの
自分が、こんなところにいるのがおかしい。

(ここはどこだろう？ マダムの部屋かな)

いや違う——と、彼の感覚が否定する。

ほのぼのと立ちこめているなまめかしい移
り香は、マダムのものではない。第一、男ぎ
らいでとおっているみな子が中原をどこかへ

誘うなんて、およそ考えられないことだ。

妙だぞ！ と中原のとまどいがつづく。し
つとりとした静寂につつまれ、なんの気配も
感じられないのがかえって気になる。ふと腕
時計をのぞくと十一時を過ぎていた。

(大変だ！ これはどえらい不覚だぞ。重要
な会議がある日だというのに——)

舌打ちをして腕をこまめく。急速に目ざめ
ゆく五官が思考をうながし、身についたプロ
の意識が活発に働きはじめる。

毎月一度、中原が大阪へくるのは慣例にな
っていた。一週間ほど滞在し、その間、支社
へ顔を出し必要な資料を検討する。近畿一円
は言うに及ばず、重点的な西日本地域におけ
るKK化学の業務実態を探り、その調査をよ
りどころにして、KB織物をはじめ、傘下の
系列会社に対する方針や、施策的な思惑をま
とめ、重役会で討議することになっている。
いわば彼は、監察を兼ねた大阪支社のお目付
役で、東京本社の上でも、威信と権力とを
合わせて持つ指折りの実力者であった。

予定では、きょうは部長クラスが集まり、
それぞれの経過報告がある。コンピュータ
による情報活動が盛んな昨今だが、人間の知
恵や豊富な経験はおろそかにできない。その

ため遅くとも十時には出社し、午後の会議に
備えて、各部課長から提出されている書類を
十分に検討しておくつもりでいたのだ。

(こうしてはおれんぞ) と、あわてて床に降
り立ち、そのときになって中原は、自分が着
ているナイト・ガウンに気がついた。

自分の身なりを小気味よく眺めながら、彼
は、面映ゆそうに首をひねる。だれが着せて
くれたのか知らないが、相手のセンスの良さ
がしのばれるのだ。と、そのとき、

「あら、もうお目ざめやしたの」

と、はなやいだ声の不意打ちがあった。

だれッ——?! がくつとしてふり向いた彼
は、思わず、どんぐりまなこで息をのんだ。

間仕切りの綾織カーテンから半身をのぞか
せ、見知らぬ女が婉然^{えんぜん}とほほ笑んでいる。上
品な淡いヴァイオレット色のガウンには、大
きな縫取り花がいくつも咲きかおっていた。

小首をかしげて穏やかな笑みをたたえ、見
た目にも麗しい女の立ち姿は、戦慄をさそう
ばかりの妖しい美しさに包まれ、まこと「忽
然と現われた花の精」という表現がすこしも
誇張ではない。カーテンをささえている白い
手指が、ゾーッとするほど印象的であった。
年甲斐もなく中原は頬を染めた。声を出す

ことも忘れ、しばしうっとりとして、妖精か
と見まがう、あでやかな女の姿に見とれた。

女は、茫洋^{ぼうよう}とした表情の中原を、ひときわ
さわやかな微笑でじっと見つめた。その様
に、男の心をやんわりとくすぐるなまめかし
さがある。実にチャーミングな、得も言われ
ぬ濃厚なお色気がふきこぼれているのだ。わ
れしらず、中原はからだがふるえた。

「すっかり朝寝坊をしてしまいましたの。ま
だこんな恰好をしていますのえ。おかしおすや
ろ。あらいややわ。そんなにじっとお見やす
と、わたくし、羞ずかしゅうて……」

女の顔がほんのりと色づき、本当に羞ずか
しように、しなやかな指さきを頬に当てて、
上品な流し目が中原の顔へそそがれる。

女は、そのままスツと姿を隠した。

言葉づかいが京なまりの優雅な女性――。

はてな？ と、あわただしい思索が脳裏を
巡り、中原は遠い面影をまさぐりつづける。

どこかで見たような気がするのだが、確か
な記憶はない。あいまいな気持に、おのずと
いらだち、肌にとりと汗がにじんだ。

不可解な思いに心を乱され、ぼんやりとつ
っ立っている中原の耳に、明るい女の声が、
歌声のような快い響きで伝わってくる。

「お洋服は、そのタンスのなかですよ。
はようおいでやす。おいしいお食事ができて
いますえ。朝とお昼と、兼用ですけど」

「ああ……ありがとう。しかし……」

中原には、まだ重いとまどいがあるのだ。
「……あなたは、どなただったかな？ ぼく
は、どうしてここへ来たのだろう――」

言いながら彼は、なんとという間が抜けたあ
いさつだろうと、かわいた苦笑をもらす。

「オホホホ。そんなこと、どうでもよろしい
やおへんか。はようお顔をお洗いやすな。気
分がすーっとしめますえ」

「うん。そうさせてもらおうか」

軽く答えて、中原の疑念はさらに深まる。
だが、急がねばならないな――と、まずその
ことを念頭におく。疑惑が大きいからといっ
て、安閑と思案顔ではいられないのだ。

「すまないが、電話を拝借したいな」

「はあ、どうぞ。枕もとにありますやろ」

「ここはどこです。大阪じゃないのですね」

「はい。京都ですえ」

（やっぱり京都か！ かしこいつの間に来た
のだろう？ この女、何者だろうか？）

何度自分の胸に問うても、答えは容易に出
てきそうもない。こうなれば成り行きまかせ

にして、ともかく、会社へ電話を入れること
が先決だろう。

「出社は遅れるが、会議には出席するから」
と秘書に伝えて、バス・ルームへはいった
中原は、頭からシャワーを浴びた。すると、
ぼやけたような感覚が、水の刺激でスキッと
する。ようやく気分的にも余裕が出てきた。

美しい狐

「われながら情けない話ですが……」

と、にが笑いでごまかす。そうでもしないと、
どうにもこの場のかっこうがつかない。

「何がなんだかさっぱりわからない。よく人
が、狐につままれたなんて言いますが、そん
な感じですよ。いい歳をして恥ずかしいな」

「ホホホ。そのとおりかもしれまへんえ。わ
たくしは女狐です。こんなカッコをして、夜
じゅう、高い声で啼きながら歩いています」

影絵の狐の形そのまま、器用に折り曲げた
指を額の両脇に立て、ジェスチャーよろしく
コンコンと啼き声を真似してふざける女に、
中原は、ぶっとふきだしそうになる。好まし
い眺めのなかにすがすがしいユーモアを感じ
ながら、それとなく女の容姿を観察する。

歳はまだ若そうである。実際には三十を過ぎているのかもしれないが、優美な肢体と相まって、いまはどう見ても二十五、六だ。

朝、起きて間もなく、身だしなみだけの薄化粧だし、全体の感じもきわだって美貌だというほどでもないが、白い額、すなおな首すじに気品があふれ、描いたような眉毛が麗しく、張りのある目もとを長いまつ毛がしとやかに飾り、瞳はきれいに澄みきっている。

すこしうすい唇の表情に、この女の内面的な気性の激しさが感じられるが、丸味を帯びた鼻は親しみやすい愛嬌があった。頬から顎にかけて、ふっくらと線が甘く、女の容貌を愛らしくやさしいものにしていくようだ。みずみずしい肌は健やかな艶を放ち、見ているだけで心の奥がぐすぐつたくなる。

とにかく、今がもっとも充実した年ごろだろうが、それでいてふしぎなういしさも見える。たえず身边にただよう明るさが、相手の心にさらっとした印象を与えるのだ。楚々としたこの女の美点は、中年を過ぎた中原にとって、まことに得がたいものであった。

「だれだったかな、あんたは——。ハハハ、とんまな質問で申し訳ないが、年寄りの物忘れだと思ってかんべんして下さい」

中原は、まばゆそうに瞳を細める。つねに企業の矢表に立ち、ときには冷酷なまでに辣腕をふるう。また一方では、遊ぶことにかけても人後に落ちぬ、と自負する彼だが、いまはすっかり弱気だった。

粘っこく舐めまわすような男の視線を浴びても、意外に平然としていた女は、急にコロコロと笑いだした。いや味のない嬌笑だ。

「あのね、狐のこと、ご存じですよ。むかしから、靈獣や、なんて言われています」

突然、何を言いだすのかと、相手の真意を解しかねて、中原はあつけにとられた。

「狐はおいなりさんのお使いやそうです。ケンゾクさんがたくさんいやはって——。アカギツネにアオギツネ、黒いキツネに白いキツネ。ああ、それから、ギンギツネ……」

クククと媚笑をもらし、指折り数える女の姿は少女のようにあどけない。だが、なにげないその動作のなかにも、ハッと目を見はらせるようなコケットリーがにじみ、ともすれば圧倒されそうになり、中原はあわてる。

「わたくしも、ケンゾクさんの仲間やわ。夜遊びの大好きな赤ギツネや。オホホホ」

女の表情は、くったくもなくほころびる。

「狐は、ひと晩のうちに何キロでも歩くって

いますよ。女狐のわたくしは、気づい気ままにノコノコと散歩に出かけ、その帰り道で赤ン坊を拾いましたの。それがあんたはんです。すこし大きいボンボンやけど……」

「なんだか妙な話だね。とにかく、こんなにお世話になって恐縮だよ。ゆうべ、ぼくはだいぶ酔っぱらっていたでしょう。あなたに何か、失礼なことをしたんじゃないかな」

「そうどうすなあ。わたくしの手を、こうお取りやして……ものすごくお元気でしたわ」

「そんな乱暴なことをしましたか。すみません。このとおり、深くおわびします」

「——それから……」

「ええッ。もっと何かをしたのですか？」

「ウフッ。ホホホホ。もし、そうやったとしたら、どうしてくれはります——？」

女は、チラと、ななめにうかがう。

麗しい媚態にたじろぎながら、中原は、

「それは困った。どうすればいいだろうな。でもね、たぶらかしだとわかっていても、あ

んなみたい美しい狐が相手だったら後悔しないね。かえってうれしいだろうな。ハハハ」

と、ようやく冗談が言えるようになった。

「そんなこと、お言いやして——。わたくしみたいな怪しい女に油断しやったらあきま

へん。女は魔ものやとか言いますやろ。わたくしはキツネどすえ。化けるのはお手のもんやし、人をだますのも商売みたいや。オホホ。念のため、お持ち物を調べておくれやすな。おさいふの中身が木の葉ッぱやったら、どないしやります——？」

「さあ、どうしよう。仕方がないからずっとここにしようかな。それでもいいの？」

中原の言葉は半ばは本心かもしれない。女に対する彼の警戒心は影をひそめていた。

あくどい策謀が渦を巻き、熾烈な競走に明け暮れる非情な社会で、いくたびも困難を克服してきた豊かな経歴が、直感的に、女が自分の敵ではないことを教えてくれるのだ。

とはいえ、水商売の女らしいが——と臆測するだけで、正体はつかみかねる。どうしてここへ連れ込まれたのか、その経過もはっきりしない。むろん記憶はまったくなかった。

（どういうつもりだ？！ しかし実にいい女だな。用心しないと、おれはこの女に夢中になりそうぞ。それが相手の魂胆だろうか？）

ことさらな根拠のない勝手な予感だが、妙に実感的な、なまなましいものがびたと肌に吸いついてくる。同時に、その自意識につれて爽快な血潮のざわめきを覚える。

（この女、ほしいな。娘にしたいほどだ！）

娘——？ 中原は自分の思いに狼狽した。

女を一べつするなり、どこかで見たような気がしたのは、数年前、ふとしたかぜがもとでアツという間にさき立ってしまった、かわいひとり娘と、どこかが似通っているためだったと気づき、にわか心奥深くがうずく。すると、なおさら、自分の腕のなかへ抱き締めたくなってくる。

娘にしたいと思う心と、抱擁しようとする気持——。その心情は、まったく異なるものだが、そんな矛盾も忘れ、いまにも暴発しそうな激情に分別を抑えかねて怖気づく。何者だろうかという探究心も加わり、妖しい欲望が、しだいに勢いを増してくるのだ。

「ねえ、名前だけでも教えてほしいな。こんなに世話になって、相手は美しい狐だった！……ではすまされない。もっとも、ぼくのような老人相手では気がすまないだろうが」「なにを、お言いやすの。おなごの心を惑わすいちばんタチの悪いお年ごろやおへんの」きれいな目が、ふうっと笑う。そのままスツと溶けこんでゆきなくなる快い誘いに、中原は自分におびえて目をそらせてしまう。さりげなくあたりを眺める。マンションの

一室らしいが調度品もほどよくとのい、この女にふさわしい高尚なふん囲気だった。

（これでは月々の経費も大変だろうな——）

ふと、そのあたりに不自然なものを感じ、何かが、まるで棒のように胸につかえる。

（男がいるのか？ パトロンだな）と、さきほどまで自分が着ていたイキなガウンが、いわれのない嫉妬の対象になる。ほろにがい微笑に心が騒る。だが奇妙にも室内には男の気配がなく、匂ってくるのは、こそぐるような甘い脂粉の香りだけだ。

しきりに何かを探ろうとする中原の意中を察したのか、女は声はずませて笑った。

「ここは狐のお宿どす。いまにそのへんからゾロゾロとケンゾクさんが出てきて、はい、こんにちは——と、あいさつしますえ」

「あんたが狐の親分かな。これは愉快だ」声たてて中原が笑うと、女も負けずに腰をふたつ折りにして笑うのであった。

「あのね。昔むかし、都を遠く離れた旅のお人が、ふと行きずりにひと夜のお宿をお求めになって、奇しくもそこで、おとことおなごがめぐり会う——。こんなお話がありました。が、ロマンチックやおへんか。ややこしい今の世の中でも、あんな、のんびりとした、夢

みたいなロマンスがほしいと思います。わたくしも、ほんのすこし、そんなマネがしてみたいのです。ご迷惑でしたやろか——」

女は、スッと立ちあがった。

「お急ぎですやろ。お車の用意をします」

※

ニューススタイルの二〇〇cc——。

スポーティな車を走らせ、女はすっかり無口になった。中原が声をかけても、バックミラーのなかで小さくうなずいてはほほ笑むだけだ。結局中原は、何ひとつ女のことを知らないままで、ていねいに礼を述べて別れた。

しかし、謎に包まれた女の面影は、意外に鋭く心の底に灼きついて消えず、熱い思いが官能をゆさぶる。黙って別れたことが痛恨となり、掌中の珠玉を失った心地がする。

折悪しく多忙な一日だったが、何がなんでも女の正体が知りたくて、のっぴきならない時間をさき、再三みな子に電話をしたうえ、閉店間ぎわの八メイト・Mへ駆けつけた。

みな子は、中原の熱心な口調に目を丸くしたが、彼の話がすむと、居合わせた客がびっくりするほど、はしゃいだ高笑いをした。

「女狐ですって！ オホホホ。あのコ、うまいこと言ったものね。そういえば、ゆうべ店

へ顔を見せていました。アハハハ……」

みな子は無作法に笑いつづける。

「なんだい！ マダムはあの女を知っていたのか。だったら、じらさずに教えてくれ」

「中原さん。あなた、本気であのコを——」

「そうだ。いささか照れくさいが、ま、中原巧三が一生に一度の頼みだと思ってほしい」

「あーら、いやだ。大げさな！ こっちのほうがびっくりして、腰を抜かしますわよ」

「まったく！ バカみたいなヤボな話だ」

「そうですよ。あなたらしくありません」

ウフツと、いたずらっぽく瞳をちらつかせたみな子は、意味ありげに声をひそめた。

「あのコ、あたしの妹みたいなものですの」

「なーんだ。そうだったのか！」

中原は、みな子の額をツンとつつく。

「おい、マダム！ マダムはいつから、そんなに意地の悪い女になったんだい」

「だって、言ったでしょ。あたしの妹も同じですって！ だから大事にしていますの」

しぶしぶ話すみな子の説明によると、あの女はマコという名前で、以前からみな子が面倒をみていたのだという。ときどきこの店を手伝っていたらしいが、いまはみな子の代理で京都の店を取り仕切っているのだそうだ。

「すると、なかなかのやり手なんだな」

「それはもう——。あたしの妹ですもの」

「ありがたい。それだけきけば十分だ。さっそく京都の店とやらへ行ってみよう」

「せっかくなのですが、あのコはダメですわ」

「どうしてだい？ わしではいかなのか！」

「いいえ、中原さんがお相手なら、申し分のない結構なお話だと思います。でも……」

「でも……って？ 何かあるのかい？」

「いえ。あのね、実は……」

みな子の声はいっそう忍びやかになった。

「実は、あのコ、男ざらいですの」

「———どういふことだい、それは？」

「どうって。殿方がきらいなんですって」

「ほう！ 妙なコだな。すると、あのー、なんとかいふ別なほうかい？」

「べつなほう……って——？」

「ほら、あれだよ。女同士の……」

くすくすツツと、紅い唇から媚笑がもれた。

長いまつ毛が妖しく翳り、鼻をしわめたみな子の満面に、微妙な影がさざ波立っていく。

「やっぱり、そうか！ Mのマダムはレズだって、そんな噂をきいたことがあるぞ」

「いやだわ。ご冗談ばっかし……」

「いや、本当だ。あのコが相手だな」

「いやね。そんなエッチな話はごめんだわ」
 やがて四十になる大年増のみな子が、柄にもなくはにかんだそぶりを見せると、妙にまなましい情感がただよう。中原は、ふしぎそうにみな子の表情を見守りつづけた。

ふくれあがった彼の感情は、いまにも力強く破裂しそうだった。あの優雅な女性がレスピアンだと知ってから、かえって愛着はげしい自分の気持の不可解さにとまどう。

「あとは言葉をにごすみな子に、中原は粘り強い情熱をあらわに、執拗にくださる。」

「ねえ、マダム。わしがこうして頭を下げて頼んでいるんだ。なんとかしろよ」

「中原さんともあろうお方が、どうしてまたそんなに——。まんざら浮気でもなさそうだし、かえって妙な感じですよ」

「とにかくもう一度会いたい。礼も言わなきゃ、わしの気持がおさまらんじゃないか」
 「そんなにご執心ですの。困りましたわ」

みな子は、真実、困惑したようすだ。

実は中原はあせていた。大阪滞在の日は残り少なく、東京にはつぎの仕事が山ほどある。ぐずぐずしてチャンスのをがせば、こんどはひと月以上も先のことになってしまう。「それほどまでにおっしゃるのなら連絡しま

す。でも、くれぐれもお願ひしますが、何事も、あのコの気持しだい、ということにしてやって下さいね。でないと、可哀相なもの」
 中原の異様な熱意に根負けしたのか、とうとうみな子は、そんなふうに約束をした。

湯水の戯れ

やがて午前二時——。マンションへ帰ったみな子は、ふと仰ぎ見て、五階の窓あかりに目をとめると、にんまりと頬をくずした。

足音を沈めて室内へすべりこみ、奥深い間仕切りのすき間から中をのぞいた。と、ムードあふれる寝台の上に、女がひとり、たおやかな肢体を横たえていた。

淡いネグリジェは裾がまくれ、脚は、思いのほうへすんなりとひらいている。寝乱れたおんなの姿はしどけないが、紅花をぼかした薄衣におおわれ、女体は優美な線を集めて、夢のようにほのかに浮きあがっていた。

あでやかなその姿かたちは、どこか幻想的な一コマに似て、見慣れたはずの姿態ではあるが、みな子の目には清らかでまばゆい。

あきることなくしばし見とれ、音をたてないように帯を解く。何もかも脱ぎすてると、

とたんにな子子の全身からふだんの年令が消えてしまう。そのままの姿でバス・ルームへ急ぐ。思ったとおり、ちゃんと入浴の支度がととのえてあった。

ムツとする温気につつまれ、なめらかなおんなの皮膚は、たちまち煙ったようにしっとりとうるおう。無造作に片脚を入れるとザッとお湯があふれ、グラマラスなみな子の裸身は、浴槽いっぱいひろがって沈んだ。

片方のふちに頭をもたせて、みな子は軽く目を閉じた。色づいたまぶたがヒクヒクと動き、つややかな頬に微笑がゆらめく。ぽってりした唇がなぶられたようにひらいた。

「段取りだけは、まず、上出来だけ……。さて、これから、どうなることやら——」

くすくすと奇妙な笑いが語尾をいろどり、大丈夫よ、うん！ と自分でうなずく。

しなやかな腕が流れ藻のように泳いだ。やわらかく肌をなめずりながら、洗い清めていく。ゆれ動く顔がしだいにこわばり、首すじに力がはいった。上気したみな子の口から熱い吐息がもれはじめる。

と、そのとき、模様ガラスのドアの向こうに、忍びやかな人影がほんのりとうつつた。「……おねえさん、いるのね……」

はずむ心を抑えつけたような声だ。

みな子はわざと聞こえないふりをした。本音を吐けば、お湯の中の中からだが熱くうだつて、まともな言葉が出そうもないのだ。

外の女は細目にドアをあけた。すき間からようすをうかがい、あお向けた顔をしわめてあえいでいるみな子を見やると、笑いをかみしめて近づいてきた。一糸まとわぬ裸身だ。匂い立つような美肌を惜しげもなくさらし、そばにたたずみ、湯水の底で妖しくうごめくおんなのひとり遊びを、じっと見つめた。

マコ！ みな子の声はせつなくひろがる。

女のからだがゆっくりと沈んだ。膝をつき顔を近づけてのぞきこむ。浴槽のふちが低いので、両手をつくると、丸いお尻がポコッととび出し、女のポーズは四つん這いになった。

と、思う間もなく、ハァーッと大きく胸をふくらませた女は、のめるように、頭からさきにお湯の中へもぐりこんでいった。

「アッ。ア、アー、マコ！」

さかさまに戯れる突飛な女の行動に、おどろきとよろこび半ば、みな子の体は迎合的にはねた。くびれたウエストにしがみつき、みな子は、はしたない声でうめいた。うめきながらアクロバティックなまなましい生き

肌を唇をつけた。

勢いよくお湯があふれ、タイル張りの床の上を洗い流していく。さして広くない湯舟のなかではふたつの肉体が奇怪にからまり、色もうるわしく咲きかおる。波立ちさわぐ水音にまじって、おんなのため息がやるせなくこもった。

「アー、熱い。これじゃたまんないわ」

軽々と女をかかえてみな子は湯舟を出た。

まっ赤な顔、フウフウと息をはずませている女の肩を抱き寄せたみな子は、額にまといついた髪の毛を、やさしい指さきでかきわけやりながら、迫るうれしさをかみしめる。

「ステキよマコ。でも、苦しかったでしょ」

「ウフッ。だいぶお湯をのんでもたわ」

「あらま、可哀相に。でもマコがいけないのよ。あんな突拍子もないコトをするから」

「おねえさんが誘ったもの。すぐくハレンチな誘惑やもん、コロッと参ってしもうたの」

「そんなことを言っ。この女狐めッ」

みな子は、女の鼻の頭を小さくつまんだ。「さっきも狸寝入りをしていたのでしょう。」

マコは狐やから、だますのがうまいわ」

「結果が知りたくてずっと待っていたのよ」

「そんなに気になる？」

「そりゃー。一世一代の演技やったもん」

「訊きたかったら、甘えてちょうだい」

「いやだア。おねえさんはズルイわ」

女は、怨じ顔で、すねたそぶりを見せる。

そのしぐさがまた、たまらなくかわいい。

「マコって、本当にふしぎな女ね。ちっとも歳をとらないみたい。まるで子どもだわ」

「じらさずに教えてエー。どうやったの？」

「教えてあげるから、さ、いらっしゃいな」

みな子は、洗い場の小さな台に腰をおろして、そろえた脚をスーッと伸ばした。

いややわ！ と口では拒みながら、女はみな子の脚をまたいだ。みずから身をくねらせてみな子の視覚を愉しませたあと、かがみこんで顔をすりつけるのだった。

「ホント言ううと、マコを手放したくないの」

マリのようにふくらんだみな子の胸に戯れていた女は、その声をきくと、瞳の奥がキラッと光る。

「そうよ。マコのお芝居は大成功だったわ」

「ホンマ？ おねえさん、それ、ホント？」

「ホントよ。中原さんったら、どうしても、だって！ くどかれて往生しちゃった」

「で、おねえさん、なんて言うたの？」

「マコの心しだいって、そう言っ。いたわ」

「ありがと。うれしいわ、恩にきます」

みな子の首に両手をまわし、女はくるおしく唇を求める。愛らしい情熱に圧倒され、自分も舌を伸ばして吸わせながら、ふと、みな子の心にわびしさがつのる。そんな弱気を強引にねじ伏せ、女の肩を力強くささえた。

「これから先はマコの腕しだいよ。マコ、いえ、浜田正子の悲願だもの。くだらない感傷はぬきにして精いっぱいおやりなさい。中原さんのことなら大丈夫。あのひと好みの女のタイプはもちろん、SEXの趣味だってみんな知っています。だから最初から、あのひと好みの女にマコを育てたのよ。なにしろあたしは、あのひとが支店の部長さんだったところから、ずいぶんと長いおつき合いだもの」

「おねえさんは中原さんが好きだったのね」

「むかしは……ね。でも、そのころは……」

親指を立てて、みな子はほろにがく笑う。

「変なことをしたら一コロよ。消されるの」

「まあ、こわい。ちっとも知らなかった！」

「マコはカレの素顔を知らないものね。すごく疑ぐり深くって。マコが来たから安心したのよ。レズならいいだろう！　と言って」

「中原さんのことでそれが心配やわ。わたしはおねえさんとうとうして女同士の……」

「そのことなら安心なさい。今夜だって、マはレズだろう。マコが相手か！　なんて、おおよそは察しているのよ、あのひと——」

「中原さんて、変な趣味があるのやろか？」

「ウフフ、まあね。お口が大好きだってさ。マコのこの可愛いお口が……」

「いやだア。困っちゃう、わたし——」

「いいじゃない。正子はそのころ、あたしの前で、カレに……」

「いやッ。やめてェー。羞ずかしいわ」

正子は、初めのころ、何度も接したみな子のパトロン、中国人の顔を思い浮かべた。それはもう、五年余りも前のことだが——。

「正子を中原さんに渡すのは、あたし、つらいのよ。初めの約束だし、正子のために一肌脱どうと言いだしたのは、あたしだけ」

胸に深く抱きしめ、たおやかなうなじに舌を這わせ、みな子の声は哀しくふるえる。

「でも、正子の念願がかなうようにと祈ってしばらくお別れよ。その代わりもう一度！」

おはいり！　とみな子は浴槽を指さした。

さきほど、ふたりが美しく戯れたため、湯舟のお湯は半分以下に減っていた。

みな子は、正子に、後ろへ両手をついて上体をささえたあお向きのポーズをとらせ、そ

の上へまたがり、急に脚を閉じてしまった。

羞じらった顔をがくんとそらして、観念したようにまぶたを伏せる正子を見おろし、

「これが最後かも知れないもの。すこしは苦しくてもがまんなさい。参考になるわよ」

と、髪の毛を驚づかみ、みな子は徐々に腰を落とした。

正子の顔がお湯の中へ沈んでいく。透明な湯水を泡だて、苦悶の表情が見え隠れした。

みな子は、湯舟の底へ正しくすわった。

豊かな肉体に圧迫され、水中で呼吸を奪われた正子は、四肢をふるわせながら、死にものぐるいであばれた。

おんなの謎

滞在予定を無理に延ばし、中原がふたたび謎の女に会ったのは、五日後のことである。

「もうお忘れやと思てましたのに、またお目にかかれるやなんて、まるで夢みたいや」

女は、顔を合わすなりにつこり笑い、愛想よく、中原を京都のマンションへ誘った。

「冗談でもそう言ってくれとうれしいね。あんたにはたくさん礼を言わなければならんだ。あの晩、ぼくといっしょだった大学教

授は、帰りの車で事故に遭ったそうだと。頭にケガはなかったが、三カ月の重傷だという。あんたがぼくを誘拐してくれたので、それで命拾いをしたらしい。きみは命の恩人だよ」

「そんなことがありましたの。こわい世の中どすなあ。ホンマにご無事で何よりだす」

「早くお礼が言いたいの、マダムが意地悪をして、なかなか教えてくれなかったんだ」

「あんたはん、大阪のおねえさんから、わたくしのこと、なにか、おききどすやろ」

まばゆそうに視線を落とし、頬にきれいな紅が散った。すがすがしい羞じらいだった。

「ああ、あらましのことは、きいたよ」

「……あの、ことも——？」

消え入るような、弱々しい声がふるえる。

「うん！　だが、気にしなくてもいいよ」

「アー、どうしたらええやろ。羞ずかしい」

もみじ色をした頬を両手にはさみ、せつなく身もだえる女の姿は、見るからに可憐だ。

「変な女やと、そう思うておいでですやろ」

「平気だよ。なんとも思っていないね」

「ホンマ、どすか？　ホンマになんとも……」

のコトだけはかんにんどっせ。お抱きやしても、お人形と同じでなんの味もおへん。人並なコトもでけへんけ、ったいな女ですさかい。すぐ、おいやにならりますやろな」

女は瞳をうるませている。その哀愁の翳りを、中原は痛ましい思いで、そっと見守る。

なにかものたりない感情を抑えて、中原はその夜も女の望みどおり世間話に耳を傾け、それだけで満足してきげんよく別れた。

そして、あすは東京へ帰るという前の日、

ハメイト・MVへ出向いてみな子に会った。

マコという女にふしぎな魅力を感じ、妖しく燃えたここ数日間の心の推移を、みな子にだけは正直に告げておきたかったのだ。

※

ひと月経って、中原はまた大阪へきた。

日暮れを待ちかねてハメイト・MVをのぞき、まず、みな子にマコのようなすを尋ねた。

「元気ですわ！」と、きいてホッとす。

多忙な日々、暇があると京都へいった。

中原が求めるまでもなく、マコは彼と寢床をひとつにするようになった。ネグリジェの上から、やわらかく熟れたからだを入念にまさぐる中原を避けはしない。だが、さてとなると、

「いや！　いややわ。かんにんして……」

と、かたくなに拒みつづけるのだ。

しかし、身もだえにつれ、柔軟にはずむみずみずしい肢体の味わいは、中原の心に、いっそう清新な思いをつのらせる。と同時に、新しい疑惑が脳裏をいろどり、深い霧の中へ迷いこんだ心地がする。不可解なのだ。

会うたびの印象では、どうしてもレスビアンだと思えない。素質的な男ぎらいのようだが、ともすれば色眼鏡で見られたり、つまはじきされることだってあり得る倒錯の性に溺れたのは、よくよくのことだろう。その裏には、何か深刻な悩みがありそうである。

とはいえ、マコの異性嫌悪は本物らしく、かんにんして！　という声には、切実な祈りがこもっている。中原が大切な華客だということからみな子の立場を思い、いやいや義理だてのお相手をしているのかも知れない。そう思うとなおさらふびんさが増し、女の心根がいじらしくて、中原は胸の奥がうずく。

だが、さまざまな疑惑や、胸をうたれる哀憐の情は深い、マコがほしいという本来の愛着心には、なんの変わりもなかった。

中原の欲望はエゴイスチックで、権力的な横暴さも多分にあったが、本当の心は色恋ざ

たをぬきにして、マコが自分の娘のような、そんな奇怪な心理も入りまじっていた。

二度目に会ったとき、命の恩人だと言ったが、それも女の欲心を買うための誇張ではなく、実際にあの夜、旧友と帰りの車を共にしていたら事故に遭ったかも知れない。マコを命の恩人だと思ふことが、中原の心に、微妙な影響を及ぼしているのも事実であった。

二カ月目——。相変わらずマコの態度は馴化しない。燃焼することのないママゴトに似た戯れに終始したが、ふしぎにも中原の心に一応の充足感が訪れてくるようになった。

ひとり娘を失ってから、老妻とふたり暮らしで家庭的には恵まれていない。そのため、どことなく娘の面影を宿しているマコに接すると、いっそういとおしさがつのる。ときには、生まれ変わった自分の娘を抱いているのかと錯覚する。すると、血が逆流した。

わが娘を抱く——。この人類最大のタブーを犯しているような心理状態におちいり、さまざまな想念におののきながら、異常の境地で、異常そのものに強烈に刺激され、青年のように自然燃焼してしまうことさえある。

(おれとしたことが、なんという奇怪なッ)
と、にがにがしく唇をかみしめるが、唯美

的なマコの容姿に眩惑され、養女にしてでも自分の手もとへおき、二度と手放したくないな！ と、そんな無謀な思いにかられた。

「あのコには経理の才能がありますのよ」と、みな子にきいてから、自分の専任秘書にしたくなって、うずうずするのだった。

「どうだい、マコ。東京へこないか！」

中原は、真顔でくだいたこともあるが、

「いややわ。東京なんて、こわいもの」

すらりと鋒先をかわされてがっかりする。

それでもなんとか力になってやりたいと思う。だが、彼女が秘めているらしい真実については、本人の口から訊きだせなかった。

思いあまってMのマダムに尋ねると、みな子はある夜、こんなふうと言った。

「中原さん。あのコは以前、東京にいたのですよ。それなのに東京がこわいなんていうのは、それなりの理由があるのだと思います。」

近ごろの若いコって、見かけは無思慮で何事も簡単に割り切っているようですが、心の中まではロマンを愛し、真剣な模索をくり返しているのですわ。あのコも、夢の多い年ごろに、きつと何かがあったのでしょ。いつまでもしこりになって残るような、女にとっては口に出せない残酷なショックが……ね。

コソコソと私腹を肥やすタチの悪い人や、うわべは清廉な紳士づらでも、一皮むけば、えげつない狼どもがたくさんいますもの。

マコは、女のあたしでさえ抱きしめて口づけしたくなるような、愛らしい女です。それが、あんな、ゆがんだ形でないと身も心も燃えないなんて、どういふことでしょうね。

それが性だと、そう言ってしまうばそれまでですが、なんという寂しい現実でしょう。

みんな、殿方の責任ではないのでしょうか」
みな子の言葉はひとつひとつが、世の男性に対する女の深怨かも知れない。火を噴く呪詛の声とも聞こえ、中原をおどろかせた。

こんなこともあって、彼はいっそう強くマコに惹かれ、溺愛するようになっていった。

「マコは以前、東京にいたそうじゃないか」
夜の床で、ふと、からかってみたくなる。女は、探るような目で中原を見つめた。

「おねえさんからお訊きになりましたのね」
言葉が齒切れのよい標準語に変わった。

「すみません。わたし、本当の名前は……」
「あとは言うな。マコって、いい名前だよ。」

京なまりの言葉もぼくは好きだ。情緒があるからね。いまのままのほうがいいな」
頬をすり寄せて涙ぐむ女をやさしくいたわ

り、中原は何も訊くまいと心でうなずく。みな子が後ろだてなら十分に信用できるのだ。

だが、むかしのマコが、自分とも関係深い会社の社員だったことや、浜田正子という名前、そして彼女が秘めている痛ましい過去の傷痕について、中原はまったく知らない。

彼が知らないマコの秘密というのは……。

愛と憎しみ

話は、八年近い往時にさかのぼる――。

そのころ、浜田正子は、KK化学とは兄弟会社にあたるKB織物へ勤めていた。

中学生のときに両親が相次いで亡くなり、彼女は、多感な年ごろをわびしい環境で過ごしている。資質的な気性の激しさがわざわいするのか、なかなか兄嫁とうちとけることができず、気まずい思いがかさなって居づらくなり、高校を卒るとすぐ、東京に住む叔父を頼って家出も同様にふる里をとび出した。叔父の口ききでKB織物へ入社し、以後、ずっと叔父の家に居候するようになった。

そして三年――。当時の正子に、降って湧いたように縁談が持ちこまれたのである。

相手は三田村誠一という、同じKB織物の

社員だが、彼女はこの話にあまり気乗りがしなかった。考え方が古いのかもしれないが、身分違いだという気持ち強い。

それというのも、正子は総務部の一BGにすぎないのに反し、三田村は社内きっての成長株だった。いわゆる重役の卵だ。彼の所属する営業第三課は、企画を含めた重要な研究部門にたずさわり、社業の原動体を形成している。いわば明日の社運をにたて立つエリート集団だ。なかでも三田村は、亡父が有力な株主だったので、信望も厚く、実質的にも才識ともに抜群だと評されていた。

そんな男に求婚されたのだから、正子はいっとき啞然とした。間違いだという実感が強く、第一、心から三田村のことが好きになれないので困ってしまう。毛ぎらいするのではないが、勝気な彼女の性格からして青白いエリートたちは魅力がとぼしい。歯がゆくて、無意識のうちに反発したくなることが多い。

とはいえ、正子もやはり人並の女である。さしたる理由もなく三田村をきらう自分の感情を、分別を知らぬ若さゆえの無思慮ではないかと、内省するときもあった。約束されたも同様な栄光の座に対して、あこがれる気持ちも自然に芽ばえた。それが、醜い虚栄であっ

ても、重役夫人と敬称されることは名誉だろうし、正直に言って悪い心地はしない。

また、どうして洩れたのか知らないが、自分のことが口うるさい連中の話題になり、『あのひと、三田村課長に見初められたんだって――』などと、妬みまじりに言いひろめられると、持ち前の反抗心が頭をもたげる。無責任な噂のとおり、夢のような玉の輿なら、ひとつ、冒険してやろうかとも思う。

しかし、真実はどこまでも消極的だった。あやふやな自分の心に不安をいだいてしづりつづけた。だが、三田村はあきらめずに、叔父を通じて正子の意志表示を迫ってくる。

彼の強引さに根負けして、というより、世話になった叔父の立場を考慮した正子は、ともかく、三田村の母と会うことを同意した。

※

日曜日――。三田村家を訪れた正子は、格式高いふん囲気に緊張し、いわれのない劣等感を意識して神経をとがらせていた。

三田村の母は、正子をはじめに想像していたような権高なそぶりもいや味もなく、大事な跡取り息子が自分でさがしだした花嫁候補を、やさしく見つめるといふふうであった。

三田村誠一の希望どおり正子の訪問は一応

成功したかに見えた。が、ひとりの男が現われたとたん、話が妙にこじれてしまった。

青年は三田村家の次男坊であった。実は正子は、三カ月ばかり前のある日、だれとも知らず思いがけないことから、誠一の異母弟、康二に出会っていたのである。

その日、買い物に出た帰り道、駅前の本屋をのぞいた正子は、そこで挙動不審の男を見つけた。はじめから怪しい男だと思って疑っていたのではない。みなぎる若さに野生的なおいを感じ、横顔にひかれて目を細めていたのだ。すると、学生らしい男は、正子が見ているとも知らず黙って本を持ち去った。

明らかに盗みだ。しかし若者の動作はなんのケレンもなく、実に堂々としている。あざやかなその手口と、物怖じしない大胆な行動に、正子は半ばあきれながら驚嘆した。

男のみなりが不良じみていたら、それほど心にとめなかっただろうが、好ましい青年の意外な行為なので、つい好奇心にかられて跡をつけてみる気になった。

口笛を吹き吹き、^{ひょうひょう}飄々^{ひょうひょう}と行く青年の後ろ姿は、なんらばかるところがない。むしろ若さを謳歌して、誇らしげにさえ見えた。

青年が道路脇の小公園へはいったとき、正

子は「ちょっと、あんた！」と声をかけた。

一瞬、青年のからだは硬直した。足を踏みだしたまま、いつでも駆けだせる体勢で、ゆっくりと首をまわして正子を見た。

「あんた、見かけによらずいけない人ねえ」

青年の鋭い目つきがキラッと光る。

正子は、平気な顔で笑って見せた。その笑顔につられて青年も頬をくずしたが、正子の視線が自分のかかえている本にそがれていくと知って、とたんに顔色を変えた。

「私、見ていたのよ。あきれた人ねえ。でも巧妙な手口なので感心しました」

「なんのことだい？」

「とぼけたってダメ。その本よ。あんなこといくらじょうずだからって、褒められた行為じゃないわよ。悪いことだもの」

「あんたは——。あそこの店員かい？」

青年は警戒の色を浮かべて身構えた。

「お待ちなさい！ 私が店員なら放っておくもんですか。それより、あんた学生さんでしょ。あんなことをして恥ずかしくないの？」

「フン。いらぬお世話だッ」

正子がただの傍観者だと知ると、青年は急にずうずうしくなり、鼻さきでせせら笑う。

「ヘマはやらんさ。万一一くじったら、その

ときは金を払う。それで文句はあるまい」

「そんなことで済むと思うの？」

青年はプツと吹きだして歩きはじめた。正子も並んで、意地悪く男の顔をのぞきこむ。

「あの瞬間、どんな気持？ 一瞬を賭けたファイナルにスリルがあるのかな。それとも、うまくやったぞ！ っていう優越感なの？」

青年は、ますます驚いた！ という顔でまっすぐに正子を見た。横柄な口をきいても相手が美しい女なのでまごついていて。その様を見て、正子は漠然とした好感をいだく。

「ねえ、すわらない？」と、片隅にあるベンチを指さし、正子は青年を誘った。

「チエッ。バカにするな。つまらない詮議だてはダメにならないぜ」 すぐみながら、青年も物好きな正子に興味を覚えたらしく、いくぶん照れくさそうに腰をおろした。

「あんた、学生さんでしょう？」

正子はもう一度、念をおす。

青年は無言だ。じろじろと見る目つきが鋭く、無気味だったが、正子は平静を装う。

彼女には青年の第一印象が好ましかった。本の万引きは感心できないが、悪事を悪事とも思わぬ落ちつきはらった神経の図太さが、いかにも現代ツ子らしくて小気味がよい。

ふたりの兄だけで弟のいない正子は、自分より年下の若者にふしぎな親近感を覚え、万引きをとがめる気持は、うすれていた。

「ねえ、さっきのつづき、話してよ」

と、気安くからかってみたくなるのだ。

「エエィッ。勉強なんか、くそくらえだッ」

何を思ったのか青年はそんなことを言う。

「あら、あんた、大学の入試をしくじった浪人だったのね。それで、すねているの？」

「バカにするな。そんなじゃねえや！ 大学がなんだって言うんだ。おれはな、もっと自由がほしい。将来まで束縛されるのは真ッ平だ。だから反逆してやるんだッ」

彼は、食ってかかるようにまくしたてる。

正子は、ほほ笑みながらウンウンと聞く。

若者の声には矛盾が層をなしているが、正子にも彼の言うことがわからぬでもない。

多分、若者の胸裏には、進学エリートコースを土台にして成り立っている現代社会に対して、侮蔑の感情が渦を巻いているのだ。非エリートへの反抗の血が熱くたぎり、ひとつの行動によって表現しようとしている。だが、そうかと言って無軌道な非行に走るのには、あまりにも安っぽい抵抗ではないだろうか。「大いに共鳴しましょ。意気軒昂は若人の特

権だもの。でもね、無鉄砲なのは困ります。

元気な若者がスクラム組むのはいいが、エスカレートして角材をふりまわすのは、あんまり見よい図ではないでしょ。万引きもどうかと思うわ。やるのがケチくさいもの……」

本心はそこまで言うつもりじゃなかった。

しかし、見たところ裕福な家庭に育ったような一人前の男が、無思慮とはいってもおろかな変に片意地張った、あぶなっかしい考え方で主張するのが、正子には気がかりだった。

弟に向かったような気になりズケズケと言ったが、それが青年の憤激を誘ったらしい。相手はチンピラじみたすてゼリフを残して去り、結果的にはケンカ別れの形になった。

正子がふたたびこの青年に出会ったのは、それからふた月ほど過ぎた日の夕方である。

軽快なスラックス姿でショルダー・バッグを肩にかけ、公園を通りぬけたとき、突然後ろから迫ってくる単車に気づいた。あわてて身をかわす正子をつきとばし、バイクの男はショルダーをもぎ取ってあざ笑った。

「ひき倒すのは赦してやったんだぞ。それがこの間のお礼だ。わかっているだろうが、余計なことはしゃべるんじゃないぜッ」

相手が先日若者だと知って、正子は唇をかみ、逃げてゆく男をにらみつけた。

その青年——。前年、大学の入試に失敗して、今年の春もまた合格できず、半ばはヤケになって遊びほうけている万引き常習の不良予備校生が、こともあろうに、三田村誠一の異母弟、康二だったのである。

※

自分の非行を目撃した人間——。

絶対に会いたくないそのひとと、自宅の応接間でバツタリ顔をあわせたのだから、康二は、とびあがらんばかりにおどろいた。

ドキンとしたのは正子も同じだが、衝撃の度合いは康二のほうが数倍して、一瞬、逆上のあまり錯乱状態に陥ってしまったらしい。

「正子さん。誠一の弟、康二ですよ」

何も知らない三田村夫人が目細めて言う

と、康二は、まっ青な唇をふるわせ叫んだ。

「なんだい！ 兄貴の心をフヌケにしてしまった女って、こいつかッ。つまらねえ」

吐きすてるように口ぎたなくののしる。

「ママ！ 兄貴も気をつける。この女の、ちいっとばかりきれいな顔や、うわべだけのおしとやかさにだまされるんじゃないぜッ」

毒づく声が、興奮のきわみでうわずる。

血相変えて叱る夫人や、誠一の激した声に耳をかさず、正子の憤りは頂点に達した。歩み寄るなり、康二の頬に、痛烈な平手打ちをくわせて、あとも見ずに部屋をとび出した。

ハプニングだといえはそれまでだが、初めて三田村家を訪れ、身も心も緊張しきってるとき、ふいに浴びせられた悪意の雑言は、背筋が凍りつく冷やっこい水だ。氣違ひじみた康二の卑劣さについてカッとなり、およそ年ごろの娘にあるまじき暴力だたを被露し、すべてをぶっこわしにしてしまった。

(仕方がない。なるようになったのだわ)

と、もうひとつ気乗りのしない話だったのだ、負け惜しみではなく、内心ホッとした。

しかし康二の態度には腹が立つ。多分、万引きの非行が母や兄の前であばかれるのを恐れての暴言だろうが、彼の卑怯なふるまいには、身ぶるいの出るような無念さが残った。

当然、解消されるはずの縁談だが、三田村からは音沙汰がなく、叔父も何も言わない。

正子は心が暗く、釈然としなかった。

康二から手紙がきたのはそんなときだ。

『過日のぼくは汗顔の至り。深くおわびします。バッグもお返ししたいので、日曜日にぜひお越し下さい』という内容だった。

いまになってぬけぬけと三田村家を訪問するのは、気がひけた。とくに先日はいきさつから察して、自分に対して不愉快な感情をいだいている三田村の母とは、顔をあわすのもいやだ。思うだけでも心が重くふさがる。

だが正子は、康二に会おうと思った。

拭いきれない屈辱感で康二の態度は赦せないが、どうしても憎みきれない。はっきり言えば、康二が好きだった。愛憎二筋が錯綜する不可解なおんな心の現われかも知れない。

恐怖の一瞬

「よく来てくれましたね。あいにく、きょう

はみんな留守ですが。さあ、どうぞ！」

いかめしい式台の前で、正子は、あがろう

かどうしようかと何度もためらう。

「皆さんお留守なら出直そうかしら。私ね、

先日のお話、お断わりするつもりだったの」

「あのね。ぼくんちはいつもこんなぐあいだ

よ。兄貴は兄貴、母はあれでぼくを甘やかして

いるつもりらしいよ。家族三人、考えるこ

ともすることまでんでんばらばら。他人が見たら変に思うんじゃないかな。さ、おあがりなさい。三田村家の本当の姿を見ておくのも

悪くないでしょう。それに、おふくろや兄貴がいるところでは、ぼく、困るんだ！ あ、先日はどうも、すみませんでした」

康二はちょっと頭をかき、照れくさそうに正子を見た。その様は、いたずらを見とがめられた少年と同じだ。ほほ笑ましく、端正な横顔が生き生きしている。研ぎ澄ましたさうどさも、頹廢的ないりどりも影をひそめ、笑うとあどけない童顔が浮き彫りになった。

知らぬ間に正子の心は、わだかまる不信感を遠くへ追いやり、なごやかに歩み寄っていた。彼女も康二だけのほうが気が楽なのだ。

ヒールを脱いだ。うずくまって靴を敷石へそろえ、からだを起こしてドキンとした。

康二は廊下に跪き、スリッパを差し出して

正子の脚を、じっと見つめている。

「いやだわ——」

正子は、面くらって立ちすくんだ。

「そんなこと、男がしてはいけません！」

康二は穏やかな表情で正子を仰いだ。

「おねえさんの脚、すごくきれいだよ」

「まあー康二さんったら……」

カーッと頬が燃えた。からだじゅう炎にくるまれ、もぎ取ったスリッパを足につっかけ、正子は、容易に動悸が静まらなかった。

「そんな見えすいたお世辞でごまかされないわよ。私は、あんたのことでもまだおこっています。うんとお説教をしてあげますからね」

しかし、怒っているはずの声は甘かった。

「お説教はありがたくねえや。でも、お話をよろこんできくよ。あ、ここよりも……」

康二は、応接間の前で気軽に言った。

「二階へ行こうよ。そのほうが落ちつくよ」

「二階へ？」と正子は目を丸くした。が、

康二とふたりきりで話したいという思いがしきりに働き、男のあとへついていった。

正子が部屋へはいると、康二は後ろ手でドアをしめ、ついでにペロッと舌を出した。

「これでよし。十分にもてなしてやるぜ」

一転して、不自然な響きを帯びた康二の声は、正子の腹の底へズシンとこたえる。どす

黒い不安が胸裏をよぎり、身をひるがえした

正子は、ドアの前で棒立ちになった。

「泡をくって、どうしたんだい正子さん！」

態度を豹変させた男はふてぶてしく言う。

「帰ってもらいたくねえな、夕方まで——」

「康二さん！ あなた、なにを——？」

まがましい光を宿した男の眼に気づき、正子はウツと息をつめた。皮膚が粟だった。

「あきらめな。おれのことを知りすぎたのが

不運だ。第一、カッコイイそのからだを兄貴にやるのが惜しい。おれがいたたくぜ」

正子は信じられぬ面持ちで男を凝視した。

影をひそめた、さきほどのまでの無邪気な顔を捜しだそうとあせる。ふたりの康二がいるような気がする。

「康二さんて、根っからの悪党だったのね」

「まあ、そう思って覚悟するがいい。とにかくネエちゃんにウロウロされて、万が一にもおれの旧悪が露見したらコトだ！ 兄貴と結婚しませんといっても、口約束ではアテにならない。なにしろ兄貴ときたら、ネエちゃんにすぐくど熱心だ。ムリもねえよ。ネエちゃんは顔もからだもイカスからな。あの日だってあとでおれは、兄貴からコテンパンにお目玉を頂戴したさ。だからよう……」

ついさっき、正子がいったん腰をおろした椅子に後ろ向きにまたがり、椅子の背に腕をかさねた康二は、その上に自分の顎を置き、青ざめていっそうさえざえとした正子の表情を、愉しそうに眺めた。

「……おれは無いチエをしぼったね。トロツととろけた兄貴の心を、根こそぎひっくり返すにはどうしたらいいだろうか！ とね。方法は一とつだけ思いついた。いくら兄貴が我

をはっても、絶対にネエちゃんが三田村の嫁になれないように、そのからだを改造してしまうのがいい……とね」

「——」

正子は息をのみ、ただ慄然とする。

「幕あきははだか踊りだ。生まれたまんまの姿で珍芸を披露するんだ。それをフィルムに納めて、浜田正子は、はだかで縛られて悦ぶ女だ。いや、エロ写真のモデルだと、兄貴にはっきりと教えてやるんだ。四つん這いも絶好の材料だぜ。そうだ！ 毛を剃り落として兄貴へのプレゼントにしよう！ 兄貴のやつおったまげて卒倒するかもしれんぞ」

恐ろしいことを平然と並べたてる康二の声に正子は縮みあがった。

押しても引いてもビクともしないドアの前で、正子は、全身の血が一度に足もとへ吸いこまれ、たましいまで凍る思いがした。

「ひ、卑怯者！ 私、負けないわッ」

「わめくならいまのうちだ。どれ、ぼつぼつとはどうか。それとも、自分で脱ぐかい？」

ゆがんだ笑いを満面にひろげ、康二は、うつそりと立ちあがって迫ってきた。



青春の陥穽 (5)

従順な新妻

眉野君美

カット・春川ナミオ

A

大崎夫人が犬のように四つ這いになっている。その背後に大崎は膝を折っていた。大崎のパジャマは上着だけらしい。

大崎夫人の呻きは、新妻が夫に優しく愛撫されている甘いものではない。激痛に必死にたえているような呻き声であった。

大崎夫人の腰からはずされた、拡張器なるものについていた栓では、まだ初歩の段階に

あると察せられた。

コールドクリームをとり、大崎はたんねんにその栓のまわりにぬりこんだ。

「こわいことはないよ」

と大崎が妻にいった。あでやかな布団に顔を埋めている大崎夫人は、かすかにうなずいたようであった。

膝は折っているが、大崎は上半身をのびし姿勢を正しくして首だけを折り、ある一点を凝視したまま、熱心に新しい開拓地に立ち向

かっているという感じであった。

大崎の動作は、かたつむりのように、のろのろと緩慢である。

「そんなにかたくならないで」

大崎夫人の全身は、硬直しているらしかった。夫がこれからしようとしている異常な行為に、不安とおそれをいだいたとしても当然であろう。

「うっ」

と大崎夫人は呻いた。

「痛い痛い」

大崎の声は決して妻をいたわる声ではなかった。少しぐらい痛くてもがまんしろ、という響が多分にあった。

処女地の開拓者たる大崎もあせっているようであった。拡張器の実験のためにある程度冷静さを保っていた大崎も、知らず知らず開拓者の沈着さを失ってきたのは確かなことであつた。

「い、いた、た。痛い」

大崎夫人は、布団を噛んで耐えているらしい。かなりひどいらしく、新婚でもない新妻のあどけない眼から涙が頬を濡らしていた。

「そんなに痛いのか」

不満そうな大崎の声であつた。拡張器の実験は遅々として進まない。

「ごめんなさい」

「おまえがあやまることはないよ」

やっと新妻をいたわる優しい夫の言葉がでた。このまま強行して、せっかくの従順な妻を怒らせ、やめられてはつまらないと思ったのに違いなかった。

「もう少しなんだが、おまえが身体に力を入れてしまうから、なかなかうまくいかないんだと思う。心配しないで、リラックスしてごらん」

「蒸しタオルを取ってきて優しくあてがい、二度三度の失敗で腫れぼったくなった柔肌をいたわると、大崎は再びコールドクリームを手にとった。

美しい絞り染めのような大崎夫人の被害地も、夫の無謀なくわだてに傷ついたようであつた。

「ひりひりする」

夫に甘えるようにつぶやいた。

「食事療法もしてみようか」

拡張器はあくまで外部的なものだが、内部からもその目的を助ける方法を試みよう。大崎はいったのである。

「明日から、牛乳と一緒にカルシウム剤をのみなさい」

大崎夫人はうなずいた。かなり長い時間あらわな恰好を強いられているが、命じられるままに、夫のいいなりになっている従順な新妻振りが可憐であつた。

「便を硬くする食事療法だがね、おまえの直腸の内容物が沢山つまっているほど、そして硬ければ硬いほど、自然に拡張器のかわりをしてくれるだろう」

「はい、そうします」

「自然便がつかないときには、浣腸をしてあげるから、便秘になってもいいだろう。心配することはないさ」

大崎の話からだ、大崎夫人は別に便秘がちでもないらしい。それが故意に便秘のような状態にされたらどうだろう。

便秘に対する身体の耐容性が弱く、絶えず必要性に刺激されて、A感覚に芽ばえるかもしれない。

肉体的にも、感覚的にも、大崎の案は一石二鳥のように見受けられた。

わざわざ便秘にさせて、浣腸をする。大崎の新妻の飼育は、この従順さにつけこんで、自然にことが運ばれているようであつた。

蒸しタオルで湿布し、やわらかくもみほぐし、クリームの潤滑油の助けをかりて、大崎は再び可愛い絞り染めの紋様にいどみかかったようだ。

「ほら、今度は大丈夫だろう」

「ああ、だめ、だめだわ」

しばらくして、うわずった大崎夫人の声が寝室に響いた。

「どうした。痛いのか」

「ちがうの、痛くなんかない」

「そうだろう。はじめの頃より、ずっと柔軟

「になっている」

「ああ、だめよ、だめ」

大崎にも理解出来ない妻の声らしかった。

「いやなのかい」

「ちがう。いやじゃない」

同じ返答が大崎夫人からはね返ってきた。

「いやじゃないけど……」

くくく、大崎夫人はのどをふるわせた。何かの激情に、必死になってたえているようであった。

「けど……どうした」

「まるでお浣腸みたいなの」

「浣腸？」

考えてみれば、それには違いなかった。

イルリガートルとか、エネマシリンジとか

浣腸器を使わなくても同じであった。

「そうか、浣腸みたいか」

「ええ、そうなの。だから……」

「だから……どうした」

「はずかしいわ」

その声は小さく聞きとりにくかった。

「よし」

ぐぐつと大崎は妻の尻をにぎりしめた。

「いや、やめて」

「やめるものか」

「いやいや、かんにんして」

「だめだ」

「ああ、だめ……でちゃう」

その瞬間、華奢な大崎夫人の全身が、羞恥でまっ赤になったような錯覚にとらわれた。

「でちゃうって？」

「——」

「何がでちゃうっていうんだよ」

「いじわる」

「俺がいつ、おまえにいじわるをした」

「知りません」

夫におさえつけられ、大崎夫人は焼けつくような疼痛に悶えているのに違いなかった。

「お願い。おトイレに行かせて」

とぎれとぎれに大崎夫人は夫にいった。

「なんだって？ もう一度、はっきりいって」

「ごらん」

知らんふりして大崎は妻を見下ろした。

「お願いですから、おトイレに、行かせて下さい」

大崎夫人の声は最早、哀願に近かった。

「ここですればいい」

「そんな……」

「命令だ。ここでしなさい」

ふと、大崎が妻のもとからはなれた。

「布団を汚したら、一週間の長期刑だぞ」

排泄をこらえるのは言語に絶した苦痛を感じるものである。大崎夫人の顔はみにくく激痛にゆがんでいた。汗がびっしりと額ににじみでていた。

「これにしろ」

大崎が持ってきたのは洗面器であった。

「それだけは許して」

「だめだ」

「——」

「まだがまんできるのか。布団に粗相したらわかってるな、一週間の長期刑だぞ」

のろのろと大崎夫人が立ち上った。

寝室のすみに置かれた洗面器を見た眼が、

うらめしそうに夫の顔を見た。

「お願い。お便所でさせて」

大崎は無表情に首を横に振った。

みるみる、あどけない幼なさが残っている

顔が泣き顔になり、大崎夫人は洗面器にかがみこんだ。

四つ這いになった大崎の眼前を、ゆっくり

と落下し、洗面器に音も無く落ちるものがあった。

大崎夫人は死ぬほどの羞恥に両手で顔をおおっていた。

貞操帯に似た拡張器をされ異常な訓練を夫に強いられた以上に、結婚までもない新妻を放心状態においやったのであろう。

「がまんするな。一度してしまったら、あとは同じことだ」

妻を見上げて大崎はいった。

「おまえは健康だな。胃腸病院の副院長さんが“×××による健康診断”というのを書いてくれるけれど、おまえの健康状態は心配なさそうだ」

すっかり気落ちしてしまったのか、大崎夫人は夫が観察しているのを一瞬、忘れてしまったらしかった。

勢いよく放出された尿が洗面器をはじいて顔を近づけていた大崎の顔にかかったのである。

「あっ」

眼に入ったのか、大崎はあわてて顔を引っ込めた。

「しみる」

「ごめんなさい。だって……」

「こいつ。夫の顔によくもオシッコをひっつけたな」

大崎は笑っていた。従順な新妻にすっかり満足したようであった。

大崎夫人は再び洗面器に小気味良い音を立てた。

大崎は紙をつかむと、腰を浮かした妻に手をさしのべた。

「拭いてやるよ」

「いや、はずかしい」

大崎がたんねんに拭き取ると、大崎夫人は洗面器をもってあわてて便所に走った。

あれだけのことをしながら、寝室に臭気が立ちこめないのが不思議であった。

新妻のものは、すべてが悩ましく甘く感じるのかもしれないなかった。

「もう一度、這ってごらん」

大崎はピンクの可愛いらしいネグリジェをまとった新妻にいった。

「ひりひりするの」

軽く四つ這いになり、シースルーのネグリジェの裾をからげる大崎夫人。

「少しただれているな」

大崎は皮膚のただれや外傷によくきく軟膏をぬって、

「よし」

と、たたいた。

「今夜は拡張器もかんべんしてやろう。だいはずかしい思いをさせたからな」

はなやかな掛布団が大崎夫妻を包んだ。電気が消された。

B

雨戸にやもりのようにへばりついてた勇は、大崎夫妻のかわった一面を覗くのに時間を忘れていた。

気がついたとき、勇は夢精のような状態におかれていたようであった。

大崎の新妻に対する異常なことの目的は、勇にもわかりかけた。

処女地を開拓することはむづかしい。それは夫婦の絶対的な信頼と協力なしでは出来ることではない。

その点、大崎は新しい夫婦生活を自分からつくりだそうとしているようであった。

大崎夫妻の夜の一端を覗いただけだったが勇は完全に毒気にあてられていた。

拡張器といい、新妻に奇妙な協力を強いることといい、大崎夫人の無条件の従順さといい、総て常識外である。

この一連の流れは、きっとハプニングのようにおこったのであろうが、その多様性といい、点的な行為といい、テレビ時代の現代にマッチしていると思えるのである。

この頃のテレビ番組に、視聴者が参加している番組のなんと多いことだろうか。テレビには、素人歓迎の特性があるようである。現代の視聴者は、新しいもの、ドキッとするもの、セクシーなものを求めている。

視聴者の参加は、何が起るかわからない特性がある。そこにはハプニングがある。それを修飾しないで起こったものをそのまま伝えるのがテレビである。

多様性のかたまりのような素人の参加、勝手気儘にしゃべる素人の点的行為は、テレビ番組を面白くさせ、従来の活字時代の思想を変えてしまう。

テレビの素人の参加は、セックスに於てもエスカレートして、SMの世界の参加になったわけであろう。

誰もが、思いのままに、発言し、行動するわけである。

大崎夫妻は勇と同年代の人間といていいだろう。大崎と勇には共通点があるはずであった。

勇はようやく、葉子に結果報告をしなければならぬことに気がついた。

大崎夫妻の寝室が暗くなってからも、しばらくの間、勇の放心状態は続いていたのであ

った。

大崎家の新しい石塀を越えるのに勇はかなりの苦痛を感じた。それだけ夫妻のハプニングに精気を吸い取られたのかもしれない。

勇は非常に疲れていた。このまま布団にもぐって眠りたかった。

勇は、ちらっと腕時計を見た。終電に間にあうならば、葉子の家に寄らず、自宅の自分の布団のところに飛んで帰りたいかった。

私鉄の終電は、とくに終わっていた。

かなり長い間、大崎の家の庭にいたようだが、葉子の家からみれば、まだ時間は早いようであった。

三田がまだ寝ていなかったのである。

廊下なり、便所なり、好きなところにもぐりこんで寝な、という葉子の言葉を、勇は思い出した。

もぐれといっても、三田がまだ起きていては、そんな冒険は出来ない相談であった。

勇は三田の庭に坐り込み、雨戸の節穴からしばらく内部の様子をうかがわねばならなかった。

大崎家の雨戸の節穴にさんざんへばりついていたのである。勇の眼はまっ赤に充血し、ただれて、ちくちくといったんでいた。

覗くことがこれほど苦痛に感じたのは始めてであった。もうどこでもいい。勇は身体を横にしたかった。

窃視の罪だと勇は自嘲した。テレビっ子らしくなく、ちょっと自己嫌悪に陥ったようであった。

勇を援護する葉子は、夫に対してかなり積極的に動いていた。

どうしたことが、今夜に限って三田の帰宅が遅かったのである。

勇が隣家に忍び込む少し前であった。

「めずらしく遅かったのね」

勇との約束があるから、葉子は興奮をおさえるのに一苦労していた。あまりうきうきして三田にさとられたくはなかった。

「仲間にキャバレーにさそわれてね」

と三田はいった。葉子と一緒にってからあまり仲間とつきあわず、それをひやかされてどうしてもつきあわなければならなかったようであった。

三田の弁解は本当だろう。

「うそ」

と葉子は夫にいった。

「うそなものか。仲間に電話をしてもいい」

「うそだ。女の匂いがする」

葉子は、三田の胸に鼻を突きつけて、くんくん嗅いだ。

「それはするだろうよ。キャバレーのホステスがべったり坐っていたんだから」

「うそおっしゃい。浮気してきたんだろう」

「違ったら、葉子」

「うるさい。畜生、今朝方、浮気封じをしてやったのに」

「違うんだったら、葉子」

「このうそつき」

三田は葉子にビンタをくらってしばらく呆然としていた。喧嘩だか、遊びだか、一瞬区別が出来なかったようであった。

「ぼんやりつつ立っていないで、坐ったらどうだい」

葉子は三田にどなった。うきうきしている自分がおかしかったが、葉子が本気になって怒っていると思って、おたおたしている夫がよけいに面白かった。

「せっかく晩酌の用意をしてあるのに、どうして飲まないんだい」

「坐るひまもありゃしないよ、そうポンポンいわれては」

「おだまり。可愛い女の子を抱いてきて満足なんだろうけど、そうはいかないよ。浮気を

してきたんだから、葉子にどんなことをされてもしらないからね」

葉子はあわててお膳の前に坐った三田の髪をつかみ、帰宅するなり妻の攻撃にあって何かなんだかわからず、まだ自分をとりもどしていない三田をこづくと、勢いよくうしろに引っ張って畳に横転させた。

長襦袢の裾をまくって、葉子は夫の顔に背中を向け、どかっと三田の胸にまたがった。

自分で酌をして、ぐいと飲んだ。

「どんな顔をして、女といちゃついていたんだらうね。ええい、くやしい」

身体をよじって、三田の鼻をつまみ、横に力一杯ひねった。二度、三度。こん畜生め。

「ひえっ」

と三田が奇妙な叫び声をあげた。

葉子は、ハイライトに火をつけると、一服吸って、それを夫の鼻の穴に差し込んだ。

三田は、むせにむせた。ごぼごぼと嘔吐するようなせきをして葉子に顔をなぐられた。

今夜の葉子は、かなり乱暴であった。

葉子の酒は急ピッチであった。三田の両腕を自分の両脚でがっちりおさえこみ、三田のズボンの前をあけて、いきなり銚子の中の酒を、それにぶっかけたのである。

「あっ、あっ、あっ……」

驚いて飛び起きようとした三田の顔を、葉子は一度、尻を持ち上げて踏み潰した。

三田は辛うじて鼻だけをだしてあえいだ。

「どうだい、苦しいかい。ブタめ」

夜昼と続く、夫や勇との情事や、隣家の秘密についての想像に興奮して、酒のまわりもいつもより早かった。

葉子は、夫の顔に力を加えた。

「やい、ブタ野郎、舐めさせてやろうか」

葉子の言葉が次第に、えげつなくなってきた。

三田がもだえた。苦しいに違いない。

「フフ、くすぐったい」

腰を浮かせたのもつかのま、葉子は更に勢いをつけてべったり坐ってしまった。

「く、くるしい」

「おとなしくしろ、ブタめ。今、葉子がいいものをたべさせてやるから待っている」

葉子のどっしりした重圧が、三田の鼻と口をすっぽりと押し捕えてはなさない。

「うん」

夫の顔に坐ったまま、葉子はいきんだのである。

「うん」

と、また葉子は息ばった。

「おや、うまく受けとったわね」

夫の顔から腰を浮かして、葉子は眼を白黒させている三田を見下ろした。

三田は、しきりに口を、もぐもぐさせていた。葉子のおくりものを、どうしても飲み込めないようであった。

放っておいたら吐き出すだろう。

葉子はそのまま三田の胸に腰を下ろすなり銚子を手にとると、三田の口に銚子をくわえさせた。

「さあ、飲んでおしまい」

真上から酒をあげ、銚子を口に突っ込まれて、三田は懸命に飲み下したようであった。

「どうだった、特別のお酒の味は」

うらめしそうに三田は葉子を見上げた。味も匂いもわからなかったのが本音だろうと思われた。潜在的な不快感だけが、いつまでも三田の胸中に残ったのに違いない。

「そのうち慣れるさ」

葉子は愉快そうに三田にいった。これから葉子は夫にたべさせるつもりだった。

三田の首を尻でおさえ、葉子は銚子を三田の口に突っ込みながら、晩酌が続いていた。隣りに忍び込んだ勇のことが気になって、

酔ってはさめ、酔ってはさめていた。

「酒はもういい。ビールにしよう」

ようやく三田の胸からおり、三田にビールを持って来させると、片膝つきながらビールを飲み始めた。

「何かあったのかい」

心配そうに三田は葉子に聞いた。いつもの葉子と違っていた。

「なんでもないよ」

三田もビールのコップはもって来たが、ビールを飲むどころではなく、せっせと葉子の酌にまわっていた。

「かがせてやろうか」

葉子は三田にいった。長襦袢の裾をすっかり、はだけていた。

「さっきの匂いと違うよ」

「わかってるよ、葉子」

「好きなくせに」

「好きだよ。俺は葉子の全部が、好きだ」

「舐めたいだろう」

ますます片膝を立てて三田を誘った。

「もう舌がひりひりしているよ」

さんざんいじめられたあとである。舌が無感覚になったとしても無理はない。

「おかしいねえ。今夜はちっとも飲まないじ

やないか」

「飲んでいるよ」

あわてて三田は答えた。どうもあやしい雲行きであった。

「いや、飲んでいない」

べろべろのつもりだが、心底酔っていないのが不思議だった。やはり、大崎夫妻と勇のことが気になるらしかった。

「葉子のビールを飲ませてやる」

葉子は三田に大ジョッキを持って来させると、畳に三田を正座させた。

「少し前にかがんでごらん」

正座した三田の前に置かれた大ジョッキがちょうど葉子の下にあった。

「いいかい、しっかりジョッキを両手で支えているんだよ」

長襦袢の裾が乱れた。

フツ、と葉子が息を吐いた。

ポト、ポトポトとジョッキにしたたり落ちるものがあった。

「ええい、めんどくさい」

葉子の声と共に、たちまちジョッキは一杯になり、あふれて三田の両手を、濡らしていた。

「お飲みよ」

勇が雨戸の節穴から中を覗き、そのままへたへたと庭に坐り込んだのは、その時であった。

「さあ、もう寝よう」

と葉子は三田にいった。勇さえ、もどつてくれば、三田にはもう用がない。時間を早くたたせるために、三田を相手にして目茶苦茶に酒を飲んだようなものであった。

「先におやすみ」

三田は酔っている葉子にいった。

「何を、この馬鹿野郎」

葉子はふらふらと立ち上ると、汚れたままぐしゃぐしゃになって押入れにほうりこまれてあった腰巻をさがしだし、それを三田の顔からかぶせると、数本の腰紐でがんにがらめに顔を縛ってしまった。

「寝ろっていったら、素直に寝ればいいじゃないか」

かなり不貞腐れた葉子の口調であった。早く三田を始末しないと、あきらめて勇が帰ってしまうかもしれない。時間の観念のない葉子は、もうとくに終電がなくなったのに気がついていなかった。

三田の顔に腰巻を巻いてから、葉子は三田の口に特に腰巻を押し込んで三田の声を奪ってしまった。

更に耳のあたりは二重にも三重にも、ぐるぐると兵児帯をまいて、勇と話をしても聞てえないようにするのを忘れなかった。

三田が葉子のいいなりになっているので、葉子の思い通り事はすらすら運んでしまうのは、こういう急の場合、助かった。

葉子は三田を、荒縄で全身をぐるぐる巻にし、ずるずると台所まで引っぱっていき、土間に放置した。

台所においておけば勇と一緒に寝たとしても、夫は気がつかないだろう。

かなり大胆だが、三田が葉子の浮気を知ったとしても、葉子を絶対はなさない自信が、すでに葉子にはあったといっても過言ではないだろう。

葉子は夫に顔を近づけ、しばらく唇を触れさせてから、親展と書いてある封筒をかぶせて、にやりとした。

布団などかけなくても、風邪をひくような三田ではなかった。精力絶倫のタフが売り物なのである。

用意が出来た。

雨戸をあけて葉子は勇を呼んだ。

半分眠っている勇を葉子は乱暴に家の中に引きずり込んだ。

夫を台所に転がしてあるので、勇の頬をびしゃびしゃたたいて眼をさまさそうとした。

勇がようやく眼をさましたのは葉子が勇の最も敏感な部分に噛みついたからであった。

(未完)

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

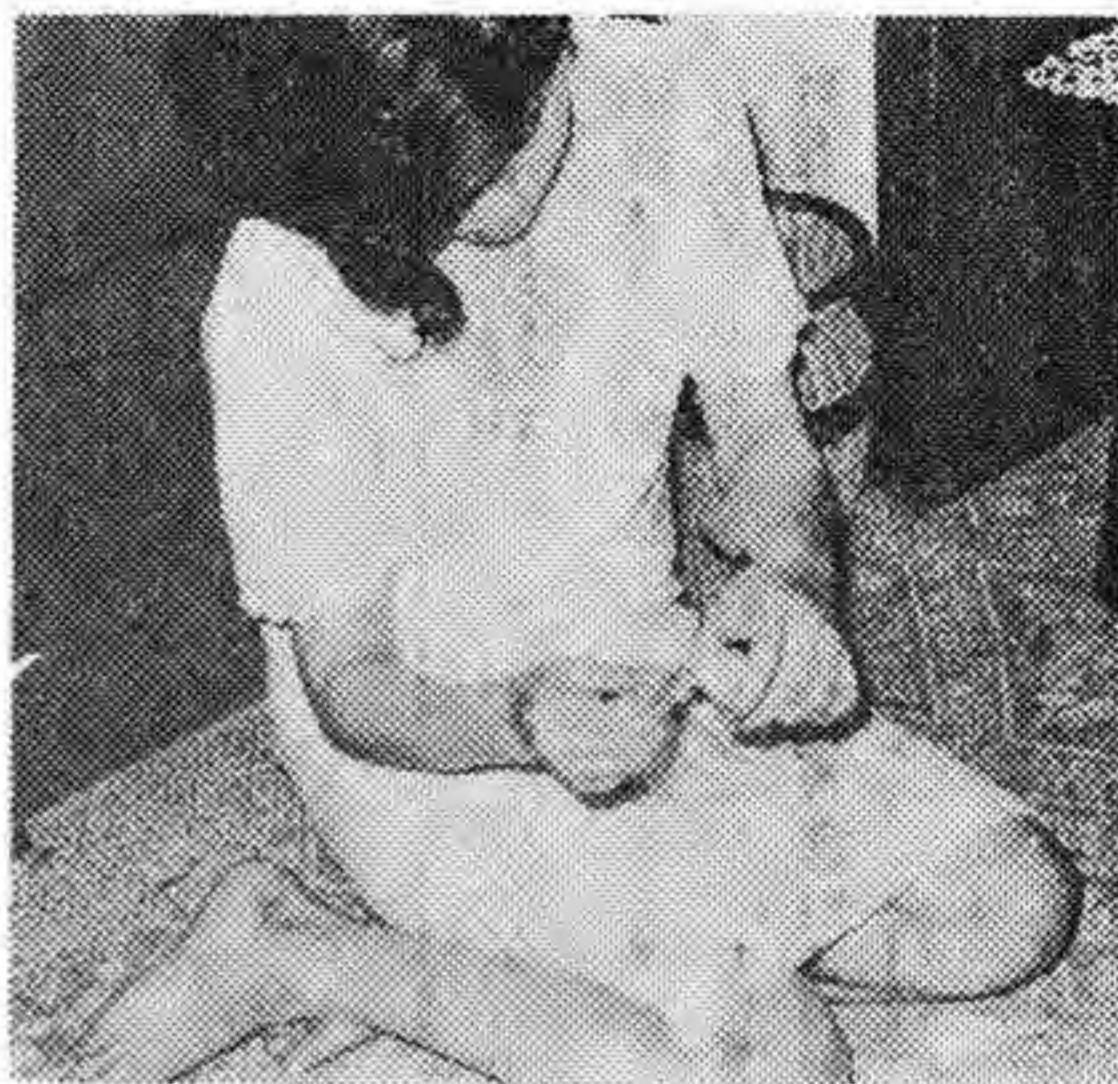
山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生体のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。



緒方君子さんへ

「浣腸」によせて

関

悦子

緒方君子さん。あなたの発表された「イチジクと君子」の手記、大変興味深く、しかもとても真面目な気持で読ませて頂きました。あれほどイチジクに対するひたむきな情熱が感じられる告白は初めてのように思います。

どちらかと云うと、浣腸記事には、ある種の派手さと云うか、そんなものが感じられるように思いますが、あなたの手記には全くそれがなく、一日の中で、あなたのプライベートな時間は、極く限られた短い時間しか許されない程の忙しさにもかかわらず、一生懸命

働き、前向きな姿勢で、自分の生活を大切にしながら、しかもなおイチジクに対して、こよなき愛着を抱き続ける君子さんに敬意を表したい気持です。

云うまでもなく、私も、君子さん同様、浣腸のかもしれない出ず得体の知れない魅力の虜となっている女なのです。強いて私と君子さんの違いをいえば、先ず生活環境の相違と年令の差、それに浣腸プレーに対する心がまえと云ったところでしょうか。君子さんがまだ若々しく、はつらつとしていらっしゃり、何かを求めようと、真剣なのに対し、私はすでに三十才に近い、いわば中年女で、結婚に失敗

し、今は小さな美容院を経営し、一応生活は安定してはいますものの、女一人が生活を維持して行く事は、精神的な面でも大変な事です。すっかり疲れ果ててしまします。

そんな私を、慰めてくれるのが浣腸なのです。君子さんも私も、浣腸とはもう縁の切れないほどになっている事は共通しているようですが、君子さんは、いちずにイチジクだけをいとおしみ、何かを求めようとしておられるのに、私は、自分ではさして気にしてはいない積りなのに、やはり心のどこかに結婚で失敗し、今だに家庭の主婦になれない事にある種の失意や、ひがみがあるのでしょうか

時として、歪んだ快樂だけを追い求め、ずい分なげやりの気持で、浣腸器を手にする事があるのです。

上手に表現する事が出来ませんが、ただ自分を痛めつけて、被虐の中に、少なくともその瞬間だけでも、耐えられない程の孤独から逃げ出したい気持が働いているように思うのです。

だから、私が私自身に対する浣腸の方法は荒々しい、云い交えればオーソドックスなものと云えない事ありません。無論、君子さんと同じ様にイチジクを使用する事もありますが、最近では、君子さんのいわれるガラス製の注射器みたいなや、ゴム球のついたエネマシリンジを用いる場合がほとんどなのです。

君子さんは、先天的に浣腸が好きなのかもしれないとの事だけど、それはどうでしょう。私の場合を考えてみますと、初めて浣腸を体験したのは、高校三年の時でした。それとも思わぬ事故で浣腸されるハメになったのです。友達五人と草スキーに出かけ、あまり経験もないのに急勾配の所を滑ったものですから、たちまち灌木に激突して、右足首を複雑骨折してしまったのです。それから二時間後

に多くの人にお世話になって病院に運ばれ、手術を受けたのですがその時、生まれて初めての浣腸を体験したのです。

内臓外科と申しますか、謂ゆる胃とか盲腸とかの手術の際は、術前に必ず浣腸される事は知っていました。それと云うのも盲腸手術を行なった友達をお見舞に行った時に聞いていたからですが、その友人に「悦ちゃんまだ盲腸あるのでしょうか？ だったら一度はあなたもアレやられるわね」と云われ、「アレって何よ」ということから、その時初めて、手術前に何が行なわれるかを知りました。ところが、幸か不幸か、私自身の盲腸は今に健在なのです。ですから、それまでは話だけで実際には知らなかったのですが、それが骨折の際に浣腸されようとは思ってもみませんでした。

局所麻酔を注射され、レントゲン撮影が行なわれ、手術室とかかれた部屋に運ばれてしばらくの後、二人の看護婦さんが、一人は大きな注射器、若い方の方が便器をもって入って来て、「浣腸済ましておきましようね」と云われた時は、ほんとにびっくりしたと云うより、何かの間違いだと思ひ「あの、骨折でも……するのですか」と訊いた程でした。

「ええ、そうですよ。手術が終ってギブスに固定すると、しばらくは身動き出来ませんか。今の内にしておかないと、困るのはあなたですよ」

そう云われてみると従うより仕方がなかったのですが、今一つ、とても恥かしい事が起こったのです。ぴっちりとした体に合ったスラックスを着ていたため応急処置の際、右足の部分は既に切りさかれていましたが、浣腸となると、それだけでは済むはずがありません。

看護婦さんは「仕方ないわね。悪いけどいずれにしてもハサミを入れるより他ないわ」と云いながら、手は、すでに切り始めていたのです。麻酔で痛みが一応治っている時に、スラックスをじわじわと切りさかれるということは、たまらなく恥かしい事です。汚れていないパンティが、せめてもの幸いでした。

それから生まれて初めての浣腸の洗礼を受けたのですが、頭の芯から背筋にかけて、思わず身震いするような何とも不思議な羞恥。優しく、そしてテキパキと世話して下さる看護婦さんが、なにか私を捕えていじめる人のように思われました。

退院した後も、その時行なわれた浣腸の事が頭から離れず、むしろそれは日増しにつ

るばかりでした。

「いいですか、五分程我慢して下さい。どうしても我慢出来なくなったら便器を使って下さい」

「えっ、トイレでは駄目なのですか？」

「いけない事はないけど、その足では出来なんでしょう」

便器を用いた経験のない私にはショックでした。

ところが私はそこで失敗してしまったのです。浣腸によって人工的に起こる便意がそれ程迄に激しく、しかも急速に迫って来るとは思わなかったため、一分たつたないうちに粗相してしまったのです。時間が早かったせいか薬液だけだったのですけれど……。

あの時、使用された薬液は、ドナンだったのではないかと思います。

「これでは何にもなりませんよ。五分間は我慢するようにと云ったでしょう！ もう一度やりなおします」という看護婦さんが、とても意地悪く思えました。

そして二回目の浣腸が行なわれ、再び激しい腹痛に襲われましたが、今度は看護婦さんの脱脂綿が粗相を防いでくれました。二分、三分。それは極く短い時間であるのに、とて

も長く思えました。

「お願い、もう我慢出来ないわ……」

「あと二分、我慢して下さい！」

その時の五分間は嵐の中に立たされた思いでした。

君子さんが、すでに子供の頃に体験されたのに対し、私の場合は、思春期に入ってからって訳ですから、君子さんの方が先輩と云う事になりますわね。

ほとんどの人が、一度や二度は浣腸を体験すると思いますが、たいていの人が嫌悪を感じたり無関心で終わってしまうのでしょうか。

でも、私や君子さんのように、どうしようもない程、魅せられてしまう人もごく僅かながらいると思います。あるいは、君子さんの云うように、先天的に惹かれる人もあるかもしれないし、潜在的にマゾの傾向にある人が、たまたま病院なんかで浣腸されて目ざめる場合とか、色々あると思うのです。

君子さんも、精神面で深く愛してくれる人が現われたら、荒々しく責められてみたいと書いていられますが、やはりマゾの傾向が多分に潜在していると考えられないかしら。実は私も、責めを受けた経験はありませんが、かなり強度のマゾではないかと自分で思っ

ているのです。

私が最近、特に惹かれるのも、浣腸そのものが好きでたまらない事は勿論ですが、私を責めてくれるパートナーに恵まれなかったため自分で自分をいじめるために利用しているともいえると思います。

前にも申しましたが、君子さんのイチジク一筋とは少し違い、私の浣腸プレイは、かなりこみ入った方法も用いています。最初のうちは私も、最も簡単なイチジク専門でした。でも、だんだんもの足りなくなり、自分で思いついたことをつけ加え、イチジクだけでなく、ガラス製浣腸器やゴム製のエネマシリンジまで揃えることになったのですが、今ではエネマシリンジの使用が圧倒的です。それは一度に大量の注入が出来る事と、私がゴムに対して特別な感情が湧くのを意識し始めたからです。

私がプレイを行なう場所は、ほとんどバスルームです。それは狭いトイレの中と違ってかなりのびのびと出来ますし、プレイの後もすぐお湯に浸れ、後始末が簡単だからです。ゆったりとした気持で入浴し充分に温まってから、用意して置いた冷水約一リットルをエネマシリンジで送り込むのですが、これが

私にはとても合うように思うのです。

自虐したい気持の激しい時に、どれくらいまで我慢出来るかやってみたこともあるのですが、最初は二百ccぐらいから始ったものが現在は千cc、つまり一リットルぐらいでない、お目当の苦しさまで味わえない様になっています。でもさすがに千cc近くなると苦痛はとても激しく、お腹のふくらみがはつきりとわかり、胃の部分に圧迫感があり、時によっては嘔吐感におそわれて、ネをあげてしまいたいようになります。

以前「奇ク」で三千ccは可能というような記事を読んだ記憶がありますが、それはどうかと思います。でもそれを目的にしての訓練次第では、千五百〜二千ccぐらいまでは出来るのではないかとも思えます。

冷水注入の後で再びバスに身を沈め、約十五分程圧迫感を楽しんで、お腹がグルグルと鳴り始めてからバスから出て、三十ccのガラスシリンジで生地のままのグリセリンを注入し、すぐに生ゴムパンティと更に二枚のナイロンパンティを重ねて穿きますが、苦しさは急に増して、いくら自虐が目的でも、忍耐出来る時間は、せいぜいで二分足らずです。

私が、生ゴムパンティを用い始めたのは最



近の事です。以前は何もつけなくても充分満足していたのですが、ただトイレに行くだけでは物足りなくなり、一度思いきってパンティをつけたままだったことが口火となつてしまひ現在は生ゴムパンティを使用しないプレイは考えられない程になってしまいました。

前にゴムに特殊な感情をもっているといいましたが、飴色のゴムパンティや、生理帯の替ゴム、ゴム管などは、とてもエロチックに

感じられ、あのムチムチした手ざわりや肌ざわりが、私にはとても好ましいのです。

生ゴムパンティですが、最近では色んな雑誌でその広告を見ます。でも私は以前に一度、他の品物を同じような通信販売で申し込み、常識はずれの粗悪品を送られた事があったものですから、欲しい欲しいと思いつながら、のびのびになっていたのですが、九月の末、近くのマーケットの中に「大人のおもちゃ店」と云うのが開店し、買物のついでにのぞいて見ると、何と、飴色のゴムパンティが陳列してあったのです。

なんとかして手に入れたいと思っていただけに、恥ずかしさより購買欲の方が強かったといえます。その場で二種類のゴムパンティを買ったのですが、その嬉しかったこと。厚い方のビキニ型が千五百円で、薄手のズロース型の方が、二千円でした。わずかばかりの材料で作られた、小さなゴムのパンティ一枚が、二千円というのですから、後で考えて、ずいぶん高いなと思ったのですが、特殊なものだけに、ゴムの好きな女にとっては安いのかも知れません。でも、生ゴム製の、通水性ゼロのパンティといったって、全然大丈夫かという、決してそうではありません。

梶山季之さんの「男を飼う」の中で、浣腸されて生ゴムパンティをはかされた女に、そのまま放出しても大丈夫だ。と云うところがありますが、あれはやはり小説の上でのことであって、実際には、どれ程びっちらとした生ゴムパンティでも駄目だと思います。只、立ったままで動かなければ、別ですが……。

それにズロース型の方は浣腸プレーに使用出来ても、ビキニ型の方は使用出来ませんので、これは常時パンティの下につけていますが、でも、これ程非衛生的な事はないと思います。それを承知のうえでムツとする程の芳香？を得ようとしているのですから、異常度と云えば、君子さんより私の方がはるかに上のようなですね。

私の使用する薬液は、グリセリンにきめています。以前にはお薬でない液体、例えば、牛乳とか、ビール、お酒と云ったものも試してみたこともあります。だけどビールの様に発泡性のあるものは駄目だと分かりました。牛乳は時間に余裕のある時のプレーには合うように思います。でも、一度牛乳浣腸を行なうと最低三日間は下痢が続く事を覚悟しなければならぬと分かって、あれっきりやっています。いくら自虐のためといっても君子

さんのおっしゃる通り、命を縮めるようなのは感心出来ませんものね。

こうして書き並べてみますと、君子さんの純情さに比べて私はずいぶん「アバズレ女」のように思われてきましたが、実際はとても内気な女なのです。そして、いつのプレイの時でも誰か他人の手によって、抵抗出来ない状態に、例えば数人のたくましい男性に押えつけられるとか、太いロープで縛られたままとか、そんな状態の中で荒々しく浣腸された上、ムチで打たれたり、その人達の見ている前で無理に排泄を強要される事を夢みているのです。

君子さんも、精神面では愛してくれる人から責めを受けたいと書いていられますが、私はむしろ、精神的にも肉体的にも、人間性を度外視して、徹底的に虐げ痛めつけてくれる男性の出現を待ち続けているのです。

長々と交わりばえのしない事を書きました。君子さんにわずかでも共鳴していただけたところがあつたら嬉しいと思います。

見よう見真似ですが、娘時代の古いカメラで自分自身を撮したものを同封しました。ほんとうは、バスルームでのプレーのフォートを撮りたかったのだけど、蒸気でどうしても

——ご投稿下さる方へお願い——
各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に氏名を書かれずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用縦書きと共にお願い致します。

レンズがくもって駄目なのです。でも、これなら、イチジクが恋人であるといわれる君子さんには、きつと気に入っていただけると思っています。

もし出来れば、「イチジク」とともに、あなたが使用される、されないは別として、私と同じガラスシリンジとゴム製のエネマシリンジ、それにグリセリンをプレゼントしたいと思えますけれど……。

どうかこれから、あなたの財産とも云うべき清純さと、変な云い方ですけど、浣腸に対する情熱を失う事なく、強く生き抜いて下さい。蔭ながら、君子さんの事を理解してくれる、良きパートナーの出現をお祈りしております。

（おわり）

娘相撲物語 (19)

花の女斗美たち



奮斗士好太

なんだか吉永ペースにすっかり乗せられてしまったようです。

指定したバスの停留所。私が先に行って彼女の降りてくるのを待っていることにしたというのに、吉永さんは、もうとっくに来て待っていてくれたのでした。

クリーム色のセーターに、うすいグレーのスカート。女子高校生の制服くらいセンスのない服装はないと思いますけれど、そのかわり、その制服をぬいでめいめいの好みの服に着かえると、たいていのひとがびっくりするほど新鮮でキレイに見えるという効用があるようです。見ちがえるほどおとなびた感じに変わった吉永さんが駆け寄ってきた時、私は一瞬「ダレだったかしら？」と思ったりしたほどでした。

「早かったのネ」

「ウン。あたしってスゴクせっかちなんだから……。それに今朝は何をやっても手につかなくてヘマばかり……。家のひとに叱られちゃったの。そんなにソワソワして、ボーイフレンドにでも会いに行くのかなんて、云われちゃった」

吉永さんはペロッと舌を出して首をすくめてみせるのでした。

次の日曜日、私はせっかくの朝寝の、快い夢を電話で破られてしまいました。もちろん吉永さんからのです。ふくれ顔で電話口へ出たものの、七時を過ぎていれば、そう文句も云えず、寝直すわけにもいきません。吉永さ

んはウラヤマしいほど張り切っていました。「これじゃア、今日の申し合いが思いやられるワ」

彼女にコワサれないようにしなければ……と床を上げながら仕切りや運び足の練習……

日曜日の学校というのは、どこか間がぬけています。入ろうと思えばどこからでも入れますし、こちらがスマした顔をしていると、何をやっていても当たりまえに見えます。学校専門の泥棒なんて、ずいぶん楽なものだと思います。

人気のない部屋。前の日の汗のにおいがかすかに残っていて、生かわきのタオルが無雑作にひっかけてあったりして、どうも色気がありません。おそろおそろといった様子で入ってきた吉永さんは興味いっぱい顔つきで見まわしていましたが

「ネェ。練習場の方を見せて」

と注意はもっぱら、そっちの方らしく

「あたし、胸がワクワクしてきちゃった」

と頬を赤らめています。

ガタガタと立てつけのよくない戸を開けて練習場へ案内します。

「アラ、立派だねェ」

吉永さんがキョロキョロと見まわしながらの第一声。

「そうかしら」

「そうヨ。広くって……。土俵が二つもとれるじゃないの。それに、いろいろな設備もあるしさ……」

吉永さんの云うように、私たちは今年の予算で幾つかの「新兵器」を備えたのでした。

でも、それは設備と云うほどのものではなくて、一口に云うなら廃物利用に近いものなのです。自転車のチューブ。これは壁につないでおいてそれを両手で押す、つまり壁に背を向けて立ち、チューブの輪をにぎってそれを押して伸ばすのです。腕力をつけるエキスパンダーの代用というわけ……。これは、初めのうちは簡単に伸ばせますけど、だんだんとゴムのほうが強くなってきて、腕が伸ばせなくなります。それどころか、ゴムの縮む勢いに負けて、壁にぶつけられたりすることもあったのでした。

それから例の美容用にも使われる、後輪しかない自転車。小型の鉄亜鈴。

そのくらいのささやかなものなのですけれど、吉永さんに改めて云われてみますと、私たちは、ふだんあまり真剣にそれらを使っていないことに気がつくのでした。どうも「科学的トレーニング」というものがニガ手で仕方なしにやっていると気分が強いのです。地道に体力をつけることよりも、ぶつかり合いこや、申し合いなど、差し当たりすぐに実戦に役立ちそうなのだけに目を奪われがちなの

のです。

吉永さんは、壁のチューブのところへ行つて、形どおりにそれを押し伸ばしてみながら「こういうものって、なかなか自分からやろうって気になれないもんネ。苦しいだけであつともおもしろくないから……」

「おざなりにやっちゃうのネ」

「あたしんとも、こういうのはもっぱら新人のシゴキ用みたい……」

吉永さんは急に気がついたように

「新人って云えば、こないだの新人戦、なかなかおもしろかったじゃない」

「うん。あの最後の一番なんか……」

私は、南さんの相撲ぶりを思い出して、吹き出しそうになりました。

「あなたんとこの新人のひとたち、なかなかいいじゃないの。体格も、ファイトも」

「まあ……、ファイトだけが取り柄みたいだけど……。でも、あなたんとこのひとにスゴイのがいたじゃないの」

私は高見さんを土俵にたたきつけた、あのスゴイやぐらなげを思い浮かべました。

「どのひと？」

「ホラ、あのやぐらなげの……」

「あア、羽入和江さんネ」

「羽入さんていうの？ あのひとつ、ほんとに一年生なの？」

「ウン。一年生は一年生なんだけど、あの一と定時制から編入されてきたから、あたしたちと同じ年なの。スゴイでしょ、あひとつ」

「ウン。段ちがいの勝負だったワ」

「あひとつ。柔道やってたんだって、中学時代かららしいワ。二段だっていったワ」

「どおりで……。でも、なんだって柔道を続けたいの？」

「彼女ネ、相撲の方が好きなんだって」

「ヘエ……」

「素っ裸で取っ組み合うなんて最高だって云うのヨ。それにマワシをつけると、気持がピリッと緊張して最高なんだって」

吉永さんはムヤミに「最高」を並べます。

「彼女、柔道やってた時も下にふんどしをつけてたんだって。激しいスポーツの時は、ふんどしが最高というのが彼女の持論なのヨ」「フウーン」

私は、羽入さんの、あの新人戦の時の姿を思い浮かべるのでした。相手の高見さんを、ほんとうに、土俵の砂に埋めるようなスゴイ勝ち方。見事なマワシ姿——。それは敵ながら見とれるような鮮かな印象でした。

素っ裸のスポーツが最高だという羽入さん——彼女はきつと、古代ギリシャのあの大らかな世界に、憧れているのかもしれない。

人間のからだに最高の美を発見したというあの時代こそ、健康で行動的で、それでこそオリンピックのような大がかりな競技会なども発生したのでしょう。羽入さんの理想は、そのギリシャおとめ、あるいはりりしい若い男のひとなのかもしれません。

それはとにかく、私たちの前には思いがけない強敵が現われたものです。

「それじゃ強かったのは当たり前だわネ」

「あの一との相手になった人はまあ運が悪かったのヨ。それに……あの相手のひとは何だか元気なかったみたいネ」

吉永さんの云うとおり、高見さんは、あの日はやはりからだの具合が悪くて、負けずぎらいから、無理をして出たものの、動くのもおっくうだったというのでした。

それが、選りに選って、あんなスゴいひとにぶつかったのですからホントに運が悪かったわけでは。

「あの一とと組んだら、あたしなんか……」吉永さんも、その羽入さんのなげわざには一目、置いていこうでした。

「でもネ、あの一と体重がないから、マワシをとられないように一ぺんに押し……」

吉永さんは、ここまで云って、あわてて口をふさぎました。

「ウワァ、あぶないあぶない」

「もう聞いちゃったわヨ。大事なところはわかったわ。おそい、おそい」

私たちは顔を見合わせて笑いました。

「でも、あなたとこのひとにもスゴイがんばりやさんがいたじゃないの」

「がんばりやさん……？」

私は、あのバカ力の紺野さんのことかなと思いました。

「ホラ、最初のひとよ。——色の白い……」吉永さんの云うのは原さんのことでした。

もろざしにくいさがられた不利な体勢からネバリぬいて逆転、貴重な一勝をあげ、ひよわそうな感じのどこからあんなファイトが出たんだろうとびっくりさせたあの原さん。

「アア、原さんネ。彼女にはホント感心したワ。見直しちゃった」

「そうネ。立派だったわネ。それにひきかえて、うちの新人たちのダラシないこと……。みんなおじけちゃって、二番目のひと——、ちよっと小柄なひと……、あの一とと当たっ

たうちの子なんか、ふだんはスゴクやんちゃなくせに、土俵へ上がったらなんにもできないんだから……。相手のひとが負けてくれたようなもんだったわネエ」

吉永さんはよく勝負を覚えていました。たしかに、朝野さんの相撲は一方的で、完全に相手のひとを圧倒していたのです。ただムリな攻め方が勝ちをのがしたと云えるのですけれど、あの大きな相手にすこしもおじけないでぶつかって行った気迫は立派でした。

こんなことを話しているうちに、私の心の中にも「あの新人のひとたちに負けられないわ」というファイトが湧いてくるのでした。吉永さんも、そのまますぐにとび込んでくるような視線で私を見ながら

「なんだか、胸がワクワクしてきちゃった」でも、吉永さんの目は「あなたには負けないわヨ」と云ってるように感じられます。ニコニコしていますけど、自信満々の顔つきです。

「あたしだって……。勝負に友情は必要なし」仲よしになっても、それとこれは別。私も固く心に誓って（大げさですけど……）一層ファイトをかき立てるのでした。

部屋へ戻りますと、机の上に吉永さんのバ

ッグが一つ、ポツンとひと待ち顔にのっています。F高のマークが鮮かに描かれて、私たちの対抗意識を一段と盛り上げてくれるように見えます。

「今日はネ、他流試合だから選手用のを持ってきたの」

バッグのジッパーをあけながら吉永さんは私の顔を見て、いたずらっぽく片目をつぶりました。その言葉のとおり、彼女がバッグから出したのは緑色のマワシです。

「このマワシ、生地は悪くないんだけど、ちよっとスベルの。マワシをひき合ったりするとすぐに伸びちゃって……」

彼女は、以前にもそんなことを言っていたようでした。

「なかなか立派なマワシじゃないの」

手にとってみますと、すこしツルツルするような感じですけど、手ざわりは悪くないようです。きつと締め込んだ肌ざわりだっていいんじゃないかと思うんですけど……。

「評判がよくないんで、来年は新調してくれてるっていうんだけど……。女の子はウルサイからネ」

何だか自分は女の子でないみたいなおぶり「そんなに感じ悪いかしらネエ」

「ウン。動かないでいるんならいいのヨ。女の子の相撲なんて、そんなに激しく動かないなんて、甘くみたのかしら……」

私はふと、あの前田さんが締めていた麗華女学院のマワシを思い出しました。分厚いくせにサラリとして、そしてどこまでも肌になじんでくるような感じ……。こんなマワシをつけて相撲ができるなら、あたしだって……と考えたものでした。

キユウツとやわらかく、そして力強くからだに締め込み込んできて、ファイトをかきたててくれるマワシの魅力……。あれだけズッシリしたものを身につけて、かえって、からだが軽くなったような気持になるのも、ふしぎです。吉永さんたちが、よりよいマワシを欲しがるともよくわかるのです。

「じゃあ、始めようか」

「ウン、時間がもったいないわネ」

吉永さんの目が、とたんにキラッと光ったようでした。

「さア、どうぞ、お客さまの方から」

「そうね、じゃ、おねがいします」

吉永さんは、こだわりなくそう云うと、クルクルと服をぬぎ始めるのでした。キビキビした動作、いつもながら、気持のいい態度で

す。ピチピチと張り切った肌。ちょっと胸のうすいのが欠点と云えば云えるのですけれどそのかわり新鮮な果物みたいなおシリからスリと伸びた、いかにもパネの強そうな足の線は、くやしくなるくらい美しいのでした。

やや幅をせまく折りたたんだ緑色のマワシが引き締まった体格にほどよくマッチして、腰のあたりを美しくいろどります。チョッピリうらやましくて、そしてムラムラとファイトが湧きます。

『このひとは二度もにがい思いをさせられているんだワ。でも、この次はきつと……』結び目のはじを引きあげる手に思わず力がこもります。

最初の敗戦の有様がホロにがく思い出されます。今になれば、自分の子供っぽい態度に顔が赤くなるのですけれど……。

でも、二度目の勝負は、完全に私の勝っていた相撲——。そんな気持があつて、それに夏の特訓で鍛え上げた豊富な練習からの自信が出来かかってきたようなのでした。

『もう敗けるもんですか。今日の練習だってせいぜいお手並み拝見といこうかしら……』

私は、吉永さんの背中を見ながら、ひそかに胸の中でつぶやくのでした。

吉永さんは、そんなことは、もちろんわかりません。ひらいた足をそのままに、グイと腰を落としてマワシを肌になじませ、クルリと向き直りました。

浅黒い肌に緑のマワシがほどよく映え、ピチッと整った締めこみ具合がまぶしい感じ。

「じゃ、今度はあたしが手伝うワ」

吉永さんにうながされて、服を脱ぎ始めます。でも初めての吉永さんの目を意識してちよつとためらいます。あの真っすぐ飛び込んできくる吉永さんの視線はどうもニガ手です。でも、思い切つてマワシを手にします。吉永さんが選手用のマワシなので私も対抗上青い選手用のマワシです。ファイトをかき立てられて熱っぽくなった肌に分厚い感触が一層その興奮を高めてくれるようで、思わずブルツと身震いが出ます。

「寒いのか？」

吉永さんがびくくりしたような声。

「ウウン。ムシャぶるいヨ」

「ワアこわい。あんまりいじめないでネ」

「それは、あたしの方でしょ。こっちはいつも負けてばかりなんだから」

「いつもだなんて……。あんなのハズミよ。あれで勝ったなんて云われるとキマリが悪い

ワ」

吉永さんは、本気でそう思ってるようでした。勝ち気な彼女にしてみれば、あんな勝ち方は不満で仕方なかったのでしょうか。おたがい力いっぱい戦つて、そしたら勝つても負けても……というのが、スポーツをする者の心がまえ。吉永さんも私も、気持は同じなものでした。

ところで吉永さんはいっこうに私のマワシを手伝ってくれないのでした。ふりかえりみると、吉永さんはマワシのはじを手にして、「テルちゃん、ずいぶん大きくなったわネ」と、見おろし、見あげるものでした。

「アラ、いやだワ、そんな目つきで……」

私は、そのへんがムズムズしてくるみたいで、思わず肩をすくめます。

マワシを締めようとしている時なので、どうにも恰好がつきません。

「そんなに見てないで、早く手伝ってヨッ」

私は急に恥かしくなつて、誰も、吉永さんのほか見てないのに身をちぢめました。でも吉永さんはそれにかまわず、

「ホントよ。服を着てる時はそんなにわからないけど、裸になると見ちがえるくらい」

「おデブになつたって云うのか？」

私は、すこし落ちつきをとり戻しました。

「ウウン。おデブになったって云うんじゃない、何んて云うのかしら……。スケールが大きくなったみたい。貫ろくかしら……」

「そんな。おだてておいて、また敗かしてやろうって云うんでしょ」

「おだてじゃなくって、もうあたしなんかとも相手になれないかもしれない。でも……負けたくないわねエ、本心は……」

吉永さんはそう云って、

「あア、ファイトがわいてきた」

と、急に思い出したみたいに、私のマワシを手伝ってくれるのでした。

選手用のマワシをつけるのは春の県大会以来のことです。ほんとにひさしぶり……。ちよっとばかり堅い感じの肌ざわりが私の血をさわがせます。ズッシリと腰を締めつけてくるのが、いかにも頼りがいのある感じで、私は思いつきおなかをへこませ、腰をひねってマワシをおへソの下あたりへ強く強く、締め込んで行きました。

「いつもこんなにきつくしてるの？」

吉永さんの質問に

「ええ、あたしって四つ相撲が下手だから、マワシを引かれないように用心してるの」

私の答に吉永さんは意味ありげな笑いを浮かべました。

マワシ姿になった私たちは、もう一度練習場に入りました。人待ち顔の土俵が、私と吉永さんの決戦？ をせかせているように見えます。伸脚、四股ふみ……と軽く体をほぐしてヒョイと傍を見ますと、吉永さんの熱の入った四股ふみが続いています。それも、軽く足ならしをするというんじゃない、軸足を伸ばし、せいっぱい上げた足に全身の重みをかけて踏みおろす本格的な四股です。若竹を思わせる彼女の足がスックリとよく伸びてさっそうとした線を描きます。くやしいけれど、私たちの五人の間では、このくらい上手に四股をふめる人はいません。二十回ほどでやめた彼女は、私の視線に気づいてニッコリと笑いかけ、紅潮した顔の、額にかかる髪を軽くかき上げました。よく光る眸が、一層輝きを加えているようです。

「彼女スゴク張り切ってるようだけど……、そうムザムザと負けたりするもんですか」

私は、おなかにグッと力をこめ、マワシの力強い肌ざわりに、こみあげてくる斗志を燃やしながら、吉永さんをうながしました。

「じゃア、始めようか」

自分ながら、のどへひっかかったようなヘンな声だと思って、それをセキばらいでごまかしたりしながら、土俵へ入ります。

向かい合って、そんな姿勢をとる吉永さんも、ちょっと上気したような顔。二年ごしの宿望が実現するとあって、彼女も興奮しているのでしょう。

申し合いなので、立ち合いのかけひきなどはなく、おたがい、まともなぶつかり合い。

ポンポンと突っぱる私の足のひらに、小気味よい手ごたえがかえってきて、吉永さんは体勢が起きて防戦一方。この時！ と春の大会のうらみもこめて突きまくる私の攻撃に、吉永さんは勝負をあきらめました。

「ようやく、あなたに勝てたわネ」

私の言葉に吉永さんは

「ダメダメ、とても歯がたたないワ。ぜんぜん近よれないんだから……。石山さんスゴク力をつけたようネ」

「そんなことないわヨ。今のは小手しらべだったんじゃないの」

吉永さんは首を振りながら

「とてもマトモからいってもダメらしいから今度は作戦を立てなくっちゃ」

と二回目の仕切りに入ります。

作戦というのは、私の突っぱりをはずして立ち合いに横へかわすつもりかしら……。私は、ふっとそんなことを考えました。そんなことに気をとられたせいか立ち合いの突っぱりが一呼吸おくれたようでした。私の腕が伸びきらないうちにサツとびこんできた吉永さんは、すばやく前マワシをとって、くいさがりの体勢です。なんとか左をこじ入れたものの、右の上手がとれません。けんめいに両足をふんばって吉永さんの寄りをこらえ、右手をのばして上手をさぐります。指先がかすかにマワシらしい手ざわりをとらえ、それがまた消えて……。二三度そんなことがあって私の注意が右手の方にだけ集まった時、その上手をさぐりに行くのに、タイミングを合わせた鮮かな吉永さんの上手なげ。右からのなげと、左下手のひねりがよくきいて、私はこらえようもなく、右肩から横転してあおむけにころがされてしまいました。完全な作戦まけ。砂を落としたがら立ち上がる私に、「どお？」と云いたげな吉永さんの笑顔。どうもニクッタラシイ顔です。

三番目。立ち合い、思い切った私の両手突きが命中して、吉永さんは棒立ち。つけ入った私はひと息に押したて、こらえるスキを与

えずそのまま押し出しました。今度は私がニコリと笑ってお返しをする番。

こうして、五番、六番と続けるうち、始めの緊張もとけて、私たちはようやく熱が入ってきましたし、勝負も一方的なものではなくなってきました。もともと、そんなに力に差はないのですから、おたがいのとくいがわかってきますと、簡単に勝負がつくものでないのは当然です。

吉永さんの突っこんでくるところ、体を開きざま私の思い切った小手なげに吉永さんは半ば自分の勢いでころがるという、胸のすくような勝ち方もありましたけれど、たいていは、無理な仕掛けを試みたりした方が負けるという形なのでした。

七番、八番と進むうち、ようやく汗が流れマワシも乱れてきます。とくに吉永さんの横ミツは腰の上へズリ上がってしまい、前の端はダラリとブラさがっている有様。

そこで汗をふき、マワシを締め直します。吉永さんも相当の汗っかきらしく、首すじから肩にかけて、噴き出る汗がぬぐってもぬぐっても止めどもなく流れ出します。

「何番やったかしら？」
「八番……、九番かな」

「どっちが勝ってる？」

「ええと……」

指を折って数えますが、初めの三、四番ははっきり覚えていきますけれど、五、六番くらいは、ちょっとあやしく、

「あたしの方が二番くらい勝ち越しかしら」
「ホント？」

おたがいに自分の方が一、二番よけい勝っていると思ってるらしいのでした。

「じゃア、このへんでひとくぎりつけましようヨ」

マワシを締め直した吉永さんは、大きく深呼吸をひとつして、斗志満々の様子で土俵へ入ります。

私も、前ミツをおへソの下ヘグイと押し下げ、新たなファイトをかき立てて続きます。おたがいに気合いをこめた仕切り……。それだけに立ち合いは全くの五分五分でした。

ガップリ胸が合って、おたがいに右上手左下手のマワシをガッチリとひき合いました。吉永さんの激しい鼓動が私の胸にひびいてきます。同じように、私のそれも、吉永さんの胸に伝わっていることでしょう。こうなったら根くらべ、ちよっとでも気を抜いた方が負けです。——と、吉永さんが一瞬体を寄せる

ようにしながら、腰を振って、私の右の上手を切りにかかりました。

「細かいことをするワ。このひと……」

切られなかった右手に力をこめ、私は指先で吉永さんのマワシを確かめるように、それを握り直しました。ほんの少しの間ですけれど、私の注意がそこに集中したところにスキができたのか吉永さんはひと腰落として私のハッとする間もなく、つり身の攻撃に出てきました。フワッと腰を浮かされて、あやうく爪先が残ります。「何をッ」と懸命にこらえてどうやらこのピンチをのがれます。どっちか片方もマワシを切られていたら、このつり身を残すことは、とても出来なかったでしょう。それに、私の方の身長が吉永さんより高くて、従って足の方も長かったということも幸いでした。

つり切れないとみた吉永さんは、その攻撃を中止し、私もそれにつけてこんでやや体勢を立て直すことができました。

再びスキをうかがう持久戦——。土俵は私の方がややつまりましたけれど、体勢はまた五分と五分です。おたがいの肩におたがいのアゴをつけ合って、相手の出方を窺います。シンの疲れる勝負——。

ピッタリと合わさっている胸の間で、二人の汗が混ぜ合わされ、そのミックスされた汗がおなかの方へ流れ下って行くのがわかります。そのおなかも荒い呼吸に大きく波を打つたびごとに、マワシと肌の間かなりのスキ間ができて、胸から下ってきた汗が、そのスキ間に流れこみ、気持が悪いのですけれど、そんなことを考えているヒマはありません。二呼吸、三呼吸……。また、吉永さんがつり身の攻撃に出ようとする——、その気配をとらえて、私も思い切り腰を落としてつり身の逆襲に出ました。重い吉永さんのからだ——マワシだけがズルズルと伸びてズリ上がってくるのがわかります。おたがいに力の限り引き合ったマワシのつき上げてくる痛さ……。思わず腰が浮きそうになって、でも、ここは力くらべのがまんくらべです。苦しいのはおたがいさま。先にあきらめた方が負けです。両足をふんばり、からだ中の力を両腕にこめての意地くらべ。

心臓が破裂しそうなくらい激しく鼓動してのどもとへつき上げてきます。目のくらみそうな苦しさ……。まるで一時間くらいもこうして、がんばっていたような気持でしたが、ほんとのところは二十秒か三十秒ほどのもの

だったのでしょう。

堅く歯をくいしばって持ち上げようとするその吉永さんのからだから、少しずつ力がぬけて行くように思えて、私はもう一度強く両マワシをひきつけながら、ヒザのバネを利かすようにして、ついにこのつり合いに勝ちました。右の上手の方へ振るようにして体を入れかえながら土俵ぎわへ……。

「ウワァ、やられちゃった。あなたやっぱり強いわ」

汗びっしょりの顔に、からだ中で荒い呼吸をしながら吉永さんが、やっとそれだけを云いました。私も何か云おうと思いましたが、激しい息づかいがそれを許しません。しばらく、ふたりで向かい合いながらハアハアと荒い呼吸を続け、そして、申し合わせたようにタテミツを直しながら、テレくさそうな笑いでおたがいの健斗をたたえるのでした。

この一戦で力尽きてしまったのか、吉永さんは、その次からの勝負を簡単に失ってしまいました。突き出し、押し出し、つり出し。どれも、それまでのネバリが感じられず、手ごたえの少ない勝負でした。そんな負け方で五、六番、続けたあと吉永さんは「このへんでやめましょうか」

と言いました。

私も、あの「大勝負」のあと、何となく情性的な取り口が続いていましたので、もうこれ以上続けても意味ないみたいだと思って「そうね、今日のところはこのへんで十分みたいだわネ」と賛成しました。

マワシをはずしますと、急に疲れが出たように、椅子に腰を下ろしてしばらくは動く気にもなれません。体の疲労と同時に、「他流試合」の緊張からくる気疲れもあるのでしょうか。吉永さんも同じらしく、気抜けしたような顔をしてボンヤリと部屋の天井などを見上げています。ところが、ひとりごとみたいに「あア、ホントに疲れちゃったわア。こんなに疲れたなんて、ふだんの練習の時にないみたい」

「あたしもそうだワ。よっぽど気合いが入ってたのネ、ふたりとも」

ようやく視線の合った私たちは、思わずニツコリ。それはほんとに何のこだわりもない純真な笑いだったと思います。

「こんな練習を続けてたら、きっとスゴク力がつくでしょうね」

私が言いますと、吉永さんも

「もちろんだワ。だからって、ふだんの練習をサボってるとは云わないけど……。やっぱり緊張のしかたがちがうのネ」

「ホント。スゴク緊張しちゃった。からだがふるえるくらい……」

「アア、石山さんのは武者ぶるいだったのでしょ」

吉永さんにうまく一本とられて、これは私の完敗。私たちは心の底からの笑いを部屋いっぱいひびかせるのでした。

時計を見ますと、ここへ来てからもう二時間以上もたっていました。

「アア、もうこんな時間ヨ」

「ホント。まだ一時間もたたないみたいだと思っただけど……」

とくいでない課目の時間ですと、死ぬほど長く感じる時間も夢中ですごした時はアツと云うくらい短いものです。

「ほんとにいいけいこになったワ。おかげさまで」私が云いますと、吉永さんも

「ウン。でも……一週に一回しかできないなんて残念だわネ。と云って、毎晩やるなんてわけにいかないし……」

「毎日じゃないからいいのよ。たまにだから緊張した練習をやるんじゃないかしら……」

「そうかもしれないわネ」

吉永さんもうなずきました。そして

「でも……。石山さんてほんとに成長したわネ。こんなこと云ったりして失礼だけど、落ちつきも、ファイトもあるし……。人間的にひとまわり大きくなったって感じだワ」

「ヒヤかさないで。あたし、そこらじゅうがムズムズしてくる……」

「ヒヤかしたりしてるんじゃないの。ほんとヨ。あたし石山さんと友だちになれてスゴクよかったと思ってるの」

「何だか云ってることがアベコベみたいネ」「マジメに聞いてちょうだいヨ。あたし、この学校へ転校しようかなと思ってるの」

吉永さんは何だか馬鹿みたいにホレこんでしまった様子ですけど、吉永さんのようなひとにこんなことを云われるのは悪い気はしません。同じことでもヒロちゃんなんか云われたら塩をまいて逃げ出すかもしれません……。

「ネエ。来週もきつとやりましょうヨ」

吉永さんは私の手をつかみますと

「ユビキリ」

と、強引に小指をからませて、私に約束させるのでした。

(未完)

女 丈 夫 散 華

女

忠

臣

蔵

川 上 米 子

(一)

「浴みは、先程お済みなされましたのに。今また湯の準備とは……？」

かつての中嶋君路が、訝しげに見上げるのへ、肥後五十万石の城主加藤忠広の正室あくりの方は、何時もと変わらぬ物静かな態度ながら、何か遠くを見つめるような面持で、

「君路、そなたにだけは、申しておきましよう。先のは旅の疲れをいやさんがための浴みこれからのは死出の旅の用意じゃ。」

「げえっ！ な、なんと仰せられます？」

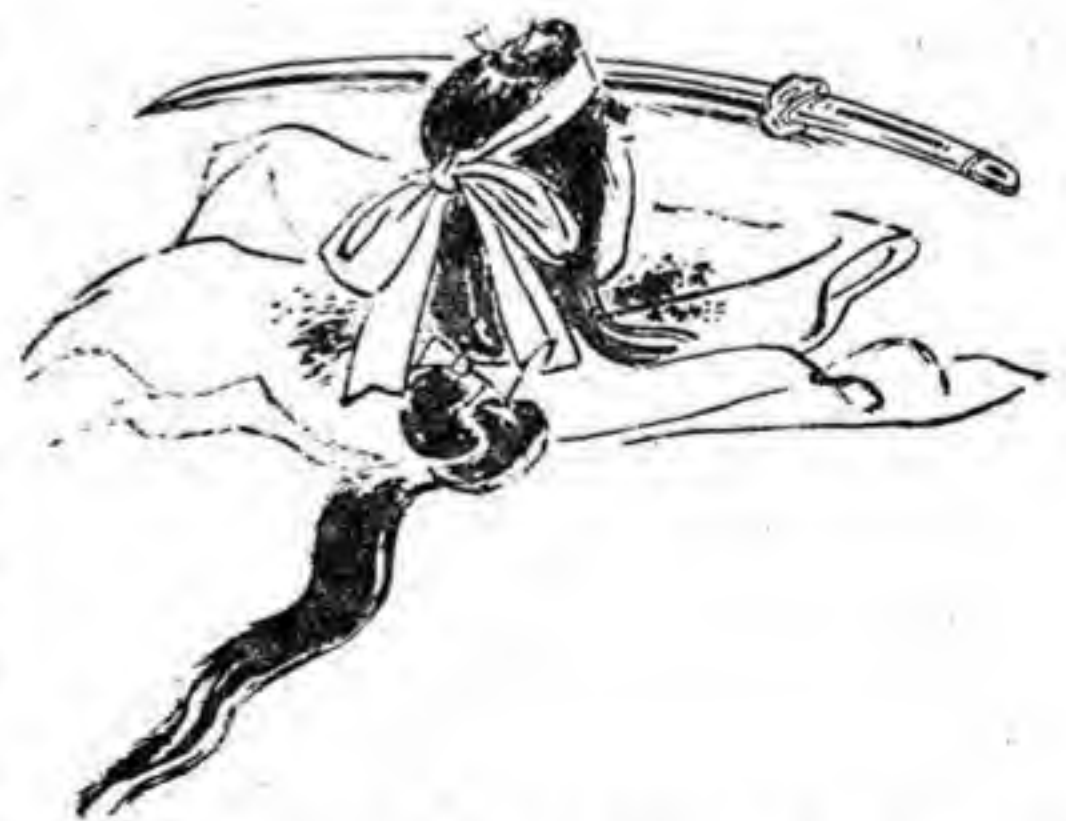
「いくばくもなく、殿よりの上使がまいって妾に死を賜わることとなるはず。そうとあれば、身を潔めて死にたい」

「め、滅相な……。何故、奥方様に死を賜わることがありましよう。このたびのこと、お国表蟄居、それも長くはありませぬこと大評定で、きまりましたもの。今更……」

「それは表向きのこと。お命の方一味の者は何としても、この妾の首が所望なのじゃ」

「そ、そのような無法、殿とてお許しになるはずがありません」

「殿のお心がどうであろうと、お命の方の申



すことが通らぬことはない今の有様……今、旅の疲れにまどろみましたところ、夢に妾の二親があらわれ給い告げて下されたのじゃ」

夢など、と口まで出かかりながら、君路は女主人の明眸を何時になくまぶしく感じて、目を伏せた。と同時に、何とも云えぬ怒りと悲しみが内から湧いてきて、身を顫わせた。

「奥方様、彼等一味の卑劣な陰謀、それを甘んじてお受けなさるのでございますか？」

「妾とても無念じゃ。この五体がピリピリと裂けるほど……」

不意に君路は烈しく嗚咽して、畳の上に泣

き伏した。あくりの方は縁先から歩みを返して、おのれの褥にもどり、

「君路。よくつくしてくれた、そなた達にはまことに申しわけありません。しかし、そなたが取乱しては、外の侍女等もさわぐことになる。どうか、ここは妾に静かに死なしてやりやれ」

「奥方様！」

「その代わり——」

キッと語気を改めた、あくりの方は

「死ぬるこの身はいとわぬが、気がかりはお家のこと。もし、そなた等がお家を大事と思ひ、妾を不愼と思ひやるなら、願うてはならぬことながら、機会あらばお命の方を討ち果たしてくりやれ。あの女が殿を迷わす限り、清正公以来の名家も必ず滅びまする」

「お、奥方様。そのことばかりは、御安心なさいませ。恩顧を受けました、われわれ侍女一党、生命のある限り、あの姦婦、生かしてはおきませぬ」

涙の顔をふり上げて言う君路の言葉に、あくりの方は、美しく微笑んだ。

あわれ、あくりの方の夢は正夢であった。それから一刻もせぬ夕まぐれ、忠広からの上使が来たって、あくりの方に「死」をし

かも「切腹」を申し渡した。奥方はわるびれもせず、これをお受けし、君路も頼みとする若月、利絵の両侍女に言いふくめて、静かに準備をすすめた。

この上使が正式のそれでないことは、あまりにも見えすいていた。正使の甲藤右馬介、副使の中藤英は、いずれもお命の方の腹心であるばかりでなく、介錯の役目を帯びてついて来た侍女美香は、お命の方の最も愛する侍女であった。君路は、せめてものことと、介錯の役はわれわれの手でと願って見たが無駄であった。彼等には、あくりの方を態々苦しんで殺すべく、姦計を立てていたのである。

忠広の愛妾お命の方が、正室あくりの方をこれほどにまで憎んだのは、ただ女の嫉妬とばかりは云えない事情があった。

あくりの方は豊後の国中津の城主中川秀政の息女で、夙に才嫁の名が高かった。そこで色好みの忠広が熱望して正室に迎え入れ、その仲も睦まじかったが、三年経っても子の無いことが災した。忠広は参勤交代の途中、京都に寄ってお命の方を見染め、側室としたのである。彼女は性淫乱、貧乏公卿の出であることもあって、忠広の寵を頼んで正室になるうとし、ことごとにあくりの方を中傷したの

である。しかも彼女と結托するものに、お家のっ取りを策す悪家老八並備前があつて、忠広の乱行は目にあまるようになって来た。お家大事と忠広を諫める譜代の臣もないではなかったが、大廈の傾くは如何ともし難く、日に日に状況は悪化していったのである。

かくて寛永七年秋八月の末、あくりの方は遂に江戸上屋敷において、お命の方に刃傷に及んだ。それは止むにやまれぬ貞女の一念から、寝所に上ろうとするお命の方を廊下に待ち伏せ、手ずから懐剣をふるってお命の方の肩先に斬りつけたのだが、無念や、うす傷を負わせただけで侍女達に遮られてしまった。

加藤家は鳴動した。忠広は、烈火の如く怒り手ずから成敗せんばかりであつたが、奥方の壮烈な行為に目覚めた若侍たちや、城代家老井上主膳の必死のとりなしで、死一等を減ぜられ、当分の間、国表において蟄居ということになったのである。しかし、お命の方や八並一派がそれに満足するはずはない。井上達の裏をかくて、あくりの方が小人数の供連れで江戸を離れたところを狙って、忠広に迫って書かせた上書を用意し、後を追ってここ大磯の宿で追いついたのである。

時に九月の八日、暮れかかった東の空に夕

月があわくかかり、風肅々と身にしみる奥の一庭。二十四才の秋を迎えて

「お役目、御苦勞に存じまする」

あくりの方は悪びれたさまもなく、洗い清めた玉の肌に覚悟の白装束をまとして、従容として死の座についた。検視に一礼して、三宝の上に置かれた腹切刀に手をのばす。

女人の切腹の場合は、介錯人が氣を利かして、この際に首を落とすか、あるいは鞘を払って、肌を押し開き、刃を左腹に擬したところで介錯するのが普通である。しかし侍女美香の刀は何時までも振りおろされず、あくりの方はやむなく、雪の膚に刀を突き立てて、キリキリと右に引き廻した。いかに氣丈とはいえ、女の弱い力で一文字に斬り裂くことは容易なことではない。早くも苦痛のために、あくりの方の上半体は前後に揺れ出した。あわてたのは美香である。腕に覚えがあればこそ介錯を願ひ出たのだが、そこは初めての経験、この揺れたのでは、斬りにくいことおびただしい。といって公の実検に供する首級とあれば、みにくい斬り方も出来ない。動揺してふりおろした第一刀は無惨や、あくりの方の右肩深く斬り込んだ。

「アッ！」

絶叫を上げて、腹切半ばのまま斜め前にのめり伏す、あくりの方。端座した足も崩れて白い胫がのぞかれる。

「えーい、見苦しい。そち達、手助けして早う首落としや」

副使の英も立ち迷って、そう命令する。侍女が、二人、左右から、あくりの方の手と肩を抑えて首を固定させ、美香は腰を落として、氣味に、やっと奥方の首を打ち落とした。コロコロと転がって、ただ一人、許されて始終を見つめていた君路の方に向いたその生首の美しい面は、苦痛にゆがんでいた。

（おのれ、天道を怖れぬ非情の仕打ち。今に見よ、英、美香。お命の方共々、八裂きにせいでおこうか）

怒りに顫える身をさとられまいとするのに懸命な君路であった。

やがて、あくりの方の首級を携えて、上使一行が去ると、君路はじめ若月、利絵等の侍女達は、空しい主の亡骸にとりすがった。

「お方様、どんなにか御無念でござりましたでしょう。このお恨み、きっと妾達の手で霽して見せまする」

(11)

一年有半の時は、またたく間に過ぎ、寛永九年一月十日、君路等、復讐の機会は来た。お命の方は忠広共々、お国入の途次を京都に立ち寄り、一夜祇園に遊んで、近くの商家に宿泊したのである。

京都ならびに江戸に潜伏して絶えず井上方の若侍と連絡をとっていた君路達のもとに、たちまち朗報は飛んだ。あくりの方の復讐を誓った同志は、はじめ九人いたのだが、永の月日の間に、あるいは離脱し、あるいは、やむなく遠方に嫁ぎ、また他界したものもあって、この日、集まったのは首領君路に、絶えずその両腕となつて一念を通した若月、利絵の両侍女に、一党の中で一番年少であった園代と呼ぶ美少女、その四人きりであったのである。ただ九人の中から一人の裏切者も出なかったことは彼等の幸いであった。若侍達の方からは力を借そうという申し出もあったが君路は一切を断わった。事が終わってからの幕府の思わくを憚ったからである。

事実、お命の方を討つだけなら、四人でも充分であった。相手は、ほとんど特別の警戒をしていないのである。忠広すらも、あくりの方のことは忘れてしまっていたし、お命の方も、待望の正室の座を獲得して、世子もも

うけ、栄耀栄華をきわめ、その権勢に酔っていた。たとえ自分を怨む者があったとしても男なら、たちどころに捕え得たし、女にそんな大胆な者があるとは考えても見なかったのである。その宿所は彼女がかつて知っていた商家であり、もともと人目を忍ぶ遊びの場であるから警固も手薄であった。その雨戸は若侍に指図された気の利いた若党がまぎれこんでいて、悉く内から鍵を外してあるはずであった。あまつさえ、折から大雪となつて、雪見の酒宴に興あつた忠広は、お命の方と一遊びの後、彼女を先に返して、侍達を引き連れて、遊女のところへ遊びに押出し、お命の方とともに帰つて来たのは、ほとんどが女許りであつた。

まさに君路達にとっては、願つてもない絶好の機会であつたのである。

「ほんとうに奥方様の御魂のおみちびき」

「成功、疑いなし」

襷、鉢巻、甲斐々々しい扮装で表に立った四人の義女は、武者振るいして勇んだ。

首領の君路は、三人の顔をじーっと、ひとわたり見廻して、

「よく集まって下さいました。お方様に代つてお礼を申します。ただ呉々も仕損じないよ

うに、お命の方の身代りになる者がいないとも限りませぬ。また逸早く逃げられぬよう気を配ることです。忠助が外で見張つてはくれているはずですが……。寝所は御承知でしょうから二手に分かれて踏み込みましょう。妾は園代殿と玄関口から入りますから、若月様と、利絵様は勝手口に通つて下さい」

「心得ました」

「本望を達すれば、あとは斬死の覚悟。これが今生のお別れです」

「君路様！」

八つの手が烈しく握りあつて、言いしれぬ感動が、その身内に燃え上つた。しかし、もはや涙は流さなかつた。君路は園代に向かつて、にこやかに、

「妾達三人は、お方様御生害のみぎりに、共に同伴すべき命だったのです。しかし園代様は違ひし、まだお若い。出来たらお命の方の首級を持って脱出して下さい。お方様の墓前に供えたいのです。妾達はそれを張りに戦います」

「お言葉うれしゅうございますが……」

並の少女なら口も利けない緊張の場面であるのに、園代は、なめらかな口調でいう。

「妾ははじめてこちらに上りましたとき、あ

の性しょうわる悪の美香と一緒に寝起きしておりますから、その顔はよう見知っております。妾はお方様のためにあの者の首を取りたいのです。お命の方の首級は、君路様にお頼みします」

「ホ……、頼母しい言葉。妾はあの憎らしい英の首をお墓に供えてあげたい」

利絵が言えば、

「それでは、斬り死にするのは妾一人になりますね」

若月の軽口に、四人は空を仰いで清らかに笑つた。折から雪は降りやんで、十三夜の月が天心に澄んでいた。

四つの影は無言で敏捷に動き、二手に分かれて邸内に消えた。難なく開いた玄関口から侵入した君路は出会頭に、はや見廻りの敵の侍女と顔を合わせた。

「えいっ！」

抜討の一刀に、その女は声も挙げ得ず廊下に崩れ折れたが、今一人の女は、

「曲者！」

と叫びながら、奥へ逃げ込む。今度は飛鳥の如く追いつがった園代が、見事にその後ろ腰の辺りを払つたので、「キャッ！」と横手の襖にぶつかつて打ち倒れる。その物音に、

(何事！)

と寝呆眼で蒲団から這い出す侍女達。と見て、君路はよく通る声を張り上げて、

「方々よく聞かれよ。そなた達の陰謀のために非業の最期を遂げられた、あくりの方のご無念を霽さんため、旧臣君路ほか、お命の方様のお首級頂戴に参上。出会えや！」

と呼ばわる。わざと多勢をこちらに引き寄せておいて、その間に裏手から入った若月と利絵に、たやすくお命の方に迫れるようにしようという作戦。

「げえっ！ あくりの方の残党の討ち入り……」

口々に叫びつつも、すでに逃げ腰が先になって、まともに打物をとって向かってくる者もない。得たりと園代は、

「毒婦にへつらう悪女ども。一人も生かしませぬぞ！」

と、当たるを幸い斬ってまわる。

肩を斬られ、腿を払われて、朱に染まって倒れる同僚の血を浴びて、ますます、うろたえさわぐ侍女達。舛屋と呼ぶ商家は時ならぬ修羅場と化した。君路は、それらの侍女を尻目に奥へ足を早めた。

「やらせぬ！」と、たまに立ち塞がる敵もあ

ったが、手練の太刀先、二、三合と打合わせぬ間に斬り倒して、なおも進む。

「なに、君路等の討入とな？」

一方、お命の方の部屋には、英や美香などが集まって、流石に驚きの顔を見合わせた。「彼女等が斬り込んで来たとして、人数は知れたこと、おつつんで討ちとるのに何の雑作もありましよう。ただ、お方様を討たせては一大事。早う殿にお知らせして、戻って頂くとともに、それまでの間、命に代えても、お命の方様をお守りするのじゃ」

英の指図に、侍女達はようやく落ち着きを取り戻して、報せに走るもの、お命の方を守ろうとする者、君路達に馳せ向かおうとする者、それぞれの部署についた。

「だ、大丈夫じゃろうか、これだけほどの人数で……」

流石に顔青ざめて身を顫わす、お命の方。

「御心配なさいますな。旭姫様の方にも使いを走らせました故、直ぐにも加勢にお出でなされますはず……」

旭姫というのは、忠広の妹姫で、武芸にもすぐれた勝気な女性であったが、今宵の遊びにもついて来ていて、同じ舛屋の離れに侍女とともに泊っていたのである。忠広に報せに

走ろうとした侍女は、表を見張っていた忠助に斬られてしまったが、旭姫の方へは屋内とて使いが届いたので、

「素破！」

と姫も身仕度をして、腕自慢の侍女を引き連れて駆けつけたのだが、それまでには大分間があった。そこで美香は、

「君路とて何程のことやあらん。美香が、まいて一太刀に討ち果たしてまいります故、お待ち下さいませ」

侍女中、随一の腕自慢とあって、拔身の大刀を提げて廊下に飛び出る。怒号、叫喚をたよりに、その方へ走ってゆくと、出会頭にバツタリと出会ったのは外ならぬ君路だったのである。

「珍しや君路！ 上を恐れぬ今宵の所業、覚悟あつてのことかっ！」

ののしりつつ、油断なく足場を定める。その敵が美香と知って、君路にもあの断腸の夜の思いが蘇って、勃然と血潮のたぎるのを覚えた。

「おのれ、そなたは美香。ようも御正室様に向かつて醜い陰謀を働きましたな。今宵こそその方一味を討ちとって、お方様の御無念を霽してくれまする」

と血ぶるいした大刀を取り直す。

「ホ……、陰謀の何のと、世迷い言。そなたこそ飛んで火に入る夏の虫。お家に仇なす不逞の輩。天に代って成敗してくれる」

相手の手剛さを充分に知っている美香は、憎まれ口を叩いて時を稼ぐ作戦。味方の多勢を頼んで無理には、しかけない。

「えいっ！」

「おう！」

と互いに裂帛の気合。君路の方は目指す仇の片割れだが、何といってもお命の方を討つ方が先に立って、自然にあせり気味。タッタとつめて上段にふりかぶる。しかし、と見てやや腰を落として刀を下に向けて構えた美香の反撃体勢には、隙がないばかりか、反ってこちらの下半身を狙う不気味さがあって、

(失敗ったっ)

と君路は、おのれの不用意に臍をかんだ。

「まいりまするぞ」

美香の持つ刀の切尖がピクピクと動いて、はじめつめておきながら思わず後ずさりする君路。君路は長身、美香は小柄だが、この場合それが美香に有利に働いて、あわや君路危うしと見えた時である。

「君路様、この敵は妾に……」

横へ並んだのが外ならぬ園代で、

「えいっ！」

途端に、猛然と踏み込みざまに横に払った一刀を、危く交した君路へ、さらに斬り返した一刀を、園代の刀がパチンと刎ね返した。

「えーい、卑怯な邪魔立てっ」

必殺の一刀を邪魔されて、面に朱を注いでたける美香。君路は逆に感謝しつつも、

「手剛い相手。そなた、大丈夫ですか」と聞く。

「相討ちになっても仕止めまする」

キッパリ言う園代は、既に手傷か、返り血か、上半身を朱に染めていた。

「君路様は早う、お命の方を——」

「よう言うてくれました。さらば、この場、頼みまする」

励まされた形で、二、三度、打ち込むと、体の入れかわった隙に、サッと駆け抜ける。

「逃げるかっ！」

討ち得た相手を逸す無念さに追いますがろうとしたが、

「美香、待ちや。そなたの相手はこの園代」

サツと鋭い太刀風を浴せられては、相手にならないわけにはいかない。

「えーい、うるさい端した女奴。さらば、そ

なたから料理してくれる」

向き直って烈しく斬り返す。しかし、ヒラリと身を交わす、園代の身の軽さ。

「こしやくなっ！」

美香は無二、無三に斬り込むが、その太刀は、いずれも空を切った。

(これは——)

と警戒した時は、おそかった。年少の相手を侮ったのとお命の方の身を案じた焦りが、相手の腕も見きわめずに攻勢に出してしまったわけで、受身に廻った時には呼吸も乱れ、体勢も崩れたのをどうしようもなかった。

「とうっ！」

得たりと突き出す園代の一刀をうけ損じて右肩を貫かれ、プツと血潮が飛ぶ。

(不覚——) ジーンとひびく激痛に目がくら

みそうになりながら、年下の少女に負けじと懸命に太刀をふるったが、園代は冷静にうけ流し、なおも無謀にも大上段から打ちおろしてくるその間合を充分見切って、敵のふところへ入りつつ、

「エイ——」

と思ひ切り下から掬い上げたから、

「うっ、う……うわっ！」

園代の太刀をおのれの腹へ抱え込んだ形と

なつて、烈しい鈍痛に身体をこわばらせた。
（わ、妾としたことが、こんな、小娘に……
残念——）

深い後悔とともに目の前が真暗になってゆく。と同時に、相手の胴に斬り入れた刀ごとサッと園代が身を引いたので、しばしもたまらず、どっと廊下に倒れ伏す。

「アレー、美香様が——」

頼みとする美香が、花も恥じらう美少女に斬り倒された驚愕に、侍女達は怖じ気をふるった。倒れた拍子に、また意識をとり戻した美香は、なおもあがいて起き上ろうとしたがもはや力がないままに、そのうちに背中にしつとりとした重圧を感じたのは、園代が馬乗りになったのである。そして

「美香、よう聞きや。非道を承知で、あくりの方様を介錯におよんだこと胸に覚えがあるう。仇の片割れ、そなたの首、園代が申しあげまする」

と妙なる声とともに、ぐいと髪を引き上げられたので、

（あ、妾の首を——いやじゃ、助けて——）

見苦しくこの期におよんで首を左右にふつたが、忽ち、くびれの深い顎の下に冷たい刃先があてがわれたと思うとサクッと柔らかい

咽喉の肉に斬り入れられた。

「きえっ！」

絶叫とともに意識が混濁してゆき、やがてその首は胴から離れてしまった。

（うれしや、美香の首を討ちとった。お方様これで御無念をお霽し下さいませ）

死骸に打ちまたがったまま、纖手に血のしたたる美女の生首をかがけ見入っている美少女の姿は美しくも、また妖しかった。

（三）

一方、裏口から侵入した若月と利絵の二人は作戦が図に当たって、すべてが君路達の方へ出向いたため、誰にも見咎められず、たやすく奥の間へ進んだばかりか、逆に裏口の方へ避難しようとした、お命の方の団にバッタリ出会ってしまった。

（天の佑け！）

と勇躍した二人は、まず敵の氣勢をそぐべく、若月が大音声。

「珍しや、お命の方。お家をあやまる姦婦！あくりの方様のお恨みをはらすため、み首級頂戴に参上！」

（げえっ！こちらからも——）

効果観面、お命の方側の侍女達は一度に縮

み上ってしまった。これほど用意周到な討ち入りであるということが、彼等に疑心暗鬼を抱かせ、お命の方などは今にも崩れ折れんばかりに恐怖に打ちひしがれている。

（お方様、しっかり！）

あわててそれを抱きかかえながら、流石に英は柳眉を逆立て、

「エエイッ、一人や二人の敵に、何を愚図々々している。おっ包んで討ちや」

「おう！」

反射的に数人の侍女が刀や薙刀を並べたがお座なりで、心は互いにバラバラ。と見抜いた義女中、最も腕の立つ秋月が、

「まいりまするぞ！」

声と共に正面の敵に、真っ向からズバリと割りつけた一刀が、難なくその脳天を唐竹割にして、声もなく崩れ折れたので、残りの者はザザーッと後ずさりしてしまふ。

「外の敵は妾が引き受けまする。利絵様には早く仇を——」

左右に目を配りつつ、颯爽と言う秋月。

「はい」

利絵も小太刀をよく使う。勇躍、敵中にとび込んで、一人、二人に傷を負わせ、真直にお命の方、目がけて走り寄る。

「推参者、退りや」

その前に立ちふさがったのは英で、傍の侍女から刀をうけとって、小太刀と相對する。

彼女は年つもって二十六才。奥の総取締りだけあって、腕は立つ。利絵と互角に数合打ち合ったが、そこへもう三、四人、斬り捨てた若月が、

「英。そちの相手は若月じゃ。正義の刃、受けて見やるか」

と立ちふさがる。利絵は得たりと

「お願い……」

と敵を譲って、さらに、お命の方に迫る。

傍には二、三人の侍女しかないから、

「出会え、出会え！」

と黄色い声を上げながらも、お命の方も流石に覚悟を決めて、懐剣の鯉口を切る。公卿の出ながら、全く武術のたしなみがないわけではない。

利絵も慎重に足場を定めれば、侍女達も今は必死に打ち込んでくる。二、三合、烈しく斬り合っている間に、お命の方は、なおも逃がれようと身を翻えして廊下へ飛び出た、その前にスラリと立ったのは、外ならぬ君路で「お命の方、もはや遁がれぬところ。この期におよんで、身苦しいさまはなさらず、潔く

討たれませ」

と静かに刀をつきつける。

「おお、君路様！」

狂喜した利絵が、その勢いで侍女の一人を斬り倒して後から迫る。はさみ打ちになったお命の方は、ただ蒼ざめて立ちすくむ。

一方、人も交えず一騎討をつづけていた英と若月だが、何といっても精神的な負目は英の方にある上に寝巻姿。充分に身支度した若月とでは、腕はそう違わなくても大きなハンディキャップの差。それを見越した若月が、相討ちのつもりで、英が刀を振り下ろす直前に我から踏み込んで斬りつけた。

「わあっ！」

と苦鳴を上げたのは英の方で、首のつけ根あたりを斜めに四、五寸も斬り下げられて、よろよろとよろめくと、間のふすまにドスンと、ぶつかって、はじかれたように畳の上へ転ぶ。

それでも、なお懸命に起き上ろうとするのを、そうはさせず、

「あくりの方の仇、思い知ったか！」

ぐいと突き出した第二刀が、ねらいあやまず、その胸板を貫いたから、

「む、無念！」

髪ふり乱した凄惨な形相で、胸に刺さった刀を握りしめたまま、今度は仰向けに打ち倒れ左手の指がバラバラに斬れて落ちる。

その悲惨な最期には若月も目を掩ったが、（これも主殺しのむくい……）

と懐剣を抜いて素早く細首を掻き落とし、

「元兇、英の首、若月が討ちとったり」

と、高々と名乗りを上げる。英まで討たれては、もう誰も、かかろうとする者もない。

「サア、あとの敵は、妾が引受けします。君路様と利絵様は、お命の方を討たれませ」

若月に励まされて、

「言うにや、およぶ」

と二人は左右から、ジリジリ詰め寄る。

「うわっ！」

何と叫んだのか、やぶれかぶれになった、お命の方は、懐剣をふりかざして、年少の利絵の方に向かって突進した。その狂気ぶりに少なからず驚いた利絵だったが、反射的に身を引いて交すと、小太刀を横なぐりに、相手の胴を、したたか斬り払った。

「お見事、利絵様！」

こなたで君路が叫んだが、お命の方は斬られたまま、突っ走って逃げようとする。

「おのれ！」

と追いつがった若月が、その背へ浴びせた一刀が、わずかに届いたので、
「うっ！」

と足をとめて棒立ちになると、崩れ折れるように畳の上へ、うつ伏した。

「おう、流石は若月様！」

「皆様、ようやくくれました」

大願成就——その感激に、三人はしばし敵中を忘れて、倒れたお命の方の姿を見つめたまま、呆然と立ちつくした。

そこへサッと飛び込んで来たのは園代で、左手に美香の生首を提げている。

「おう、園代様も無事であったか……」

喜ぶ利絵。

「はい、約束通り美香の首を討ちました」

と美香の首を掲げて見せる。

「お手柄じゃ」

若月が言えば、君路は

「園代様、喜んで下さい。首尾よう、お命の方を仕止めましたぞ」

「そ、それは、まことでござりますか？」

喜びに美しい目を見張る園代。君路も我に戻って

「時移って新手の敵が加わっては一大事。さあ、お命の方の首級を挙げましょう」

「はい」

まだこと切れはせず、泣いているのか、苦痛にうめいているのか、声を出して身を震わせているお命の方を、三人でズルズルと引きずって来て、君路の前に引き据える。

君路は、なおも沈着冷静に、

「ここまで来て、仇を討ち間違えては、物笑いになります。まことのお命の方には、左の肩先にお方様がつけられた、刀疵のあとがある筈。たしかめて下さい」

「そうでした」

若月が左の襟をぐいと押しひろげてみると肩も背の方へかけて、真白な肌に、ありありと残っている二、三寸の傷あと。

「おお、まさしくお命の方……」

「お方様。どんなに、御無念でござりましたことか……」

感きわまって、絵利と園代は声を上げて鳴咽し、若月もそれをこらえるように、キッと唇をかみしめた。君路は容を正して

「お命の方、そなたが愛妾になってからこのかた、色香をもって殿を迷わし、奸計をもって、あくりの方様の御無念を齎さんため、今宵参上致しましたからには、せめて前非を悔い立派に御生害の程願わしうござりまする」

と凜然と引導を渡して、懷に用意していたあくりの方が切腹に使った短刀をとり出してつきつける。だが、お命の方は、

「いやじゃ、妾は死ぬのは、いやじゃ。その方達、無法な。誰か来て——」

と身をふるわせて、わめく。

「えーい、この期におよんで未練な。そちとぐるになって陰謀をたくらんだ、英も美香もこの通り、首になったわ」

と若月から二人の死首を見せられては、

「ああ……」

と泣き伏すばかり。

「御生害出来ぬとあれば、やむを得ませぬ。われらの手で、お首級頂戴するまで……」

君路は、園代を目でさしきねいて

「若月様と利絵様は、すでに一刀を酬われしました。首級は妾が挙げます故、貴女がお方様に代わって、止刀を刺して下さい」

「はい、それでは」

光榮に顔を輝かせた園代は、君路から恨みの短刀をうけとって、お命の方の前に坐ると左手でぐいと襟をとり、右手でその左乳房の下をまさぐって、心の臓を探りあてると、

「お主の仇、思い知れ！」

力一杯、突き込んだ切尖は、ねらいあやま

たず、そこを貫いたと見えて、

「う、うーん」

お命の方は一旦、長身を後ろに反らせてからガックリと白い面を伏せて、こと切れた。

「お見事！」

顔を見合せて喜ぶ義女達。ついで仰向けに倒した、お命の方の死骸に馬のりになって、君路が型通り首を掻き落とし、

「これ、この通り」

と三人に、さし示す。

「大願成就！」

「あくりの方様。これにて御無念を晴らし、御成仏下さいませ」

これも用意していた、あくりの方の位牌をとり出し、その前に、お命の方をはじめ三つの首と、仇の肉を刺し通した血刀を据え、四人の義女は静かに合掌するのであった。

(四)

こう書いてくると長いが、実は君路達が討ち入ってから、お命の方の首級挙げるまでものの三十分とかからぬ短い時間であったのである。それは周到な計画の賜物であった。故に、報らせを受けた別棟の旭姫達が、急拠、駆けつけた時には、大事は既に去っていたの

である。しかし、義女達側から云うと、もう一足、彼等の来るのが遅ければ四人とも無事屋外に脱出が出来たかも知れなかった。それを果たさぬうちに不運にも、彼女等は新手の敵に囲まれたのである。

「後は妾が引きうけました。貴女方は首級を持って、落ち延びて下さい」

それと見て、若月がキツとなって言うのへ「死なば、もろとも——」

と利絵と園代が寄り添う。しかし、君路は小袖に包んだお命の方の首を抱えながら、「殿の愛妾を手に掛けた上は、妻達も生きて居れぬことは、かねてからの覚悟の上。しかし、こうして望みを果たした上は、逃がれるだけ逃がれて見ましょう。妾は、お命の方の首をとにかくも、お方様の墓前にお供えしたい。利絵様も園代様も、夫々首を持って逃げて下さい。死ぬのは、いよいよの時にでも出れます。あとは若月様をお願いして、では、さらば——」

と言いつ終わると身を翻えして旭姫達の来る方と反対の裏口へ走り出す。利絵と園代は、なおもためらったが、「我々の首領は君路様、君路様の言われる通りにするのです」

若月に励まされて、

「では、おさらば……」

と後髪を引かれる思いながら、君路の後を追う。

若月は今は思い残すところなしと、我から新手の敵の中に斬り込んで行く。

「遅かったか……」

旭姫は、無惨にも首を失って倒れている、お命の方の死骸の前に立ちすくんだが、

「憎っくき曲者達。それにしても、お命の方の首級だけでもとり返さでは、兄上に合わせる顔がない。そち達、曲者を一人たりとも逃がしてはなりませんぞ」

侍女達に下知すると、自ら長刀をとり直し若月を捨てて、君路を求めて追ってゆく。かくて一旦、静まった外屋邸に、再び剣戟の音が起り、四人の義女は四力所で乱斗を強いられた。お命の方の侍女達は戦意を喪失してしまっていたのだが、旭姫の侍女達は違う。お命の方の弔い合戦という意気込みがあった腕に覚えもあったが何よりも負けず嫌いな旭姫の気性が伝染していた。そこで功を争って四人をとり囲み、その勢いに力を得て、お命の方の侍女達も加わったから、さしもの若月等も、忽ち苦戦に陥った。

義女のうち、真っ先に花を散らしたのは、利絵であった。彼女は英の首級を小脇にかかえて片手で小太刀をふるっていたが、旭姫の侍女達は、ほとんど長刀をもって向かってきた。長刀は狭い屋内では使い難いので、それを見越して君路等は、わざと刀を使用したのである。実際、不意を打たれたお命の方の侍女達の中には、薙刀をふるった者もあったが鴨居に切り込んだり襖に当たって手元の狂ったところを義女達に乗せられた。しかし旭姫の侍女達は先刻、そのことを承知していたし屋内の戦にも習熟していた。見るまに手足や背に創を負った利絵は、英の首を投げ出して懸命に応戦したが、彼女の得意とする小太刀は特に長刀には不利である。もちろん身体が動けば、かえって屋内では有利も考えられがもう疲れていたし、心の張りもなかった。和歌と呼ぶ一人の侍女が踏み込んで斬りつけた刃先に左の優肩を斬られて、よろめくところを、さらに後ろから横車に胴を払われて、

「無念！」

と一声、クルクルと身体を二、三度まわして、パツタリと廊下に、うち倒れた。

和歌女が、その上にのしかかって、左手で長い利絵の黒髪をまき上げると、露わになっ

た白いうなじに、抜き放った懐剣の刃先をおしあて、手捌きもなまめかしく、遂にその美しい首を掻き落とした。そして、血のしたたる生首を高く掲げて、

「お命の方様を討った曲者を、この通り首に致しましたぞ」

と、声さわやかに名乗りを上げると、はじめてお命の方側から喜びの勝鬨が起こった。

「げえっ！ 利絵様が、ご最期！」

反対に義女達の受けたショックは大きかった。ことに、すぐ近くで戦っていた園代は、

「利絵様！」

と呼んで無意識にその方へ走り寄る。その前に立ちふさがった敵の侍女には目もくれず「邪魔しやるな」

ふり切って行こうとしたが、その敵が送った槍先があやまたず、滑らかな太腿を貫いたので、

「アッ」

と一旦は、はじかれたように倒れたが、刀を杖になおも利絵の死骸に近寄ろうとする。

その姿へ二度三度と槍の穂先が走ったが、もはや疲れと悲しみに錯乱した園代は、おのれを傷つけた敵に精神を集中する気力もなくひたすら利絵を求めて、

(もう少し、もう少し)

と、その方へ気がいつているうちに、遂に狙いすました槍先が、スーッと手元にのびてきて、今度はその若々しく張った下腹を、無惨にも深々と刺し貫いたから、

「アッ……」

と棒立ちになって、ブルブルと全身をふるわせる。しかし最後の気力をふり絞って、

「エッ」

とふり下ろした一刀が、見事に槍の柄をスパツと真中から斬り落とした。

「アッ」

はずみをくらった敵の侍女は、もんどり打って後ろへ倒れ、

「アア、助けてー」

と四つ這いになって逃げ出した。しかし園代の方も勢いあまり、タタツと前のめりになって、利絵の倒れているあたりへ突伏した。

「おう、利絵様、ここに居られましたか。園代も御一緒に……」

衣裳で、それと分かったのであろう。首のない、そのむくろへ左手を伸ばしたが、

「曲者、覚悟！」

と非情な敵は、先刻、槍を斬り折られた侍女と入れかわって、もっとも若く美しいのが

園代の背に馬乗りになると、左手に黒髪を掴んでグイと仰向かせ、そのくびれの深い顎の下に懐剣をあてがう。その皮膚に触れた冷たい感触に、

(ああ、妾も首をとられる)

そう思った時には、もう辺りは真暗になって、噴血とともに首は胴を離れて、敵の侍女の纖手に掴まれていた。

あわれ、健気に闘った義女園代も、花も薔の十六才を一期に悲壮な最期を遂げた。

「美香様を討った曲者を仕止めましたぞ」

同じ年頃の敵の美女は誇らかに園代の死首を衆にさし示す。

(園代様も討たれたか)

裏口まで逃げていた君路の耳にも、その声は届いて、逃げ足を釘付けにした。

(もはや逃がれられぬ。本望は達した以上、思い残すことはない。四人一所に死ぬまで、あくりの方様、お許しあれ)

念じ終わると、小袖に包んだままの、お命の方の首級を棚の上に乗せ、踵を返して、追ってくる旭姫の部下へ斬り込んでいったが、

「おう、君路。妾が相手じゃ」

スラリと、その前に立ち上がったのは、外ならぬ旭姫で、

「そなた、ようも忠義顔して人の邸に押し入り、お命の方を殺害し居ったな。所詮、法を破った大罪人、義姉上の仇。この旭姫が成敗してくれる。観念しや」

と得意の薙刀を斜めに構える。

「姫こそ、正室あくりの方様の御無念を知ってか！ いずれにせよ、よき敵、お手向かい致しまする」

わるびれもせず、そう言う、君路は最後の勇をふるって太刀を構え直す。

かくて美女同士、人も交えぬ一騎討の凄艶さに、ぐるりととり囲んだ侍女達も、しばしは打たれたように見入る。

「えいっ！」「とう！」

長刀と大刀とが烈しく打ち合ったが、君路の並々ならぬ腕前に、武芸自慢の旭姫も容易に討ち得ない。かくてはならぬと旭姫は、雨戸を押し放して庭へとび出る。やはり長刀を使うには屋外の方が有利であるからである。

夜はなお深く、雪はやんでいるが、あたりは一面の銀世界。君路も誘われて庭へ降り立ったが、その機に姫危しと見たか、三、四人の侍女が、ぐるりと彼女をとり囲んで烈しく斬りかかった。

「邪魔しやるなっ！」

叫んだのは旭姫の方であつたが、君路の方は応戦しないわけにはいかない。白刃がもつれ、影が入り乱れて、二人の侍女が雪中に斬り倒されたが、君路も横髪を薙がれて滴る血が雪を紅く染めた。

旭姫も今は必死に斬り込む。手傷の痛みをこらえながら、わたり合う君路。しかし何といつても旭姫は新手なのにひきかえ、君路は先刻からの激斗の疲労が著しい。

(殿の妹であるこの姫に一言、真実を知らしておきたい。そのためには、この勝負、勝つてからでなくては効果がうすい……)

そう思って心ははやるのだが、身体がついていかない。次第に長い得物にあしらわれて退るだけの態勢にいらだつた君路が、懸命に盛り返そうとするその無理を、充分見定めた旭姫が、

「えいっ」

サツと薙刀の石突きを返しての一閃が、あわれ義女の足を見事に払ったので、その長身はあられもなく一転して、どっと柔らかな雪の上に落ちた。侍女達の歓声をうしろに、すかさずふり上げられた第二撃の下、一世の美女も唐竹割になったかと見た瞬間、

「あっ、待って」

と手を上げて制止したのは君路で、

「この期に及んで卑怯な！」

と旭姫が柳眉を上げるのへ、

「この勝負は妾の負け。この上、お手向かい
は致しませぬ。ただ妾も今宵、討ち入りの首
領。武士の情けに生害をお許し下さいませ」

と大刀を投げ出し、冷たい雪の中に端座し
て、おもむろに両肌をおし拡げて、その雪よ
りも白い肌を露わにする。

「腹を切るといいやるか？」

さすがにおどろいて目を見張る旭姫。その
顔を見上げながら、懐剣を逆手に抜き放った
君路は、

「旭姫様。臨終の君路の一言、ようお聞きな
されませ。お命の方と、あくりの方様と、い
ずれがお家を思うての仕打ちであったか、殿
のなされ方が正しいか、間違つて居られたか
姫様は御存じありますまいが、家中には憂え
て居る若侍も沢山ござります。妾のただ今の
生害は、本望を遂げての切腹。しかし、あく
りの方様は、如何にお家の行末を案じ、御無
念のまま切腹して果てられたか。その故にこ
そ、今宵われら四人、死を賭して、そのお恨
みをそそぎにまいりましたこと、よう心にお
とどめ下さいませ」

忠女の一言、鋭く旭姫の肺腑をえぐって

て、あたりの侍女に向かって、

「方々も、運つきて腹を切らるる時の手本と
されよ。さらば、御免！」

と未練気もなくグサツと左の脇腹につき立
てる。

「おのれ、ひかれ者の小唄！」

と中には、いきり立つ侍女もいたが、懐剣
がキリキリと引き廻されて、流れる血潮が雪
を赤く染めると、あまりの壮絶さに皆、息を
のんで立ちすくむ。

「ウム、さすがは君路じゃ。妾みずから介錯
してとらせよう」

旭姫も感に堪えて、おのれの長刀を傍らの
侍女に渡して、代りに大刀をうけとると君路
の背後に回る。

「……」

もう声が出せず、ニッコリと旭姫をふり仰
いだが、そのまま白く長いうなじをさしのべ
る。

「エイッ！」

烈しい気合とともに、振り下ろされた一刀
は、ねらいあやまたず細頸を切断して、パッ
と飛ぶ血しぶきとともに、観音像のそのよ
うに美しい君路の首が、雪中に落ちた。

(五)

急を聞いて忠広が近習とともに柵屋に戻っ
て来たのは、その頃であった。忠広は愛妾の
死に怒るよりは呆然となったが、侍達はすぐ
さま残る若月をおっとり囲んだ。さしも腕自
慢の旭姫の侍女達も、若月の死をきわめた烈
剣のまえに避易していたところで、ホツとし
て入れ代った。若月は、なおも阿修羅の如く
荒れて

「殿に申すことあり！」

と男達をも、斬り靡いて突き進んだが、そ
の時

「今宵の曲者共の首魁、中山君路を只今、旭
姫が討ちとったり」

と叫ぶ旭姫の澄んだ声がひびいて来たので
(今はこれまで)

と若月も観念し、我から顔見知りの若侍の
手に討たれんとしたが、その相手は彼女の刀
を奪って縄を掛けようとする。

「武士の情じゃ、首討って……」

と身もだえる若月の耳に口を寄せて
「死ぬのはいつでも死ねる。苦しかろうが、
一旦捕虜となつて、事の次第を逐一、殿に申
し上げるのじゃ」

となだめ、遂に彼女は縄目のまま忠広の前に引き出された。

惨劇の終わった大広間の煌々たる灯の下で忠広の前に並べられた君路、利絵、園代、三つの首を見て、あまりに変わり果てたさまに「君路様！ 利絵様！」

と、しばしは身も世もあらずに泣き伏した若月だったが、そこは烈女。キッと顔を上げると、おめず臆せず、あくりの方の非業の最期から、八並一派の陰謀の一部始終を、切々と訴える。八並方の侍達が騒然となって、その言を阻み、即刻処刑を迫ったが、忠広は無言。このような壮挙を見ては、井上派ならずとも義女に同情が集まるのは当然の上、旭姫

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下さい。電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

までが忠広の不明を詰る有様に、形勢は逆転井上、八並両家老の対決を待って、罪を決することとなりひとまずその身柄は、罪人の形で中立派の藤田主殿之介の許に預けられた。

「対決の結果、我々が敗れた場合には、もはや若月に手を下すことは出来ぬ。そうって一大事……」

「いや、こうなっては形勢は我に非だ。対決の前に若月を討ってしまったわねば」

八並一派の陰謀は進んで、

「その役、妾が引き受けましょう」

と申し出たのは、小百合と呼ぶ二十に満たぬ美少女。八並備前の一族で、お命の方にもゆかりのある者であった。

（藤田家の見張りは厳重。男衆では見咎められましようが、女ならば油断して忍び込む隙がありました）

（しかし、若月は並々ならぬ腕利き。そなたの細腕で討ち得るかじゃ）

（罪人の若月、武器の携帯は許されて居りませぬ。忍び込みさえすれば……）

そのような恐ろしい企みがあるとは、つゆ知らず、あくりの方および三人の僚友の後生を祈るのに、ひたすらであった若月は、一夜突如、小百合の襲撃を受けたのである。

「おのれ、あくまで卑怯な八並一味。殿にお預けしてある妾の命。滅多に、そなた如きに渡されぬ」

その一念から、初太刀を肩に受けながらも若月は必死に抵抗した。そうなると素手とはいえ、小百合如き手弱女に討てる相手ではない。しばし格闘の末、小百合を組み伏せた若月は、その懐剣を奪って逆に刺そうとする。あわやと見えたが、少女ながらも不敵な小百合は第二の手段を用意していた。今一人、端女を連れ、万一の時のために部屋の外に待機させていたのである。彼女は小百合危うしと見るや、背後から若月に組みつき、不意を打たれて自由を失ったところをすかさず下から突き上げた一刀に、下腹部を深々と刺し通されて、さしもの勇婦もたまり得ず、

「無念！」

の一声を残し、あえなくその美首を一少女の手で掻き落とされたのであった。

小百合は、若月の首級を抱えて無事脱出したので、八並方は一時、凱歌を挙げたが、やがて井上方の報復となって事件は拡大し、義女達の願いもむなしく、忠広は蟄居を命ぜられ名家加藤が断絶したのは、その年の六月のことであった。

（おわり）



周期的な耽溺の世界 片倉 茂

満員電車に揺られて市内のオフィス街に通勤する一見平凡なサラリーマンは現在の私の姿である。

時には冒険心にかられたり自由気ままに奔放な旅行をしてみたいと思うことがあるが、家にいる年老いた両親や恋愛結婚した妻、悪戯盛りの子供のことを考えると、そういった私の邪念も泡雪のように融けてしまう。そして少しでも残業手当を増やそうと、用もないのにカマボコのようにデスクにへばりついて時間をつぶす。

しかし、今の私にとって周期的に襲ってくる耽溺の誘惑の方が恐ろしい。この世の中の現象は森羅万象すべて一定の波動によって動いている。春夏秋冬の四季の移り変わりは勿論のこと、人間の鼓動

や電波光波に至るまで、あらゆるものがリズムに従っている。

私に訪れる周期的な耽溺の心も女性に於ける生理のように、一定のリズムによって私を支配しているようにも思える。そんな兆候が起り始めると私はそわそわとして落着かない。丁度発情期の牡犬のように、そこらあたりをうろつきまわりたくなる。といって私は妻子のあるれっきとした紳士である。未婚の者のように決してセックスに飢えているというのではない。にも拘らず、私は或る周期がくると自分でも浅間しいと思うくらいハレンチな衝動が全身をさいなみだすのである。

それは時にはSのどろどろとした食欲な欲求であったり、空想と

しても、とてつもないMの責地獄であったり或いは美女の下着に包まれた甘美な花園であったり、自分でもその広範囲なものには驚くくらいであった。しかし、その嵐のような一過性が去ると、あとはオコリの落ちたように平静にかえり私は再び平凡なサラリーマンに立ちかえるのである。

二重人格者ではないかと悩んだこともあったし、またその衝動の赴くまま場末の雑踏に身をゆだねたこともあったが、いつも空しい虚無感に襲われるのが落ちであった。所詮実行に移して満足の得られる内容のものではなかった。

妻子を残して蒸発する亭主の記事なんかを読むと自分の腹の底を見すかされたようでドキリとする時がある。自分もそんなことになるのではないかという恐怖観念が私をおびやかす時がある。こんな私の心の悩みを会社の同僚だっ誰一人知らないだろうし、妻だっで知らない。

雑誌なんかを読んで自分の気をまぎらわしているときはいい。どうしても実行してみたい、自分の手でじかに味わってみたいという強い欲求が起ったときは自分でも制しきれず恐ろしい気がする。

電車の窓から眺めた物干台にひるがえる女の下着を見て、生温かい若い女の下着を手に入れてみたという矢も盾もたまらない衝動に責めさいなまれることがある。しかし、辛くも私の理性がそれを押し止め一過性の生理現象が擦過するのを待つのである。

この様に異常な耽溺の世界にとっぷりと浸ってみたいという強い気持が周期的に起こってくるのは私一人だけの現象なのだろうか。それとも私と同じような発作を経験している人たちも他にいるのだろうか。新聞、雑誌、単行本などを注意して見ているのだが、まだそういう体験者の記事は見ない。

今、こんな手紙を書き出している私は、平凡でありふれたサラリーマンでないかもしれない。心の底のどこかで毎日同じことの繰り返し返えしである型通りの判で押したような生活に退屈した反逆心がある。でもぞと動きだしたのか、平常考えもしない突飛な空想が湧き起ってくる。その空想を実行に移し、十分耽溺してみたいという悪魔のような淫らな心が激しい葛藤を演じているのを、私は第三者として冷ややかに眺めているのである。



「鞭責め」 志羽利也

私のイメージ画

「水責め」 堀 真彦



M の 理 解 者

中 河 恵 子



昨年の九月から書きかけては破り書きかけては破りして、前後三回にわたって原稿用紙に取り組んだのですが、とうとう書けずじまいになってしまいました。

あれほど文章を書くのが好きで自信もあった私ですが、書くことが余りにも多く、またそれだけにまとまりがつかなくて、どうしても途中でペンを投げすててしまう

のです。縛られることに異常な関心を持ち、羞かしめられたいと常日頃願っている私。あられもなく妊娠した不恰好な裸身さえ、人に見られたいとカメラの前に晒した私の心情。

こうした女を妻に持った男性はひとときも気の安まることはないのではないかと気の毒になったりしますが、やはり私の最大のMの理解者は夫だと思っています。その夫が最近、私にいじめて欲しいと言いだして戸惑っています。

祖父がどうしても、こちらへ来て暮らせというので親娘三人、国へ帰って半ば定住の形です。孫娘の私を手元へ置きたい祖父が屋敷の敷地内にプレハブながら近代的

な新居を建ててくれましたので夫も祖父の事業を手伝っています。昨年の春、娘の手も放れましたので祖父にねだって新車を買ってもらいました。箱根や伊豆一周のコースは何度も走りましたが、この間は名古屋へ出たついでに名神で大津へ出て、実家で一泊し、翌日は神戸まで走らせましたが、西宮インターチェンジを出てから三宮まで道路工事でいらいらさせられました。

それでも久しぶりに神戸の明るい街並を見ることが出来て、すかつとしました。神戸訪問と私の浮気のことなどまた次の機会に書いてみようと思います。



—〈第七十回〉—

辻 村 隆

万国博が近づくにつれて、拙宅に宿を求める夫婦プレイの同好者の連絡もあって、いっそのこの機会に、我が家の一堂に会して、お祭り騒ぎをやってみようという計画が着々と進んでいる。和歌山の新宮夫妻、岐阜の水野夫妻、京都の徳永夫妻、滋賀の石田夫妻など、四組から五組ぐらい集まって、夜もすがらSMプレイに耽溺出来たら、惑溺の佳興に過ぎるものはないと、万国博をダシにして、大いにハッスルしている。そうなれば勿論、愚妻も一枚加わらねばな

らないので、折あるごとに口説いているが、その口説きが、私のSの心を刺激して、時には思いがけない新鮮なハプニングの夜もあって結構、愉しい。

万国博のような行事がなければ仲々こういう機会もないので、同好者諸氏にとっては、或いは博覧会の見学より、その方が本命になるのではなからうか。友あり遠方より来たる、亦愉しからず哉」と、そんな期待が、私の胸を疼かせるのである。

各夫婦は、酒宴の席ですべて全裸になり、興いたれば、SMプレイを開始する。年令、地位などを超越して、同好という絆で結ばれた夫婦の群が、部屋狭しと乱れる夜を想像すると、この夜のハントを書く愉しさに、私の胸は弾みに弾むのである。実現出来るだろうかと危惧する前に、実現させたい気持ちしきりである。

二月号の読者通信に緊縛のSMプレイを希望されていた、神戸の伊藤圭子さんの、かなりM願望の強い回送手紙を受取る。生憎と二女の結婚近く、未だ返事を出してないが、その気になれば、すぐにでも実現出来る可能性がある女

性である。

編集部の話では、相当熱心で、私がダメなら、適当なS男性を紹介して欲しいというので、神戸に近い、飾磨の「S強烈生」を紹介したらしいが、余りうまくゆかなかったようである。三十五才の会社員、S強烈生が、SMのプレイよりも、逸早くセックスに走りたがって、彼が撮ったというフोटも、初の体験ですっかりアガったのか全部ダメで、伊藤圭子さんは不満の手記を、寄せられたということである。SMプレイといっても、一対一で、密室でプレイすれば、当然それは前戯のようなもので、無理もないと思うが、彼女にしては、もっとSMに耽溺したかったようである。控えめな彼女の手紙であるが、その奥に、M願望の切実さが秘められているように思えた。いずれ近いうちに、是非逢ってみたい人である。

昨年末の二十三日頃、秋山美智夫氏より年賀状が届き、私を苦笑させた。青森県八戸市のキャパレ1富士より十二月十七日に投函しているのだが、普通葉書なので元旦より一週間以上も早く到着したのである。みちのくの果てでフロ

アショウをやっておられるからこゝ当分は会えそうにないと思っていたら、一月末、ひょっこり夫妻が訪問され、11PM以来のつもり話をとりかわした。大阪在住の秋山夫人の姉さんの旦那が、交通事故を起こしたので縋りつかれ、己むなく公演を中止して、急拠上阪し、何かと事後処理を、義兄に代わって相談にのり、奔走しているとのことであった。一番稼ぎ時の一月公演はその為にキャンセルし義兄の交通事故の処理も曙光がみえたので、二月一日より、おなじみ大阪ミナトの、ダイコーミュージックで公演される予定。引続き東大阪市フセのコーセイ劇場の公演がきまっている。

SM談たけなわになって、夫妻は今にもプレイしそうな気配であったが、嫁入り道具が部屋一杯の離れ家を使う術もなく、日を改めざるを得なかった。彼等の秘談、芸談は、いずれ秋山夫妻のカメラハントで又書くつもりであるが、並々ならぬ意欲に、敬服の外はなかった。

長女と二女の結婚が、四カ月半ばかりの間隔をおいて、バタバタときまったため、慌しい毎日が続

き、一月下旬、箕田氏夫妻がわざわざ来られて、度重なるお祝いに大恐縮である。九月には長井葉津子さんを同行して来られたが、この度は奥さんで、余り立入った話も出来ない。彼の台湾みやげなど頂戴し、四方山話のうちに、二時間許り、あっという間に過ぎてしまった。勿論SMに理解のある奥様のことだから、コトその方に話が進んでも、黙って笑っていらっしやるが、不徳なハナシは余り出来ない。

滋賀県近江八幡市の、石田夫妻が、私に非常に会いたがっているというので、石田夫人は肥満タイプである。一度是非プレイの生々しいフオトを撮って欲しいと仰有っているという。石田氏は公務員で、お家は半農の旧家――。

水野夫人、徳永夫人以外、余り肥満タイプの人を撮ったことのない私であるが、偶にはそれもよからうと快諾する。石田氏はDPEが出来ぬし、カメラもどちらかというと不器用な方なので、SMフオトを大いに私に期待しているらしい箕田氏の口吻であった。或いは近日ハントに登場するかも知れない。あの夫婦、この女性と、私の虚名がいつとはなく、役に立っ

ていることをしみじみ感じる昨今である。

× × ×
その時の箕田氏の話では、モデル志望女性に、非常に東京在住の女性が多いといっておられたが、新幹線で走れば三時間そこそこでも、万一スッポかされた場合を考えると、何となく憶劫になるというのであった。

反面、僚誌の風奇誌には、これ又対照的に大阪や、関西の女性が多く、やはり近辺を避けようとする女性の、ひょっとして知られては、という秘密心理からであろうか。いつか編集長会議の折、奇くと風奇のモデル女性の交換提案を出してみてもという箕田氏の案であるが、私も賛成である。

昨年、つい行けぬ俚、箕田氏が折角紹介してくれた東京在住の女性数人を、私の一存で、東京の同好の人に紹介したが、いずれもその俚になつてしまった。風の噂にきけば、愛人にしてしまって、大いに独りSMを愉しみ、性愛衆に及ぼさないで、これでは紹介の意味もない。気が合えば、愛人関係に陥る気持も分からなくはないが私のハントしようとする意志は全く無視されている有様である。

一応東京の同好者に飼育してもらって、お膳立ての出来たところで、上京しようとしていた私の考えは水泡に帰し、それも或いは虫がよすぎるのかと自省もしているが、トンと音沙汰なしになつてはかえって友好の仲にヒビも入るので、やはりこれから一匹狼で、コツコツ開拓してゆくより仕方ないと思つてゐる。

新幹線の交通費さえ払えば、出てきてくれるかも知れないが、やはり女性にとつても、一泊はせねばならぬ家庭の事情が、いざとなれば来阪をためらわせるのであるうか。

箕田氏もいっておられたが、余りの熱望について紹介すると、その人達は、対象の女性をどうしても独占したくなるらしく、反ってマインナスになる場合が多いようで、その気持は分かるとしても、それでは編集部なり奇クにとつて、ただ仲介の労をとるだけで、何らプラスにならないわけで、わざわざ手紙を書き、連絡して、一男性に独り占めされるのなら、得にもならぬことは止めておこう、ということになるらしい。

なかには散々やいやいっておき乍ら、一旦女性と連絡がとれる

と、あとは梨の礫。礼状一枚よこさぬひどい方もあるらしく、それなら、ハントを書いて、幾分でも奇クに貢献している私にでも紹介した方がましということになるらしい。全部が全部ではないが、中には心当たりのある方もある筈。十五円切手一枚と便箋だけで、こうした、志望モデルなり、読者通信女性を、獲得しようとするのは、一寸虫のいいハナシである。そうじゃありませんか。

× × ×
そろそろオジイちゃんになる私に代わって、ハントを書かれる方ありとすれば、いつでも潔ぎよく交替する気でおります。

× × ×
過日、東映の石井カントクさんと、掛札昌裕シナリオ氏の外二人の計四人が、撮影の合間に、ひょっこり私宅を訪問された。珍客の来訪に、コレクションの相当強烈なのを開陳したら、物に動じぬカントクさんも流石に驚嘆されていした。現在は、やくざものを撮っておられるが、こうしたSMものにも手を染められる時は、又、協力させていただくことを約して、その夕方別れたが、東映の性愛路線もどうやらピリオドをうったようである。

プレイを
して下さい

佐野みさ子

今年二十八才になるM女です。もちろん独身ではありません。

一年ほど前から、奇クは読んでおりますが、主人には、ぜんぜんSMにたいする興味はないらしく、Mにあこがれる私にとってはものたりないばかりでなく、欲求不満がだんだんつのつてくるような私自身の気持を、もてあましている今日の頃です。

カメラ・ハントで、辻村さんのモデルをつとめる女性を、うらやましく思うこともたびたびです。でも、関西まで行くことは、主人のある身ではなかなか出来にくいことです。

そこで私は少し冒険をしてしまいました。主人には済まないと思ったのですが、横浜で、責めのピンク映画を上映している映画館から出てきた中年の紳士をハント？



したのです。近くの温泉マークでうつしてもらったのが、この写真です。



その紳士は、ロープやストロボ付きのカメラまで用意しての私の願いには、少しびっくりなさったようでしたが、「一度、SMプレイがしてみたかったが、相手がなくて出来なかった」といって、ころよく応じてくださったのでした。感激の二時間でした。

男と女が、一対一でハダカになってプレイするのですから、たとえ実際にはセックス関係がなくても、他人が聞けば、信じてはくれないでしょう。考えてみれば、きけんなことをしたと思います。もちろん、主人には絶対に知られてはならない体験でした。

半ば夢をみているような、何か自分が自分でないみたいな二時間

でしたが、縛られるということにいつもあこがれていただけに素肌に感じるロープは、ひそかに一人で巻きつけてみた時のものとは、ぜんぜん違

い、日がたつにつれてその感覚がよけいに強く思い出されてきて困るほどです。

私のプライバシーをかたく守って下さる方で、プレイの相手をしてやろうというお方を望むのは、自分勝手な考えかたでしょうか。若い人でも中年の人でもかまいませんし、肌に跡が残らなければどんなプレイでもかまわないと思っていますのですけれど……。

面白く楽しめるSMプレイのプランをおきかせ下さい。



人妻讃歌

川 栄 一

昔から「よその嫁はん」という関西弁が有る。これほど、若妻に対する男達の羨望をまろやかに包んだ言葉はないと思うが、大昔から好事家にとっては「よその嫁はん」は処女以上に垂涎的だったわけである。

人妻の美という観点を、無理に一応おあずけにしておいて、別の考えを押し進めてみても、裸に剥いて衆目に晒し、羞恥責め等の加虐を与えるということは、最高のSMの素材となる。何故なら、アプの中に耽美を求める我々の異次元の世界は、社会生活に内在する大矛盾である法規範というおぞましい抑圧によって、大昔から人間の心の深部に凝結され続けてきた鬱結を吐き出す快感を伴うことを要求しているからである。

しかし、SMをここで大義名分化してみてもはじまらない。話を元に戻すならば人妻のある種の羞恥と怖れを内在させた裸身ほどの耽美は、他にないという言葉に尽きる。

安井喜久子夫人、村田ゆう子夫

人、幸崎、宮前等の読者諸兄の愛妻、飯田カオル夫人、金原奈加子夫人等々、奇ク誌によって、私は妖艶な人妻を鑑賞できたことを喜び、奇クに感謝していたが、またまた、2月号に於いて新しき鑑賞妻の川路叢子夫人と、読者の井上氏の若妻に接し、その慶びをあらたにした。ヌードだけを鑑賞するのなら、わざわざ人妻を選ばずとも美しいヌードは幾らでもある。私の求めるのは、モデルの被虐感と羞恥心から、おのずから生ずるしみ出るような美態なのである。勿論、娘達にも羞恥心はある。しかし、人妻の羞恥心とは異質のものであり、美の神秘さは人妻によって極まると思う。

更に人妻達に内在する美の根源を曳き出すための姿態を強要することによって、彼女達は美の究極を露呈し、女の美の概念を拡大せしめる。女の裸体は今、なお、低俗なものとされ易いが、私は女の裸体を通じて、心の奥底より滲み出る美的なものを求めている。妊婦の恥じらいしかり、白い陶器に

かがむ人妻の羞恥の悶えしかりである。

西欧で私はすべてを露わにした芸術フォトを鑑賞したが、その女の美しさとは、あらわな部分にはあらず、それが写されているという女の感受性の滲み出た雰囲気にあった。即ちすべてを鑑賞されるということの意識に羞恥が生じ、耽美な極限を呈示していたのである。惜しむらく、我国では女のすべてを撮ることは許されない。人

妻の美価値を見出すためには絶対に必要だと云いたいだが、許されぬ限り、観念的な作品に美を求めるより他はない。そこに縄があり、浣腸が存在する。人妻を通じて、女の未だ見出されていない美しさを導き出し、近世の自由を表現謳歌したい。美女の緊縛体に迫るガラスの管、大型犬、唸るパイプ、異常な羞恥に震える若妻達は、必ずや真の女の美しさを見せてくれるに違いない。



イメージ画 『獲物』 小川茂正

「S M プレイ」への反省

伊藤 藤 圭 子

お忙しい折柄、わざわざ私のためにS紳士をご紹介下さいまして有難くお礼申し上げます。

S強烈生様は、私の予想と反しまして、意外に若い方で、三十才過ぎの妻帯者の方でした。

飾磨市から、私の住むマンションの近くまで、わざわざ車でお迎えに来られ、芦有道路をのぼって有馬へまいりました。

テレビスターの山田吾一さんによく似た方で、テンポもテキパキして、ドライブは快適で、この方なら将来もおつきあい出来ると、内心喜んでいたのですが……。

有馬の一流旅館に休憩しまして色々お話して、いよいよ私の初体験となったのですが、正直いって何となくギコチなく、ロープも僅か一本しか持参せず、物足りなく思いました。マンションでの独り住居の夜、奇クを読みふけりながら、あれこれと楽しいプレイを想像していた私の夢は無惨にも崩れたのです。S強烈生様は、ホンのかたちばかりにカメラをおとりになると、数枚もうつまぬうちに投

げ出されて、かんたんに後手に手首だけで縛った半裸の私に、いきなり息をはずませて挑んでくれたのです。それは、私の抱いていた不安の最大のものでありましたが、やはり、世の男性と何ら変わらないうと、この瞬間、S強烈生様が急に醜く見えました。

シュミーズをつけ、パンティもそのままの私でしたが、あの方は性急に、私を裸体にしようとなさいます。既にセックスの初体験のあった私ですが、こうした愛情のともなわぬ、しかも被虐におちいらない私の体を求めようとするのは、プレイヤーにとっては邪道のように思えました。私のMの心を十分に満足させていただけたら、案外素直な気持で、その気になつて燃えたかも知れませんが、猪突猛進は、ただ女である私という人間の体を求める、卑しい、単なるオトコに過ぎないように思えました。このままではどうにもならないので、私は抵抗をやめて静かになり、痛いから後手の縄をといてくれるよう、さりげなく申しまし

た。

野獣になった彼は、それでも、あっさりと縄をとくと、再び私を抱きしめてきたのです。もう私の心はすっかり冷えていました。肉体を求めるだけで、何らS紳士的なところのない彼に、あっさり体を許すことは私のプライドが許しませんでした。奇クの読者通信で呼びかけた私の真意は、無ざんに踏みくだかれた思いです。

強い彼の手をそっと振り解き、私はトイレに行きたいといひまして立ち上り、そのままお手洗いにかけこむと、しばらくは出てゆきませんでした。

ノメノメと出てきた私自身の、バカげた心が情けなくなり、その時、会社のUさんや、Kさんの、



…… イメージ画 ……

「可憐」 神戸・狂四郎

私に求愛する二つの顔がフト浮かんできました。こんな素性の分からぬ人に抱かれるくらいなら、UやKに抱かれた方が、ずっと楽しいでしょう。

辻村先生なら、きっとこんな野暮なこととはなさらないだろうとフト考え、先生に編集部気付でお便り出してあるのに、一向にお返事のないことを独り恨む私でした。多分お忙しいか、それとも私なんかに興味ないのかしらと、いろいろと考えるうち、段々と自分の心が淋しくなり、トイレより出ますと、さっと脱いでいた服を身につけ始めました。

彼はびっくりしたようです。しきりに何か弁解めいたことをおっしゃいましたが、冷えた私の心に



奈津子の近況

浅田 守

筆をとるのが大分遅れました。年末に急に海外出張を命ぜられ、その準備や報告等で忙しく彼女と会う時間もなくて内心残念でした。只フランスでは念願の品物を手に入れることが出来、帰国後、早速使用に及びましたが若い彼女にはまだまだ、無理のようでした。

扱て、奈津子とのプレイも毎度のように縛りと撮影をするため、彼女も私の悪趣味と思い、あきらめて協力するようになりました。只私の縛り方が未熟のため貴誌の写真等を参考にしながら研究するのですが、なかなかうまくゆきません。狭いホテルの一室ではなく、山や海、掘立小屋等での奈津子の若い体を思いきりいじめてみようと思います。が、実現は不可能に近いでしょう。

同封の写真は最近のカメラハントの勇にならって彼女の肉体の秘密まで写してあります。が御自由にカットして下さい。只、やはり顔を写したものは誌上に発表する勇氣はありません。

奈津子は体の発達割には童顔で九重祐三子タイプです。一度彼女にセーラー服を着せて責めたらと夢みています。国川栄一氏の提案も読み、半ば共鳴しますが彼女の事を思うと、そこまでする気になれません。しかし年令の図々しさであえて浅田守として今後も密かなプレイを報告します。

は、その言葉の一つ一つがワザとらしく聞えて、もう返事をする気にもなれず、一寸一礼してさっさと部屋を出ました。こんな私を意地悪い女とお考えでしょうか。

私にもSMのプレイは、前戯的なものだという観念は知っております。その前戯すらロクロク出来ず、矢たらに私の体目当てでもう何をか云わんやです。

独りぼっちで下山するバスに揺られていきますと、無精に泣きたいような気持ちになります。

皆が皆そんな方ばかりではないと思いますし、勿論、私に返信して下さった方の中には、十分に私のMの願望をみたしてくれる方もあると思います。運がわるいといえはそれまでですが、やはり女だてらに、こんな通信を書いた私自身、馬鹿だったのかも知れません。こうしたことを申し上げても、編集部の方を恨む気持ちは毛頭ありませんから、その点誤解しないで下さい。

何かコリゴリした気持の反面辻村先生なら、私をどうしようよになさるか、すぐそのあとからそんな甘い考えを抱く私です。

S強烈生様——、私がこんなことを書きましたからといって、あ

の時の、貴男様の、逸り立ったお心や行動を憎む気持はございません。男性というものは、時にのぞんだら、誰でも、ああいう風になるものだと、気分が落付いたら感じるようになったからです。

でも、昔から（せいてはことを仕損じる）というではありませんか——。始めてお目にかかり、いそいそとして、内心好意を感じた貴男様に、もっといたわりと、そして楽しいフンイキのプレイを期待していただけに、ガッカリしたのです。悪女の雑言とお叱りにならないで下さい。二度にわたってお手紙をいただきながら、内容もみずに破り捨てた私の失礼をお許し下さい。私にとって、S強烈生様はもう単なる「路傍の人」に過ぎないからでございます。

はしたないこの様な告白を長々と書きつらねまして御免下さい。そのくせ今も、心の中はうずき、Mの刺激を求めて、夜もすがら転々ハンソクする私です。辻村先生によろしくお伝え下さいませ。いつまでもお返事お待ち申しております私をお忘れなく——。

奇巧の御発展を心よりお祈り致します。

読者通信について思う

大西弘明

小生の拙文を、おとりあげ下さり、先輩諸兄には赤面の至りながらも、何か仲間入りの許可を戴いたかの如き歓びを憶え、厚顔にも再度筆をとる次第です。

読者通信はいつも楽しみにしておりますが、最近、誰々様、何々子様とご指名の呼びかけが多くなり、間口が狭くなったように思われてなりません。終局的には同じことかも知れませんが、第三者の這入り込む隙が無いように感じられ、従来のあの温かな愛読者全員の、ほのぼのと暖めるが如き雰囲気失われてしまいそうで、悲しんでおります。

もっと広義な意味での呼びかけや、感想を始めとし、短い告白体験談、願望、提案、それに同好者情報交歓の場として盛りたて、愛読者全員が自分の場と思って愉しめるものが欲しいものです。

この意味に於きまして、女性上位時代らしく、積極的な淑女諸嬢の投稿の増加は歓ばしい現象であると同時に、男性マニヤの夢を助長してくれるものであると云いた

いのですが、これに付随して名指しの呼びかけが増加するのは困りものです。まして、これに対する女性の応答が名指しでは言語に絶する嫌悪に耐えかねます。

大体、女性は男性の視覚に対応する露出感覚の妙なる悦びを持つている者が多く、これを文章の上で吐露し、その被虐に没頭して、露出自虐的快感に浮身をやつす傾向にあるようですが、これはマニヤにとって、通信文として非常に共通の欲びである価値を見出す素材でありますから、皆さんで迎えるべきだと思えます。

だからこそ、個人に対する呼びかけが存在するのだと、反論されるむきも多いかと存じますが、個々に名を呼びあったところ、当然徒勞に終わるのが大半であり所詮果かない夢に終止符を見出すのが奇巧の良識かと思えます。

それなら男性マニヤも女性一般に対し、個人の名を挙げて讚美しつつ、彼女を始めとするマゾ女性サド女性の心を捕えて離さない程の感想、願望、体験や提案を列挙

して、広汎な偽らざる心情を呼びかけた方が、それがSM的感情オナニズムに墮そうとも、マニヤとしては有意義かと信じます。男女を通じ、必要欠くべからざることは、この場合も自己本来の洞察に根をおろした願望であり且つ、最も重要なことは、真情あふれる体験告白を基礎とした呼びかけかと思えます。

鏡が友達でトロロを愛好すると云う小杉嬢、イチジク専門の緒方君子嬢、除毛に酔う藤田春枝、パットを送った春川さと子嬢、ゴムマニヤの梅川幸子、複数プレーを願望する川村順子夫人等々、百花満開。通信欄に、名指ししたくなるは人情ではあるが、あえて個人的交信の場とせず、広い視野に立脚して、楽しい場と発展させて戴きたいと思えます。

男は視覚を、女は露出を、例えば女は深酔を粧って二人でトイレへ、個室の中で露出曲を奏で、男はそれを鑑賞する。いと易き現象です。この様な雰囲気奇巧読者通信を作りたい。介抱する、されるふりしてのみそかごと。愉しき通信欄と化すと信じ、あえて駄弁を弄する真情に免じて、この罪深き批評をお許し下さい。

編集部だより

○三月号の発売が三日ばかり遅延しました為、ファンの方に大変気をもたせたことは恐縮でした。殊に直接購読者の方からは督促を貰ったりしてお手数をかけました。

○今まで定日発行を厳守するよう努力してきましただけに申し訳なく思っています。十二月二十三日に八花と蛇V百枚と八鬼六談義V十五枚を確実に入手出来るところで予定で進行させていましたところ種々の事情で八花と蛇V二十五枚を入手したのが、一月上旬になつてしまいました。印刷、製本の過程でスピードアップして貰いましたが結局遅れてしまいました。

○八鬼六談義Vに書かれていた通り、今年は団先生も執筆の方で頑張つて下さるそうなので大いに八花と蛇Vの華麗な展開を期待しましょう。尚、寄稿家執筆の方にお願ひしたいのですが原稿の締切は毎月十五日ですのでお含みおき頂きたいと思えます。

○本誌二月号のカメラハント「あつと驚く人妻の豹変」で初登場した川路叢子さんの素晴らしい縛り写

S M 短歌

縦 縄

小林美智子

諦めのまつげを伏せて両の手を
後ろに回し彼の手を待つ

○ 柔肌の脂を吸いし綿ロープ今後
手に我をくくりぬ

○ なにゆえに裸にされて掛けられ
る縄目は我を奈落に落とす

○ 二度みたび地獄の縄目しぼられ
て円くふくらむ白き双丘

○ もだえても悪魔の縄目ふかぶか
と尻の割目に喰い込んでゆく

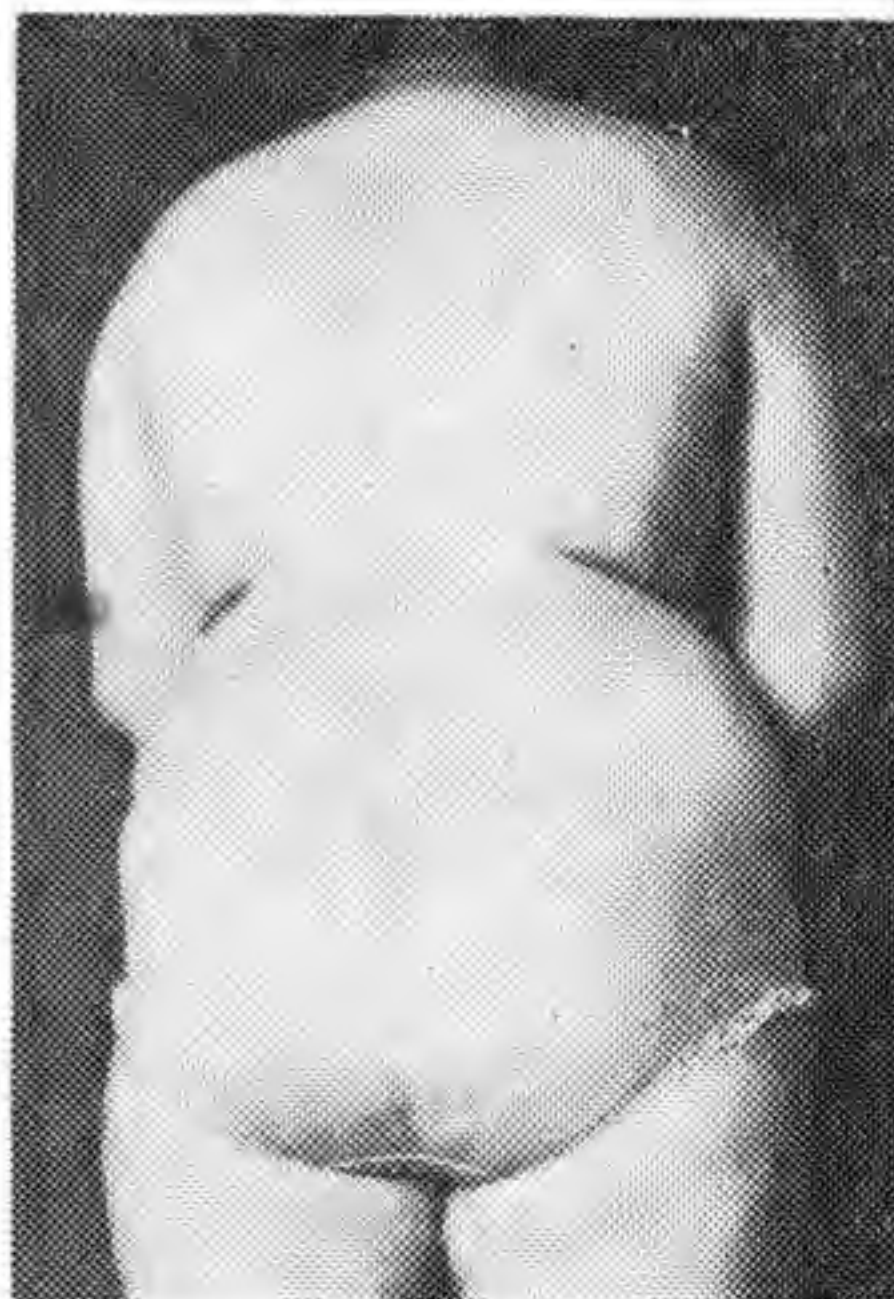
○ 足指をくの字に曲げて耐えてい
る全裸の肌に掛かるたて縄

○ とげとげの縄目痛しも縦縄がじ
わりじわりと肌に喰い込む

○ 悲鳴さえ夜のとばりに消えてゆ
く股間縛りのまま捨てられて

○ ゆくりなく息をついたる目の先
にパチンコの玉ころげていたり

豚妻短信 赤畑修造



高浜氏には、お呼びかけをいた
だきながらお答えもせず、まこと
に失礼とは承知の上の無沙汰。お
ゆるしを……。大津駅云々の文に
ついては、小宅は大津ではなく、
草深い田舎でして、豚妻は、年中
家にウロチョロしておりますので
念のため……。

○ 昨年夏、その草深い小宅へ、突
然（前もって便りはいただきまし
たが）京都美恵子様のご主人が来
宅。公用のついでとのことですが
ビックリの初対面。

○ で、小生のささやかにして大切
なるコレクションを開陳、いろい
ろとアドバイスも受けましたが、
小生以上に、豚妻が驚いたりあわ

てたり。

○ 考えてみれば無理もないことと
思われます。

○ 誌に投稿しております豚妻の写
真は、すべて当人には無断のこと
で、後でブツブツいうぐらいがセ
キのヤマ。

○ ましてや、当人のまえにヒョッ
コリと出現せしお客様、大きな体
をちぢめてみたところで、あとの
マツリ……という次第でした。

○ 四四・一二月号に掲載された、
豚妻の「いれずみ」の写真。全身
の予定が、途中で豚妻がブウブウ
文句をいだし、未完成に終わっ
て残念。その内、ゴキゲンをとっ
てモノにするつもりです。

真を編集部にて撮影しました。本
誌二月号の「読後感」をお寄せ下
さいました読者の方々全部に対し
川路叢子さんの緊縛フォト一枚か
ら十枚まで原稿の長短に応じて無
料贈呈いたします。

○ 三月号のこの欄で記しました春
川さんと子さんからM男性への贈物
の件、お申込み下さった方々には
早速御送付しました。尚まだ若干
残っておりますので御希望の方は
送料同封の上、編集部宛お申込み
下さればお送りいたします。

○ 連載第三回まで迎えた「地獄ホ
テル」の原稿の到着が遅れたため
残念ながら今月号の掲載に間に合
いませんでした。体験告白として
由利美千子という女性から原稿を
書いてみたいと相談を受けました
ので逢ってみましたところ中々い
ろいろの体験を持っていたような
ので書いて貰うことにしました。

○ 題は「被虐の旅」（仮題）とい
うのだそうですが、文章には自信
があるとのこと、今までの被虐
の体験をあらさまに綴りたいと
張りきっていました。次号の掲載
には充分間に合いますから由利美
千子さんの告白を大いに期待し
おいて下さい。好評でしたら引続
いて書いて貰うつもりです。

モデル志望者のプロフィール

前田カオル



- 一、氏名、前田カオル（筆名）
- 一、年令、二十六才
- 一、身長、一五八センチ
- 一、体重、四六キロ
- 一、趣味、読書、刺繍、旅行
- 一、プレイ歴、二年
- 一、好みの傾向、緊縛、浣腸、ロソク責、毛剃り、鞭打ち
- 一、職業、事務員（日曜日若くは平日は午後六時以降出頭可能）
- 一、場所、東京都内（東京駅から三十分以内で行けるところ）

マンネリのSM夫婦の願い

杉 本 讓 治

十二月号長田実さんのお説に対し賛成です。私達夫婦もここ数年に亘り、あらゆるプレイを実行して参りました。しかし実際に、心から満足したのは浣腸のみで、それも羞恥責めを含めたもののみである事がわかりました。

しかしこの責めにもおのずと限界があり、昨今ではその行きづまりを痛感いたします。常に新しいものを望む人間の本能が、一つのプレイを完成させる

と、又、それ以上のものを生み出す迄には、情性による行為のくりかえししか、行なう事が出来ません。その打開を他の方々に求め、

グループ化した交際に依って更に進歩することが、このマンネリを打破する只一つの道、私達夫婦に残された方法と考えます。

場合、始めて行なえるものではないでしょうか。

その意味でも、赤裸々なる同好者同志の告白の交流こそ、只一つのマンネリ打開の道に通じるものと思います。

最近とみにその販売網を広げたといわれる大人の玩具のバイブレーター等の器具、私達の身近にあるあらゆるものを利用しての責めは、まだまだ次々と生まれてくるでしょう。

私は、最終目的を夫婦交換プレイにおいて、本年の課題として広く積極的に同好者諸氏のお仲間に加えていただき度く、そして我々のみが知るバラ色の人生を歩み度いと思つて居ります。

今ではもう私はもとより、私の妻も、小杉様や藤田さん始め、浣腸、羞恥責めを好む同性の方々のとりこになり、文通を熱望いたして居ります。

これを御縁に私も同趣味の方々とおつき合いを切望いたしますが、編集部の方々にもこの様な奇クファン欲する特集の毎号発表や、真剣なる文通交際に対して、お力添えと御配慮をよろしくお願いいたします。

……シヨート
シヨート
『ムロイ新聞』 室井亜砂路

ネジ子ちゃん人形大ブーム!!
SM商会より発売されたネジ子ちゃん人形は、たちまちダッコちゃん以来の大ブームを呼び、商会では製作がまにあわないと嬉しい悲鳴をあげている。人形はその細部にいたるまで人間とそっくりに

出た!!みんなの仲よしネジ子ちゃん!!!
不思議、動力源は一日に三度人間と同じ食事を与えて下さい。
ネジをきくと、あんよします。
全国のよい子の間で早くも大評判!
教育玩具のSM商会が70年におくる
ネジ子ちゃん人形
ネジをきくだけで貴方の思いどおり自由にうごく人形の革命!!
着せ替え人形として使いやすく、腕がとりはずせます。
定価 5,000円。(送料別)




ネジ子ちゃん人形の
発明者、アサージ博士

造られている。食事、排泄はもち論、呼吸運動や新陳代謝作用まで行ないネジがついていなければならず人間との区別がつかないだろうと言われている。好みによってあらゆる年齢とタイプが揃えられてあり、最も人気があるのは、十五才から二十才までの少女人形である。人形は人間そっくりに成長もするので三年以上たつと普通、下取りをしても新しい新品と買い変えるようになっていく。食事を長い間与えなかったり、首の部分をしめたり等、あまり乱暴にあつかうと故障をおこし、丁度、人間が死んだ時のような状態になるが、解体して内部を開いても素人には絶対に修理は出来ないし、又法的にも禁止されている。レントゲンで調べてみてもネジは一見、ただ背

骨に連結しているだけで特に動力にはつながっていないようにみえるが、発明者のアサージ博士はそれらについては一切、語っていない。同博士は、慈善家としても有名で戦後深刻な社会問題となっていた多くの孤児、行き場の無い私生児等を引取って私財を投げうって「愛の学園」という施設孤児院を設立し、三十五年には社会大臣賞を授与されている。(二月三十一日ムロイ新聞より)

全国で少女の神隠し流行!!
最近、全国的に十二、二十才の少女の神隠しが流行している。はじめは今のはやりの家出や蒸発と思われていたが、普段の生活がまったく普通の者が突然、何の手がかりも残さずに消えてしまい、地元警察の必死の捜索にもかかわらず、ずいとも迷宮入りとなってしまうので、アポロ時代の現代にも、神隠しがあるという事が信じられるようになってきた。これをふせぐには、年頃の女性は決して一人き



安全チェーンをつけて集団行動をするようになった女学生

りにならず通勤、通学時はかならず集団で行ない、路を歩く時には各地方教育局より支給の連結首輪付チェーンを用い、それぞれの家庭と学校、会社の責任者が一コずつその鍵を保管するようにになっている。又、都内のA女学校では二年生のS子さん(十七才)が用便中に神隠しにあったので、学校の中でも安心は出来なくなり、女子トイレは教室の内部に造り、ドアを常に開けはなして、担任の教師が責任を持って、用便中も監視するようにしている所もふえてきている。(二月三十日、同紙より)



剃毛の楽しさ

堀山人

関谷夫人の剃毛された緊縛姿態の美しさ。誰かが剃毛される過程にサディスチックな興味があると云っていたが私も同感である。

ローズ秋山も剃毛されていると云う。安井喜久子夫人もフォトで拝見してエキサイトした。今やM女性に対する剃毛ばかりであるがこれも八花と蛇Vで団先生が静子夫人に対して剃毛を施したことに端を発しているようだ。

近頃では読者通信に登場する女

まけにこの私の作品への過分なお言葉。

例によって読み流し専門で横着極まる私も、さすが今回はこの余りある御讃辭に痛み入り、先ずはもってご返事を——というよりもこの中村純氏のような方が、近頃？の本誌の愛読者のお一人であった事に大いに気を良くし、また感激しつつ、サテ何から書くかの思慮もないくせにしているのまにやら斯うしてペンを執っている

性でさえ剃毛を希望している時代である。SMのアクションとして剃毛も見直される時期にきているようだ。私も最初は一向に剃毛に対して関心はなかったが、或る時彼女に対して「ここを剃ってやるか」と、冗談に言ったことがある。どうせ拒否するだろうし、自分もそんな面倒なことはしたくないと本心は思っていたのだが、案に反して彼女は、待っていたとばかり、「剃ってエ剃ってエ」とせがむのである。

私も言った手前仕方なく剃毛することになったのだが、無器用で自信がなかったので先ず鋏を用いて雑木を切りはらい、次いで電気カミソリで平坦にならし、最後の

した。中村氏は前回にも女装Mとしての短歌等を発表されており、拝見して、失礼ながら以来同趣味者としての興味を向けていた御仁でもあります。

一体私はこの愛読誌「奇ク」に他種の記事は豊富ながら女装記事のいたって僅少なことをかねてより歎き口惜しがっていたものですが、今回、女装Mとしてのその願望あふれるばかりと察せられる方が本誌の愛読者として一人でも

仕上げは石鹼と安直剃刀を用いてつるつるの玉の肌にしたものだ。

生えかけのチクチクする段階は彼女にとっては大変刺激的で始終責められているような気持ちになるそう。勿論私にとっても刺激的であるのは変わりないが、視覚的にも触覚的にも「女体責め」の醍醐味が味わえるし、日が経てば当然剃毛という作業になるわけだ。

その作業も面白いが、伸びてきた長さのいろいろの段階を観察し「責め」に応用するのも面白い。

また羞恥責めの一つとして、種々な変わった形に一部を残しておくのも興味があるものである。

剃毛に関して造詣の深い先輩諸氏の御教示を賜れば幸いである。

居られたという事が、私にすれば是れ、相当に貴重な「動揺」ともなったのは事実でした。ちょっと気取って言うなら——女装して責められることに陶醉し尚食欲にも永遠の夢と願いをかけるだろう私は、いまその夢と願いを文章にしたいがため、浅薄ながらこれまで体験してきた事柄をミックスさせて、いつもながらの駄文拙筆の赤っ恥にも、臆せず屈せず、小説「女装の家」連作を書きつづけて

短信往来

女装愛好者各位

井風呂秋於

十二月号、久方ぶりに愛読者の女装フォトが「サロン」の頁に掲載された。矢張り同好者としてのこの種の投稿は嬉しい限りです。お

いるところですが、なお、この厚顔ついでに言わして貰えば——女装関係の記事などが偶さかに採用されたとしても何だか本誌内容に溶け入るには——ヒガミかも知れないが少々場違い的な感じに察せられ、残念ながら本誌愛読者諸氏のあまり歓迎してくれそうにない感がしないでもないのです、そこでわが愛する本誌への、頼まれざる「悪戦苦闘の挑戦」、なんとか女装物の今後うやむやのうちに消滅してしまわないことを祈りつつ、言わば「忘れちゃイヤよ」の信念で——。やがては奇ク編集部に他の原稿と共に女装Mの原稿もが万来山積される事を願っての、飽くなき私の投稿でもあったと御推察



苦しくってそして望みたくてセツセと書き綴ってきた作品でした。そこでもしも、私のこんな女装記が、幸いにして何等かの形で効を奏したとして、いつか愛読者で隠れたる女装愛好の方が、「こんな井風呂の女装記ってあるか！」などと発奮なさるなりしていつしか本誌毎号にでも「女装責め」の記が掲載されていくようになったらそれこそ言うことなし！ いやその時こそ厚顔且つ駄文一手引き受けの恰好で赤っ恥かいてきた井風呂秋於も、もって瞑すべしではありませんか——。もっとも、その時にはもって瞑すべく現在はその気概や横溢といったところでもあ

願いたい次第。勿論、わが投稿を毎度掲載してくださった編集部の方方には深く感謝する毎日であり、そして暇あらば原稿用紙に向かうこと自体、私には楽しいことではないのです。

——楽しくって



なお、この気概においては中村氏に瞠目します。フオート二葉を拝見したところ、まさしく「へたな女性よりも……」でもありまじょう。感服。今後その女装、被縛の記等をどんどん発表して戴きたいものですが如何。出来ればきつと楽しく撮って居られるだろうそのフオートをも、もっと拝見したいものです。

そして、女装愛好諸氏の作品には、勿論もっともとお目に掛かりたい！
さて後筆ながら中村氏への「便り」として私は私の拙いフオートを呈上したいと思うのですが如何なものでしょう。きつと失笑を買う始末となるは承知の上ながら、ただ同好の人への御挨拶がわり——失礼をかえりみず申しました。

<マゾ詩>

私は坐布団に
なりたい

並木恵夢男

私は坐布団になりたい
私は坐布団になって、女性の大きなお尻の下に敷かれ
べしゃんこに潰されたい

○ 私はサドルになりたい
私は婦人用自転車のサドルにな
って女性の股の下に敷かれ
自転車の振動する度に
ギイギイ言わされたい

○ 私はパンティになりたい
私はパンティになって、女性に
穿かれ気も遠くなるような
くさい目に合わされたい

○ 私は便器になりたい
私は便器になって、女性の激し
い小水を
顔一面に浴びせられたい

○ 私はチリ紙になりたい
私はチリ紙になって、女性の小
水のあとを拭かされ、存分にその
小水を吸わされたい。

私の夢想「教師の屈辱」

絵と文……東京・赤ちゃん……

放課後、千代が来た。ちよっと
顔を貸せというのである。

私は来るべきものが来たと思っ
た。授業中、余りの規律無視にた
まりかねた私は、彼女たちを厳し
く叱りつけた。札つきの千代やみ
どりを叱るには、余程の勇気がい
る。何か起こらねばいいが……。

その懸念が現実化したのである。
彼女らのたまり場には、みどりと、
ボス格の五条玲子の二人が、
ガムをクチャクチャ噛みながら薄

「何の用なんだ」
私は努めて冷静を装っていた。
「何の用？ 手前、しらばっくれ
るなよ」
みどりがすごんだ。ドスの効い
た声だ。この美しい顔のどこから
出るのだろうか。

お前は

「君達の言

う事は、ど

うもわから

ない。一体

私のどこが

気に入らな

いんだ」

みどりは

フンと鼻

で笑った。

他の二人も

先刻からニ

ヤニヤ笑っ

てばかりい



る。全く教師である私を軽蔑しき
っているこの女達の態度に、私は
頭に血が昇る思いで、怒りに声を
震わせた。

「教師をなめるのもいい加減にし
ろ。自分達のしていることを少し
は反省してみ……ウツ」

その時、いきなり背後から棒の
ようなもので腰を打たれ、私はよ
ろけた。みると千代の手にはカラ
竹が握られている。彼女らは、本
気で私を痛めつける気なのだ。

「つべこべ言わずに裸になりな」
玲子が低い声で言った。私は、
この際逆らわない方がいいと思っ
た。教師としてのプライドよりも
身の危険を感じる方が先立って反
射的に上着を脱いでいた。

× × ×

地面に垂直に埋め込まれたカラ
竹に私の両手がしっかりとくくり
つけられた。そして合わされた両
腕の上に玲子が、どっかと跨がっ
てきた。六〇キロの重みは相当な
もので、私は自分の腕が折れはし
ないかと本気で心配した。玲子は
全体重を私の腕に預けて、二、三
度ヴァンプした。眼の前に白くは
だけた太腿がまぶしく迫る。相変
わらずガムをクチャクチャさせて
いる玲子は、

下男に使ってほしい

堀川英勝

私は奇クを愛読してもう十年位になると思いますが。家の中を片付けていて発見して以来、現在迄愛読しております。

当時白い表紙の雑誌でしたが、女性を縛りあげた写真を見たときには、びっくりして夢中で読み耽ったものです。なんということなく、私の身体の中がカッカと熱くなり、なかなかおさまりませんでした。

特に女性が男性をいじめている写真、小説は一気に読破したものでした。

私は現在愛知県北部にある日本最古といわれる犬山城の城下町に住んでいます。鶏肉販売店の店員となつて、もう三年になります。毎日平凡で味気ない生活を続けております。

現在の生活からの逃避を考えておりますが、中学卒の自分には他の職業も見つからず、悩んでおります。元来M的な要素の強い性格です。なんとかして自分の願望を果たしたいと、思いあまってペンをとりました。

誌上を借りまして、読者の中で私を使用してみたいと思われる方（特に女性の方を望みます。年齢は別に問いません）御一報下されば幸いに存じます。但し、下男として奴隷的に酷使する目的であつてほしいです。無論、月給などありません。

女御主人様に対しては絶対服従の精神を持っていますので、一生飼育されても決して不服は申しません。どうか、この私の哀れな心情に同情下さつて、よきご返事をお待ちします。

……略歴……

堀川英勝、二十八才、独身、中学校卒、職業店員、身長一メートル五三センチ、体重五二キロ。

今まで飼育された経験は皆無の素人です故、調教飼育し甲斐があるのではないかと思います。どうか、このせつない私の望みをかなえて下さい。

△編集部より▽至急住所を編集部へ御連絡下さい。待っています。

「お前さん、まだチョンガーなんだって？」

右手で私の髪の毛をワシ掴みにすると、顔を上向けた。

「……」

「チョンガーかって訊いてんだ」

「は、はい」

こんな惨めな格好でいれば、気弱な私は無意識のうちにへり下った態度に出てしまう。

「何で結婚しないんだ？」

「何でって……別に……」

「肉体的欠陥でもあるんじゃないのか、お前」

そう言いながら、ハイヒールの踵が、私をなぶるように至るところを踏みつけてきた。

「あう……」

私は思わず呻く。そんなに力が入っていないとはいえ、鋭く固い踵の先は凶器ともいえるだろう。その凶器でなぶられる私はハダカで縛られているのだ。恐怖と恥辱に、私はガタガタ震え出した。

「ほら、安定悪いよ」

玲子の手が私の頭をこづく。

「一人じゃ、あんべえ悪いだろ」
後ろから千代が後頭部をギュッと押えつける。

「あとでこいつ独特のプレイをみせてもらおうか」

玲子の頓狂な声に千代とみどりが吹き出した。

「口開きな、ガムやるから」

ねらいを定めて玲子の口から見事に私の口の中へ落下したものをそのまま飲み込んでしまった。甘酸っぱいものが咽喉をよぎる。ガムは噛むものというのを忘れていたのだ。激しく咳込んだ。

「ハハ、バカだよ、こいつ」

女たちは、目を白黒させる私をみてゲラゲラ笑いこぼれた。咳が止まらない。

「ジュースでも飲めば止まるよ、きつと」

と、みどりが言うのと、

「よおし、特製のジュースをご馳走してやる。お近づきにね」

玲子はニヤニヤしながら、スカートの裾に手をかけた。私は直感的に玲子のしようとしていることを悟り、激しく首を振った。

「仕様がなね。千代、こいつ押えてよ」

やがて私の四肢は、玲子と千代によって、雁字搦目に押えつけられ、微動だに出来なくなった。私は思わず大声を出して泣き出していた。しかし、女たちはやめようとはしなかったのである。

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひV

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせV

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆV

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめV

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よすV

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よもV

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よきV

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさV

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もとV

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへV

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もにV

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もちV

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほV

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬV

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もりV

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もはV

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なのV

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむV

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあV

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きすV

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせV

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそV

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きてV

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きとV

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きなV

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあV

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めくV

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆV

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めやV

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえV

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひV

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あはV

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふV

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこV

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るねV

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえV

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそV

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はねV

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はたV

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てらV

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いねV

刺青裸女を踏みにする

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつV

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこV

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみV

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろV

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほかV

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほきV

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13型) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇〇円

十組十枚 一〇〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

☆

一枚一枚、いずれも一粒選りの
素晴らしい緊縛フォトばかりを集め
ました。お好みのモデルの、お好
きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の厳重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむぎき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フオート

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原清子 略号(もの) 四〇〇円

浴室の全裸刺青

山原清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 一二〇〇円

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大塚・東浦 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟燭責め

大塚・東浦 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚・東浦 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚・東浦 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大塚・東浦 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大塚・東浦 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(るは) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ) 四〇〇円

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(ほは) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かく) 四〇〇円

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(ほい) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かな) 四〇〇円

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(へき) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ) 四〇〇円

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(か) 四〇〇円

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 四〇〇円
絹川 文代 略号(きか) 四〇〇円

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いりり) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(いりり) 一五〇〇円

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ) 四〇〇円

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか) 四〇〇円

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほの) 四〇〇円

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るい) 五〇〇円

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(るは) 六〇〇円

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは) 四〇〇円

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい) 四〇〇円

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へき) 六〇〇円

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へか) 六〇〇円

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かる) 四〇〇円
山原 清子 略号(かる) 四〇〇円

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一三〇〇円
山原 清子 略号(かへ) 一三〇〇円

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一二〇〇円
山原 清子 略号(かに) 一二〇〇円

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(けか) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けか) 七〇〇円

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号(けひ) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けひ) 六〇〇円

イルリガートル

大手札十枚一組 略号(かも) 一五〇〇円
山原・東浦 略号(かも) 一五〇〇円

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号(けま) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けま) 七〇〇円

浣腸後カバー装着

大手札五枚一組 略号(けさ) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けさ) 六〇〇円

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(のけ) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ) 四〇〇円

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号(むい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい) 四〇〇円

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(むは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは) 四〇〇円

施される浣腸

大手札三枚一組 略号(むる) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むる) 四〇〇円

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか) 四〇〇円

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(ちぬ) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ) 四〇〇円

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(ちり) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり) 四〇〇円

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(ちら) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら) 四〇〇円

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね) 一〇〇〇円

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(かて) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かて) 一〇〇〇円

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた) 一〇〇〇円

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち) 一〇〇〇円

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの) 七〇〇円

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円
山原 清子 略号(うも) 五〇〇円

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ) 五〇〇円

浣腸悦楽独りブレイ

大手札五枚一組 略号(ぬる) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる) 六〇〇円

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(ぬか) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか) 六〇〇円

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号(るて) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて) 五〇〇円

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(るち) 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち) 三〇〇円

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(ると) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると) 四〇〇円



奇ク一月号を拝見していますと「奇妙な四角関係」という記事が目につき、一気に読了してしまいました。M性のある男性の参加を望まれる花田恵惟子様のご投稿には、私のようなM性格の強い者にとって本当に強い憧れで、胸をはずませてしまいました。私はM性の強いもので、私を奴隷にして虐めて下さる女性の方を日夜、求めておりました。しかし、そういった女性どころか、若い女性さえも私の近辺にはおりません。そんなわけで、女王様を慕う気持は日に日に募ってくるばかりで、近頃では若い異性の足を崇拜するようにまでなりました。舐めさせられたり、顔を靴で踏みつけられたり、犬のように侮辱されたり、なぶられたい願望で頭の中は一杯なのです。すうりと伸びた異性の足には

強烈に魅せられ、死ぬ程にまで憧れてしまいます。花田恵惟子様。どうか私を奴隷に使って下さい。私は恵惟子様の犬か奴隷になりたいくてたまりません。私のようなMの者で、異性の足に強く憧れ崇拜の念まで持っていて、女性の方の足下にもひれ伏すことが出来ななくては、女性の方が雲の上の人になつたみたいなきで、せめて、お足の裏にでも口をつけてみたくてたまらず、切実に渴望する毎日であります。花田恵惟子様。どうか、私を貴女様の奴隷の一員にお加え下さい。(大阪・海野逸生)

二、三年前から次第にマンネリになっておりました。けれども、ふとした機会に夫が奇クを手に入れ浣腸に興味を持ちはじめました。私は小学生時代に浣腸の経験がありますが、何しろ大人になって始めてのことですから、最初は、いやでたまりませんでした。ところが五度、六度目、それも縛られて無理に注入されたとき、何か今までにない快感を感じ、夫に私の苦しむ姿を目撃されますと、我を忘れてその快感に酔いしれてしまいます。最近、夫はポラロイドカメラを購入して、いろいろな型で浣腸羞恥責めを私に試み、そのフオートで、つぎつぎと新しいアイデアを生み出そうとしています。それを期待する私と、今度はどんな責め方をされるのかしらと思う不安が入りまじって、毎日を過ごしております。貴女様のプレイの体験談など、ぜひ私の参考にさせていだきたく、赤裸々なお話ををおきかせ下さいませ。これを御縁に、文通などさせていただければこんな嬉しいことはございません。またMの女性の方々、お便りをお願いいたします。(愛知県 杉本せいひの)

私は半年余り前からの御誌のファンです。神戸近郊にお住いの二十才から四十才までの女性とSMプレイを望んでおります。相手のプレイバシーにお互いに触れないで心ゆくまでSMプレイを行い、うるさい現世を忘れようではありませんか。おたよりを待ち望みます。(神戸・風流粹人)

二十六才の愛読者です。安沢達子様の「私を奴隷にして下さい」に大変、感激しています。私もガールフレンドは二人いますが、SMには全く関心がないらしく、デートしても余り楽しくはありません。貴女の文を読み、私の長年、探し続けた女性にめぐり合ったようで非常に嬉しくて仕方がありません。貴女が望んでおられるように、もし貴女をお金で買えたら、私は貴女を、このように取扱いたいと想像しています。先ず、かけがえのない大事な女奴隷ですから絶対に逃げられないように、全裸で足には三十センチの鎖のついた足錠、手は後手錠、首には猟犬用の丈夫な首輪、鼻にも障子に穴をあけ、貫通した鼻輪。そして腰にはクサリの錠つきフンドシ。そして、用事のないときは、猛犬等

を入れる鉄格子のついたオリの中に入れておきます。また食事をするとときは、主人である私が食べた残飯を全部、洗面器に入れて、それを後手錠のまま、口だけで食べなければいけません。また私は乗馬が好きですから、四つん這いになり、私を背に乗せ、尻にムチを受けながら、走らねばなりません。また部屋には大きい鏡が沢山ついていますから、女奴隷達子は自分の浅ましい姿を、いやでも見なければいけません。そして貴女は、永遠に私の可愛い美しい悲しい女ドレイとしての生活を送るわけです。失礼なことを色々書きましたが、実は私は、まだ一度もプレイしたことの無い、気の弱い普通のサラリーマンです。お会いできるのでしたら、北海道でも九州でもまいます。必ずお便り下さるよう、お待ちしております。

御送金についてお願い

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さる場合は、封書の場合には、切手代用（一割増）でも結構ですが、なるべく小額切手に願います。

（神戸市・山下和男）

最近、マゾ男性に対する女性の呼びかけが増えたようで、まことに喜ばしい限りです。私も一匹の野性マゾとして、常日頃から女性の皆様に心おきなく気軽に、しかも徹底的に消費していただく日を夢みつつ、ひそかに奴隷心を精神的に充実させている毎日です。私の常日頃、心がけていることは、心を無にすること。つまり人間としての我がままや欲望、選択心をなくして赤ん坊のように空白無地の心になりきって、女性の方に飼われることです。だから飼主様は白紙に画をかくように、お好みのまま仕込めるわけです。毎日の生活の中では、精神力が充実して、奴隷としての素地ができたといふ自負しております。何卒、お気まぐれにでも、お呼びつけを心から哀願申し上げます。自己紹介しますと、年令三十才、身長一七〇センチ、体重六十四キロ、サラリーマン、独身、病氣は殆どせず、全くの健康体。相手を選ぶような人間心はさらさら持ちません。誰でも何才の女性の方でも、必死に隷属する決心了。無料労働者として、営

業用、御家庭用、見世物用、ペット、気ばらし用などに、ぜひ御使用下さい。私は東京在住ですが、神奈川、千葉、埼玉、更に静岡の東京寄りまでの範囲でしたら、毎日でも出頭いたします。御慈悲深いお呼びつけを、お待ちしております。

（東京都・安田待男）

大西良子様へ。久しぶりに貴女の通信に接し、嬉しくまた懐かし

くさえ感じました。相交わらずゴムの虜になっておられる由、心強い限りです。私は常々、貴女のゴムに対する趣味が私と非常に一致する点が多いことに気がつきました。ゴムを常に身近かに置き慈しむの余り、ゴムが憎くなったその過程、私にはその気持を充分に理解することができません。私もその気持をこれまで何度、味わったことか数限りありません。そうしてその後、前よりも増してゴムが好

△飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハント紹介された純情可憐な小池美喜嬢での緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
小池美喜 略号 八れろV

羞らいたを含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
小池美喜 略号 八れろV

後手首を縛られて

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
小池美喜 略号 八れろV

瑞々しい全裸の肌を惜しげもなく晒らして柔軟な後手首を背後で背負った少女のあどけなき表情。

飼育された美少女

大手札一組 略号 四〇〇円
小池美喜 略号 八れろV

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはない興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。

きになり、いよいよゴムから離れられないようになりました。私は大西様をモデルに次のようなゴムプレイを夢見ています。最初は梶山季之氏の小説よりヒントを得て作ったアメ色生ゴムパンティの内側にスポンジコケシをとりつけたのを私の指導する通りに穿いていただきます。つぎに黒光りするゴムストッキングです。普通のストッキングと違って中に空気がたまっている、なかなかうまく具合に穿くことができません。爪先から両手で扱いながら空気を抜いて徐々に穿いて行きます。ほら、ピッタリと吸いついてゴム特有のソフトな弾力で貴女の足をしめつけ、何か自分の足が急に軽くなったような気がしませんか？ 今度は同色のゴムコルセット、これでウエストをキュッと引きしめゴムストッキングを吊って身体に固定します。つぎにピンクのゴムブラジャーをつけ、純白のゴムスリッパを着ます。私の使用するゴムは全て極薄です。私から、純白のゴムスリッパの上にはピンクのブラジャーが可愛らしく浮き出て、また黒のゴムコルセットと黒のゴムストッキングとのコントラストが鮮かで、もうそれだけで充分にゴムドレスをまと

った女王なのです。大西様はミニ
がお好きなのでしょう。か、それと
も普通のタイトでしょうか？ ゴ
ムスカートは全体を黄色でまとめ
左右のポケットには赤色ゴムを使
用、アクセントをつけます。ゴム
ブラウスはピンクが良く似合うで
しょうね。襟に大きめのファツと
したフリルをつけた貴族スタイル
は如何でしょうか。ウエストにギ
ャザーをとり入れた純白のゴムコ
ートをふわ々と着ると、私の夢の
中に出るゴムファツションショー
に出演する準備がすっかりできた
のです。しかし、これはあくまで
も私の夢なのです。

(神戸・弾六夫)

緒方君子さん。一月号にとりあげられた君の独白記事は全くすばらしいものでした。イチジクを愛することの喜びを何の作為もない素直な文章で、しかも君の人柄を余すところなく表現してあるところに、ぼくは心うたれるのです。人間、誰しも先天的に浣腸が好きではなくありません。ぼくが君子さんの独白を読んで最も感動した部分は八十四頁の中段です。そこには浣腸を好むことに対する君子さんの決意が実によく書かれてま

安井・中河・金原緊縛写真	大手札印画紙極鮮明焼付フオト	開股羞恥責めの姿態	大手札四枚一組 略号△しう▽ 五〇〇円	髪吊りで強烈ムチ打ち	大手札四枚一組 略号△した▽ 五〇〇円	片足首引きつけ縛り	大手札四枚一組 略号△しち▽ 五〇〇円	尻立て鞭打ち艶姿	大手札四枚一組 略号△しつ▽ 五〇〇円	安井喜久子 略号△しと▽ 五〇〇円	柔肌に炸裂するムチ	大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円	エビ縛りの鞭打ち	大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円	貞操帯着用鞭打ち	大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円	安井喜久子 略号△しと▽ 五〇〇円	痛打にもかく美女体	大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円	安井喜久子 略号△しと▽ 五〇〇円	あぐら縛りの羞恥責	大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円	安井喜久子 略号△しと▽ 五〇〇円	片脚挙げて晒す裸身	大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とは▽ 四〇〇円				
強烈エビ縛りで苦悶	大手札三枚一組 略号△とに▽ 四〇〇円	膝頭縛り開股竹棒責め	大手札三枚一組 略号△とほ▽ 四〇〇円	竹棒開股足首縛り	大手札三枚一組 略号△とへ▽ 四〇〇円	股間縛りの裸身表情	大手札三枚一組 略号△とち▽ 四〇〇円	菱縄縛り狭くつわの表情	大手札三枚一組 略号△とり▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とり▽ 四〇〇円	乱痴戯騒ぎの結末	大手札三枚一組 略号△とぬ▽ 四〇〇円	菱縄縛りで床に喘ぐ	大手札三枚一組 略号△とる▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とる▽ 四〇〇円	浣腸責めの甘い恐怖	大手札三枚一組 略号△とか▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とか▽ 四〇〇円	浣腸液の注入直後	大手札三枚一組 略号△とま▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とま▽ 四〇〇円	強制浣腸の各姿態	大手札三枚一組 略号△とみ▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とみ▽ 四〇〇円	浣腸責めの美態開陳	大手札三枚一組 略号△とめ▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とめ▽ 四〇〇円	浣腸を待つポーズ	大手札三枚一組 略号△とも▽ 四〇〇円	中河 恵子 略号△とも▽ 四〇〇円

したね。イチジクのために長生きできなくても本望だと言いつつた君子さんの態度に、ぼくは何か言葉に出しきれない、こわいものを感じます。貴女の記事を十数回、読み、その度毎に素直な表現を感じ、貴女の純粋な性格に何か大切なものを感じます。ぼくは、まづいながらも流腸小説を脱稿して本誌に送ろうと考えてますが、君子さんも如何ですか。ペンによって貴女自身の流腸欲を満足させるのです。想像の世界は実に楽しく、社会に対する実害もありません。君子さんのペンの力は豊かです。で、良い作品が期待できるでしょう。

(神奈川・村上信夫)

安沢達子様。貴女の奴隷願望は素敵ですね。過去に私も妻を奴隷として飼育し、鼻にリングをつけ完全な一匹の牝犬として育て上げました。もし貴女が私の奴隷女になったら、鼻と乳首にリングをつけ、私はヤクザの世界は知りませんが、つとめてヤクザとしての態度で振舞いましょう。察するところ貴女は強度の露出願望の持主と思われれます。とすれば貴女は常日頃、今流行のシースルで日々を送られたら良いと思います。道行く

人々、また近所の人は皆、貴女を変態女性として眺めるでしょう。そうすることによって、ある程度のマゾ的気分が味わえると思いますが、如何でしょうか。貴女が私の奴隷になったら、絶対にシースルで街を一緒に連れて歩きます。私は貴女のような奴隷女を手に入れたら、一生を通じてこの世の中の最高の果報者となることができるとでしょう。

(芦屋市・小田信正)

辻鼻太郎さま。美しい画をおかきになる貴男よりの名ざしのおたより、胸がはりさけるほど嬉しく思いました。あのように美しい画をおかきになるにかかわらず、とっても、ご嫌悪なさっていらつしやる貴男の奥ゆかしいお人柄が、あのように丸味を帯びた素敵な責め絵となって現われるのだと私は思います。SM画は相対的に見て乾燥気味なものが多くと思います。が、貴男の羞恥画は優しく柔らかかに、そして甘く切なく、ねっとり女の肢体を描かれています。貴男の美しい羞恥画が頂けたら、どんなに幸福なことでしょう。私は貴男がご想像なさるような美しい女性ではないと思いますが、お願い

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめV	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえV	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひV	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあV	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆもV	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆにV	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほV	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみV	股間縛り悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆらうV	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへV	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆわV	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆよV
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆぬV	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆるV	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれV	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそV	全裸高手小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よのV	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よやV	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よいV	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふV	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえV	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬV	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあV	イルリの流腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よたV

できますことなら、あえて美化した上で、貴男のイメージ画の題材をけがさせて頂きたいと思っております。どんな姿態をとらされても私は我慢します。貴男の柔らかな筆先でいたがられることが私の夢です。せめて一度だけでも貴男の筆先で私の夢を叶えて下さい。

(神戸市・小杉千恵)

○ 小生は最近、奇クを愛読しはじめたフェチ男である。気が弱いせいか女体ばかりそのものよりも、美しい女の身につけた布ぎれに愛着を感じる。それも洗いざらしや新品ではなく匂いのこもった分身の如き下着でなければならぬ。下着でなくとも要するに女の匂いを嗅ぐのが大好きである。満員電車でワキガの強い女に押しつけられるのが小生の楽しみである。奇クは「花と蛇」を読みたくて買い始めたが、もう一つ、フェチ向きなフォトが少なく残念に思っている。ヌード雑誌ならムンムンするような女体が白い小さなパンティを穿いて太股を大きく開けたフォトがいくらかもあるが、奇クにはないのが残念で仕方がない。奇クらしく羞恥を混入した美しいパンティフォトを載せてほしい。小

さな白い布切れをつけさせて思いつきり両足を開けさせたり、パンティを間一発のところまで、ずらさせたりしたフォトをお願いしたい。

(鈴蘭台・応殿釈雄)

○ 東京の留美子様。ぼくは東京に住む二十四才のM男です。十一月号の留美子様の原稿を見て、留美子様の専用タンツポにしていたきたく思いペンを持ちました。考えただけで恥ずかしいことですが途中で逃げ出したりはいたしません。奴隷志願者なら、それぐらいでなければ駄目でしょう。留美子様のお好みのタンツポにして下さい。どのような御命令でも留美子様が少しでもお喜びになられるよう、一生懸命ご奉仕させていただきます。人間であることを忘れてお仕えますから留美子様の思いのままに飼育していただきたく思います。なにとぞ、よろしくおねがいします。

(東京・須藤)

○ 安沢達子さん。奇クを愛読して早や七年、当年三十三才のSを自他ともに認めているものですが、あなたほど私の心を躍らせた奴隷候補は未だかつていないと信じ、この文を呈する次第です。私は月

大手札印画紙焼付

「緊縛女体美のシリーズ」

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もえV

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もゆV

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もよV

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もすV

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もせV

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もれV

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もるV

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もてV

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もなV

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もねV

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もむV

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もろV

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もきV

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もこV

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八もみV

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はゆV

投げたす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はよV

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はてV

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はおV

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はのV

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はひV

商一〇〇万円ほどの零細？ 企業主ですが、過去一度結婚し、私の性癖のために女房とは一昨年に離婚し現在に至っておりますが、幸か不幸か同好の士を得て（ご夫婦の方ですが）SMプレイでその悩みを解決しているのが現状です。ご夫婦と私三人でプレイを行い、その際は奥さんは完全に私の奴隷として三、四時間タップリと苛めぬかれます。よき理解の下に、こうしてプレイできることは、私のようなSにとっては、この上もない幸いと思っております。つきましては二月号誌上にて拝見いたしました奴隷希望ですが、あなたのお望み通りには現行の法律上、または人道上無理な点も多々ありますが他の条件は満足すべきものです。徹底的に奴隷として飼育して差し上げましょう。私は、あなたのような方の出現を待っていました。

（枚方市・田中）

四国に住む「花と蛇」ファンの二十二才の女性です。当地には昔ながらの温泉風俗が残っており、楽しい雰囲気です。私のお友達には、なかなか近代的に割きつた考え方をする娘が多くいて種々な体験を私にお話してくれます。

同好のマニヤの方と交際いたしましたと思っています。「花と蛇」ファンの方、どしどし投稿して下さい。

（松山・伊予探子）

私は何度か通信欄に出させていたしましたが、最近お便りを休んでいる内にも、私の希望していただきますことが大分、この欄に見られます。私のような輝ファンは本当に胸がワクワクして、むさぼり読みます。焼津の鈴木様、並びに東京の輝K生様お元気ですか。私は六尺輝を愛用している二十七才の独身者です。これから、ずっと六尺輝を愛用したいと思っております。将来、結婚すれば、貴女達のように輝夫婦になりたいと夢を見ております。輝のことにくわしい、お二方にぜひお教え願いたいと思っております。では、ご健康をお祈りいたします。

（東京・岸尾盛男）

編集者の皆さま、愛読者の皆様御元気ですか。ほんの少しS気味の四十三才の少々肥満体の男性です。軽く手術で固定し浣腸を施行するのに関心を持っています。貴女はプレイ前日、三三C Cシリンドー浣腸。用済み後、羞恥一杯

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はわV
中河 恵子 五〇〇円

悶える猿轡の裸身
大手札三枚一組 略号△はもV
関谷富佐子 四〇〇円

全裸の女体立ち縛り
大手札三枚一組 略号△はふV
中河 恵子 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境
大手札三枚一組 略号△はさV
関谷富佐子 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る
大手札三枚一組 略号△はほV
中河 恵子 四〇〇円

両手吊りで痛める女身
大手札四枚一組 略号△はしV
大島 照代 五〇〇円

悦虐に身もたえる美女
大手札四枚一組 略号△はあV
中河 恵子 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め
大手札四枚一組 略号△はすV
大島 照代 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる
大手札三枚一組 略号△はうV
中河 恵子 四〇〇円

強烈開股強制縛り
大手札三枚一組 略号△はせV
大島 照代 四〇〇円

柱に立縛りでさらす
大手札四枚一組 略号△はさV
中河 恵子 五〇〇円

両手吊りであえぐ女体
大手札四枚一組 略号△はゆV
大島 照代 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め
大手札四枚一組 略号△はめV
中河 恵子 五〇〇円

竹棒強烈開股責め
大手札三枚一組 略号△はたV
大島 照代 四〇〇円

無防備の女体を開陳
大手札四枚一組 略号△はしV
中河 恵子 五〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め
大手札四枚一組 略号△はちV
大島 照代 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り
大手札四枚一組 略号△はもV
中河 恵子 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する
大手札四枚一組 略号△はつV
大島 照代 五〇〇円

若妻の魅力を発散する
大手札三枚一組 略号△はむV
関谷富佐子 四〇〇円

竹棒の胸絞め責め
大手札四枚一組 略号△はとV
大島 照代 五〇〇円

後手縛り全裸身の魅力
大手札三枚一組 略号△はめV
関谷富佐子 四〇〇円

竹棒開股胸絞め縛り
大手札四枚一組 略号△はとV
大島 照代 五〇〇円

関谷富佐子 略号△はめV

大島 照代 略号△はとV

○兵庫の坪井満子様。お便り、拝見しました。近くにSM同好の貴女を見つけ、嬉しくなりました。小生は三十才の会社員です。坪井さんは楽しいプレーをしているとのことですね。小生は傷跡の残るようなプレーは好みません。女性を精神的に苦しめる羞恥責めを主体に、真面目なプレーに終始しますし、秘密は絶対に守ります。坪井様。ご返事下さい。

(岡山・責め男)

○神戸の小杉千恵様。貴女との夢が実現できましたら、どんなに楽しいか知れません。色々と想像するだけで胸が高鳴って参ります。何よりもまずお友達になっていただいて、それからことですね。貴女には決して迷惑はかけません。プレー以外のことは一切、秘密を厳守いたします。お便り一日千秋の思いで、お待ちしております。す。画の方で何かよいポーズ(姿態)のアイデアがありましたら、お聞かせ下さい。貴女を空想しながら描きたいと思います。

(豊中・谷中治)

○安沢達子さん。私は十数年、奇

クを愛読いたしております平凡なサラリーマンです。私は今まで、緊縛に理解ある女性をと、日頃、悩んでおりましたが、今月号の奇クで貴女のお便りを拝見し、本当に嬉しく思いました。ぜひ、緊縛についての良き理解者として交際していただきたいと思い、お便りする次第です。お互いのプライバシーは、必ず守ります。私の好むものは全裸か又はワンピース(ミニスカート)の洋装で、濃い茶色か黒色の網状の靴下をはいて(全裸のときでも靴下をはいた方がよい)後手、高手小手縛り、さるぐつわを噛まされ、足首と太ももをきっちり縛られ、足を横に投げ出したポーズです。その他、両手吊り等、色々緊縛について空想いたしております。きつと貴女を心ゆくまで満足させられると思います。心よい返事をお待ちしております。

(東京・太田三郎)

偶然に古本屋さんで奇ク二月号を読み、ずっと以前から私が求めていた何ものかを感じて、一月号とあわせて購入してみましたところ、やはり私の予期した通りで、私は孤独の焦燥から救われ、お友達から、憑きが落ちたように明朗

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号天星社宛へ願います。

になったといわれました。私は異性から体を見られると、それだけで、立っておられないほどの快感を感じてしまう変質的な女です。この異常さに悩みながらも、超ミニの下に何もつけないで外出したりして、陶酔を求めてしまう自分に苦しんでいます。でも、アブを愛する人々が他にもいることを知って、悩みを取り除くことができました。私は暖かい日には膝上三十センチに加工した超ミニで下着は穿かず、青春のオルガを謳歌しています。二十才の肢体が縛られてカメラハントされ、晒されたら、どんなに恍惚感に震えるかと思うと、徒らに無我の焦燥を憶えて悶えるのみです。私の操に触れない約束を真面目に守って下さる方、男女、老若を問いませんからおたより下さい。そして、お友達になつて下さい。私を恥かしさで失神させて下さい。猛烈なアブ・ラブ・レターを下さいね。必ず、お返事します。(愛媛・鈴川露子)

かと思ひますと、うれしいような感じでございます。毎号毎号、辻村さまの「カメラ・ハント」を楽しく拝見させていただき、つぎつぎと登場してくるM女性が、とても羨ましく、私も本当の女性だったら、きつと辻村さまにハントしてくださいさるようお願いしていることでしょうか。三月号の「悦虐に憑かれて」は道具だてもムードもあって、ひとつのストーリーのようですが、かんじんの辻村さまはピエロのような感じでございまして。やはり、これまでのようなハントの方が良いのではございませんでしょうか。辻村さま、私へのおほめのことは本当にうれしうございしました。正直にいつてちよつと自信がなかったのです。あなたのおっしゃる自縛方法を勉強したいと思っています。苦木桃太郎さま、お呼びかけありがとうございます。前にしるしたとおり神戸の方と聞くだけで、ふとなつかしいような気がします。私のようなものでよろしければ、よろしくお願いいたします。ご指導たまわれれば幸せでございます。(大阪・中村純)

全裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こよ	△
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こわ	△
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こお	△
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こる	△
煙草責めに喘ぐ女	大手札二枚一組	略号	三〇〇円
佐々木真弓	略号	△こぬ	△
緊縛麗姿に映えるライト	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こほ	△
臀部強調後手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△ころ	△
羞恥に悶える全裸緊縛	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こに	△
ホステスの緊縛姿態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こち	△
二つ折りで責める女体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こへ	△
脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△こふ	△
臨月腹の革紐股間縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△こや	△
猿轡の臨月妊婦腹縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△この	△
卓上の股間縛り狂態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こそ	△
羞恥の足挙げ責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△これ	△
悦虐責めの女体終着駅	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こた	△
片足挙げの鞭打ち責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こら	△
柔肌に弾ける惨酷な答	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こな	△
あくら縛りの女体鑑賞	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐近麻里子	略号	△こえ	△
対談用に縛られた女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
左近麻里子	略号	△こて	△

いかがお過ごしですか。三年ぶりにお便り致します。私も夫婦プレイも数年を経過しマンネリになつてきたようです。しかし妻の胴鎖だけは一度もはずしたことはありません。先日、野外プレイでもしてみたら

と思うのですが、適当な良い場所もなく、実行にうつしてはいないのです。最近、夫婦プレイを長年、楽しんでこられた夫婦の方々の投稿の内容が、マンネリから脱するの夫婦交換、複数プレイをしてみたいという意見が多くなりました。私の考えも同じように、より多くのスリルと刺激を求めて、他の夫婦の方々とS・Mプレイ、夫婦交換、複数プレイをすることによって、自分達の夫婦プレイのマンネリから抜けだす一つの道だと思っています。しかし、この種のプレイは外に相手を求めるだけにプレイベイト、社会問題と総ての危険がともないます。それだけに相互の信頼と秘密を守ることが絶対の必要条件になります。先輩夫婦の指導があれば良いと思います。関東・関西地方にお住いの奇クファンの夫婦で、かなりの方が呼びかけているようですが、私の住んでいる近県の同好者の呼びかけを、お待ちしております。

(北九州市・今田雄三)

私の奇クに対する感謝の度は大きい。味気ない私の日々を救ってくれたからだ。私は若妻の美しさに敬意を払うアブマニヤだが、奇

クは常に新鮮な若妻を提供してくれる。胸おどらせて開く新刊号にまたまた、羞恥にうづく人妻のフオトを見て、私はその美しさに呆然とした。井上雅人氏の妻女の写真に、いつも味わうのと同じ心を抱いた。その心とは、求めて止まない耽美への焦燥である。縛られて突き動かされ、畳の上に斜めに伏せる井上夫人、タオルを腰にまいて両手を吊り上げられた夫人の美態に、私は思わず唾をのんだ。

(有馬・鶴飼和雄)

塚本鉄三氏の美しいレンズさばきに魅せられました。辻村氏と異なる味わいに新鮮さを感じさせられ、楽しみにしております。関谷さんの白いパンティのアクセントを上手に生かし、彼女の悦虐の姿を、より美しいものにした挙句、見事な角度を捕えたのは立派でした。私は去年の夏に美しいOLの白いパンティを心ゆくまで味わう機会に恵まれた幸福な中年男ですが、塚本鉄三氏の鋭い感覚で、美しい関谷さんの体から至上的美を引き出すことを切望します。私の塚本氏に対する期待は大きく、私の好みの女性である新年号の小池美喜嬢を何度も撮りまくって下さる

ことを希望します。あくまでも、ありのままの自然の女体美を追求し、羞恥美を通して未知の女性美を見出して頂きたいと願っています。

(神戸・国川栄一)

城崎の坪井満子様、私とプレイをしてくれませんか。私は本誌を愛読してから十年余になります。その間、何人かの女性とSMプレイをこころみました。が、今までまだ一度も自分の納得の行くパートナーにめぐりあえませんでした。たまたま一月号のページをめくっているうちに貴女の名前が目につきました。そのときの私の気持はデラックスな宝石を見つけたような喜びで胸が一杯になりました。貴女こそ私が十年来、探し求めていたパートナーです。貴女のスラリと伸びた美しく長い足、はちきれるような若さ。今こうして書いてある間にも、貴女の姿が目には浮かんでくるようです。貴女となれば自分で納得のいくプレイが出来ると信じます。どうかこれを機会に、私のSMプレイのパートナーとなつて下さいませんか。貴女からのお便り、心をわくわくさせてお待ちしております。

(愛知・豊田一郎)

室井亜砂路殿。○「花と蛇」が、さっぱりわからないとは憎まれぐちも最高だ。貴殿の画は、それなりに支持者も多いと思うが、そのニューアンスは「花と蛇」とは非常に異なっているから貴殿の発言は嘘ではないと理解できる。しかし少しグロッキー気味の団氏を毒することは止めて頂きたい。というのは愛読者の一人として、これ以上の休載は耐え難いからだ。現実ばなれした物語にはついていけないという意見は納得できない。他にもっと厚顔無恥な現実ばなれの文章が溢れている。貴殿の画にしても抽象絵画が多い筈だ。その善悪は別として「花と蛇」の如き世界に住む美女は沢山いる。異次元の世界をあばきたてるといってもなく、たんとんと甘く切なく美女の心理をあやしく描く「花と蛇」の華麗な筆の運びに私は陶醉している。「花と蛇」を読もうと奇クを購入する人と、どちらが多いだろうか。私は豪城二氏や辻梟太郎氏のイメージ画を愛せても、貴殿の絵にはなじめない異質の男である。ただし筆を置く前にあたり、貴殿の絵画が芸術的な匂いすら漂わせる気位の高いある種の魅

次号（五月号）は三月二十五日に発売いたします

力のあるものであることを認め、愛する奇クにとつては欠かせないものであることを述べ異質とはいえ、奇クマニヤ同志として奇クの誇りのため、貴殿の投書画の絶えないことを伏してお願ひしたい。失礼の段、お許し下さい。

（芦屋市・毛蟹太一郎）

ったそうで、親しさが増し商売は目に見えて好調だと主人は喜んでおり、次回は縛りもいれての宴をするかと張り切っております。でも私は、まだ被虐を喜ぶほどではなく、悩んでおります。どなたか、お便り下さい。

（神戸市・困惑せる妻）

マニヤの皆様、初めてお手紙を出します。私は二十才の人妻ですが、御誌の旧号で私と似通った体験をなさった奥様のお話が出ていましたので、思わずペンをとりました。夫婦交換のことでしたが、私も私の年令の倍以上の夫によって、同じような目にあわされたのです。私達カップルは円満で、お互いに愛しあっております。夫は私が可愛い故に行うのだと言いますが、私は恥かしくてたまりません。間違ひなく籍を入れた正式の妻である私の全裸を、数組の親しいご夫婦達に覗かせるのです。先輩のご夫婦は馴れたもので、私が息もできないほどに、ひどく恥かしいことをなさるのです。主人のお友達は、みんな大事なお顧客だ

藤田春枝様。一月号の通信うれしく拝見させていただきました。小生、奇クの読者となつてまだ間もない品川在住の二十三才の者です。まだプレイの経験はありません。今のところは頭の中で勝手な思いをめぐらせているだけです。たとえば気品に満ちた女性の衣服を無理矢理、剥ぎとります。そして、開股の状態に縛り上げます。縄目が白い肉体に喰ひ込みます。そむける顔をこちらに向けて、見ている目の前で失禁させ、羞恥のどん底につき落とし、気品に満ちたその美しい顔に隠された一面をあばいてやったら、さぞ楽しいことだろうと、頭の中で勝手気ままに想像するのです。ただこのように想像するだけで、自分にはプレ

イの機会などはないのではないかと感じておりました。ですから貴女の便りを拝見しましたときは、大変うれしく思いました。未経験な者故、貴女を真底から喜ばせることができるかどうかわかりませんが、もし貴女と共にプレイが許されるならばどんなに楽しいことでしょう。貴女を責め抜いてあげたいと思います。では心から御返事お待ちしております。

（東京・渡辺良造）

沈黙を破ります。SもMも性にもとづいたものでなければならなと思います。これは性をもっとすばらしいものにするために自然に出てきたものだと思います。理論は、いずれ発表したいと思っております。大館市の藤原明子様、兵庫の坪井満子様、横浜の藤田春枝様、お友達にならしましょう。私の待つていた女性です。お便り下さい。

（秋田県・姿裕次郎）

私は白タビをはいた女性を責めるのに喜びを感じます。私は和服姿に白タビを穿いた女性を見ますと、胸がワクワクします。上半身をグルグル巻きに縛り上げた姿は何ともいえない魅力があると思

ます。私の願いを叶えて下さる女性の方はおられないでしょうか。

（東京・美田富士夫）

貴誌益々御清栄の趣、お喜び申し上げます。扱て似て非なる理論家や批評家の多い中で花影叢、高浜満六、田沼醜男諸氏等の追求するテーマは貴誌発展の支柱柱ともなうと思われまふし、又相当数の支持者が居られるものと思ひます。何卒同氏が引続き健筆を揮われまふ様、強く希望します。

（東京都・玉川等）

東京の水川理太郎様。はじめてお手紙を差し上げる御無礼をお許しく下さい。私はSMに関心を持つ四十才の男性です。二月号の通信で貴方の記事を読みました。SMに関心は持つていても過去に縛ることや羞恥責めの経験は一度もありません。一度どのようなプレイをするのか御指導願えないでしょうか。プレイを覚えたら妻に実施してみたいと思つています。そうすることによって夫婦生活をもっと甘美なものにして、今まで知らなかった喜びを味わつてみたいと思つています。妻はSMという言葉もプレイも知りませんが、

早く新らたな喜びを教えてみたいと痛感する次第です。私たち夫婦は結婚して十年になり、二人の子供がいます。至極まじめに人生を過ごしていきたいと思つています。しかし夫婦合意の上の、すばらしい楽しみは今後、大いに追求したいと思っています。勝手な相談を持ちかけ甚だ失礼とは存じ上げますが、何卒よろしく御了解下さいますよう御願ひ申し上げます。なお、お互いのプライバシーについては絶対に厳守することを誓います。

(東京・未知男)

(東京・未知男)

○

同好のM女性の方々にお願い致します。私は中年者にて経済も地位も何もない男でございます。妻帯は致しておりますが年長の妻なので肉体的に無理になって参り、最近プレイの機会を逃してしまつております。人一倍、S意識の強い者です。一人で、悩んでおります。美句名文を以ってお願いかけることの出来ない者ですが、若し広い世の中に私に御同情下される女性が御座居ましたら御文通いただければ幸甚に存じます。自分で申し上げるのも変ですが私は馬鹿のつく正直者です。他人からも左

様小馬鹿にされており、絶対信頼して交際していただけると存じます。女性故に悩んでおられる方も多いと存じ上げ、文通できればプレーに発展して行きたいと思ひます。ぜひ、お便り下さい。年令は問わず強健なM女性諸君へ期待しております。

(京都・高田生)

(京都・高田生)

加古川市の小山真弓様。再度にわたる熱心な呼びかけに、貴女がた御夫婦の真情がお伺いでき、マニヤとして喜んでおります。私は夫婦そのもののプレーよりも排泄マニヤで、貴女がたの御期待にそ

わないかも知れませんが、許されることならグループプレーを行ないたいと思っております。私は三十才。私のペアは二十三才で小麦色の肌をした腿の太い、臀部の豊かな女性です。野外やトイレは最高でしょうが、寒い間は、やはり湯殿に限ると思います。が如何でしょうか。条件は必ず真弓さんの指先から頭のとっぺんまで、余すところなく私に舐めさせて下さることに、私の見ている前で神酒と固型を出して下さることです。御返事をお待ちします。

(神戸・野見鯛三)

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少な
ものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担してりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は△小包▽にて発送申し上げます。

昭和41年6月号(送共三二〇円)
昭和41年7月号(送共三二〇円)
昭和41年8月号(送共三二〇円)
昭和41年9月号(送共三二〇円)
昭和41年10月号(送共三二〇円)
昭和41年11月号(送共三二〇円)
昭和41年12月号(送共三二〇円)
昭和41年1月号(送共三二〇円)
昭和41年2月号(送共三二〇円)
昭和41年3月号(送共三二〇円)
昭和41年4月号(送共三二〇円)

[illegible]

昭和45年3月2日
昭和45年12月1日
昭和44年11月10日
昭和44年9月8日
昭和44年8月7日
昭和44年6月5日
昭和44年4月3日
昭和44年2月1日
昭和43年11月8日

(送共三七〇円)

編集後記

○「女性の神秘」を引き出そうとかなんとか「SMプレイ」の話をし、「しゅるしゅる」と縄を取り出して「イアン」バカッとフラレタ男の「哀」れさよ。彼女の「童女」ぶってハラの中心を「切腹」させて調べたい思い。いやならいいさと「ふたり妻」持つ甲斐性さになく悶々と「SMショー」を想い浮かべて不覚の「大噴火」。オレはいい「どうしてこんな女に？」と、外見に惚れた軽率さを悔むと「鼻」の奥がむしように痛む。

○「花と蛇」が一緒にいそうな「ヤイト寺」びいきのおやじにグチろうと出掛けたら、先客の「ある患者」が「見果てぬ夢」の「たわごと」のマッ最中。「浮気」の相手は「助教

授夫人」で、「M派」らしい彼は「菱縄」で「混浴場」へ連れこまれたのはいいが、そこで「女狐」の化けたような「柔順な新妻」とばったり。忽ち「浣腸」効果の如きジュラシの噴出ものすく撮み合つての「女斗美」図の展開。双方の連れまでが入り乱れ、「女忠臣蔵」の討入りもかくやとばかりの光景であつたというんだが、ホントかねえ。

○「周期的な耽溺」気分の中には、自称Sのオレだって「Mの理解者」となりきる。だがやはり「鞭責め」「水責め」「ラクガキ」など、どうぞ「プレイして下さい」といわれるほうが気分がいい。そりゃあ「人妻」として稼いできたものを「獲物」扱いしてはいけないと「反省」はする。しかし「可憐」な女とは……。一杯になった。ヘンな「後記」。

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはとて作品は必ず誌上に取上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千円以上の賞金を呈します。

映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千円以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに依じないことになっております。故

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

読者通信原稿

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

本誌御購読の葉

に限り
一月分(1冊)三五〇円(送20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

四月号 (第二十四巻第四号)
昭和四十五年三月二十日 印刷
昭和四十五年四月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

郵便番号558
発行所 暁出版株式会社
(振替口座大阪四二七八三番)
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二二日)
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二二〇号

書店の皆様方へお願い

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されな